

録所ヲ設ケ、評定所ヲ置キ、引付衆、寄入等ヲ配置ス、決斷所ハ、卿相ヲ以テ頭ト爲シ、功罪殿最ヲ裁シ、諸訟斷獄ヲ判ス、記録所ハ、公卿以下、大史、外記、判事等之ヲ掌リ、補、名和ノ族之カ寄人トナリ、武士之ニ參勤シテ、結番分直シ、大議アル毎ニ、天皇親臨シテ之ヲ決ス、其ノ直番五隊、一月六次ヲ期シテ、定議ノ事項ヲ評論ス、又對問越訴等ノ署ヲ分チテ、之ヲ分掌セシム、其ノ後新決所ヲ置キ、公卿ヲ以テ頭人ト爲シ、一畿七道ノ庶事ヲ分治セシム、其ノ外武者所ヲ設ケテ、新田氏ノ族ヲ以テ頭ト爲シ、又關東廂番ヲ置キテ、足利氏ヲ以テ之ヲ掌ラシメ、又侍所ヲ置キ、其ノ衆ヲ設ク、天皇常ニ新制ヲ欲シ、カテ創立スル所多シ、是ニ於テ中興ノ政治、畧々其ノ端緒ニ就ク、

第三 中興政府ノ現象

後醍醐天皇、中興政府ヲ組織スルヤ、一意勤王内閣ヲ成立セリト信シ、奸賊際ヲ窺フコトヲ慮ラス、故チ以テ、乃チ藤原光經ヲ以テ之ニ代ヘ、天皇自ラ高時ノ邑ヲ以テ供御料ト爲シ、素家、及ヒ大佛貞直ノ邑ヲ以テ、護良親王、及ヒ内侍廉子ニ賜ヒ、其ノ餘悉ク閭閻倡妓ノ輩ニ給シテ、天下復タ餘地ナキニ至ル、加フルニ内旨變シ易ク、赤松則村ノ如キハ、一旦播磨守護タリシモ、未タ幾ナラスシテ、視ヒテ義貞ニ賜ヒ、代フルニ佐用莊ヲ以テス、則村是ヨリ朝廷、及ヒ新田氏ヲ怨ム、是レ或ハ内幸ノ言フ所ニシテ、尊氏ノ遠謀ナランモ知ルヘカラス、其ノ他朝ニ定ムル所、タニ改易シ、經國ノ政、最モ冷淡ニシテ、賞罰且ツ明ナラス、賄賂公ニ行ハレ、後房理マラスシテ、女謁、内諂、甚タ盛ナリ、時ニ繪旨翻覆ノ誦アリ、此ノ時ニ方リ、駿馬ヲ獻スル者アリ、天皇大ニ喜ヒ、呼ヒテ天馬ト名ケ、臨ミテ之ヲ見ル、藤原公賢、盛ニ其ノ祥瑞ヲ贊ス、藤房諫メテ、不祥ヲ論シ、仁政注意ノ議ヲ獻ス、天皇憚ハス、初メ天皇素綱ヲ理メテ、治ヲ圖リシモ、天下漸ク平ナルニ

テ專ラ意ヲ外ニ用キ、北條氏ノ餘類ニ注目シ、護良親王ヲ拜シテ、征夷大將軍ト爲シ、參議源顯家ヲ以テ、陸奥守ト爲シ、義良親王ヲ奉シテ、奥羽ヲ鎮メシメ、其ノ父大納言親房ヲシテ、之ヲ輔ケシメ、成長親王ヲ上野大守ト爲シ、出テ、鎌倉ヲ鎮メシメ、左馬頭足利直義ヲ相模守ト爲シ、以テ之ヲ助ケシメ、曾テ内ナ省ミス、且ツ賞ヲ行フコト普カラス、是ヨリ先將士闕下ニ厯集シテ、功冊ヲ獻シ、爭ヒテ抽賞ヲ干ム、蓋シ勤王愛國ノ士ト雖モ、身ヲ萬死ニ投セシモノハ、一ハ名譽ヲ喜ヒ、一ハ富貴ヲ樂ムカ故ナルヲ、況ンヤ北條氏ノ虐ニ耐ヘスシテ旗ヲ反スルカ如キ者ニ於テチヤ、而シテ功冊決斷所ニ群ルコト數萬、容易ニ其ノ眞議ヲ決スルコト能ハス、旬月匪ニ二十餘人ヲ定ム、天皇、藤原藤房ヲ以テ更ニ之ヲ決セシム、藤房復審シテ將ニ奏セントス、而シテ内幸アリ、賞ヲ得ル者既ニ多シ、藤房事ノ獻替スヘカラサルヲ覺リ、病ト稱シテ事ヲ觀

及ヒテ、意ヘラク四方虞ナシト、是ニ至リテ頗ル政ニ倦ム、藤房道ヲ論シテ、之ヲ諫諍スレトモ、竟ニ容レラレス、藤房復タ盡スヘカラサルヲ知リテ、竟ニ冠ヲ挂ケ、位ヲ棄テ、去ル、護良親王、豪邁ニシテ威望アリ、曾テ尊氏カ不臣ノ象アルヲ看破シ、天皇、其ノ奸ニ陷リテ、寵遇日ニ渥キナ慨ヘ、奏請シテ之ヲ誅除セント欲ス、義貞亦之ト隙アリ、初メ義貞艱ヲ凌キ、堅ヲ衝キテ、鎌倉ノ巢窟ヲ殄ス、尊氏ハ之ニ反シテ、北條氏ノ勝敗ヲ觀望シ、將ニ陷ラントスル、六波羅ヲ破ル、其ノ功固ヨリ論セスシテ明ナリ、而シテ義貞、尊氏並ニ其ノ祖ヲ同クシ、共ニ義家ノ孫、(義重義康ヨリ出ツ)ト雖モ、義重(新田ノ祖)ハ其ノ女ノ故ヲ以テ、賴朝ニ疎斥セラレ、厩ニ上野新田庄ヲ食ミ、義康(足利ノ祖)ハ下野足利郷ニ住シテ、多ク庄園ヲ領シ、其子義兼(後故アリテ僧トナリ足利ノ鑊阿寺ヲ創ス)亦大ニ鎌倉幕府ニ用ヰラ

ル、是兩家祖ヲ同クスト雖モ、家聲ニ盛衰アル所以ナ
リ、是ニ於テ尊氏夙ニ義貞ヲ忌ミテ、其ノ功ヲ奪ハシ
ト欲ス、然レトモ護良親王アルヲ以テ、未ダ發セス、
其ノ弟直義、最モ奸諂ニシテ權略アリ、成長親王ノ執
權タルヲ以テ、鎌倉ヲ鎮ムルニ及ヒ、尊氏陰ニ之レト
謀ル所アリ、故ニカテ將士ノ心ヲ收攬シ、關東ニ據リ

テ天下ヲ風靡セント欲ス、時ニ准后藤原氏(廉子)最
モ天皇ニ嬖幸セラレ、言フ所用キラレサルハナシ、尊
氏因テ深ク諛結ス、會藤原氏、皇子(第六皇子恒良
親王)ヲ擧グルニ及ヒテ、藤原氏初産ノ皇子ナリ)護
良親王ノ雄威ヲ忌ミ、尙ニ皇子ノ不利ヲ恐ル、尊氏之
ヲ時トシテ、内奏セシメ、誣フルニ叛逆ヲ以テシ、竟ニ
鎌倉ニ幽ス、親王疏ヲ上リテ冤ヲ訴ヘ、陳情甚タカム、
文中、申生、死而晉國亂、扶蘇、刑而秦世傾、ノ語アリ、肯
テ傳奏スル者ナシ、其ノ後北條高時ノ子、時行、義故
ヲ勵集シテ、信濃ニ反シ、進ミテ鎌倉ヲ攻ム、直義支

フルコト能ハス、成長親王ヲ奉シテ走ルニ際シ、淵邊
義博ニ囑シテ護良親王ヲ害セシム、然シテ天皇之ヲ知
ラス、尊氏自ラ請ヒテ時行ヲ討チ、竟ニ之ヲ走ラシ、
鎌倉ニ入りテ復タ還ラス、是レ即チ建武皇政ノ阻碍ニ
シテ、中興ノ業遂ケサル所以ナリ、

第四 上下ノ關係及ヒ朝野ノ現象

中興ノ業、稍成立スルニ及ヒテ、天皇大ニ之ニ安シ、
且ツ親政ノ煩シキニ倦ミ、屢宮人嬖妓優倡ノ徒ヲ集
メテ、遊宴盤樂ノ事アリ、卿相ノ國ヲ愛セサル輩ハ、
久シク武門ノ壓制ニ屈セシモ、今日頗ル昌平ノ現象ニ
遇ヒテ、以テ萬世不易ト信シ、肯テ國家ノ重キニ任ス
ルノ意ナシ、天下ノ傷痍未ダ癒エサルニモ拘ハラズ、
諸卿等大内ヲ經營シテ、壯觀舊ニ復セントスル奏議ア
リ、天皇之ヲ採用シ、儼然タル宮城ヲ起サントシ、藝
防二州ノ程賦ヲ以テ、其ノ經費ニ充テ、更ニ諸國ノ地頭
領主等ニ課シテ、所得二十分ノ一ヲ徵シ、以テ其ノ足

ヲサルヲ補フ、時ニ天下新ニ定マリ、民力未ダ復スル
ニ違アラサルニ、大役暴ニ起リシカバ、財用給セス、
是ニ於テ古來未曾有ノ楮幣ヲ製シ、又銅錢ヲ鑄造シ
テ、之ヲ補支セントス、抑朝廷強敵ヲ斃シテ、皇政
ヲ復セリト雖モ、鎌倉幕府以來、武門ノ政事ヲ以テ、
民心ヲ收メ、守護地頭ノ族、土地人民ヲ監督シ、其ノ
膏ヲ陷ヒテ、世襲シ來レルカ故ニ、之ヲ御スルニハ緩嚴
宜シキヲ得テ、失職ナカラシムルヲ要ス、然ルニ一旦
事成リ、業遂グルニ及ヒテハ、之ヲ賤シメテ奴婢ノ如
キ、待遇ヲ爲ス、彼ノ萬死ヲ冒シテ、王ニ勤メタリシ
者ト雖ト、一邑ヲタニ得ルコト能ハス、媚ヲ賣リ、情
ヲ鬻ケル、遊手ノ徒ハ、僅ニ一タノ内奏ヲ以テ、頗ニ領
地ヲ有ス、藤房龍馬ノ祥ニ遇ヒ、諫メテ曰ク、方今天下
大亂ノ後ヲ承ケテ、人民窘究ニ陥ル、諫臣宜シク時弊
ヲ論シ、卿相應ニ塗炭ヲ拯フヘキ秋ナリ、而ルニ百辟、
淫樂ヲ貪リ、群僚上ニ阿リテ、國政ノ重キニ任セス、

是ニ於テ功ヲ冊シ、賞ヲ千メテ、集マル者斷念シテ、
郷曲ニ歸レリ、諸卿以テ無爲ノ徳、王化ノ及フ所ト爲
ス、夫レ勤王從軍ノ士ハ、皆勳功ヲ以テシニ代ヘント
欲セリ、朝廷宜シク其ノ功ヲ論シ、賞ヲ行ハサルヘカ
ラス、然ルニ公家被官ノ外ハ、未ダ恩給ニ浴セル者
多カラス、彼ノ功冊ヲ捨テ、干祿ヲ要スル者ナキハ、
是恨ヲ懷キテ郷黨ニ歸リシ者ナリ、諫臣須ラク議ヲ建
テ可ク獻シ、以テ士民ノ情ヲ達スヘシ、却テ不急ノ皇
城ヲ營ミ、諸國地頭ノ膏血ヲ徵シ、兵革ノ餘、尙ホ功
課ヲ起ス、豈ニ仁政ノ化ナランヤト、天皇省ミス、現
象、既ニ斯ノ如シ、故ヲ以テ、上下ノ思想、相隔懸シ、
朝野ノ關係、迭ニ牴牾ス、是ニ於テ宗室ノ尊嚴、黎民
ヲ服スルコト能ハス、詔勅ノ令行ハレス、然レハ萬姓
既往ノ幕府政治ヲ慕ヒ、天下亂ヲ樂ムニ至リシモ、亦
宜ナラズヤ、此ノ時ニ方リテ、英邁材武ノ士、一タヒ
蹶起シテ、天下ヲ圖ラハ、所在不平ノ徒、一時ニ響應

シテ、之ニ荷擔セシコト、掌ヲ指スカ如シ、是レ蓋シ政體ノ一變スル所以ニシテ、南北兩立ノ亂階ナリ、

第五 南北朝ノ兩立

建武元年、高時已ニ誅ニ伏ス、是ヨリ先關東兵亂ノ後人民未タ堵ニ安ンセス、時ニ足利直義鎌倉ヲ鎮メ、北條氏ノ舊政ヲ修メ、士庶ノ職ヲ失ヘル者ヲ招キ、カメテ民心ヲ收ム、遠近望ヲ屬セリ、此ノ時ニ當リ、四方ノ武士、武家、執政ノ舊ニ復センコトヲ意フ、足利尊氏、素ヨリ聲望アリ、陰ニ大志ヲ懷ク、護良親王、深ク之ヲ惡ミ、將ニ誅セントス、尊氏乃チ親王ノ謀叛ヲ誣告ス、天皇之ヲ信シ、親王ヲ執ヘテ、之ヲ鎌倉ニ幽ス、

二年七月、北條時行亂ヲ爲シ、鎌倉ヲ攻メテ、直義ヲ走ラス、尊氏素志ヲ果スヘキ時ノ至ルヲ喜ヒ、自ラ諂ヒテ時行ヲ討チ、大ニ之ヲ破リ、遂ニ鎌倉ニ據リテ叛ス、

十一月、天皇、新田義貞ヲ大將軍ト爲シ、尊良親王ヲ

奉シテ、東海道ヨリ、忠房親王、東山道ヨリ、並ニ進撃セシム、楠正成等、止リテ京師ヲ守ル、官軍初メ大ニ利アリ、終ニ敗績シテ走ル、尊氏追ヒテ西上ス、

三年尊氏、京師ニ逼ル、官軍之ヲ拒クト雖モ、勝ヲ取ルコト能ハス、天皇延曆寺(近江)ニ幸ス、北畠顯家、奥羽ノ兵ヲ率キテ來リ、義貞ト共ニ賊將細川定禪ヲ三井寺ニ撃チテ之ヲ走ラス、義貞尾撃シテ、京師ニ入ル、賊ノ全軍方ニ填咽シテ、南北一里ニ餘ル、官軍奇兵ヲ以テ復タ之ヲ破ル、其ノ夜定禪襲ヒテ、官軍ヲ走ラズ、尊氏再ヒ京師ニ入ル、是ヨリ兩軍交シ勝敗アリ、互ニ京師ヲ爭フ、其ノ後賊軍大ニ敗レ、尊氏丹波ニ走リ、終ニ兵庫ニ屯ス、官軍追ヒテ、鎮西ニ走ラス、

四月、尊氏、兵二十萬ヲ率キ、太宰府ヨリ、水陸並ヒ進ム、旌旗空ヲ掩ヒ、鼓聲地ヲ動カス、官軍震駭シテ色ヲ失フ、五月、正成直義ト湊川ニ戦ヒテ之ニ死シ、義貞重圍ヲ衝テ、京師ニ還ル、天皇是ニ於テ、復タ延

曆寺ニ幸ス、八月尊氏新主(光明天皇)ヲ擁立ス、十月尊氏伴リテ降ヲ乞フ、時ニ官軍食ニ乏シ、故ニ之ヲ許ス、義貞詔ヲ奉シ、皇太子恒良親王ヲ奉シテ、越前金崎城ニ據ル、天皇ノ京師ニ還幸スルヤ、尊氏之ヲ花山院ニ幽シ、神器ヲ新主ニ傳ヘンコトヲ乞フ、天皇仍チ偽器ヲ授ケ、夜ニ乘シテ吉野ニ幸ス、是ヨリ天下京師ヲ呼ヒテ、北朝ト云ヒ、吉野ヲ稱シテ、南朝ト云フ、

是ヨリ先赤松則村、曾テ朝廷ノ恩賜キチ不滿トシ、且ツ義貞ヲ怨ム、故ヲ以テ尊氏ヲ戴キ、説キテ曰ク、官軍ハ錦旗ヲ以テ途ヲ開ク、我ハ是ナシ、是レ蓋シ一旦勝利アリト雖モ、竟ニ成スコト能ハスシテ、數、敗劔スル所以ナリ、宜シク光嚴上皇ニ奏シテ、新主ヲ擁立シ、錦旗ヲ得テ、三軍ヲ麾キ、兩帝ヲシテ位ヲ爭ハシムルニ若カスト、尊氏之ヲ奇貨トス、尊氏はニ於テ之ヲ光嚴上皇ニ奏請ス、上皇之ヲ聽シテ、新主ヲ立ツ、

光明天皇、即チ是ナリ、爾來尊氏ノ兵、錦旗ヲ得テ、

振ケテ軍ニ名アリ、故ヲ以テ連戰累ニ勝チ、竟ニ其ノ志ヲ得タリ、

四年、尊氏、足利高經ニ命シテ、金崎城ヲ攻メ、之ヲ陥ル、時ニ義貞、城中ニ在ラス、尊良親王、及ヒ新田義顯等自殺シ、太子擒ニセラル、後害ニ遭フ、已ニシテ義貞、高經ヲ越前ノ府城ニ破リ、北畠顯家、新田義興等ハ鎌倉ヲ攻メテ、足利義詮等ヲ走ラシ、諸道ノ官軍頗ル振フ、

曆應元年、義貞藤島ヲ攻メテ、戦死シ、顯家亦堺浦ニ歿シ官軍大ニ挫ク、二年天皇、吉野宮ニ崩ス、脇屋義助、義治等、越前ヨリ美濃ニ走リ、畑時能戦死シ、北國復タ官軍ナシ、八月皇太子義良親王、吉野ニ踐祚ス、之ヲ後村上天皇ト云フ、楠正行、和田正朝等來リテ官ヲ守ル、三年、義助伊豫ニ至リ、官軍將ニ盛ナラントス、幾クモナク病ミテ死ス、細川頼春、伊豫ノ諸城ヲ降シ、大館氏明自殺ス、是ニ於テ全國ノ官軍、大

半滅ヒ、其ノ餘北朝ニ降ル者多シ、北畠顯房、顯信並ニ常陸ノ小田城、及ヒ陸奥ノ白河城ニ據リ、苦戰セシカ保ツコト能ハスシテ、竟ニ吉野ニ還ル、爾來東北ノ官軍振ハス、足利氏ノ勢威、天下ニ擅ナリ、然レトモ新田、楠、北畠、菊池等ノ遺孽、諸國ニ潛伏シテ、常ニ足利氏ヲ圖ル、

貞和五年、興仁親王位ニ即ク、崇光天皇、即チ是ナリ、是ノ歲、楠正行、四條暎ニ戰死ス、北軍進ミテ吉野ヲ侵ス、天皇賀名生ニ脱ル、楠正儀、高師泰ト、河内ノ石川ニ相持ス、

觀應元年、直義、尊氏ト隙アリ、南朝ニ降ル、將士多ク之ニ從フ、尊氏ノ庶子直冬、亦叛キテ九州ニ起リ、共ニ尊氏ヲ討ツ、尊氏大敗ス、已ニシテ直義、尊氏和ヲ講ス、二年、尊氏復タ直義ト隙アリ、之ヲ追討セント欲ス、京師ノ空虛ヲ患ヒ、伴リテ復タ降ヲ乞フ、天皇モ亦伴リテ之ヲ許シ、尊氏ニ詔シテ、直義ヲ討タ

シム、十一月、義詮歸順ノ意ヲ表シ、崇光天皇、及ヒ皇太弟直仁親王ヲ廢シ、觀應ノ號ヲ去リテ、南朝正平ノ號ヲ奉シ、車駕京師ニ還ランコトヲ請フ、天皇之ヲ許シテ、吉野ヲ發シ、急ニ兵ヲ遣ハシテ、義詮ヲ京師ニ襲ハシム、義詮近江ニ走ル、爾來勝敗常ナク、或ハ叛キ、或ハ降ル、

第六 楠氏ノ忠勇

正成、姓ハ楠氏、小字ハ多聞ト云フ、左大臣諸兄ヨリ出ツ、諸兄ノ後裔、河内ニ居ル者、楠氏ト稱シ、世々豪族タリ、正成ニ至リテ、益々著ル、元弘元年八月、後醍醐天皇、笠置山ニ幸ス、六波羅ノ兵將ニ來リ犯サントス、時ニ天皇詔ヲ四方ニ下シテ、勤王ノ士ヲ募レトモ、事急ニシテ命ニ應スル者少ナシ、僧快元ヲ召シテ、地方勤王ヲ將士ヲ問フ、對ヘテ曰ク、河内ノ人、楠正成、材武ノ名アリ、蓋シ命ニ應セント、天皇藤原房ヲ召シテ召サシム、正成、行在ニ詣ル、天皇藤原

シテ命ヲ傳ヘシメテ曰ク、賊ヲ討スルノ事、一ニ卿ヲ頼ハスト、因テ策ヲ問フ、正成感激シテ曰ク、東兵勇ニシテ謀ナシ、若シカテ以テ争ハ、天下ノ兵ヲ擧グルモ當ルヘカラス、謀ヲ以テ之ニ對セハ與シ易キノミ、況ヤ天誅ヲヤ、臣策アリ、陛下苟モ正成未タ死セスト聞シメサハ、復タ宸慮ヲ勞スルコトナカラシコトナト、即チ辭シテ還リ、赤坂ニ築キ、將ニ天皇ヲ奉迎セントス、六波羅ノ兵、既ニ行在ヲ圍ミテ、遂ニ之ヲ陷レ、尋テ關東ノ大軍ト合シテ、赤坂城ニ萃ルコト、無慮三十萬、城兵僅ニ五百人ナリ、敵望見シテ笑ヒテ曰ク、城ノ地方百步許、隻手掀クヘシト、肉薄シテ之ヲ攻ム、正成兵ヲ左右ニ伏セ、戰酣ナルニ及ヒテ、三面合擊シテ、立トコロニ數千人ヲ斃ス、且日東軍兵ヲ二分シテ、一ハ伏兵ニ備ヘ、一ハ城ヲ圍ム、正成或ハ複垣ヲ設ケテ、之ヲ墮シ、或ハ沸湯ヲ注キテ、敵ヲ焦爛セシム、東軍易ク進マス城ヲ環リテ、持久ノ策ヲナ

ス、正成遠ク慮リ、火ヲ城ニ放チ、夜ニ乘シ、金剛山ニ入ル、敵正成已ニ死スト思ヒ、兵ヲ引キテ去ル、天皇追兵ノタメニ、宇治ニ執ハル、是ニ於テ高時、光嚴院ヲ立ツ、二年天皇ヲ隱岐ニ徙ス、四年正月、湯淺定佛ヲ赤坂城ニ攻メテ、之ヲ降シ、河内和泉ヲ徇フ、初メ高時、天皇ヲ移シ、ヨリ、天下復タ虞ナシト謂ヒ、國事ヲ以テ念トセス、正成起ルニ及ヒ大ニ驚キ、六波羅ノ鎮將、仲時、時益ニ命シテ、之ヲ擊タシメシニ、却テ正成ノ謀略ニ陥リ、死スル者勝テ數フヘカラス、仲時、時益、更ニ宇都宮公綱ヲシテ赴キ擊タシム、正成曰ク、吾大任ヲ受ケ、前途甚々遠シ、徒ニ將士ヲ失ハンヨリハ、寧ロ戰ハスシテ之ヲ屈スヘシト、遂ニ營ヲ棄テ去ル、公綱代リテ營ス、夜四面ヲ望メハ、炬火山岳ニ星布シ、漸ク近ツク、此ノ如クスルコト連夜滋々多ク、滋々逼ル、敵甲ヲ釋キテ、寢ル克ハサルコト三晝夜ニ及フ、乃チ營ヲ棄テ還ル、正成復タ

營ニ入ル、遠近來リ屬スル者益々多シ、威京畿ニ據テ一日正成、四天王寺ノ所藏、聖德太子ノ未來記ヲ觀ル、其文ニ曰ク、人皇九十五代、天下一タヒ亂レテ、主安ンセス、此ノ時東魚來リテ、四海ヲ吞ム、日西天ニ没シテ、三百七十餘日、西島來リテ、東魚ヲ食ヒ、海内一ニ歸スト、正成衆ニ示シテ曰ク、所謂九十五代ハ、今上ニアラスヤ、東魚ハ乃チ高時ナリ、上ノ復辟明春ニアラント、衆皆奮勵ス、八月東國ノ大軍來リ攻ム、正成金剛山ノ千窟城ニ據リ別將ヲシテ、赤坂城ヲ守ラシム、

三年二月、是ヨリ先護良親王、兵ヲ吉野ニ擧ク、是ニ至リテ陷リ、赤坂亦陥ル、東軍金剛山ニ萃リ、四面仰キ攻ム、八十萬ト號ス、正成千餘人ヲ以テ、拒手戦フ、殺傷算ナシ、十二人ヲシテ、其ノ死傷ヲ記サシメシニ、三晝夜筆ヲ開カスト云フ、諸將等、策盡キテ環守シ、以テ持久ノ計ヲ成ス、正成黨人ヲ作リテ、之ヲ城外ニ

置キ、壯士ヲ其ノ下ニ潜伏セシメ、曉霧ニ乘シテ、閃ヲ發ス、敵進ミ近ケハ、徐ニ數箭ヲ發シテ、城ニ入ル、衆競テ黨人ニ赴クニ、城上ヨリ巨石ヲ下シテ、八百人ヲ殺傷ス、是ヨリ敢テ薄ラス、已ニシテ天皇逃レテ、名和長年ニ依ル、長年之ヲ船上山ニ奉シ、百五十騎ヲ以テ、行在所ヲ護ル、兒島高德以下、山陰、山陽ノ豪族、來リ屬スル者多シ、高時、足利尊氏ヲシテ、金剛山ヲ攻メシム、尊氏官軍ニ屬シ、諸將ト共ニ討チテ、京師ヲ平ク、五月天皇、伯耆ヲ發シ、京師ニ歸ル、新田義貞、亦歸順シテ鎌倉ヲ攻メ、竟ニ高時ヲ誅ス、肥後ノ菊池、伊豫ノ土居、得能等使ヲ馳セテ、鎮西南海ノ捷ヲ報ス、建武元年、戰功ヲ論ス、正成攝津、河内、和泉ノ守護トナリ、檢非違使左衛門尉ニ兼任シ、長年ト決斷所ニ直シテ、訟獄ヲ斷ス、

二年尊氏反ス、義貞等ノ諸將東伐シ、正成、長年、京師ニ留守ス、延元元年正月、尊氏京師ヲ犯ス、正成、

宇治ヲ守リ、長年、勢多ヲ守リ、皆制ヲ義貞ニ受ク、時ニ大渡山崎ノ軍敗レ、尊氏京師ニ入り、天皇叡山ニ幸ス、正成聞キテ直ニ行在ニ赴ク、長年モ亦至ル、遇北畠顯家、陸奥ノ兵ヲ以テ來リ援ク、官軍大ニ振フ、已ニシテ大ニ京師ニ戰フ、互ニ勝敗アリ、正成、卒ノ善ク泣クモノヲ擇ヒ、僧數人ト、戰場ノ跡ヲ物色セシム、敵兵怪ミテ問フ、輒チ泣キテ曰ク、昨日ノ戰ニ七將(義貞、正成、顯家、長年等ヲ云フ)皆没セリ、吾其ノ尸ヲ收メテ葬ラントスト、尊氏大ニ喜ヒ、義貞、正成ノ首ニ肖タルヲ得テ、之ヲ梟ス、其ノ夜正成、兵數千ヲ遣シ、炬ヲ執リテ西行シ、綿々相屬セシム、尊氏意ヘラケ、官軍將領ヲ喪ヒテ潰去ルト、急ニ兵ヲ出シテ要撃シ、留ル者備ヘテ設ケス、正成、等昧爽薄リ撃チ、火ヲ放チテ鼓譟ス、賊大ニ潰エ、死スル者半ニ過ク、尊氏走リテ、鎮西ニ至ル、九國悉ク尊氏ニ屬ス、

尊氏、大舉シテ西上シ、水陸並ヒ進ム、義貞書ヲ飛ハシテ、急ヲ告ク、朝廷震動ス、時ニ京師兵寡シ、天皇、正成ニ命シテ、義貞ヲ援ケシム、正成答ヘテ曰ク、尊氏、新ニ九國ノ兵ヲ擧ケテ來ル、其ノ鋒銳ナリ、今計ルニ陛下叡山ニ幸シテ、義貞ヲ召還シタマフヘシ、臣ハ河内ニ還リテ、畿内ノ兵ヲ招聚シ、賊ヲ京師ニ入レテ、後其ノ糧道ヲ絶チテ、之ヲ夾撃セハ、一戰ニシテ殲スヘシト、衆皆然リトス、獨參議藤原清忠、之ヲ不可トス、天皇其ノ言ニ從フ、正成退キテ歎シテ曰ク、事已ニ此ニ至ル、亦何ソ抗議センヤト、五月弟正季等ト西シ、子正行ヲ河内ニ遣歸シ、戒メテ曰ク、汝幼シト雖モ、猶ホ能ク吾カ言ヲ記セヨ、此ノ行ハ、即チ天下安危ノ係ル所、吾復タ汝ヲ見ス、吾死セハ、天下悉ク尊氏ニ歸センコト知ルヘシ、慎ミテ禍福ニ因リテ、志ヲ變シ、以テ父ノ忠ニ傷シルコトナカレ、苟モ同族一人ノ存スラバ、金剛山ヲ守リ、自ラ以テ國

ニ殉ヘヨ、汝吾ニ報スル所以ノモノハ、是ヨリ大ナル
ナシト直ニ進ミテ湊川ニ陣シ、直義ノ陸軍ニ當ル、己
ニシテ、尊氏ノ舟師、和田崎ニ上ル、腹背敵ナリ、正
成奮戦シ、殆ト直義ヲ獲ントス、尊氏ノ軍、其ノ後ヲ
包ム、正成馬首ヲ廻シテ、又之ニ當リ、血戦スルコト
十六合、盡ク其ノ從騎ヲ亡ヒ、匿ニ七十三騎ヲ餘ス、
乃チ走リテ民舎ニ入り、鎧ヲ釋ケハ、身ニ十二創ヲ被
ル、願テ正季ニ謂ヒテ曰ク、今日死セハ、何ノ處ニカ
魂ヲ託セント欲スト、正季笑ヒテ曰ク、七タヒ人間ニ
生レ、以テ賊徒ヲ滅セント、正成欣然タリ、遂ニ耦刺
シテ死ス、正成、年四十三、家族十六人、從士五十餘
人、咸ク殉死ス、天皇、悼惜シテ已マス、正三位左近
衛中將ヲ追贈ス、實ニ古今無比ノ忠臣ナリ、

第七 新田氏ノ勤王

義貞姓ハ源氏、小太郎ト稱ス、義家十世ノ孫ナリ、義
家ノ子、義國事ニ坐シテ、上野ニ謫セラル、二子アリ

五日ナリ、義貞ノ武威、關東ニ振フ、義貞使者ヲ馳セ
テ、捷ヲ行在ニ奏ス、天皇大ニ喜ヒ、遂ニ義貞ヲ左馬
助、義助ヲ兵庫助ト爲ス、建武元年、入朝シ、從四位
上左兵衛督トナリ、播磨守ヲ兼テ、上野、播磨二國ノ
守護トナル、尊氏固ヨリ異圖ヲ蓄ヘ、義貞ヲ憚リ、之
ヲ除カント欲シ、上書シテ之ヲ罪狀ス、義貞モ亦尊氏
ノ八罪ヲ聲ラス、二年十一月、詔ヲ奉シテ、尊氏ヲ討
ツ、尊氏親王ヲ奉シテ、東海道ヨリ進ミ、矢矧川ニ至
リ、直義ヲ討チ、之ヲ走ラス、十二月義助ヲシテ、竹
ノ下ニ向ハシメ、自ラ直義ヲ箱根ニ破ル、已ニシテ義
助利アラズ、義貞ノ軍、逃亡相屬シ、五百人ヲ餘ス、
義貞退テ天龍川ニ至リ浮橋ヲ造リテ軍ヲ濟ス、或ル人
橋ヲ徹セント請フ、義貞曰ク我敗軍ノ餘、猶ホ且ツ之
ヲ爲ル、彼等ヲ爲ルハサランヤ、徒ニ人ノ笑ヲ取ル
ノミト、橋ヲ存シテ去ル、延元元年正月、尊氏大舉シ
テ西上シ、大渡ニ至ル、義貞戰ヒテ之ヲ破ル、已ニシ

義重、義康、ト云フ、新田、足利兩郡ヲ分チ食ム、義
重、頼朝ト隙アリ、故ヲ以テ顯レズ、七子アリ、義包
家ヲ嗣キ、義房ヲ生ム、新田ヲ氏トス、義貞ハ、其ノ
四世ノ孫ナリ、元弘ノ亂ニ、楠正成ヲ千劍破ニ攻ム、
義貞素ヨリ、高時ノ亡狀ヲ惡ミ、且ツ其ノ驅使ヲ憤リ
義兵ヲ擧ケ、家聲ヲ興サント欲ス、三年五月、護良親
王ノ令旨ヲ得テ、東歸シ、子義顯、弟義助等ト、遂ニ
義兵ヲ擧ク、族大館宗氏、堀口貞満、里見義胤、江田
行義以下ヲ率キテ、武藏ニ入ル、近國ノ將士、期セス
シテ會スル者、一日二萬人ニ及フ、高時大兵ヲ發シテ
來リ攻メシム、義貞戰ヒテ、遂ニ之ニ克ツ、既ニシテ
兵ヲ三道ニ分ケテ、鎌倉ニ迫ル、戰未タ決セス、賊兵
海岸ニ據リ、艦ヲ其ノ南ニ列シテ、傍射ニ備フ、義貞、
金裝刀ヲ投シテ、退潮ヲ海神ニ祈ル、曉旦潮大ニ退キ、
兵艦漂ヒ去ル、是ニ於テ衆大ニ奮ヒ、府中ニ入り、遂
ニ高時ヲ誅ス、兵ヲ興シ、ヨリ、此ニ至リテ、匿ニ十

テ山崎ノ官軍敗ルト聞キ、急ニ京師ニ還リ、天皇ヲ奉
シテ、叡山ニ保ツ、時ニ鎮守府將軍源顯家、陸奥、出羽
ノ兵ヲ率キテ、來リ援フニ會ス、義貞乃チ細川定禪ヲ
園城寺ニ攻メテ之ヲ走ラシ、又奇兵ヲ發シテ、大ニ尊
氏ヲ京師ニ破リ、追ヒテ桂川ニ至ル、山道ノ官軍至ル
ニ會シ、義貞乃チ勢ヲ諸將ト合セテ、尊氏ヲ擊ツ、尊
氏潰エテ、西海ニ奔ル、三月義貞詔ヲ奉シテ、山陰、
山陽ヲ管領シ、進ミテ白旗城ヲ圍ム、城未タ下ラス、
五月尊氏、大舉シテ西上シ、海陸並ヒ進ム、義貞曰ク、
吾陸軍ヲ扞カハ、海軍直ニ入りテ、關ヲ犯サン、兵庫
ニ退キテ、兩軍ヲ扼スルニ若カスト、乃チ圍ヲ解キテ、
兵庫ニ至ル、士卒逃亡スル者、半ニ過ク、賊ノ先鋒、
西宮ヨリ上ラントス、官軍馳セテ之ヲ拒ク兵庫ニ一人
ナシ、賊ノ後隊、大軍ヲ以テ上陸ス、正成之ニ死ス、
義貞軍ヲ回ラシテ、生田森ニ陣ス、終ニ利アラズ、自
ラ殿シテ退ク、馬蹏ル、即チ徒歩シテ、二刀ヲ揮ヒ、拒キ

戰ヒテ、厩ニ脱シ、京師ニ還ル、上下色ヲ失フ、天皇復タ叡山ニ幸ス、七月叡山ノ僧徒援テ南都ノ僧徒ニ請フ、南都ノ僧徒之ヲ聽ス、是ニ於テ畿内ノ兵モ、亦官軍ニ屬スル者アリテ、賊ノ糧道ヲ絶ツ、義貞自ラ東寺ニ抵リ、尊氏ヲ呼ヒテ曰ク、天下ノ擾亂久シ、皇統ノ爭ト云フト雖モ、抑々公ト吾ニ由レリ、徒ニ功ヲ規リ、以テ人命ヲ害センヨリハ、寧ロ單騎相決セント、尊氏出テ、應セントス、將士之ヲ止ム、既ニシテ尊氏伴テ降ヲ乞フ、天皇、義貞ヲ慰諭シテ曰ク、天運未タ至ラス、兵疲レ民苦ム、今權ニ講和シテ、以テ後圖ヲ謀ラシ、卿ハ宜シク越前ニ赴キ、北陸ヲ經略シテ、恢復ヲ圖ルヘシ、但シ卿カ賊名ヲ負ハンコトヲ患ヒ、特ニ皇太子恒眞ヲ付ス、之ヲ視ルコト猶ホ朕ノ如クセヨ、朕已ニ卿ノタメニ耻ヲ忍ブ、卿亦朕カタメニ努力セヨト因テ泣下ル將士能ク仰キ視ル者ナシ是ニ於テ義貞、皇太子及ヒ尊眞親王ヲ奉シテ、北行シ、金崎城ニ入ル、

時ニ瓜生保等山ニアリ、新田義治ヲ推シテ、北道ヲ扼シ、旁近爭ヒ附ス、二年正月、金崎ヲ援ケ、保、義鑑等途ニ戰死ス、三月義貞密ニ山山ニ入ル、賊之ヲ知ラス圍ムコト彌々急ナリ、城中食盡キ馬ヲ食フ、又盡ク義顯太子ヲ舟ニ奉シテ、山山ニ逃レシメ、尊眞親王ト自殺ス、將士之ニ殉ス、城兵八百、降ル者十二人ノミ、太子途ニ執ヘラル、賊義貞、義助ノ所在ヲ問フ、太子諦リテ曰ク、已ニ自殺スト、乃チ賊太子ヲ京師ニ送ル、適ニ義貞ノ次子義興、顯家等ト鎌倉ヲ陷ル、是ニ於テ義貞ニ應スル者多シ、義貞鯖江ニ戰ヒテ、足利高經ヲ走ラシ、三十餘城ヲ降シ、進ミテ國府ニ據ル、四方ノ義軍復タ起ル、尊氏怒リテ太子ヲ殺ス、已ニシテ高經、平泉寺ノ僧徒ヲ誘ヒ、藤島以下七寨ヲ修ム、閏七月、官軍藤島ヲ攻メテ、拔クコト能ハス、義貞怒リテ馬ヲ易ヘ、甲ヲ變シ、歩卒ヲ率キ、間道ヨリ救ニ赴ク、途ニシテ高經カ兵ニ遇フ、義貞楯ヲ備ヘス、從士身ヲ以テ

義貞ヲ蔽ヒ、且ツ逃走ヲ勸ム、義貞曰ク、士ヲ失ヒテ獨リ免ル、ハ吾カ志ニアラスト馬ニ策チテ進ム、馬箭ヲ被リテ渾中ニ墮ル、義貞起テ欲スレハ、矢其ノ眉間ニ中ル、乃チ免レサルヲ知リ自刎シテ死ス、年三十八ナリ、

第八 足利尊氏ノ志望

足利尊氏ノ願ニ歸スルヤ新田、楠ノ諸氏ト其ノ主義ヲ異ニセリ、尊氏固ヨリ、源氏ノ胄子ニシテ、北條氏ノ制スル所トナリテ、其ノ願使ニ從フコト久シ、尊氏時機ヲ得テ、宿望ヲ達セント欲ス、會シテ元弘ノ亂アルニ投シテ、名ヲ勤王ニ藉リ、鎌倉幕府ヲ殲シテ、賴朝ト同一ノ績ヲ起サントスルニ熱心セリ、然シテ朝廷ハ専ラ復故ノ政體ヲ組織シテ、幕府執政ノ跡ヲ斷チ、政權全ク諸卿ノ左右スル所トナル、故チ以テ尊氏大ニ望ヲ失ヒ、自ラ根柢ヲ固營セント欲シ、直義ニ屬シテ、類ニ關東ノ士心ヲ收ム、關東ノ將士、亦之ニ服スルコト、

日本誌 史紀 足利尊氏ノ志望 政治其他

南北一統

一朝ノ故ニアラス、率子幕政ヲ冀望シテ、各其ノ餘瀝ヲ管メント欲ス、時ニ朝廷、上野大守、成良親王ヲ以テ、征夷大將軍ニ拜シ、大ニ關東ノ鎮守ニ注意シ、更ニ執權ヲ擇ヒ、新田氏或ハ其ノ他ヲ以テ之ニ擬セントス、然シテ候補未ダ決ゼス、尊氏之ヲ聞キテ、准后藤原氏ニ憑リテ、其ノ議ヲ中止セシメ、直義竟ニ故ノ如シ、

尊氏ノ北條時行ヲ討スルヤ、亦朝勢ヲ藉リテ、朝業ノ礎ヲ築カント欲シ、奏シテ征夷大將軍、關東管領タランコトヲ請フ、朝議之ヲ可サス、更ニ征東將軍ト爲ス、尊氏大ニ怒リ、辭セスシテ發シ、往テ鎌倉ヲ平ケ、自ラ署シテ、征夷將軍、東國管領ト稱シ、竟ニ茲ニ據リテ反ス、八州ノ將士、翕然トシテ之ニ應スルコト恰モ水ノ下キニ就クカ如ク、天下ノ武人、其ノ職ヲ失ヘル者、亦群起シテ、之ニ屬スルコト、雲ノ如シ、尊氏、義貞ヲ誅スルヲ以テ名ト爲シ、儼然トシテ其ノ反ヲ露

ハス、是ニ於テ朝廷尊氏ノ官爵ヲ削リ、尊良親王ヲ以テ上將軍トシ、義貞ヲ以テ之ニ副ヘ、東海道ヨリ軍ヲ進マシメ、忠房親王ハ東山道ヨリ、義良親王、源顯家等ハ奥羽ヨリシ、三道并ヒ進マシム、義貞等討チテ尊氏ヲ手越河原ニ破ル其ノ後脇屋義助賊ト箱根ニ戰ヒテ大ニ竹下ニ敗ラル、官軍竟ニ潰散シテ、賊ニ下ル者多シ、天皇使者ヲ遣ハシテ、義貞ヲ尾張ヨリ召還セントシテ龍馬ヲ出シテ之ニ乗ラシム半途ニシテ其ノ馬斃ル、藤房ノ言悉ク適中ス、是レ蓋シ大勢ノ變遷ヲ來セル、一大種子ナリ、

第二 政治其他

本編ニ政治、法律、以下外交、宗教、文學、武備、民業、美術及ヒ風俗史等ノ目ナキハ、其ノ紀事ノ年代、歴ニ六十年ニ過キス、且ツ建武ノ中興アリト雖モ、尋テ南北二朝ノ亂トナリ、天下干戈ヲ事トシテ、國力委弊シ、其ノ間ノ事蹟、未ダ曾テ記スルニ足ルモノアラ

テ、四方大ニ定マル、義滿乃チ大内義弘等ヲシテ、和ヲ講セシメテ曰ク、天皇帝師ニ還リ、神器ヲ北帝ニ傳ヘハ、自今兩統ヲ更立スルコト、尙ホ鎌倉幕府ノ故事ノ如クセント、天皇之ヲ許シ、神器ヲ後小松天皇ニ授ク、實ニ元中九年(明德三年)閏十月五日ナリ、後醍醐天皇ノ南遷ヨリ、此ニ至テ五十七年、南北合一シ、海内始テ晏然タリ、

第二 應仁文明ノ亂

足利義政、在職已ニ久シク、稍、政務ニ倦ム、義政未タ男子アラス、弟僧義尋ヲシテ髮ヲ蓄ヘシメ、名ヲ義視ト更メテ嗣ト爲ス、細川勝元之カ執事タリ、時ニ寛正五年ナリ、明年義政ノ子、義熙生ル、義熙ノ母富子、密ニ山名持豊ニ謂ヒテ曰ク、此ノ兒僧ト爲スニ忍ヒス、然シテ義視已ニ嗣タリ、勝元之ヲ輔ク、希ハクハ卿之ヲ保護セヨト、持豊以爲ヘラク、義視將軍トナラハ、勝元必ス權ヲ專ニスヘシ、吾此ノ兒ヲ鞠育シテ、他日

ス、是ヲ以テ政治以下ノ事項ニ就キテハ、第六期ヨリ直ニ第八期ニ移ルモノトス、

第六編 第八期

第一章 本史

第一 南北一統

正平七年(文和元年)足利義詮、後光嚴天皇ヲ立ツ、時ニ尊氏關東ヲ定メテ、京師ニ入ル、十三年(延文三年)尊氏薨シ、義詮襲ク、南軍喪ニ乘シテ、所在並ヒ起リ、鎮西ノ諸軍モ、亦再ヒ振フ、十五年(延文五年)北軍大舉シテ、河内ニ至ル、楠正儀、和田正武ト金剛山、及ヒ赤坂ヲ守リ、大ニ北軍ヲ苦マシメシモ、後終ニ敗レテ、南軍復タ微ナリ、二十三年(應安元年)南朝後龜山天皇立ツ、二十四年(應安二年)正儀北朝ニ降ル、文中元年(應安五年)北朝後圓融天皇立ツ、弘和三年(永徳三年)後小松天皇、後圓融天皇ノ禪ヲ受ク、是ニ至リ

爲スコトアラント、遂ニ之ヲ諾ス、是ヨリ先畠山義就、同族政長ト戰フ、初メ管領畠山持國、三將軍ヲ輔佐スルヲ以テ、威權頗ル盛ナリ、持豊之ト抗衡シ、女ヲ勝元ニ嫁シテ、以テ相結フ、勝元ハ祖先以來、畠山氏ト交ト管領タリ、持國子ナシ、曾テ其ノ弟持富ノ子政長ヲ養ヒテ嗣ト爲ス、已ニシテ義就生ル、持國遂ニ政長ヲ黜ケテ、義就ヲ立テントス、政長走リテ勝元ニ依ル、義就之ヲ攻ム、勝元、持豊ト政長ヲ助ケテ、持國ヲ襲ヒ、義就ヲ河内ニ走ラス、既ニシテ政長、持國ヲ迎フ、持國、又政長ヲ嗣トス、其ノ後義政、政長ヲシテ國ニ就カシム、其ノ何ノ故ナルヲ知ラス、畠山義忠、義就ヲ召還センコトヲ請フ、義政之ヲ許ス、後義就法ヲ犯シテ逐ハレ、政長復タ召還セラル、持豊、赤松滿祐ト善カラス、勝元カ赤松氏ヲ再興スルヲ憤リ、爾來勝元ト隙アリ、嘉吉元年、赤松滿祐、將軍義教ニ怨アリ、之ヲ弑シテ誅

ゼテ、家絶エ、長祿二年、遺臣石見太郎請ヒテ曰ク、神璽猶ホ吉野ニ在リ、願ハクハ取リテ之ヲ獻シ、赤松氏ノ後ヲ立テント、義政之ヲ諾ス、太郎四十四人ヲシテ伴リ降ラシメ、遂ニ二皇子ヲ殺シ、神璽ヲ獲テ之ヲ獻ス、詔シテ滿祐カ姪政則ヲ赦ス、持豊怒リテ太郎ヲ途ニ殺ス、

是ヨリ先、斯波義敏、義廉、宗家ヲ争フ、持豊義廉ノ舅タルヲ以テ之ニ黨シ、兵ヲ聚ム、都下流言アリ、義視亦之ニ與スト、義視自安セス、勝元カ家ニ逃ル、京師騒然タリ、應仁元年正月、政長、義政ヲ襲セントシテ、大ニ供具ヲ備フ、期ニ及ヒテ、義政至ラス、持豊ノ第三寔ス、政長大ニ怨ム、蓋シ武家ノ故事トシテ、歳首ニ管領以下將軍ヲ襲シ、椀飯ヲ供スルヲ例トス、持豊、義廉、幕府ヲ圍ミ、請ヒテ曰ク、義就已ニ赦サル、應ニ本第二就カシムヘシ、然ルニ勝元、政長ヲ右ケテ、公命ヲ拒梗スト、義政使者ヲ遣ハシテ、勝元ヲ

政春ハ淡路、斯波義敏ハ越中、畠山政長ハ紀伊、河内、京極持清ハ隱岐、出雲、飛騨、近江、赤松政則ハ播磨、備前、美濃、武田國信ハ安藝、若狹ノ兵ヲ以テ、並ニ之ニ屬ス、凡ソ十六萬五千餘人、上下震駭シ、民庶負擔シテ避ク、持豊之ヲ聞キテ、亦管國、但馬、播磨、因幡ノ兵ヲ徵ス、族教之ハ伯耆、備前、教清ハ美作、石見、備後、斯波義廉ハ越前、尾張、遠江、義就ハ大和、河内、紀伊、畠山義統ハ能登、六角高頼ハ近江、一色義直ハ丹波、伊勢、土佐、土岐成頼ハ美濃、大内政弘ハ周防、豊前、筑前、安藝、石見、河野通春ハ伊豫ノ兵ヲ以テ、各之ニ應ス、凡ソ十一萬六千人、勝元東ニ陣シ持豊西ニ陣ス、相持シテ未タ戰ハス、義政義視ヲシテ和解セシム、聽カス、令シテ曰ク、先ツ戰フ者ハ、將軍ノ敵ナリト、是ニ於テ兩軍手ヲ束ヌルコト數日ナリ、持豊、義直ヲシテ、幕府ヲ衛ラシム、勝元撃チテ之ヲ走ラシ、將軍ノ牙旗ヲ請ヒテ、之ヲ四足門

日本誌 史紀 應仁文明ノ亂

詰問セシム、勝元曰ク、臣將ニ自ラ往キテ答ヘント、幕府戒嚴ス、時ニ兵細川邸ニ聚ル者一萬許ナリ、義政令シテ曰ク、義就、政長各兵ヲ以テ唯雄ヲ決スヘシ、將士ノ扶翼スル者ハ、叛賊ニ比セント、政長第ヲ燒キテ、御靈林ニ至ル、從兵多ク道ニ逃ビシ、厩ニ二十人ヲ餘ス、義就ノ大兵、虛ニ乘シテ進ミ擊ツ、持豊、義廉等亦潛ニ之ヲ援ク、政長之ト戰ヒ、殺傷相當ル、政長遂ニ克ツヘカヲサルヲ察シ、祠宇ヲ燒キテ逃ル、義就宇下ニ三屍アルヲ視テ、意ヘラク政長死セリト、乃チ凱旋ス、勝元門ヲ閉チテ救ハス、人其ノ怯ヲ嗤ヒ、諺ヒテ之ヲ謗ル、勝元慚憤ス、時ニ勝元ノ第東ニ在リ、持豊ノ第西ニ在リ、以テ幕府ヲ夾ム、義視往來シテ、爲ニ之ヲ和解ス、勝元陽ニ服從ス、持豊益驕リテ備ヘス、

四月、勝元潛ニ管國、攝津、丹後、土佐、讃岐ノ兵ヲ徵ス、族政之ハ阿波、參河、師春ハ備中、元春ハ和泉、ニ立テ、兩軍始テ交戰ス、六月東軍ハ相國寺ニ、西軍ハ武衛邸ニ據ル、八月流言ス、將軍ノ近臣、款ヲ西ニ通シ、常ニ謀ヲ泄ス、故ニ東軍敗チ取ルト、勝元乃チ幕府ヲ圍ミ、義政ヲシテ一色政照等、十二人ヲ逐ハシム、政照怒リテ曰ク、豈ニ唯我カ儕ノミナランヤ、將軍ノ意、亦西ニ在リ、故ニ西勝テハ笑ヒ、東勝テハ擊ムト、遂ニ西軍ニ投スル者、九十四人ナリ、九月勝元、土御門天皇、及ヒ後花園上皇ヲ幕府ニ迎フ、蓋シ義政西ヲ助ケハ、天皇ヲ挾ミテ戰ハント欲スルナリ、爾來日夜戰鬪シテ、兵火四面ニ起ル、東軍退キテ、相國寺ニ保ツ、持豊、政弘、義就等ノ五將ヲシテ、相國寺ヲ攻メシム、五人勝ヲ誓ヒテ出ツ、寺僧陰ニ款チ、西軍ニ通シテ内應ス、西軍遂ニ相國寺ヲ取り、獲ル所ノ首、車八輛ニ載セテ還ル、此ノ月義視潛ニ伊勢ニ逃レテ、北畠教具ニ投ス、細川成之曰ク、敵相國寺ニ屯セハ、我カ危キコト釜魚ノ如シト、勝元曰ク、吾之ヲ

思フト雖モ、各守ル所アリ、誰カ之ヲ復セント、或ル
人曰ク、政長即チ其ノ人ナリト、勝元因テ政長ニ告ケ
テ曰ク、事緩クスヘカラス、希ハクハ君ヲ煩サント、
政長乃チ寡兵ヲ率キテ發ス、觀ル者之ヲ危フム、政長
願テ曰ク、諸君思フルナカレ、政長アリト、直ニ進ミ
テ大ニ戰ヒテ、義就等ヲ破リ、竟ニ之ヲ復ス、政長ノ
名東西ニ振フ、

二年九月、天皇詔シテ、義視ヲ伊勢ヨリ召還セシム、
十月並語アリ、勝元廢立ヲ謀ルト、義政疑懼シテ、西
軍ニ投セント欲ス、勝元以爲ヘラケ、義視西ニ入ラハ、
義政必ス疑心ナカラント、陰ニ計リテ西軍ニ走ラシム、
持豐大ニ喜ヒテ、義視ヲ迎フ、是ヨリ兩軍ノ鬪争ハ、
宛モ將軍兄弟ノ争ノ如シ、將士ハ各黨ヲ郡國ニ樹テ、
相奪奪シ、天下亂レテ麻ノ如シ、文明四年、勝元義政
ノ旨ヲ以テ、畠山義統ヲ論シテ降ラシム、是ニ於テ北
陸ノ根道通シ、西軍ノ勢益々衰フ、

第三 川中島ノ雄戰

五年三月、持豐卒シ、子政豐嗣ク、五月勝元亦卒シ、
子政元嗣ク、兩軍各首領ヲ喪フト雖モ、猶ホ屹然トシ
テ相對シ、幕府ノ命行ハレザレトモ、義政宴遊シ、自
若トシテ意ト爲サス、天下竟ニ戰國割據ノ世トナレリ、
十二月義政職ヲ義尙ニ讓ル、政長管領タリ、義統尋テ
之ニ代ル、九年十一月、西陣解キテ各國ニ飯リ、義視
美濃ニ走り、土岐成頼ニ依ル、東軍モ亦解ク、初メ勝
元、持豐難ヲ構ヘシヨリ、凡ソ十一年、是ニ至リテ惣
ム、其ノ間官民ノ邸宅、蕩盡シテ荒野トナリ、文物典
章、盡ク兵燹ニ罹リ、灰燼トナルモノ勝計スヘカラ
ス、

ヲ略ス、天文十一年三月、村上義清、諏訪頼茂等、兵
ヲ擧ゲテ來リ攻ム、晴信邀ヘテ之ヲ破ル、十一月信濃
ノ九城ヲ取リ、十三年、諏訪頼茂ヲ勝殺ス、十五年三
月、戸城ヲ攻ム、義清來リ救フ、晴信大ニ敗レ、先鋒
ノ諸將爲ニ戰死ス、已ニシテ晴信、山本晴行ノ謀ヲ用
キ、大ニ之ニ勝ツ、十六年、晴信、義清ト上田原ニ戰
ヒテ、大ニ之ヲ破ル、義清越後ニ走ル、二十年、晴信
髮ヲ削リテ信玄ト號ス、信玄戰略ニ秀ツ、後世以テ則
トス、
上杉氏ハ、本姓長尾氏ニシテ、平良文ノ裔ナリ、世々
越後ニ居リ、爲景ノ子景虎ニ至リ、武威四隣ニ振フ、
景虎幼ニシテ、精悍膽略アリ、父爲景之ヲ棟尾ニ逐ヒ、
僧ト爲サント欲ス、天文十一年、一向宗ノ賊、加賀ニ
起ル、爲景、爲ニ梅榎野ニ殺サル、諸將多ク意ヲ景虎
ニ屬ス、獨胎田常陸、景虎ノ兄晴景ノ庸暗ヲ利トシ、
之ヲ立テ其ノ弟景康、景房ヲ殺ス、景虎時二年十三、

走リテ乳母ノ夫、及ヒ守佐美定行ニ依リ、天文兵法ヲ
學フ、已ニシテ賊ノ搜索敵ナルヲ以テ、從士十四人ト、
行脚僧トナリ、逃レテ米山ニ上リ、越中ノ府内ヲ瞰テ
曰ク、我他日兵ヲ起サハ、必ス此ニ陣セント、又梅榎
野ニ至リ、泣キテ曰ク、兒必ス仇ヲ滅シテ、冤魂ヲ慰
ムヘシト、遂ニ北陸、東山ノ諸國ヲ經歷シ、周ク山川、
城池ノ形勢ヲ探リ、圖シテ歸ル、十三年兵ヲ起シテ、
棟尾城ニ據リ、晴景及ヒ胎田常陸以下ヲ誅ス、將士推
シテ、主ト爲サント欲ス、景虎聽サスシテ曰ク、吾賊
臣ヲ誅センカタメニ、兄ト抗セシノミ、今汝等ノ諍ニ
從ハ、世人吾ヲ目シテ、篡奪ト謂ハント、削髮シテ
將ニ高野山ニ赴カントス、將士連署シテ之ヲ止ム、景
虎曰ク、主君ヲ置クハ、令ヲ用ケンカタメナリ、令ヲ
用キサレハ、主君ナクシテ可ナリ、自今吾令スル所ニ
違ハスハ、吾敢テ止マラント、則チ諸將ト誓ヒテ入ル、
明日令シテ、專横ノ者十六人ニ死ヲ賜フ、諸將股栗

ス、

二十一年、景虎薙髮シテ謙信ト云フ、謙信能ク兵ヲ用キ、日ニ強大ニ赴キ、越後ヲ徇ヘ、師ヲ加賀、能登、越中ノ間ニ出シ、佐渡、飛騨、上野等ニ及フ、

是ヨリ先村上義清來リテ、謙信ニ謁シテ曰ク、僕等信玄ノ侵凌スル所トナリ、身ヲ容ル、ニ地ナシ、公カ威名ヲ聞キ、勢ニ藉リテ國ヲ復セント欲ス、謙信曰ク、君ハ人ノ下タル者ニアラス、然ルニ來リテ我ニ託ス、是レ我ヲ知ル者ナリ、今吾加賀、越中ヲ屠リテ、父ノ讎ヲ復シ、幟ヲ京師ニ樹テント欲ス、然レトモ我ヲ知ル者ノタメニ盡サ、ルハ、丈夫ニアラスト、因テ信玄ノ兵法ヲ問フ、時ニ天文十六年ナリ、十月八千騎ヲ將キテ、信濃ニ入り、火ヲ武田ノ屬城ニ放ツ、十一月、進ミテ河中島ニ陣ス、信玄自ラ兵二萬ヲ將キテ發シ、兩軍水ヲ夾ミテ陣ス、謙信戰ヲ挑ム、信玄應セス、謙信曰ク、我聞ク公、兵ヲ用キルニ留陣ナシト、今日何ゾ然

ルヤ、吾公ト宿怨アルニアラス、唯、義清等ノタメニ敢テ問フノミ、公若シ戰ヲ欲セスハ、地ヲ彼ニ還スヘシ、尙ホ克ハスハ、吾ト戰フヘシト、信玄答ヘテ曰ク、公、義清ヲ庇スルコト、眞ニ高義タリ、然レトモ信玄死セサレハ、公、志ヲ成ス克ハス、必ス戰ハント欲セハ、公ヨリ始メヨト、謙信曰ク、諾、乃チ詰朝ノ會讎ヲ約ス、平明、謙信進ミテ戰フ、勝敗未タ決セス、謙信上流ヲ渡リテ、甲斐ノ軍ノ後ニ出テ、大ニ之ヲ破リ、多ク將士ヲ斬ル、越後ノ軍モ、亦死傷多シ、交引キテ還ル、二十三年六月、謙信、信玄ト雌雄ヲ決センコトヲ誓ヒ、復タ信濃ニ入り、犀川ヲ渡リテ陣ス、信玄出テ戰フ、終日迭ニ勝敗アリ、

弘治二年三月、兩軍、川中島ニ戰フ、三年八月、謙信復タ河中島ニ出ツ、水ヲ背ニシテ陣ス、信玄ノ侯騎、報シテ曰ク、越後ノ軍、多ク薪ヲ蓄フ、持久ノ備ヲ爲スナリト、信玄曰ク、否ラス敵陣必ス火ヲ發スヘシト、

憤ミテ進撃スルナカレト、晡時、侯騎又報シテ曰ク、越後ノ軍營ヲ掃ヒ、荷擔シテ將ニ去ラントスト、諸將爭ヒテ進撃ヲ請フ、信玄曰ク是レ謀ナリ、之ヲ擊タハ必ス敗レント、天明ク越後ノ軍ヲ見レハ、列ヲ整ヘ、陣ヲ嚴ニシ、復タ異狀ナシ、諸將信玄ノ兵略ニ服ス、信玄伏ヲ設ケテ、佯敗レ之ヲ誘ハント欲シ、馬ヲ逸シテ、北軍ニ入り圍人ヲシテ之ヲ追ハシム、謙信亦知りテ應セス、二將ノ智謀、優劣ナキコト此ノ如シ、

是ヨリ先上杉憲政、連ニ氏康ノタメニ破ラレ、關東盡ク氏康ニ屬ス、憲政謙信ニ依リテ、之ヲ復セント欲ス、謙信許諾ス、憲政之ニ上野ヲ與ヘ、上杉氏ヲ冒サシム、謙信名ヲ政虎ト改メ、越後守ト稱ス、永祿三年、入京シテ將軍ニ謁シ、關東ノ管領ヲ命セラレ、偏諱ヲ賜ヒテ、輝虎ト改ム、是ニ於テ直ニ小田原ニ逼ル、勢威八州ヲ壓ス、當時北條氏ノ城下ヲ踏ム者ハ、謙信一人ノミ、關東ノ豪傑、風ヲ望ミテ靡假シ、事大小トナク、

日本誌 史紀 川中島ノ雄戰

洪ヲ謙信ニ仰ク、故ニ上野ノ將士、兩方ニ分屬シテ、相討伐ス、皆小田原ニ近ク、越後ニ遠シト雖モ、謙信ニ屬ス、或ハ敗軍ニ至リ、急援ヲ乞フニ、謙信國ヲ發スト聞ケハ、敵先ツ四散ス、蓋シ謙信ヲ恐ル、コト鬼神ノ如シ、謙信ノ小田原ヲ攻ムルヤ、信玄、北條氏ノ託ヲ受ケ、越後ノ虛ヲ侵シ、以テ其ノ勢ヲ殺ク、謙信之ヲ聞キテ大ニ怒ル、四年八月、復タ信濃ニ入り、西條山ニ壘ス、信玄伏ヲ河中島ニ設ケ、軍ヲ分チテ、其ノ歸路ヲ絶ツ、謙信自若トシテ曰ク、彼夾撃セント欲スルナリ、吾其ノ意外ニ出ツヘシト、疑兵ヲ山上ニ置キ、全軍枚ヲ脚ミ、馬舌ヲ縛シ、進ミテ信玄ノ軍ヲ壓シテ陣ス、信玄報ヲ俟チテ曉ニ至リ、謙信ノ軍旗前ニアルヲ見テ、大ニ驚キ、急ニ隊伍ヲ改メ、以テ待ツ、已ニシテ兩軍交戰シ、部列大ニ亂ル、謙信兵ヲ潛メテ、信玄ノ麾下ヲ襲ヒ、之ヲ走ラシ、勝ニ乘シテ進ム、信玄數千騎ト走ル、一騎アリ黃襖ヲ被リ、驅馬ニ馳リ、白

布ヲ以テ面ヲ襲ミ、大刀ヲ提ケ呼ヒテ曰ク、信玄何ニ
カ在ルト、信玄馬ヲ躍ラシ、流ヲ亂リテ將ニ逃レント
ス、騎亦タ追躡シ、罵リ且ツ刀ヲ擧ケテ撃ツ、信玄刀
ヲ抜クニ暇アラス、魔扇ヲ以テ之ヲ格ク、信玄ノ部將、
原大隅槍ヲ以テ、其ノ騎ヲ刺ス、中ラズ、馬ヲ打ツ、
馬驚キ跳リテ湍中ニ入ル、信玄間ヲ得テ免ル、武田信
繁、信玄ノ危キヲ聞キテ、單騎ニシテ戰ヲ挑ミ、遂ニ
此ニ死ス、山本晴行等モ亦戰死ス、五年三月、氏康、
信玄ト兵ヲ合シテ松山ヲ攻ム、松山ハ太田三樂ノ屬城
ナリ、三樂時ニ魔楯ニアリ、留守上杉憲勝、急カ謙信
ニ報ス、謙信魔楯ニ至レハ、城既ニ陥リ、憲勝降レ
リ、謙信大ニ怒リ、刀ヲ按シテ曰ク、汝城ヲ怯夫ニ托
シ、吾ヲシテ時ニ及ハサラシム、是レ我カ武ヲ辱シム
ルナリト、三樂懼レテ、憲勝ノ質子ヲ上ル、謙信左手
ニ、質子ノ髮ヲ捫リ、右手ニ之ヲ斬リ、問ヒテ曰ク、
敵軍ノ將帥ハ誰ソト、曰ク、信玄、謙信、氏康、氏政

ナリト、謙信笑ヒテ曰ク、吾カ敵二人ノミ、氏政、謙
信ノ如キハ、刀背ヲ以テ一倒スルニ足ラスト、又問フ、
近地敵城アリヤ、曰ク、私市十里許ニアリ、謙信乃チ
進ミテ、刀根川ヲ濟リ、信玄ノ陣ヲ過キ、告ケテ曰ク、
二公、松山ヲ攻ム、吾援ハントシテ及ハス、深ク之ヲ
愧ツ、今往キテ將ニ私市ヲ攻メントス、二公、幸ニ要
セラレヨト、答ヘス、乃チ一晝夜ニシテ之ヲ拔キ、城
兵ヲ驅シ、還リテ又告ケテ曰ク、今城ヲ拔キテ還ルト、
徐ニ魔楯ニ還ル、氏康、信玄ニ謂ヒテ曰ク、公何ヲ以
テ戰ハサルト、對ヘテ曰ク、吾、公ト一ノ謙信ニ敵シ、
勝ツト雖モ、愧ツヘキナリト、依リテ問ヒテ曰ク、河
越ノ戰、公一軍ヲ以テ、兩上杉氏ニ克ツ、願ハクハ其
ノ詳ナルコトヲ聞ク、氏康曰ク、公在リ、吾何ゾ敢テ
言ハン、信玄固ク請ヒテ曰ク、兒童ヲシテ之ヲ聞カシ
メント欲スト、氏康其ノ戰略ヲ談ル、信玄還リテ馬場
信房ニ謂ヒテ曰ク、氏康ノ手段、吾之ヲ得タリト、六

年、謙信越中ヲ略シ、魚津城ヲ攻メ、父體ヲ獲テ、其
ノ族十六人ヲ誅シ、首ヲ梅楳野ニ梟ス、七年八月、信
玄、謙信、約シテ各、一壯士ヲ撰ミテ、單騎ニシテ關ハ
シメ、其ノ羸輪ニ就キ、勝者ノ主ナシテ、河中島ヲ取
ラシム、信玄、安間弘重ヲ撰ム、軀幹長大、衆ニ超ユ、
謙信、長谷川基連ヲ擇ム、體格短矮ナリ、二人騎シテ
相搏シ、馬ヨリ墜ツ、弘重、強力、基連ヲ壓ス、基連
下ヨリ刀ヲ以テ刺シ、之ヲ誅ス、甲斐ノ軍憤リテ戰ハ、
ント欲ス、信玄止メテ曰ク、吾言ヲ食マスト、乃チ四
郡ヲ越後ニ屬シテ、兵ヲ罷ム、謙信、村上義清ヲ故邑
ニ復ス、二氏兵ヲ構ヘシヨリ、十八年是ニ至リテ始テ
鎖マル、

第四 嚴島ノ義戰

天文二十年九月、周防、長門、豊前、筑前ノ守護、太
宰大貳、大内義隆、子義尊ト共ニ、其ノ臣、陶晴賢ニ
攻メテ、遂ニ自殺ス、是ヲ山田ノ亂ト云フ、晴賢固

日本誌 史紀 嚴島ノ義戰

テ豊後ノ守護、大友義銀ノ弟、義長ヲ迎ヘテ主トス、
二十二年三月、義長、周防ノ山口城ニ徙居ス、晴賢之
ヲ輔ク、而シテ擅權日ニ甚シ、九月晴賢將ニ逆ヲ謀ラ
ントシ、使ヲ遣ハシテ、毛利元就ニ説キテ曰ク、君、
吾ヲ援ケハ、佐東郡ヲ與ヘント、元就其ノ不義ヲ怒リ
テ、之ヲ卻ク、是ニ於テ元就兵ヲ將キテ、晴賢ニ屬ス
ル諸城ヲ攻ム、

弘治元年五月、元就、嚴島ノ有、浦ニ城カントス、將士
皆其ノ不可ナルコトヲ諫ムレトモ聞カス、皆相言ヒテ
曰ク、我カ公、常ニ諫ヲ容ル、今何ゾ斯ノ如キヤト、
此年六月、城成ル、乃チ家臣ヲシテ、之ヲ守ラシメ、
草津、櫻尾、仁保島ノ諸城ヲシテ、相應援セシム、既
ニシテ元就僭リテ、將士ノ諫ヲ容レサリシコトヲ悔イ
テ曰ク、嚴島ノ地形守リ難ク、援ケ難シ、即チ敵ノ有
トナリ、諸城從テ陥ラン、吾カ計之ヨリ失ナルハ莫シ
ト、晴賢聞キテ大ニ喜ヒ、先ツ之ヲ取リテ、此ニ牙旗

ヲ樹テ、尋テ諸城ヲ略取セント欲ス、九月自ラ兵二萬七千ヲ將キ、來リテ嚴島ニ屯シ、城ヲ攻ムルコト甚ダ急ナリ、元就乃チ、宍戸隆家ヲシテ、吉田城ニ留守セシメ、兵三千五百ヲ率キテ、草津ニ至リ、晴賢ト海ヲ隔テ陣ス、元就移リテ火立山ニ陣ス、乃チ諸軍ニ令シ、黄昏船ニ上ル、大風雨ニ會シ、士卒震怖ス、元就勵マシテ曰ク、是レ天我ヲ助グルナリト、篝火ヲ滅シ、一燈ヲ牙船ニ掲ケ、諸船ヲシテ之ヲ認メシメ、浪ヲ破リテ渡ル、晴賢カ兵疲レ、且ツ風雨ヲ恃ミテ、警邏スル者ナシ、天將ニ明ケントス、元就命シテ螺ヲ吹キ、鼓譟シテ進マシム、敵兵大ニ周章シ、爭テ其ノ牙營ニ萃ル、營、填咽シテ互ニ擊刺ス、元就カ兵大呼シテ益々進ム、敵兵潰奔シ、舟ヲ爭ヒテ溺死スル者、其ノ數ヲ知ラス、晴賢肥大ニシテ、歩行ニ便ナラス、從者扶掖シテ海岸ニ至リ、船ヲ求ム、復タ一隻ヲ觀ス、遂ニ自殺ス、時二十月朔日ナリ、

弘治三年三月、元就兵ヲ將キテ、周防ニ至ル、敵兵風ヲ望ミテ降附ス、進テ山口ヲ攻ム、義長拒クコト能ハス、長門ニ走リテ自殺ス、是ニ於テ周防、長門、安藝、備後、皆元就ニ屬シ、兵威大ニ震フ、

第五 織田氏尾張ニ起ル

信長ハ、平重盛ノ子、資盛ノ後ナリ、子孫世々越前國織田庄ノ祝人ナリ、因テ織田氏ヲ冒シ、斯波氏ノ近臣トナリ、重臣六人ノ中ニ列ス、後尾張ニ徙リ、八郡ヲ分チ同族信定ト各、四郡ヲ領ス、天文中、父信秀、今川、齋藤等ト相攻撃ス、天文十七年八月、齋藤利政ト和ス、利政其ノ女ヲ以テ、信長ニ配ス、信長尙儻ニシテ大志アリ、細節ヲ顧ミス、常ニ奇服ヲ被テ、大刀ヲ帶フ、出行ノ時ト雖モ、修飾セス、傍ニ人ナキカ如シ、平時事ニ托シテ、將士ノ剛弱ヲ試ミ、馬ヲ調へ、弓銃ヲ習ハシメ、泗ヲ學ハシム、又近士ヲ聚メ、竹槍ヲ以テ闘ハシムルニ、其ノ長槍ニ利アルヲ知リ乃チ二丈八槍ヲ

二年二十ナリ

作ル信長曾テ亡父ノ法會ニ方リ、弟信行ト借ニ位前ニ拜ス、信長先ツ進ミテ、香ヲ擲リ爐内ニ投シ、一拜シテ出ツ、信行容ヲ整ヘ香ヲ拈リ、恭シク拜伏ス、觀ル者窃ニ信行ヲ譽ム、信長放縱日ニ甚シ、平手政秀、保傳ノ任ニ居ルヲ以テ、數々諫爭スレトモ聽カス、政秀、諫言五條ヲ書シテ、自殺ス、信長大ニ驚キ、悔イテ屏居シテ出テス、爲ニ佛院ヲ建テ、政秀寺ト云フ、自ラ矢ヒテ曰ク、吾徒ニ悔ユルモ益ナシ、當ニ大功ヲ天下ニ立テ、前失ヲ償フヘシト、益々武ヲ講ス、

(利政曾テ信長ノ動止ヲ試ミント欲ス、期ニ至リ、利政道傍ノ民舍ニ潛ミテ、其ノ行ヲ覗フ、信長風貌臨野ノ如シ、既ニ至リ形ヲ更ム、儀容閑雅ニシテ、進退禮ニ適フ、利政等禮式ヲ整ヘテ、之ヲ引ク、信長群士ノ前ヲ過キ、堂ニ上リ、柱ニ倚リテ坐ス、頃クアリテ、利政出ツ、信長見サル者ノ如シ、從士進ミテ曰ク、是レ山城守ナリト、信長顧ミテ曰ク、先ニ

道傍ノ民舍ニ在リシ人ニ類セリト、利政後ニ嘆シテ曰ク、我方國終ニ贊幣ト爲サ、ルヲ得スト、信長時

信長、今川氏ヲ窺フコト年アリ、其ノ臣、戶部政直、笠寺城ニ在リ、驍勇ニシテ書ヲ能クス、信長其ノ書ヲ得、侍史ニ命シテ、欺書ヲ贗作シ、森可成ヲ賈人ニ擬シ、駿河ニ齎ラシテ、義元ヲ城カサシム、義元反聞ヲ信シテ、政直ヲ誅ス、永祿三年、義元既ニ遠江、參河ヲ掠定シ、聲威遠近ニ震ヒ、將士風靡ス、大舉シテ尾張ニ至リ、攻メテ、二城ヲ拔キテ、桶狹間ニ陣ス、信長曰ク、先スレハ人ヲ制シ、後ルレハ人ニ制セラル、明日將ニ勝敗ヲ決セント、大ニ置酒會飲シテ、自ラ舞ヒ、古謠ヲ謠ヒテ曰ク、人世五十夢幻ノ如シ、生アレハ死アリ、將タ何ヲカ恨ミント、舞訖リテ甲ヲ擲、馬ニ乘リテ發ス、熱田ニ至ル頃一千人ヲ得タリ、入リテ社前ニ拜シ、陰ニ祠官ヲシテ甲ヲ社殿ニ鳴ラサシメ將

士ヲ願ミテ曰ク、神助ノ兆ナリト、乃チ山路ニ沿ヒテ

進ム、時ニ風砂面ヲ撲キ、雷雨起リテ昏黒ナリ、諸將

嚮テ抑ヘテ之ヲ諫ム、信長怒リテ曰ク、吾安進スルニ

アラズ、彼既ニ二城ヲ拔キ、其兵疲ル、且ツ吾ヲ侮リ

テ備ヘス、吾其ノ不意ニ出ツヘシ、機失フヘカラスト、

乃チ軍ヲ潛メ山ヲ攀チ、桶狹間ニ至リ、鼓譟シテ馳セ

下ル、義元ノ麾下、狼狽散亂シテ、取フコト克ハス、

義元竟ニ戰死ス是ヨリ信長ノ威名、天下ニ震フ、

此ノ時ニ方リ、足利氏太ニ衰ヘ、三好長祿、松永久秀

等、幕府ノ政權ヲ私シ、北道ノ將士ハ、各一方ニ割據

シテ、迭ニ相爭奪ス、信長慨然トシテ、天下ヲ戡定ス

ルノ志アリ、四年、水野信元、信長ニ説キ徳川家康ト

連和シテ、之ニ東方ヲ委ネ、西面ヲ征シテ、天下ヲ圖

ランコトヲ勸ム、信長喜ヒテ、約ヲ誓フ、

五年十月、正親町天皇、熱田神社ヲ奉幣ニ托シ、立入

宗繼等ヲシテ、密旨ヲ附ラン、尾張ニ赴カシム、信長

コトニ同、義賢竟ニ命ニ應セス、九月信長、義昭ヲ挾

ミテ、義賢ヲ討チ、三日ニシテ十八城ヲ下ス、三好ヲ

黨、驚キテ京師ヲ棄テ去ル、信長即チ京ニ入ル、信長

岐阜ヲ發シテヨリ、十二日ニシテ上洛シ、義昭ヲ清水

寺ニ居ランゾ、自ラ東福寺ニ陣ス、初メ京師ノ士民、

信長ノ威武ヲ聞キ、其ノ暴掠ヲ怖レ、相驚キテ皆荷擔

シテ四方ニ離散ス、信長至ルニ及ヒテ、士民ヲ愛撫シ

號令嚴明ニシテ、秋毫モ侵サス、朝野怙然タリ、其ノ

卒會、賈人ト價ヲ爭フ者アリ、輒チ執ヘテ之ヲ罰ス、是

ニ於テ士民相告ケテ、土ニ復ル、蓋シ信長ノ權謀ナリ、

京畿ノ將士調ヲ執リ、軍門市ノ如シ、朝廷功ヲ賞シテ、

顯爵ニ叙ス、信長之ヲ辭ス、乃チ從五位下ニ叙シ彈正

忠ニ任ス、

義昭成ヲ賀シ、盛ニ樂ヲ張ラント欲ス、信長諫メテ曰

ク、四方未タ平カス、優遊ノ秋ニアラズト、之ヲ省キ

テ式ヲ畢ヘ、兵ヲ釋キ關ヲ撤ス、遠近悅服ス、義昭書

日本誌 史紀 織田氏尾張ニ起ル

三百九十二

乃チ沐浴シテ、勅使ニ接ス、詔ニ曰ク、方今朝廷衰細

シテ、姦宄縱橫ス、卿幸ニ威力ヲ養ヒテ、以テ王室ヲ

興スヘシト、信長答ヘテ曰ク、特旨ノ聖言、何ノ榮カ

旂ニ加ヘン、臣當ニ天威ニ藉リ、先ツ美濃、近江ヲ平

ケ、不日入朝シテ事ヲ圖ルヘシト、日夜西上ノ策ヲ識

ス、時ニ武田信玄、國富ミ兵強シ、信長厚ク之ト親ム、

北年八月、齋藤義龍ノ子、龍興失敗アリ、稻葉通朝等叛

キテ欺テ信長ニ通ス、信長前後六年ニシテ、竟ニ之ヲ

定メ、尋テ稻葉山ニ移リ、名ヲ岐阜ト改ム、

是ヨリ先松永久秀等、將軍足利義輝ヲ弑ス、弟義昭走

リテ佐々木義賢ニ依リ、難ヲ靖ント欲ス、三好ノ三黨

(三好康長、三好政康、岩成左通) 義賢ヲシテ陰ニ義昭

ヲ圖ラシム、義昭逃レテ若狹ニ至リ、武田義統ニ依ル

義統辭ス、轉シテ朝倉義景ニ頼ル、義景諾スト雖モ、

果サス、義昭、信長ノ威名ヲ聞キ、終ニ之ニ頼リテ興復

ヲ託ス、十一年八月、信長使ヲ遣ハシテ義賢ヲ招諭スル

シテ、信長ヲ父ト呼フ、信長朝廷ノ義旗ヲ歎シ、村井

貞勝ニ諭シテ曰、應仁以來、天下大ニ亂レテ、王室

衰微セリ、凡ツ王土ニ居リ、王臣タル者、誰カ嗟悼セ

サラン、今畿内粗ホ定マル、當ニ禁内ヲ修シテ、帝坐

ヲ安スヘシ、然レトモ亂荒ノ後、遽ニ役ヲ興サハ、恐

クハ民幣ヲ擾サン、宜シク之カ漸成ヲ期スヘシト、乃

チ法度ヲ定メ、木下秀吉ヲ京師ノ留守トシテ歸ル、

元龜元年、信長、朝倉義景ニ入朝ヲ促ス、義景聽カス、

信長乃チ之ヲ越前ニ攻ム、淺井長政、義景ト舊アリ、

長政反シテ信長ヲ擊タンコトヲ約シ、遂ニ近江ノ姉川

ニ戰フ、呼聲地ヲ動ス、信長殆ト危シ、徳川家康、羽

柴秀吉、兵ヲ督シテ、竟ニ之ヲ破リ、驍將以下、三千

餘人ヲ斬ル、九月三好ノ黨ヲ攝津ニ討ツ、一向僧大坂

ヲ以テ義景等ニ應ス、信長之ヲ意ト爲サス、將士ヲシ

テ赴キ攻メシム、大ニ敗レテ死傷多シ、前田利家ノ力

戰ニ依リテ、屋ニ全キコトヲ得タリ、信長敵ノ内間ニ在

日本誌 史紀 織田氏尾張ニ起ル

三百九十三

リテ困ム、義景長政之ヲ時トシテ、南上ス、森可成、以下皆拒戦シテ死ス、十一月義景等義昭ニ依リテ和ヲ請フ、許サス、天皇詔シテ之ヲ許サシム、
 二年九月、信長叡山ヲ燔ク是ヨリ先叡山ノ僧、義景等ニ應ス、信長諭スニ順逆ヲ以テス、聽カス、此ニ至リテ此ノ舉アリ、佐久間信盛等諫メテ曰ク、桓武天皇、草創以來、此ニ千年、王城ノ鎮タリ、今之ヲ滅スルハ如何ト、信長曰ク、吾勤王ノ師ヲ唱ヘテ、王道ノ衰ヲ興シ、四海ノ平ヲ圖リ、千辛萬苦、一日モ安居セス、彼レ務テ凶賊ヲ右ケ、王法ヲ妨ケ律ヲ犯ス、是レ國家ノ蠱賊、安ソ王城ノ鎮ナランヤ、今ニシテ芟除セスンハ患ヲ後世ニ貽サント、乃チ堂社、僧房、餘ル所ナク、僧徒ハ老少ヲ論セス、盡ク之ヲ殺ス、然シテ志賀郡ヲ明智光秀ニ與ヘテ岐阜ニ歸ル、此ノ歳、皇居落成ス、仍テ供御ノ田ヲ置カント欲ス、寇賊ノ侵奪ヲ恐レ、乃チ金ヲ京畿ノ豪戸ニ貸シ、其ノ息ヲ以テ供御ニ充テ、

大ニ缺典ヲ興シ、紀綱頗ル張ル、義昭失行多シ、且ツ信長ノ武威、日ニ熾ナルヲ忌ミ、竊ニ之ヲ圖ラント欲ス、信長十七事ヲ書シテ諫諍ス、其ノ言公平ニシテ、勤王愛國ノ情溢ル、義昭驕傲ニ流レテ、悛メス、天正元年、武田信玄、上杉謙信、及ヒ毛利輝元ニ令シテ、潛ニ信長ヲ挾攻センコトヲ圖ル、信長和ヲ請フ聽カス、益々城壘ヲ築キ、兵食ヲ徵ス、信長曰ク、吾遂ニ兵ヲ用キサルヲ得スト、京師ニ至リ、兵ヲ視シテ和ヲ請フ、尙ホ聽カス、乃チ二條城ヲ圍ム、義昭和ヲ聽ス、信長丹羽長秀ニ、耳語シテ曰ク、將軍必ス再舉スヘシ、汝宜シク兵艦ヲ湖ニ備ヘテ俟ツヘシト、七月果シテ再兵ヲ舉グ、信長警ヲ得テ乃チ發シ、直ニ馳セテ澤山ニ至リ、彼ノ兵艦ニ乘シ、即日坂下ニ達シ、直ニ京師ニ入ル、京師ノ人驚キテ曰ク、信長翼アルカト、信長進テ義昭ヲ宇治ニ攻ム、義昭死ヲ滅センコトヲ請フ、信長害ヲ加フルニ忍ヒス、秀吉等ニ委シテ、之ヲ河内ノ若

江ニ徙ス、是ニ於テ織田氏、足利氏ニ代リ、令チ京師ニ出シ、村井貞勝ヲ以テ、所司代ト爲シ、大ニ仁政ヲ行ヒ孝節ヲ旌ス、尋テ義昭ニ應スル者ヲ攻メシム、岩成左通ヲ斬リ、荒木村重ヲ降シ、又命シテ和田惟政ヲ攻メシム、賞格ヲ榜シテ曰ク、主將ヲ獲ル者ニ萬金、編禊ヲ獲ル者ニ千金、士卒ヲ得レハ百金ヲ予フヘシト村重ノ將、中川清秀墨ヲ以テ其ノ首條ニ勾ス、見ル者之ヲ恠シム、已ニシテ濠ニ伏シ、惟政ノ出ツルヲ待チ跳出シテ遂ニ之ヲ斬ル、信長乃チ萬金ヲ與フ、
 八月、又義景ヲ攻メ、兩日十四城ヲ屠リ、遂ニ義景ヲ斬リ、之ヲ京師ニ梟シ、尋テ淺井久政、長政父子ヲ攻殺ス、又六角義弼ヲ降シ、三好義次ヲ攻メテ之ヲ殺ス、是ニ於テ四氏皆亡フ、
 天正二年、信玄既ニ卒セシカハ、信長之ト絶チ、上杉謙信ニ通ス、三年徳川家康ヲ援ケ武田勝頼ト、大ニ長篠ニ戦フ、初メ軍譏ニ當リ、徳川ノ將、酒井忠次進ミ

テ策ヲ献ス、信長伴リ罵リテ曰ク、田舎ノ兒、何チカ知ラント、後密ニ忠次ヲ召シテ曰ク、汝ノ計用キルヘシ、吾其ノ漏泄ヲ恐レテ、伴リ叱セシナリト、竟ニ勝頼ノ軍ヲ破リ、斬獲凡ソ一萬三千級、勝頼壓ニ免レテ甲府ニ還ル、時ニ越前ノ朝倉ノ餘黨起ル、八月攻テ加賀越前ヲ定メ、柴田勝家、前田利家、佐々成政等ニ授ク、
 四年正月、信長徙リテ、近江ノ安土ニ治シテ、謙信ニ備ヘ、其ノ子信忠ヲ岐阜ニ置キ、以テ武田勝頼ニ備フ、時ニ大坂ノ一向門徒、復々武田、上杉、毛利等ト相結ヒテ兵ヲ舉グ、信長急ヲ聞キ、直ニ馳セテ之ヲ平ク、五年十一月、累遷シテ、從二位右大臣ニ至ル、信忠左近衛權中將ニ任ス、信長略ホ畿内ヲ定ムト雖トモ、大坂未タ服セス、毛利輝元、之ヲ援ケ、秀吉ニ委スルニ中國ノ事ヲ以テシ、山陰、山陽ヲ略セシム、時ニ謙信信長ト互ニ中原ヲ争フノ志アリ、大舉シテ西上セント

ス、六年、謙信西上ノ準備已ニ定マリシニ、病ミテ暴ニ卒ス、信長聞キテ大ニ喜ヒ、物ノ手ヨリ墜ルヲ知ラズ、是ニ於テ越中ヲ定メ、尋テ丹波、丹後ヲ略ス、八年、大坂一向ノ門徒、連ニ勢援ヲ失フ、正親町天皇諭シテ降ラシム、門徒等信長ト兵ヲ交ヘシヨリ、十一年ニシテ鎮定ス、本願寺主光佐、紀伊ノ鷲森ニ逃レ、子光壽等、大坂城ヲ致シテ去ル、攝津悉ク平ク、信長既ニ近畿二十餘國ヲ定メ、袞冷嚴峻ナリ、故ニ奸盜屏息シ、行旅豪ヲ委テ睡ル、時ニ亂世ノ一奇ト爲ス、是ノ時ニ當リ、西ニ毛利アリ、東ニ武田、上杉アリ、未タ服從セス、徳川家康、屢武田ト戦フ、北條氏政ハ關八州ヲ以テ内瀾ス、十年信長武田勝頼ヲ撃チテ、遂ニ之ヲ滅ス、甲斐信濃ノ民、素ト信玄ニ威服ス勝頼ニ至リ、奸臣政ヲ傳ニシ、弊政多ク、虐役ニ苦シムコト日久シ、師至ルニ及ヒ、先ヲ争ヒテ降ル、信長、甲斐信濃、駿河、上野ノ四國ヲ定メ、降附ヲ撫納シテ、奸臣

ヲ誅ス、四月、澁川一益ヲ以テ關東管領ト爲シ、且ツ奧羽ノ平定ヲ委メ、五月、秀吉信長ニ告ケテ曰ク、臣今高松城ヲ圍ム、吉川元春、小早川隆景等、毛利輝元ヲ擁シ、大舉シテ來リ救フ、機會失フヘカラス、請フ援軍ヲ賜ヘト、信長釋ヒテ曰ク、彼渠穴ヲ擧ケテ來ル是レ天授ナリ、吾自ラ往キテ之ヲ殲シ、勢ニ乘シテ九州ヲ定メント、大ニ兵ヲ徵シ、明智光秀等ヲシテ、先ツ發セシム、光秀乃チ丹波ノ龜山ニ還リテ、逆ヲ謀ル、初メ光秀、諸國ニ流寓シ終ニ信長ニ仕ヘ、擢テ、登用セラレ、丹波ヲ食ム、光秀、材藝ヲ以テ自ラ高フル、而シテ信長將士ヲ待ツニ禮節ナシ、曾テ將士ヲ宴ス、光秀素ト飲ニ勝ヘス、酒ヲ迷ル、信長之ヲ捉ヘテ強フ信長、森可成ノ子蘭丸ヲ寵ス、曾テ珍玩ヲ陳シテ曰ク汝欲スル所ヲ言ヘト、答ヘテ曰ク、臣ノ願此ニアラス近江ノ志賀郡ハ、父ノ舊領ナリ、之ヲ得ハ幸甚ナリ、然レトモ肯テ望ム所ニアラスト、信長曰ク、且ク之ヲ

俟テ、三年ノ後之ヲ與フヘシト、志賀郡ハ、時ニ光秀ノ屬邑ナリ、光秀屏後ニ在リテ之ヲ聞キ、意ヘテク我ヲ誅セラル、コト、蓋シ三年ノ後ニアルカト、其ノ後又光秀ニ命シテ、徳川家康ヲ變セシム、光秀盛ニ供具ヲ備ヘ、周旋甚タカム、俄ニシテ出征ノ命アリ、他人之ニ代ル、光秀大ニ悲リ盡ク其ノ具ヲ湖ニ投シテ去ル、此ニ至リテ反心アリ、信長之ヲ覺テス、安土ヲ發シテ京師ニ入り、本能寺ニ館ス、光秀秀吉ヲ援クト宣告シ、丹波ノ兵ヲ悉シテ西向シ、俄ニ左折シテ馬首ヲ枉ク、士卒之ヲ異シム、光秀颯言シテ曰ク、吾方敵ハ、本能寺ニアリト、衆始テ其ノ反ヲ知ル、六月二日昧爽、本能寺ヲ圍ム、事倉卒ニ出テ、撥甲ニ過アラズ、信長及ヒ從士等力戰シテ之ヲ拒ク、信長傷キ、火ヲ繼チテ自殺ス、年四十九、蘭丸、兄弟三人、其ノ他百餘人盡ク之ニ死ス

テ、虛美ヲ喜ハス、官權ヲ干ノス、賞罰ヲ明ニシ、政偏私ナク、直諫ヲ好ミテ之ニ從ヒ、公廉ヲ舉ゲテ、奸臣ヲ黜ク、尤モ浮圖ノ其ノ道ヲ守ラサルヲ憎ム、一僧アリ自ラ神通ヲ得タリト稱ス、愚民景附ス、信長召シテ詰問シ、其ノ兩手ヲ捉リ、親テ其ノ頭ヲ斫リテ曰ク猶ホ神通ヲ得タルカト、蓋シ信長、足利氏ノ舊慣ヲ一洗セントス、故ニ風俗ノ變更ヲ喜フ、然レトモ性猜忍ニシテ、將士ノ舊惡ヲ追咎ス、光秀ノ如キハ、皆自ラ安ンセス、爰ヲ以テ其ノ志ヲ果サ、リシナリ、
第六 豊臣氏ノ大業
秀吉ハ、尾張愛知郡中村ノ人、父ノ名詳ナラス、幼名日吉丸ト稱ス、其母人ニ越絶ス、母舅ケテ邑人ニ寄食ス、同閭筑阿彌ト云フ者アリ、織田信秀ノ僕タリ、疾ヲ以テ歸リ耕ス、母再ヒ之ニ醜ス、家貧ニシテ糞ヲコト能ハス、之ヲ糞更郡ノ光明寺ニ托シテ、僧トセントス、日吉意ヘテク大丈夫亂世ニ生レテ、安ソ乞丐ヲ學

ハンヤト、僧ヲシテ己ヲ厭忌セシメント欲シ、品行放恣ナリ、僧逐ニ之ヲ返ス、年甫十六、遠江ニ如キ、松下之綱ノ奴トナリ、名ヲ與助ト改ム、之綱其ノ才幹ヲ愛ス、一日黄金六兩ヲ附シ尾張ニ往キテ胴圓ノ鍔ヲ買ハシム、與助謂ヘラク、吾姑ク此ノ金ヲ借りテ、仕進ノ資ト爲サント、此ノ時ニ當リ信長嗣立シテ、專ラ四疆ヲ略ス、與助乃チ刀劍、衣服ヲ辨シ、自ラ木下藤吉ト稱シ、信長ノ出ツルヲ睨ヒ、道ニ跪キテ曰ク、臣カ父曾テ先君ノ奴タリ、願ハクハ復タ臣ヲ收メテ、奴ト爲シタマハントナト、信長熟視シテ、笑ヒテ曰ク、汝カ面猴ニ類セリ、其ノ心必ス、捷ナラント、之ヲ許ス、常ニ鞋ヲ穿リテ從フ、奉仕甚タカム、信長其ノ才幹ヲ愛シテ親近ス、永祿二年、清洲城ヲ修ス、二旬ヲ經テ未タ成ラス、藤吉從ヒテ城下ヲ過キ、嘆シテ曰ク、嘻危シト、信長之ヲ詰ル、密ニ對ヘテ曰ク、方今君カ國強敵ノ間ニ介マリ、備ヲ弛フルコト此ノ如シト、信長

リ、五十餘色ヲ服ス、信長賞シテ將校ニ列ス、足利義昭、信長ニ請ヒテ曰ク、一將ノ智勇、兼備ナル者ヲ留メテ、京師ヲ鎮メント、衆意ヲ、柴田、丹羽、佐久間等ニ擬ス、擇出スルニ至リテ、則チ秀吉ナリ、衆大ニ驚ク、秀吉、裁決、立處ニ辨ス、三好ノ黨犯ス克ハス、元龜元年、信長兵ヲ越前ニ進ム、秀吉先ツ發シテ、手筒城ヲ拔ク、淺井長政叛シテ、信長ノ軍ノ後ヲ絶ツ、秀吉自ラ請ヒテ殿シ軍ヲ全クス、功ヲ以テ三萬石ヲ賜フ、既ニシテ、淺井長政、朝倉義景、兵ヲ帥キテ、八王寺ニ陣シ、進ミテ大津ヲ焚ク、天正元年信長義景ヲ滅ス、秀吉長政ヲ攻メテ之ヲ平ケ、信長ヲシテ、北顧ノ患ナカラシム、竟ニ近江、十八萬石ヲ食ム、長島ニ居リ、三年筑前守ニ任シ、從五位下ニ叙ス、是ヨリ先、秀吉姓ヲ羽柴ト改ム、

此ノ時ニ方リ、毛利輝元、山陰、山陽十餘州ヲ有ツ、信長秀吉ヲ以テ、中國ノ事ヲ委子テ曰ク、功成ラハ、

乃チ命シテ工事ヲ司ラシム、藤吉役徒ヲ分チテ十隊ト爲シ、一隊ヲ十歩ニ充テ、自ラ率キテ督作シ、兩日ニシテ成ル、信長見テ大ニ驚キ、因テ擢デ、吏ト爲ス藤吉知リテ言ハサルコトナク、顔ヲ犯シテ避ケス、信長多ク彈斥スレトモ、夷然トシテ恥チス、衆笑ヒテ曰ク、猿面甚タ厚シト、藤吉、淺野長勝、前田利家ト善シ、長勝ノ養女二人アリ、乃チ其ノ長ヲ娶ル、是ニ於テ淺野、加藤、福島等外戚ヲ以テ皆藤吉ニ屬ス、信長儉チ行ヒ、國ヲ富サント欲シ、薪炭ノ費多キヲ患ヒ、藤吉ニ命シ、之ヲ掌ラシム、經費十ノ七ヲ省ク、因テ之ヲ數事ニ試ムルニ皆効アリ、然レトモ未タ兵ニ將タラシメス、信長、齋藤龍興ヲ攻メテ志ヲ得ス、壘ヲ河畔ニ築キ一將ヲ留メンコトヲ議ス、敢テ當ル者ナン、信長密ニ藤吉ニ謀ル、藤吉、蜂須賀小六等ヲ招キ、其ノ黨ヲ率キテ、之ヲ築ク、敵大兵ヲ以テ來リ沮ム、我カ兵且ツ戰ヒ且ツ築キ、忽チ成リ、竟ニ襲ヒテ大ニ之ヲ破

中國ヲ舉ケテ、汝ニ子ヘン、汝進ミテ、九州ヲ取レト、對ヘテ曰ク、叛ヲ討シ、服ヲ撫シ、以テ有功ノ將士ニ賜フヘシ、臣ハ直ニ進ミテ、九州ヲ下シ、海ヲ濟リテ、朝鮮ニ入り、其ノ降兵ヲ以テ、明ヲ席卷シ、君ノ武威ニ由リテ、三國ヲ合一セント欲ス、是レ臣ノ宿志ナリト、信長笑ヒテ曰ク、秀吉復タ大言セリ、宜シク汝ノ意ニ任スヘシト、秀吉乃チ播磨ノ姫路城ニ入ル、黒田孝高、謀略アリ、常ニ、秀吉ノ謀主タリ、牙兵加藤清正、脇坂安治等、亦屢、戰功アリ、秀吉五年間ニシテ、播磨、因幡、但馬、伯耆等ヲ定メ、安土ニ赴キテ、信長ニ謁ス、信長其ノ面ヲ撫シテ曰ク、汝ノ面目、復タ、昔日ノ藤吉ニアラスト、明日客禮ヲ以テ、之ヲ饗ス、十年秀吉、高松城ヲ圍ミ甲部川ヲ引キテ之ニ灌ク會輝元、及ヒ隆景、元春、來リ援フ、秀吉使ヲ馳セテ、曰ク、城陷ルコト且タニアリ、然ルニ輝元、大舉シテ來リ援フ、大旗ヲ出サハ、一歳ヲ出スシテ、中國、西陲

擧グヘシト、信長大ニ喜ヒ、將士ヲシテ先ツ往カシメ、自ラ京師ニ入り、本能寺ニ舘シ、不日將ニ發セントス、輝元、信長ノ大擧シテ、至ラントスルヲ聞キテ和ヲ議ル、秀吉未だ之ヲ許サズ、時ニ成卒、光秀ノ間使ヲ捕フ、毛利氏ニ通信ノ使ナリ、其ノ書ニ曰ク、我既ニ信長ヲ弑ス、急ニ秀吉ヲ擊破シ、尾シテ東セハ、一擧シテ大業成ルヘシト、秀吉愕動ス、既ニシテ京師ノ使者來リテ、信長ノ變計ヲ傳フ、秀吉竊シテ宣告セス、明日城陷リ、城將自殺ス、毛利ノ使者、屢來リテ前議ヲ治ム、秀吉之ヲ許ス、既ニシテ秀吉將士ヲ會シテ、右府ノ弑セラレシヲ告ケテ泣キテ曰ク、吾右府ノ恩ヲ受クルコト比ナシ、今死ヲ以テ佐ヲ復セン、汝等我カタメニ之ヲ勉メヨト、乃チ兵四萬ヲ將キ、尾ヶ崎ニ至リ、使チ光秀ノ陣ニ遣ハシ、明日山崎ニ會戰ヲ約ス、十三日黎明、秀吉山崎ニ至リ、天王山ヲ瞻テ曰ク、今日ノ戰、敵チシテ先ツ此ノ山ヲ獲セシメハ、吾カ利ニア

ラスト、言未タ畢テサルニ賊ノ旗幟之ニ登ル、乃チ堀尾吉晴ニ命シテ、之ヲ奪ハシム、兩軍交戦フ、織田信孝ノ軍殆ト危シ、中川清秀權ニ衝キテ之ヲ却ク、已ニシテ敵軍大ニ敗ル、光秀還キテ、青龍寺城ニ入り其ノ夜數十騎ト、坂本ニ走ラントシテ、小栗樓ヲ過ク、土兵起リテ、藪中ヨリ槍ヲ以テ之ヲ刺ス、光秀馬ヨリ墜チテ死ス、秀吉進ミテ圍城寺ニ陣シ盡ク餘黨ヲ亡シ、光秀ノ首屍ヲ併セテ粟田口ニ梟ス、信長ノ薨セシヨリ、十三日ニシテ平ク、秀吉ノ威、畿内ニ震フ、八月、柴田勝家、澁川一益等皆、清洲ニ會議シ、信忠ノ子秀信ヲ立テ、安土ニ居ラシム、信雄之ヲ攝ス、柴田丹羽、池田、羽柴ト略定セル諸國ヲ有ツ、勝家元老ニシテ、威望諸將ニ最タリ、號シテ鬼柴田ト云フ、兼併ノ志アリ、是ノ日醉ヒテ、秀吉ヲ挑ム、丹羽長秀、耳語シテ曰ク、卿若シ犬志アリハ、宜シク速ニ勝家ヲ謀ルヘシト、秀吉微笑シテ曰ク、吾豈ニ勝家ニ對スル者

ナラシヤト、諸將宴ヲ促シテ罷ム、十月從五位上左近衛少將ニ進ム、秀吉信雄ト心ヲ協セテ、秀信ヲ佐ク、信孝、信雄ト權ヲ爭フ、勝家、一益、成政等ト相議シテ、秀吉ヲ圖ル、秀吉先ツ信孝ヲ岐阜ニ攻ム、信孝伴リテ和ヲ請フ、乃チ質ヲ取リテ、山崎ニ遣ル、勝家雪ニ沮メラレテ、援フコト克ハス、來歲雪ノ解クルヲ俟タント欲シ、伴リテ城ヲ釋カント請フ、之ヲ諾ス、勝家喜ヒテ曰ク、秀吉吾カ術中ニ墮チタリト、備ヲ懈ルナント欲スルナリ、吾何リ彼ニ欺レンヤト、十一月兵引キテ、長濱ニ至リ、勝家ノ義子勝豐ヲ招キ降ス、勝家南出ノ途塞ル、十一年正月、秀吉兵ヲ將キテ、伊勢ニ入ル、時ニ一益、長島ニ在リ、豫シメ戒メテ曰ク、一益ハ兵ニ老セリ、今夜必ス來ラント、即夜果シテ來ル、其ノ備アルヲ視テ去ル、二月勝家佐久間盛政ヲシテ、柳瀬ニ陣シセム、秀吉蒲生氏郷等ヲ留メテ、一益

ニ當ラシメ、柳瀬ニ至ル、四月信孝兵ヲ大垣ニ擧ク、秀吉往テ大垣ヲ攻ム、盛政進ミテ、中川清秀ヲ賤嶽ニ襲フ、清秀力戰シテ死ス、秀吉報ヲ得テ、使者ニ問ヒテ曰ク、盛政去リシカ、曰ク、未ナリト、乃チ踊躍シテ曰ク、吾大勝ヲ得ヘシト、自ヲ馳セテ炬火酒食ヲ沿道ノ民ニ募リ、其ノ夜賤嶽ニ達シ、黎明之ニ逼ル、盛政方軍大ニ驚キ、急ニ退キ去ラント欲ス、秀吉其ノ後ヲ躡ム、盛政且ツ戰ヒ、且ツ退ク、已ニシテ加藤清正、加藤嘉明、福島正則、平野長泰、脇坂安治、片桐且元、糟谷武則等先チ爭ヒテ奮撃シ、大ニ之ヲ破ル、世呼ヒテ賤嶽ノ七本鎗ト云フ、勝家敗テ聞キテ走ル、秀吉進ミテ、北莊ニ至リ、火ヲ縱チテ城ニ薄ル、或ル人盛政ヲ縛シテ來ル、秀吉擒ヲ以テ、城中ニ視ス、勝家遂ニ城ヲ燒テ死ス、秀吉、加賀、能登ヲ徇フ、秀吉復タ信孝ヲ岐阜ニ圍ム、信雄亦兵ヲ引テ、之ニ加ハル、信雄人ヲシテ、信孝ヲ勝ハシム、信孝之ヲ信シテ城ヲ

出ツ、途ニシテ之ヲ殺ス、五月盛政ヲ京師ニ斬ル瀧川
一益降ル、

時ニ、近畿粗ホ定ル、秀吉天下ニ覇タルノ志アリ、大
坂ニ城ク、信雄、秀吉ノ威權、日ニ熾ナルヲ視テ、心
平ナラス、竟ニ之ト絶チ、援ヲ徳川家康ニ乞フ、秀吉
自ラ東下シテ、大山ニ至ル、家康、信雄、小牧ニ陣シ
テ、之ニ相對ス、池田信輝、間道ヨリ三河ヲ持カント
欲シ、進ミテ岩崎城ヲ拔ク、信輝、勇ヲ特ミテ備ヲ怠
ル、家康襲ヒテ之ヲ長湫ニ撃ツ、信輝、奮戦シテ死ス、
本多忠勝、秀吉ヲ襲ハント欲ス、家康曰ク、秀吉ハ英
武絶倫、未タ冀フヘカラスト、其ノ夜退キテ還ル、其
ノ後秀吉和ヲ議シ、信雄ト相見ユ、家康モ亦其ノ子秀
康ヲ送リテ、質ト爲ス、

十三年、秀吉累遷シテ、正二位内大臣ニ陞ル、秀吉塞
微ヨリ起リ、姓ヲ有セス、因テ平氏ヲ冒ス、是ニ至リ
テ、藤原氏ヲ稱ス、四月、長曾我部元親ヲ諭シテ、伊

ニ兵ヲ出シテ、隣國ヲ攻畧スト、歳久書ヲ地ニ投シテ
曰ク、我此ニ居ルコト、十四世、朝貢ヲ促ス者ハ、獨
リ近衛氏ノミ、猿面冠者、敢テ我ヲ屈致スヘケンヤト、
大舉シテ豊後ニ入り、十六城ヲ下ス、十二月、秀吉太
政大臣トナル、關白故ノ如シ、奏シテ義久ヲ討タシコ
トヲ請フ、後陽成天皇、之ヲ許ス、十五年、秀吉水陸
ノ兵ヲ將キテ、京師ヲ發ス、秀吉本願寺ノ光佐ヲ遣ハ
シ、所在ノ門徒ヲ招諭セシム、故ニ士民奔波シ、潜ニ
資ヲ傾ケテ、支給スル者相屬ス、竟ニ進ミテ、薩摩ニ
入り、牙ヲ太平寺ニ建テ、軍營ヲ布ク、兵馬野ヲ蔽ヒ
テ、二郡ニ充溢ス、進ミテ鹿兒島ニ薄ル、義久罪ヲ謝
シ、剃髮シテ軍門ニ降ル、秀吉命シテ義弘ヲ以テ嗣ト
爲シ、其ノ故地、薩摩、大隅、日向ヲ與ヘテ、京師ニ
還ル、

十六年、秀吉舊金幣ヲ改メテ、始テ銀金ヲ造ル、是ノ
時ニ當リ、秀吉ノ威令五十餘州ニ及ブ、然レトモ北條

謙、讃岐ヲ獻シ、來朝セシム、聽カス、五月秀吉命シ
テ、伊豫、讃岐、及ヒ阿波ノ三面ヨリ、並進シテ元親
ヲ攻メシム、元親大ニ敗レテ降リ、南海盡ク平ク、
秀吉征夷大將軍タラント欲ス、時ニ義昭、毛利輝元ニ
寓ス、秀吉其ノ猶子タラント求ム、義昭曰ク、寒
族ノ卑夫ヲ子トシテ、祖先ヲ辱ムルコト克ハスト、秀
吉忿リ、又笑ヒテ曰ク、憫ムヘシ昏愚、時機ヲ知ラス、
宜ナル哉流落シテ、此ニ至レルコトナト、乃チ請ヒテ
關白トナリ、姓ヲ豐臣ト稱ス、八月佐々成政ヲ降シ、
越前越中ヲ定メ、直ニ越後ニ出テ、上杉景勝ヲ攻メ
テ之ヲ降シ、飛騨ヲ略ス、秀吉一日、毛利輝元ノ第二
如キ、義昭ヲ視テ曰ク義昭汝我ヲ匹夫ト云フ、今竟ニ
奈何ト、

十四年、島津義久、薩摩ヨリ起リ、九國ヲ荐食ス、大
友義統等援ヲ乞フ、秀吉書ヲ義久ニ遣リテ曰ク、關白
問フ、汝何カ故ニ朝貢セス、坐ナカラ官爵ヲ帯ヒ、縱

氏政、關東八州ニ據リ、伊達政宗、陸奥ニ据リテ降ラ
ス、秀吉使ヲ氏政、及其ノ子氏直ニ遣シテ曰ク、子五
世ノ勢ニ席リテ、八州ヲ擅有シ、朝貢ヲ修メス、今天
皇(後陽成天皇)新ニ立ツ、子獨リ入觀セス、宜シク速
ニ來朝スヘシト、氏政竟ニ譎リテ來ラス、秀吉大ニ怒
リ、意ヲ決シテ討伐ス、氏政箱根ノ險ヲ扼シ、山中
山ノ二城ヲ守リ、諸軍各小田原以下ノ城寨ヲ固ム、已
ニシテ山中城陥ル、秀吉直ニ小田原ニ達ス、城中震駭
ス、秀吉石垣山ニ營セントシテ、夜萬卒ヲシテ城ヲ築
カシム、紙ヲ牆壁ニ糊シ、戶版ヲ塗ル、一夜ニシテ成
ル、城ハ小田原城ノ上ニアリ、之ヲ望メハ堊ノ如シ、
敵兵大ニ駭キ、以テ神ト爲ヌ、既ニシテ諸城陥ルコト、
六十餘城、小田原獨リ下ラス、初メ家康、衆軍久シク屯
セハ、穀價ノ騰貴センコトヲ慮リテ、其ノ豫備ヲ爲ヌ、
已ニシテ長東正家ノ漕米狼戾ス、乃チ秀吉ノ善ク人ヲ
用キルニ服ス、時ニ秀吉ノ軍、山野ニ充滿シ、所トシ

テ兵ニアラサルハナシ、關東ノ諸將、風ヲ望ミテ降附ス
伊達政宗モ亦大ニ懼レ、降ヲ乞ヒテ來リ謁ス、時ニ年
二十、政宗英武人ニ超エ、膽略アリ、秀吉問ヒテ曰ク、
卿ハ國ニ在リテ、幾戰セルカト、曰ク三十餘戰ナリ、
曰ク、是レ村卷ノ小關ノミ、未タ大兵ヲ部勒スルノ法
ヲ知ラサルヘシト、起テ政宗ヲ引キ、廣靈ヲ示シテ
曰ク、彼ハ畿内ノ兵ナリ、彼ハ坂以西ノ軍ナリ、彼ハ
海道ノ軍ナリト、政宗唯々スルノミ、退キテ入ニ謂ヒ
テ曰ク、關白ハ天授ナリト、即チ辭シテ去ル、時ニ城
中連日會議シ、一モ決スルコトナシ、七月氏直、氏規
出テ降ル、乃チ氏政ニ死ヲ賜ヒ、氏直以下三十人ヲ縱
シテ、高野山ニ放チ、俸ヲ給ス、是ニ於テ八國ヲ家康
ニ與ヘ、蒲生氏郷ヲ抽キテ、會津仙道十一郡ヲ與ヘ、
東北ヲ鎮メシム、
秀吉一圍ヲ從ヘテ、尾張ニ入り、騎シテ單リ中村ニ
入り、父老ヲ召シ、笑ヒテ曰ク、吾ハ藤吉ナリト、

四百四

父老皆惶怖伏ス、因テ酒及ヒ物ヲ賜ヒ、與ニ舊故
ヲ語リテ去ル、是ヨリ先秀吉志ヲ得テ、後松下之綱
ヲ召シ、丹波國船坂ノ地三千石ヲ與フ、是ニ至テ之綱
ノ子吉綱ヲ遠江國久野城主トシ、一萬石ヲ與フ、攝
金ヲ償フナリ、
應仁以來、天下大ニ亂レ、英雄四方ニ割據シテ、互ニ
相攻撃ス、是ニ至リ、海内一統ス、
秀吉關東ニテアリシトキ、鎌倉ニ遊ヒ、賴朝ノ祠ニ詣
リ、直ニ上リテ曰ク、子ハ流竄ヨリ發リ、予ハ卒伍
ヨリ出ツ、俱ニ寸土ナクシテ志ヲ得タリ、但シ予ハ
寒族セリ、子ハ華胄ナリ、故ニ其ノ功ヲ成スニ難易
アリ、此シ予ノ勝レル所以ナリト、三タビ像背ヲ拊
チ、淡然トシテ出ツ、人其ノ磊落ヲ稱ス、
秀吉宇都宮ニ抵ル、佐野天徳寺了伯、驍名アリ、謁
シテ頗ニ謙信ノ義勇ヲ稱ス、秀吉曰ク、謙信、信玄
歿シテ虛名ヲ遺スハ幸ト謂フヘシ、彼若シ現存セハ、

吾此ノ歸路、渠等ナシテ朱蓋ヲ把ラシムヘシ、曾テ
聞ク彼ニ事懸ノ術アリト、予ニ轍レハ兒童ノ戯ノミ

慶長三年七月、秀吉病篤シ、天下ヲ以テ家康ニ托ス、
家康之ヲ辭ス、乃チ秀頼ヲ利家ニ托シ、大坂ニ居ラシ
メ、片桐且元等ニ囑シテ曰ク、我、明ト兵ヲ交ヘ、禍
結ヒテ解ケス、吾深ク之ヲ悔ユ、彼レ吾カ死ヲ聞カハ、
大舉シテ來リ報イン、國朝、古ヨリ未タ曾テ外國ノ侵
奪ヲ受ケス、然ルニ我カ死後ニ至リ、國難、爲ニ作ラ
ンコト、吾甚タ恥ツル所ナリ、吾カ家ノ存亡ニ至リテ
ハ、未タ恤フルニ暇アラス、汝等謹ミテ覺醒ヲ生セシ
ムルコトナカレト、八月淺野長政、石田三成ニ命シテ、
朝鮮ニ赴キ、兵ヲ收メシム、十三日疾大ニ篤シ、將ニ
暎セントス、已ニシテ目ヲ張リテ曰ク、我カ十萬ノ兵
ヲシテ、海外ノ鬼ト爲サシムルコトナカレト、言畢リ
テ薨ス、年六十二、詔シテ正一位ヲ贈ル、遺命ニ從ヒ

日本誌 史紀 朝鮮ノ役

第七 朝鮮ノ役

テ、廟席ヲ建ツ、勅シテ號ヲ豐國ト賜フ、秀吉天縱宏
才ニシテ、雄穎大度ナリ、然レトモ文學ヲ修メス、常
ノ言ニ曰ク、天下我ニ叛ク者アラン、未タ我ニ勝ツ者
アラスト、又大坂ニアリテ、京師ノ無事安寧ナルヲ聞
キテ云ハク、是レ衰弊ノ基ナリト、遂ニ京師ニ入ル、
蓋シ其ノ意ハ、人ハ無事安康ナレハ、必ス不善ヲ造ス、
故ニ人ナシテ束手康樂、莫カラシメント欲スルナリ
ト、
秀吉、曾テ明、朝鮮ヲ徇フルノ志アリ、畿内ヲ定ムル
ニ及ヒテ、橘廣康ヲ以テ、朝貢ヲ朝鮮ニ徵サシム、要
領ヲ得スシテ還ル、其ノ後西海既ニ定マリ、宗義智歎
ヲ納ル、ニ至リテ、義智ヲシテ朝鮮ニ發遣セシム、是
ニ於テ朝鮮王、李松大臣ヲシテ、隨テ入貢セシム、時
ニ秀吉關東ヲ平ケ、京師ニ還リテ、使者ヲ見テ、乃チ示
シテ曰ク、吾道ヲ貴國ニ假リ、直ニ明ニ入り、四百餘

洲ヲシテ、盡ク我カ俗ニ化セシメ、以テ王政ヲ彼ニ施
サント欲ス、吾明ニ入ラハ、朝鮮王軍營ニ會シ、我カ
タメニ前導セヨト、王疑懼シテ、稍邊備ヲ修ス、明亦
聞キテ海防ヲ嚴ニス、

天正十九年、夏復々宗義智ヲシテ、朝鮮ニ遣ス、報ヲ
得ス、秀吉志益決シ、奏シテ討征ヲ請ヒ、肥前郡古耶
ヲ行營トス、文祿元年、西南四道ノ兵ヲ分チテ、八軍
ト爲シ、以テ朝鮮ニ嚮ハシム、先鋒加藤清正第一軍ニ
將タリ、鍋島直茂、相良長每之ニ屬ス、小西行長、第
二軍ニ將タリ、宗義智、松浦鎮信、有馬正純、之ニ屬
ス、以下次ヲ以テ諸軍ヲ部署シ、別ニ水軍ヲ置キ、九
鬼嘉隆、脇坂安治、加藤嘉明等之ニ將タリ、水陸合セ
テ二十餘萬人ナリ、又別ニ游軍六萬人ヲ以テ、應援ニ
備フ、秀吉自ラ徳川家康、前田利家、蒲生氏郷、上杉
景勝、伊達政宗以下、畿内東北三道ノ將士、十餘萬ヲ
率キテ、行營ニ屯ス、乃チ上書シテ、關白職ヲ秀吉ニ

讓リ、自ラ太閤ト稱ス、

秀吉、京師ヲ發スルヤ、或ル人曰ク、蓋ソ漢文ヲ善ク
スル者ヲ從ヘザルト、秀吉笑ヒテ曰ク、此ノ行、將ニ
彼ヲシテ、我カ國文ヲ用キシメント欲スルノミト、四
月安藝ノ嚴島社ニ詣リテ、勝ヲ祈リ、遂ニ行營ニ達
ス、
是ノ月、水陸九軍、大礮ヲ發シ、海ヲ蔽ヒテ進ム、暴
風ニ遇ヒテ、壹岐ノ風本ニ留マル、風稍平ク、行長、
義智等、海路ヲ請ス、潛ニ軍ヲ抜キテ發ス、平明諸將
之ヲ覺ル、清正怒リテ之ニ踵ク、風益甚シク、進ムコ
トヲ得ス、行長舵師ヲ促シ、濤ヲ冒シテ進ミ、遂ニ釜
山浦ニ達シ、立トコロニ其ノ城ヲ拔キ、守將ヲ斬リ、
兵ヲ分チテ、慶尙道ヲ徇フ、其ノ東北三十里(日本ノ
三里許)ニ東萊アリ、行長、清正ニ先ンシテ、功ヲ立
テント欲シ、將士ヲ趣シメ、半日ニシテ之ヲ拔キ、遂
ニ梁山ヲ陷イル、

清正、行長ニ後ル、コト三日ニシテ、釜山ニ達ス、切
齒シテ曰ク、吾豈ニ渠ノ迹ヲ踐マンヤト、乃チ轉シテ
別路ヲ取り、火ヲ慶州ニ縱チテ、守將ヲ走ラス、進向
スル所、皆風靡ス、

行長金海ヲ圍ミ、進ミテ尙州ヲ陷イル、遂ニ忠州ヲ取
リテ清正ト會ス、諸將皆至ル、乃チ進ミテ京畿ヲ取ラ
ンコトヲ議ス、清正、行長ニ謂ヒテ曰ク、子ノ功多シ、
國都ヲ攻ルニ至リテハ、先鋒ヲ我ニ屬スヘシト、答ヘ
テ曰ク、吾レ子ト並ニ約束ヲ受ク、子何ソ擅ニセント
スルヤト、清正ノ曰ク、子ノ告ケスシテ發スルモ、亦
約束ニ出ツルカト、二人怒リテ鬪ハント欲ス、諸將之
ヲ解シテ止ム、乃チ南東二道ニ分レテ進撃ス、初メ李
昫、我カ軍ノ忠州ニ會スルヲ聞キ、都城大ニ擾レ、世
子ト平壤ニ走り、急ヲ明ニ告ケ、舟師ヲ以テ漢口ヲ扼
ス、守將、都元帥、金命元、清正ノ至ルヲ聞キ、疑兵
ヲ張リテ臨津ニ逃ル、清正江ニ抵レハ舟ナシ、北岸ヲ

臨ミテ、笑ヒテ曰ク、敵舟ニ危殆アリ、是レ兵ナキナ
リト、其ノ舟ヲ取ラシメテ濟ル、五月都城ニ達シ、之
ヲ望メハ、旗幟皆行長ノ號ナリ、清正益怒ル、行長驪
川ヲ渡リテ敵ヲ走ラシ、清正ニ先ツコト一日、都城ニ
入りシナリ、既ニシテ諸軍皆至ル、秀家自ラ國都ニ居
リ、行長ハ平安道、清正ハ咸鏡道ニ向ヒ、并ニ北入ス、
是ハ時ニ方リ、國都ヨリ釜山ニ至ル、數十城烽火相應
ス、皆我カ兵ノ守ル所ニシテ、行營ト聲息ヲ通ス、

行長、已ニ平安ヲ徇ヘテ、大同江ニ至ル、六月、李昫、
義州ニ走り、金命元ヲ留メテ、明ノ援兵ヲ俟タシム、
行長、命元ヲ擊チテ、之ヲ走ラシ、進ミテ城ニ入り、
水軍ノ至ルヲ俟チテ、明ノ北京ニ至ラント欲ス、
我カ水軍、釜山ヲ發シ、朝鮮ノ水軍ト、戰ヒテ之ヲ破
リ、遂ニ全羅ニ出ツ、全羅ノ水軍、節度使、李舜臣、
軍艦ヲ以テ、巨濟洋ニアリ、我カ水軍ノ諸將、進戰ヲ
議ス、脇坂安治、加藤嘉明、計議協ハス、相怒ル、藤

堂高虎、之ヲ和齎シテ、共ニ進取ヲ決ス、嘉明期ニ先シテ進ミ、敵艦ヲ衝キテ、二十餘艘ヲ奪フ、諸將繼キテ進ミ、追ヒテ洋中ニ入ル、舜臣左右ノ翼ヲ縱チ、巨煩ヲ以テ、我カ船ヲ碎ク、來島康親、之ニ死ス、安治苦戰シテ退ク、此ノ故ニ、我カ水軍、陸軍ト合スルコト克ハス、

明主、翊欽、朝鮮ノ急ヲ聞キ、大臣ヲ召シテ、之ヲ援クヘキヤ否ヤヲ議ス、大臣曰ク、明ノ屏ハ、朝鮮ニアリ、朝鮮援ケナクハ、折レテ日本ニ屬セン、日本、朝鮮兵ヲ合セハ、我ニ利アラズ、今一將ヲシテ援ハシメ、其ノ力ニ由リテ、以テ東北ヲ禦クヘシ、議決ス、乃チ祖承訓、史儒ヲ援軍ノ將ト爲ス、二將甚タ我カ兵ヲ輕ス、蓋シ前ニ、明ノ境ヲ掠メタル者ハ、皆海盜ニシテ、甲仗弊惡ナリ、以爲ヘラク秀吉ノ兵、亦是ノ如シト、乃チ朝鮮ニ來リテ、順安ニ舍ス、營未タ全カラズ、行長夜試ニ輕卒ヲ遣ハシテ、其ノ營ヲ斫ラジム、營亂ル、

惟敬、盡ク其ノ意ニ從ヒ、五十日ヲ期シテ還リ、乃チ平壤ノ西北十里ニ界シテ、彼是俱ニ相驗エサルコトヲ請フ、行長、之ヲ許ス、而ルニ朝鮮ノ將、竊ニ兵ヲ募リテ都城ヲ復センコトヲ計ル、

清正、盡ク威鏡ニ二管ヲ收メ、長驅シテ遼東ニ入ラシト欲シ、行長モ亦惟敬ノ期ヲ過キテ、至ラサルヲ怒リテ、進擊セントス、李松、書ヲ飛ハシテ、明ニ告ク、明主翊欽、宗應昌ヲ經略使ト爲シ、李如松ヲ大將軍ト爲シ、大兵ヲ率テ、北京ヲ發ス、大司馬石星、獨リ前議ヲ執リ、復ヒ惟敬ヲ、平壤ニ遣ハス、既ニシテ如松ノ大兵、遼東ニ至ル、惟敬之ヲ路ニ要シテ、和ノ成ラントスルコトヲ告ク、如松等功ヲ立テント欲シ、陽ニ之ニ從フ、二年正月、惟敬、行長ニ告ケテ曰ク、和議成ランコト近キニアリト、行長喜フ、俄ニシテ明ノ諸軍、平壤ニ薄リ、四門齊シク攻撃ス、行長、義智等殊死シテ戰ヒ、竟ニ牡丹臺ニ退ク

日本誌 史紀 朝鮮ノ役

笑ヒテ曰ク、明兵亦與シ易シト、明日自ラ明軍ト戰フ、史儒、丸ニ中リテ斃ル、我カ兵進ミテ、渾ニ迫リ、之ヲ虜ス、承訓、身ヲ挺キテ逃ル、明國之ヲ聞キテ震動ス、

清正ノ威鏡道ニ入ルヤ、永興ニ至リ、津、璋、二王子ノ所在ヲ聞キ、兵ヲ分チテテ日ニ行クコト、數百里、勢烈風ノ如シ、北道ノ兵使、之ヲ逆擊ス、其ノ兵善ク射ル、我カ兵多ク利アラズ、銃ヲ以テ之ヲ拒ク、朝鮮ノ兵、鐵嶺ニ上リテ陣ス、清正夜伏ヲ設ケ、且日大ニ之ヲ破リ、首將ヲ擒ニシ、朝鮮ノ極北、令寧府ニ赴キ遼ニ二王子、大臣等ヲ拘フ、李松、益々急ヲ明ニ告ク、明、已ニ前將ノ敗聞ヲ得テ、舉朝震駭ス、時ニ明ハ、國內ニ事アリ、兵ヲ四方ニ分テリ、依テ和ヲ議セント欲シ、越人沈惟敬ノ略ホ日本ノ事情ニ通スルヲ以テ、遊擊將軍ニ任ス、惟敬平壤ニ來リテ和ヲ乞フ、行長、惟敬ニ面シテ、數條ヲ徵ス、

明軍四面ニ圍集ス、我カ兵連ニ鳥銃ヲ發ス、鉛丸雨ノ如ク下ル、明兵死傷、數千人アリ、竟ニ拔クコト克ハス、即夜行長潛ニ臺ヲ出テ、都城ニ還ル、

宋應昌等、謀リテ曰ク、敵將皆都城ニ萃ル、清正孤軍、威鏡道ニアリ、聲息通セス、虛喝ヲ以テ取ルヘシト、乃チ辯士ヲ遣ハシテ、説カシメテ曰ク、明ノ大兵、已ニ平壤、開城ヲ復シ、遼ニ浮田、及ヒ小西等ヲ擒ニシ、餘衆或ハ散シ、或ハ降ル、公誰カタメニ此ヲ守ルカ、公ノ志仁義ニ原キ、過タル所秋毫モ犯サスト聞ケリ、大明皇帝、其ノ高義ヲ賞シテ、報告セシム、公速ニ王子ヲ返シ、軍ヲ收メテ歸ルヘシ、否ラサレハ、明ノ大兵四十萬、朝鮮ノ兵ヲ併セテ安邊ニ萃ル、全勝ノ威、嚮フ所盡ク齧粉ス、追悔スト云フトモ及フコトナケン、公熟ク之ヲ圖レト、清正答ヘテ曰ク、吾國命ヲ奉シテ、戰フコトヲ知リ、明人ノ令ヲ聞キテ、和スルコトヲ知ラス、我カ性戰ヲ好ム、今弊甲、凋兵アリ、無事ニ若

ム、且ツ此ノ地、嶺山峻險ニシテ、路比行スヘカラス、兵ノ來ルコト、日ニ二萬ニ過キサルヘシ、吾日ニ一萬ヲ殺サハ、四十日ニシテ之ヲ殲シ、二萬ヲ殺サハ、二十日ニシテ殲スヘシ、既ニ殲シテ、牙齧ヲ貴國ニ立テ、其ノ君ヲシテ、我カ國ニ臣タラシメン、是レ我カ素志ナリト辯士逃ケ去ル、

時ニ明軍勝ニ乘シテ、臨津ヲ渡ル、李如松、陸景卜碧蹄館ニ戰ヒ、竟ニ大敗ス、明兵死スル者一萬、殆ント如松ヲ獲ントス、江水之カタメニ流レス、如松坡州ニ退キテ、開城ニ入ル、秀家等清正ヲ招還ス、秀吉、毛利秀元ヲシテ赴キ援ヘシム、三月、加藤光泰、細川忠興等晋州ヲ攻ム、城險ニシテ皆敗レ退キテ都城ニ入ル、

李如松、惟敬等ヲシテ和ヲ計ラシム、惟敬、都城ニ來リ、行長ニ賄ヒテ曰ク、太閤、朝鮮ノ二王子ヲ放還セハ、朝鮮ノ三道ヲ割キ、封シテ王ト爲シ、明ノ公主ヲ

慶長元年六月、明、朝鮮ノ使發ス、是ニ於テ諸將兵ヲ、釜山ニ留メテ凱旋ス、九月、明ノ使者、伏見ニ至ル、儀衛殿重ナリ、二使摺伏シテ仰視セス、金印冕服ヲ奉シ、膝行シテ進ム、禮畢リテ之ヲ變ス、秀吉、僧承兌ヲシテ冊書ヲ讀マシム、行長私ニ承兌ニ囑シテ曰ク、冊文或ハ惟敬ノ説ト齟齬セン、子且ク之ヲ諱メト、承兌聽カス、入りテ之ヲ讀ム、爾ヲ封シテ、日本國王ト爲スト云フニ至リテ、秀吉色ヲ變シテ、怒リテ曰ク、吾日本ヲ掌握シテ、王ヲ下ニ欲セハ、何リ彼カ封ヲ待タンヤ、且ツ吾王タラハ、天朝ヲ如何ト、行長ヲ召シテ、大ニ之ヲ誚メ、清正等ニ命シテ、使者ヲ逐ハシメ、且ツ再舉ヲ告ク、秀吉、小早川秀秋ヲ大將ト爲シ、浮田秀家、毛利秀元ヲ副ト爲シ、兩先鋒以下故ノ如シ、二年正月、使者明ニ還リ、伴リ報シテ曰ク、秀吉封ヲ受ケテ、和議全ク成レリト、已ニシテ吳越、變ヲ告ケテ曰ク、清正已ニ機張ニ至ルト、明大ニ驚キ、刑

以テ、正妃ト爲サント、行長等不學ニシテ、封王ノ故事ヲ知ラス、以テ明ニ王タルノ謂ト爲シ、之ヲ許サント欲ス、已ニシテ其ノ非ヲ知ル、惟敬、巧ニ之ヲ彌縫ス、清正其ノ議ヲ可カス、行長三奉行ト歸テ懷ヒ、秀吉ニ報シテ曰ク、明主殿下ヲ辱ミテ、皇帝ト爲サント欲スト秀吉和ヲ許ス、諸將乃チ都城ノ兵ヲ解キ、東シテ、蔚山以下十六屯ヲ起シテ、秀吉ノ命ヲ俟ツ、明主翊欽、徐一貫、謝用梓、沈惟敬、ヲシテ來リテ、秀吉ニ謁セシム、秀吉變シテ之ヲ還シ、小西如安ヲシテ與ニ往カシメ、二王子、大臣以下ヲ放還ス、已ニシテ如安、久シク還ラス、秀吉、惟敬ノ欺計ヲ疑ヒ、日夜軍事ヲ謀議ス、十一月、清正和議ノ成ラサルコトヲ知リ、進ミテ安康ヲ攻メ、大ニ之ヲ破ル、彼最モ清正ヲ畏レ、呼ヒテ鬼上官ト云フ、李松、數明ニ促シテ和ヲ定ム、明主翊欽、如安ヲ召シ、乃チ封王ノ議ヲ定メ、正副使ヲ定ム、

玠、楊鶴、麻貴等ヲシテ發セシム、行長釜山ニ軍シ、清正梁山ヲ陷イレ、西生浦ニ軍ス、朝鮮人、前役ニ懲リ、駭キテ逃竄ス、二月秀秋等、釜山ニ達シ、山海ノ勢ニ因リテ、壘築舟艦ヲ列シ、令シテ暴掠ヲ禁ス、諸道風ヲ望ミテ潰奔ス、朝鮮人、惟敬ヲ目シテ曰ク、彼レ國ヲ賣ル、反覆ノ臣ナリ、明ヲ罔シ、日本ヲ欺キ、朝鮮ヲシテ其ノ弊ヲ受ケシムト、惟敬大ニ窘シ、以爲ヘラク行長和ヲ主トシテ、清正戰ヲ主トス、先ツ清正ヲ退クルニ若カスト、乃チ書ヲ遣ハシテ曰ク、三國和ヲ講ス、公獨リ之ヲ敗ル、明主首トシテ公ヲ擊タント欲シ、刑玠ノ兵、七十萬、既ニ朝鮮ニ入ル、公速ニ和ヲ請ハスハ、禍踵ヲ旋サ、ラント、清正答ヘテ曰ク、吾每ニ朝鮮ノ怯懦ヲ病フ、今明軍ニ方リ、一タヒ快戰シテ、直ニ北京ヲ殲サント欲スト、惟敬、爲スヘキヲ知ラス、行長ニ依リテ、投歸セント欲ス、行長之ヲ許ス、刑玠、遼東ニ在リテ、之ヲ聞キテ曰ク、彼日本ニ入ラ

ハ、必ス我カ害ヲ爲サント、兵三千ヲ伏セテ、走路ニ要シ之ヲ殺ス、

明、朝鮮ノ諸軍全羅ヲ守ル、七月我カ水軍、奮撃シテ大ニ之ヲ破ル、八月行長、計ヲ以テ朝鮮ノ將、元鈞ヲ誘ヒ、其ノ水軍ヲ破リテ、元鈞ヲ斬ル、清正全羅ニ入ル、諸城旗ヲ望ミテ曰ク、鬼上官至レリト、戰ハスシテ潰ユ、清正進ミテ、行長ト合シ、黃石城ヲ攻メテ、之ヲ陷イル、守將皆死ス、二將兩道ヨリ並ヒ進ム、清正ハ雲峯ヨリ、行長ハ密陽ヨリ、浮田秀家、毛利秀元二道ニ繼キ、南原ニ入り、攻メテ其ノ城ヲ陷イル、全州ニ進向ス、時ニ我カ師ノ有スル所ハ、釜山浦、安康、加徳、竹島、西生浦、松島、機張、泗川、蔚山、順天等ナリ、

十月天漸ク寒シ、清正退キテ蔚山ヲ守リ、行長退キテ順天ヲ守ル、十二月、刑玠、都城ニ入りテ議シ、明ノ三十三將、朝將ノ七將ヲ分ケテ、三軍ト爲シ、楊鎬麻

貴ヲシテ、之ヲ統ヘシム曰ク、日本ノ諸將ノ中、清正最モ勇悍ナリ、先ツ之ヲ獲ハ、餘ハ風ニ從ハント、乃チ順天ニ向フト聲言シテ、皆蔚山ニ萃ル、清正敵ノ攻撃セントスルヲ聞キ、西生ノ諸塞ヲ巡視シ、加藤安政ヲ蔚山ニ留メテ、城ヲ修メシム、土木未タ竣ラス、明軍己ニ來リ攻ム、皆城ニ入りテ固守ス、淺野幸長往キテ役ヲ監セント欲ス、敵ノ大兵ニ遇ヒ、力戰シテ竟ニ城ニ入ル、敵己ニ外郭ヲ破リ、攻撃甚ダ急ナリ、幸長防拒大ニ力ム、敵爲ニ死スル者多シト雖モ、大軍ナルヲ以テ勢衰ヘス、幸長急テ清正ニ告ケント欲ス、清正時ニ機張ニ在リ、相距ルコト三日程ナリ、近臣木村頼母、一騎乘テ馳突シ、一晝夜ヲ以テ達ス、清正大ニ驚中袂ヲ投シテ起チ、急ニ蔚山ニ入ル、明日敵ノ大軍、合シテ蟻附ス、清正擊チテ之ヲ卻ケ、即夜襲ヒテ、大ニ之ヲ破ル、敵更ニ百道並ヒ攻メ、城壘震動ス、清正、幸長堅守シテ、屈セス、楊鎬、麻貴其ノ力取スヘカス

サルヲ知リ、合圍スルコト、十晝夜ニ及フ、城兵飢渴シテ、紙及ヒ壁土ヲ煎シ、馬ノ溺血ヲ飲ミ、或ハ夜出テ、人ノ屍ヲ搜リテ食フ、適天大ニ雪ル、士卒指ヲ墜ス、清正意氣自若トシテ、益々守備ヲ修メ、日ニ明兵數百人ヲ斃ス、敵伏ヲ設ケテ、伴リ走り之ヲ誘フ、清正知リテ、殿ニ追撃ヲ禁ス、

三年正月、諸將來リテ、蔚山ヲ援フ、敵圍ヲ解キテ逃グ走ル、秀吉手書ヲ以テ清正ヲ勞ス、明主敗ヲ聞キ、萬世徳ヲ以テ、楊鎬ニ代ヘテ、以テ刑玠ヲ助ケシム、四月秀吉、秀秋、行長、清正、義弘等十餘將ヲ留メ、其ノ餘盡ク罷メ歸ラシム、留ル者分レテ四屯トナリ、秀秋、釜山ヲ守ル、蔚山其ノ右ニアリ、清正之ヲ守ル、順天其ノ左ニアリ、行長之ヲ守ル、泗川其ノ前ニアリ、義弘之ヲ守ル、兵凡テ十萬、秀吉病篤シ、八月命シテ朝鮮ノ軍ヲ收メシム、尋キテ薨ス、

第八 關原ノ戰爭

義弘新寨ニアリ、一晝元ヲ破リ、北ケルヲ追ヒテ、首ヲ斬ルコト三萬餘級、伏屍三百餘里ニ亘ル、適秀吉ノ計至ル、明兵謀シテ之ヲ覺ル、秀秋己ニ對馬ニ還ル、清正、義弘、亦退ク、行長後ル、敵行長ヲ圍ム、清正返リテ之ヲ援ヒ、俱ニ舟ニ上ル、清正己ニ去ル、敵兵艦千數ヲ以テ、義弘ヲ海中ニ要ス、義弘闘ヒ且ツ卻キ、加徳島ニ至ル、明兵行長ニ四集ス、行長奮戰ス、會明兵火器ヲ失ス、行長因テ之ヲ慶ス、李舜臣等此ニ死ス、明兵復々追躡セス、十一月、諸將那古耶ニ至ル、征韓ノ師、發リシヨリ此ニ至リテ、七年ヲ經タリ、

慶長四年正月、徳川家康權ニ天下ノ事ヲ決ス、時ニ秀頼猶ホ幼ナリ、内外疑懼シテ、口耳相屬ス、石田三成、増田長盛ト、相謀リテ曰ク、家康、利家トカヲ協セテ、政ヲ執ラハ我カ輩徒ニ驅使セラレシノミ、方今ノ計ハ、二家ヲ離間スルニ若カス、二家己ニ離レハ、以テ

事ヲ送グスルニ身シト、是ニ於テ三成利家ニ事ヘ、長盛、家康ニ事ヘ、カテ相猜疑セシム、二家漸ク協ハス、利家志リテ、國ニ就カント欲ス、細川忠興、諫メテ之ヲ止ム、而レトモ遂ニ隙アリ、利家、秀頼ヲ奉シテ、大坂ニ移ル、黒田長政、池田輝政、細川忠興、加藤清正、淺野幸長等皆三成ヲ惡ミ、心チ家康ニ屬ス、忠興利家ト戚族タリ、密ニ三成カ利家ニ藉リテ、家康ヲ圖リ、尋テ利家ニ及ホサントスル事ヲ告ク、利家、忠興等ノ勸ニ從ヒ、疾ヲ扶ケテ家康ニ會ス、欵情舊ノ如シ、三月家康、亦大坂ニ會ス、

池田、黒田、淺野、細川、福島、兩加藤(清正嘉明)七將連署シテ、三成ヲ誅セント欲ス、家康、利家並ニ許サス、時ニ三成、利家ニ依ル、閏月利家病ミテ大坂ニ薨ス、七將三成ノ出ツルヲ伺ヒ、要撃セント欲ス、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家、島津義弘、佐竹義宣衆ヨリ三成ニ善シ、義宣三成ヲ勸メテ、家康ニ依ラシ

見ヲ發ス、三成大ニ喜ヒテ曰ク、吾カ計中レリト、會大谷吉隆、東軍ノ敵ニ應シテ、垂井ヲ過ク、三成要シテ告グルニ謀ヲ以テス、吉隆其ノ不可ナルモノ、五事ヲ擧ケテ之ヲ止ム、三成曰ク、我已ニ約ヲ定ムト、吉隆大息シテ曰ク、子亟ニ我ニ告ケハ、我レ家康ヲ送ルニ托シテ、長束正家ト夾撃シ、一擧ニシテ獲ヘカリシヲ、今已ニ時ヲ失セリト、乃チ去ル、已ニシテ之ヲ棄ツルニ忍ヒス、還リテ俱ニ大坂ニ至リ、遂ニ檄ヲ遠江ニ移シテ曰ク、家康罪アリ、嗣君命シテ之ヲ討タシム、苟モ故太閤ノ恩ヲ思フ者ハ、來リテ力ヲ效スヘシト、輝元以下五十餘將、來リ會ス、三成、輝元ヲ推シテ盟主トス、長政、清正之ニ應セスシテ曰ク、三成命ヲ幼主ニ藉リテ、自ヲ私權ヲ樹テント欲スルナリト、乃チ小早川秀秋等ヲ諭シテ、應セサラシム、三成、諸將ノ掣ヲ收メテ實ト爲サントス、輝政、清正、長政等ノ留守ノ者計ヲ以テ出ツ、獨リ忠興ノ妻、明智氏免ル、コ

ム、家康悟リテ七將ヲ慰諭シ、三成ヲシテ其ノ邑、澤山ニ就カシム、三成密ニ景勝ニ謀ル景勝諸將ヲ會シテ、議シテ曰ク、三成ヲシテ且ラク家康ノ命ヲ聽カシメ、其ノ後景勝義宣鎮ニ歸リ、兵ヲ擧ケテ、家康ノ根本ヲ滅サハ、家康必ス東下セン、輝元、秀家等大兵ヲ發シテ、東西夾ミ撃タハ、諸將ノ質、大坂ニ在ルヲ以テ、必ス家康ニ黨セサルヘシ、家康孤立セハ、之ヲ滅サンコト、掌ヲ指スカ如シト、乃チ決議シテ三成ニ報ス、三成遂ニ國ニ就ク、家康、七將ノ要撃ヲ慮リ、將士ヲシテ、三成ヲ護送セシム、景勝、義宣等亦請ヒテ國ニ還ル、十月關東流言ス、景勝異圖アリト、

五年二月、家康、景勝ノ西上ヲ促ス、景勝病ト稱シテ來ラズ、是ニ於テ東北ノ諸國、争ヒテ上杉ノ反形ヲ告ク、家康、屢ニ之ヲ諭セトモ悛メズ、家康、大ニ怒リテ、之ヲ征セント欲ス、清正、三成カ虛ニ乘シテ、事ヲ擧ケンコトヲ察シ、其ノ東行ヲ止ム聽カス、六月伏

トヲ得ス、火ヲ即ニ縱チ、二兒ヲ殺シテ自裁ス、三成驚キテ、質ヲ收ムルコトヲ止ム、諸大名、大坂ニ會スル者、四十餘人、國ヲ擧ケテ命ヲ聽ク者、三十六國、乃チ長盛ヲシテ、伏見ニ至リ、城ヲ撤セシム、家康ノ臣島居元忠答ヘテ曰ク、我主命ヲ受ケ之ヲ守ル、百萬ノ敵アリト雖モ、避クヘカラスト、乃チ變ヲ關東ニ告ク、

家康、時ニ下野ノ小山ニ至ル、伏見ノ使者、至ルニ會シ、衆皆大ニ驚ク、本多正信、等從征ノ諸將ヲ還シテ、四境ヲ守ラント欲ス、井伊直政曰ク、速ニ旆ヲ反シテ、群雄ヲ掃蕩スヘシト、家康之ヲ然リトシ、意ヲ決シテ、西上セントシ、乃チ諸將ヲ會シテ曰ク、三成、景勝ト謀ヲ通シ、質ヲ挾ミ、言ヲ幼主ニ托ス、諸君固ヨリ其奸ヲ知ル、然レトモ情義ノ避クヘカラサルモノアリテ、西軍ニ歸セント欲スル者ハ、宜シク速ニ解キ去ルヘシ、吾毫モ憾ナシト、衆相目シテ答ヘス、福島

正則曰ク、我カ獲三成ノ願使ヲ受クルヲ欲セス、公ハ
 苟モ太閤ノ約ヲ渝ヘスシテハ、善ク嗣君ヲ輔ク、僕等願
 クハ前驅セント、長政、輝政等皆之ヲ賛成ス、是ニ於
 テ秀康ヲ小山ニ留メテ、景勝ニ當ラシメ、東北ノ豪傑、
 其ノ節度ヲ受ケシム、八月小山ヲ發ス、家康ハ海道ヨ
 リ、秀忠ハ山道ヨリ進ム、時ニ伏見城陥リ、島居元忠
 之ニ死ス、初メ西軍伏見ヲ攻メ、一鼓シテ之ヲ取ラン
 ト欲ス、城兵善ク防ク、攻ルコト十晝夜、城中内應ス
 ル者アリ、城遂ニ陥ル、
 西軍凡テ十八萬、美濃ノ大垣ヲ根據トス、東軍ノ先鋒
 清洲ニ至ル、大垣ヲ距ルコト、七里ニシテ相持ス、軍
 監井伊直政、本多忠勝等、家康ノ西上ヲ促ス、家康疾
 ト稱シテ發セス、蓋シ客將ヲ試ルナリ、嘉明曰ク、吾
 カ曾敵ト相對シテ、未タ戰ハス、故チ以テ大旗西上セ
 サルナリト各進ミテ大ニ戰ヒ、遂ニ岐阜城ヲ陷イル、
 浮田秀家、伏見ヨリ至ル、三成推シテ元帥トス、秀家

夜敵ノ疲ル、ニ乘セント欲ス、三成諸軍ノ至ルヲ待テ
 シト欲ス、秀家曰ク、我カ軍皆至ラントキハ、東軍亦
 至ルベシ、然レトモ吾ハ後生ナリ、敢テ子ノ言ニ違ハ
 ス、唯子悔ユルナカレト、
 九月朔、家康、美濃ノ捷報ヲ得テ、大ニ喜ヒ、乃チ江
 戸ヲ發ス、石川家成曰ク、今歲西方塞ル、請フ方ヲ避
 ケテ發セントナト、家康曰ク、我輩チテ之ヲ開カン
 ノミト、兵凡テ二萬人、東海道ヨリ誠行シテ西ス、是
 ノ時ニ當リ、美濃以東ハ、概チ東軍ニ屬シ、以西ハ多
 ク西軍ニ屬シ、其ノ他ハ成敗ヲ望觀シテ、首鼠兩端ヲ
 持ス、
 秀家、義弘、行長、三成、及ヒ安國寺惠瓊等ハ、伊吹
 山ヲ背ニシテ陣シ、大谷吉隆、平塚爲廣ハ、其ノ背ニ
 陣シ、豊臣秀秋ハ、松尾山ニ陣シ、脇坂安治、朽木元
 綱ハ、其ノ山下ニ陣シ、長束政家、毛利秀元ハ、南宮
 山ニ陣ス、騎卒凡テ十二萬八千人ナリ、家康、乃チ諸
 帥皆无事ナリ、西軍崩潰シテ、四方ニ散ス、
 眞田昌幸、次子幸村ト西軍ニ屬シ、長子信幸東軍ニ屬
 ス、山道ノ東軍、來リテ昌幸ヲ上田城ニ攻ム、昌幸、
 幸村、奇計ヲ以テ、展之ヲ破リ、進ムコトヲ得サラ
 シム、故チ以テ山道ノ軍、海道ノ軍ニ後レテ、期ニ合
 ハス、
 三成將ニ走ラント欲シテ能ハス、遷卒ニ獲ラル、長束
 正家走リテ、水口城ニ還ル、拒守スルコト能ハス、遂
 ニ自殺ス、安國寺惠瓊等亦捕ハル、行長敗ニ至リ、陣
 亂レテ禁スヘカラス、乃チ走リテ糟壁邑ニ至リ、相識
 ノ僧ニ依ル、僧執ヘテ之ヲ告ク、是ノ歳ノ冬、三成、行
 長、惠瓊京師ニ斬ラル、景勝ハ伊達政宗、及ヒ最上義
 光ト、戰ヒテ之ニ勝ツ佐竹義宣、觀望シテ出テス、西
 軍ノ敗ヲ聞クニ及ヒテ皆徳川氏ニ降ル、

將ヲ部署ス、兵凡テ八萬五千人ナリ、時ニ長政ノ將、
 毛谷主水、使シテ中軍ニ至ル、家康敵ノ兵數ヲ問フ、
 答ヘテ曰ク、三萬ト、家康曰ク、吾候騎皆十餘萬ヲ以
 テ告ク、主水曰ク、臣ハ唯、闘士ヲ算スルノミト、家康
 大ニ悦ブ、
 十五日、大霧咫尺ヲ辨セス、東西ノ軍、關原ニ退フ、
 一勝一敗、甲乙未タ決セス、初メ秀秋、及ヒ秀元内應
 ナ約ス、是ニ至リテ、東軍展之ヲ促ス、秀秋俄ニ西
 軍ヲ衝キ、三面合擊、聲天地ニ震フ、吉隆悲リテ曰ク、
 秀秋思ニ背キ、義ヲ忘ルト、直ニ其ノ麾下ヲ擊チテ、
 大ニ之ヲ破リ、東軍ノ監使與平貞治ヲ斬ル、而シテ脇
 坂安治等、亦タ秀秋ニ應シ、藤堂高虎等ト之ヲ包ム、
 吉隆奮戰シテ死ス、西軍遂ニ大ニ敗レ、死傷大凡四萬
 人、原草爲ニ赤シ、秀家怒リテ、秀秋ヲ獲ント欲ス、
 從士之ヲ止メテ走ル、義弘奮闘シテ、井伊直政ヲ卻
 ケ、竟ニ走ル、東軍ノ死傷スル者、四千ニ過キス、將

第九 大坂陣
 豊臣秀頼、大坂城ニ在リ、片桐且元、木村重成、薄田

兼相、及ヒ七隊將等、之ヲ保護ス、大野治長ハ、淀君ノ乳母ノ子ナリ、且元ト相軋ル、慶長十九年、秀頼已ニ長ス、治長姿容アリ、淺井氏(淀君)大ニ之ヲ寵ス、其ノ官ヲ所皆聞カル、陰ニ兵ヲ擧ケテ、舊業ヲ復セント欲シ、淀君ノ季父、織田長益ト議シテ、前田利長ヲ勝フ、從ハス、四月方廣寺ノ洪鐘ヲ鑄ル、五月成ル、家康ニ告ケ、慶ヲ請フ、八月三日ヲトシテ、公卿以下之ニ會シ、民庶ニ縱覽セシム、家康鐘銘ノ稿ヲ見ルニ、國家安康ノ句アリ、乃チ怒リテ曰ク、是レ吾カ名ヲ截チテ、吾ヲ誣スルナリト、俄ニ其ノ慶ヲ停ム、且元曰ク、作者偶然此ニ及ヘルノミ、今大儀近キニアリ、萬衆既ニ聚ル、願ハクハ禮ヲ畢ヘテ、後銘文ヲ毀ダント、聽カス、物情騷然タリ、京師ノ僧亦多ク其ノ誣ヲ證ス、九月且元、駿河ノ府中ニ至リ、陳謝甚タカム、淀君又ニ女ヲシテ赴キ、謝セシム、家康温言ヲ以テ慰籍シ、事銘文ニ及ハス、之ヲ還シ、

所在ニ潜伏セル、浮浪ノ士、之ニ應スルノミ、號シテ十萬ト稱ス、真田幸村、高野ヨリ來リ投シ、自ラ玉造ニ陣シ、偃月城ヲ築ク、長曾我部盛親、京師ヨリ、後藤基次、南都ヨリ、其ノ他嫡直次以下ノ將士、數百人來會ス、然レトモ皆有土ノ將士ニアラス、治長等望ヲ失フ、十一月、東軍ノ先鋒、住吉ニ達ス、幸村、家康ノ未タ陣セサルニ及ヒテ、之ヲ襲ハント欲ス、治長聽カス、巴ニシテ東軍悉ク至ル、兵凡ソ十萬人ナリ、家康使者ヲ城中ニ遣ハシテ、和ヲ議セシム肯セス、家康、幸村、重成、基次等ヲ諭シ、降ヲ勸ム、皆從ハス、幸村等日ニ敵兵ヲ斃シ、城兵一人ヲ損セス、東軍戰ヲ休ム、家康數、和ヲ勸ム、秀頼領地ヲ阿、讚、豫ニ移シテ、攝、河、泉ニ易ヘント請フ、家康、房總ヲ以テセント欲ス、淀君東スルコトヲ欲セス、十二月、淀君、天主閣ニ登ル、適、大煩閣ニ中リ、侍女二人死ス、乃チ怖レテ和セント欲ス、京極忠高ノ母、常光院ハ、淀君ノ

獨リ且元ヲ止メテ、意終ニ解ケサルコトヲ告ク、且元其ノ理由ヲ問フ、答ヘス、且元遂ニ去リテ、大坂ニ歸ル、二女曰ク、家康懇切ニシテ他ナシ、國事慮ルニ足ラスト、且元曰ク吾ニ詰ル所大ニ異ナリ、搦ルニ母堂(淀君)或ハ主君(秀頼)江戸ニ至ルカ、又大坂ヲ避ケテ、他ニ徙ルニアラサレハ、事止マスト、二女退キテ曰ク、家康ノ意、豈ニ此ニ至ランヤ、是且元我カ君ヲ賣ルナリト、淀君、及ヒ大野治長等怒リテ、且元ヲ誅シ、兵ヲ擧ケント欲ス、且元ノ從士、謀ヲ告ク、且元、疾ト稱シテ出テス、竟ニ其ノ邑、茨木ニ還ル、訣ニ臨ミテ事ノ行ハレサルヲ七將ニ告ク、皆歎息ス、治長、謀ノ泄レンコトヲ知り、七隊長ヲシテ、赴キ攻メシム、皆肯セスシテ曰ク、市正忠勇比ナシ、之ヲ誅セハ、猶ホ君ノ手足ヲ絶ツカカシト、

十月家康、大坂ヲ攻メントス、大坂益、金ヲ散シテ兵ヲ募ル、然レトモ大名ノ命ニ赴ク者ナシ、唯、關原ノ敗後、妹ナリ、時ニ京師ニアリ、依リテ迎ヘテ城ニ入ラシメ、和ヲ議セシム、客兵ヲ逐ヒ、周池ヲ填ムルノ約ヲ定ム、明日家康、板倉重昌等ヲシテ、誓ニ蒞マシム、秀頼ハ重成ヲシテ誓ヲ取ラシム、重成、茶臼山ノ營ニ抵ル、時二年二十二ナリ、已ニシテ誓成ル、大坂ノ將士、家康ノ歸路ヲ要セント欲ス、家康已ニ京師ニ入ル、人其ノ迅速ニ服ス、且日東軍十萬人、城ノ外濠ヲ填メ、濠テ内濠ニ及フ、城中大ニ驚キテ之ヲ詰ル、成瀬正成、對ヘテ曰ク、周トハ内外ノ周ナリ、且ツ和已ニ成ル、何ソ遑ヲ用キン、今内濠ヲ存セント欲スル、其ノ意如何ト、治長、岡山ニ馳セテ、秀忠ニ詰問ス、吏曰ク、是レ前將軍大御所ノ命ナリト、治長、乃チ使ヲ京師ニ發ス、勝重曰ク、本多正純ノ主任ナリ、吾與ラスト、馳セテ正純ニ詰ル、疾ト稱シテ出テス、往復數反ノ間、遑皆夷キ、獨リ牙城一瀆ヲ存スルノミ、是ヲ大坂陣ト云フ、

元和元年、殘荒ノ餘、大坂ノ將士、給テ仰テ所ナシ、三月賑ヲ關東ニ請フ、報セス、客兵再舉ヲ、勸メテ曰ク、此ノ城、天下ヲ舉ケテ、取ル克ハサルハ、人ノ知ル所ナリ、今再舉セハ、歸スル者必ス多カラント、乃チ募テ十二萬人ヲ得タリ、上下大ニ喜フ、七隊長曰ク、城勢前役ニ比スヘカラス、之ヲ城外南口ニ扼シテ、衝突スルニ如カスト、議遂ニ決ス、四月東軍已ニ京師ニ至ル、是ヨリ先、小幡景憲、伴テ大野治房ニ應シ、其ノ勳息ヲ關東ニ報ス、城中師ヲ出サント欲ス、景憲、治房ニ説キテ、故ヲニ聽カサラシム、是ニ至リテ家康復タ常光院、及ヒ後藤光次ヲシテ、兵ヲ弭メシム、秀頼答ヘス、東軍和泉、大和、河内ノ三國ヨリ並ヒ進ム、大坂亦三道ニ分レテ之ヲ拒ク、治長、淀君ヲ命ヲ以テ、諸將ヲ沮抑シ、軍譏屢ニ變ス、是ヲ以テ將士悅ハス、堀直次、奮戦シテ櫻井ニ死ス、五月基次、平野ニ軍シ、水野勝成ヲ破ル、已ニシテ大軍ニ夾マレ、統ニ當リテ死ス、

直孝私ニ銃ヲ倉中ニ發シテ絶テ示ス、秀頼曰ク、吾太閤ノ嫡子ニシテ此ニ至ル、天ナリト、乃チ自刃シテ死ス、年二十三、淀君、及ヒ治長、勝永以下之ニ殉ス、時ニ五月八日ナリ、之ヲ大坂夏陣ト云フ、是ニ至リテ、豊臣氏亡ヒ、徳川氏ノ大業成リ、顯象變シテ遂ニ、第九期ヲ開クニ至ル、

第二章 政治及ヒ法律

第一 政治

管領制度 足利尊氏鎌倉ニ据リテ、志望ヲ達シ、子義詮ヲシテ之ヲ鎮メシメ、自ラ室町ノ幕府ニ在リテ、南朝ニ對ス、官軍漸ク微ナルニ及ヒ、義ニ陽尊セル光明天皇ヲ輕ンシテ、更ニ忌憚スル所ナシ、是ニ於テ朝官或ハ東語ヲ學ヒテ、其ノ蔑辱ヲ免ル、ニ至ル、直義兄ヲ助ケテ逆ヲ遂ケ、頗ル策略多ク、與リテ力アリ、高師直、軍功アルヲ以テ、幕府ノ執事トナリ、擅肆度ナシ、直義之ト相軋リテ、遂ニ渠ヲ除カント欲シ、直

日本誌 史紀 政治及法律 政治

薄田兼相、亦奮戦シテ亂軍ニ斃ル、幸村來リ救ヒ、擊テ伊達政宗ノ先鋒ヲ破ル、伊達ノ兵、馬上ニ銃ヲ發シ、烟ニ乘シテ馳突ス、是伊達ノ兵ノ長技ナリ、幸村之ヲ知り、兵ヲ引キテ凹處ニ就キ、將士ヲ令スルコト、手ノ指ヲ使フカ如シ、伊達ノ軍、大ニ潰エテ走ル、重成、井伊ノ兵ト、河内ニ戦ヒテ之ヲ破リ、鎗ヲ揮ヒテ挺進シ、向フ所皆靡ク、已ニシテ盡ク從士ヲ亡ヒ、遂ニ戦死ス、幸村、茶臼山ニ陣シ、牙旗ヲ天王寺ノ傍ニ樹テ、秀頼ノ親出ヲ乞フ、時ニ城中内應ノ者アリ、秀頼出ツルヲ止ム、幸村怒リ、奮戦シテ遂ニ死ス、森勝永ハ、本多忠朝、小笠原秀政ヲ破リ之ヲ斬リ、進テ家康ノ麾下ニ迫リ、兩軍大ニ戦フ、然レトモ城兵勝ヲ取ルコト能ハス、諸門皆破ル、秀頼難ヲ倉中ニ避ク、治長、秀頼ノ夫人、千子(徳川秀忠ノ女)ヲ出シテ、家康ニ致シ、秀頼母子ノ命ヲ全クセンコトヲ請ハシム、東軍已ニ夫人ヲ得、井伊直孝等ヲシテ倉外ヲ監セシム、

冬(尊氏ノ庶長子直義ノ養子)ヲ以テ、中國探題ト爲シ、豫メ外援ニ備フ、事漏ル、ニ及ヒテ、師直幕府ヲ圍ミ、迫リテ直義等ヲ斥ケント請フ、尊氏暫ク其ノ請ヲ許シ、義詮ヲ召シテ、政ヲ執ラシメ、其ノ弟基氏ヲ以テ關東管領ト爲ス、(子孫世襲)直冬、肥後ニ走リ、鎮西漸ク之ニ屬ス、是ニ於テ天下三分シ、官軍ヲ官方、尊氏ノ所屬ヲ將軍方、直冬ノ所屬ヲ兵衛佐方ト稱ス、尋テ師直、尊氏ニ勸メ、直義ヲ圖ラシム、直義南都ニ走ル、是ヨリ兄弟兵ヲ搦ヘ、或ハ去リテ官軍ニ歸シ、或ハ和シテ吉野ニ叛ク、後師直等誅ニ遇ヒ、直義亦尊氏ニ毒殺セラル、直冬ハ病ヲ以テ死ス、義詮、既ニ職ヲ其ノ子義滿ニ讓ル、義滿、細川頼之ヲ舉グルニ及ヒテ、執事ヲ改メテ、管領ト爲ス、頼之方正ニシテ文武ヲ兼ネ、最モ政略ニ長ス、將士之ヲ敬重ス、頼之曾テ文アリ、武アル者ヲ擇ヒ、義滿ノ左右ニ侍セシメ、將士ノ便佞ナル者アレハ、之ヲ戮辱ス、故

ヲ以テ士風大ニ革マル、

鎌倉ノ管領、基氏、材武アリ、能ク士心ヲ得テ、關東ヲ鎮定シ、義詮ヲシテ東顧ノ憂ナカラシム、基氏、其ノ子氏滿ニ教ヘテ曰ク、謹ミテ京師ノ約束ヲ奉シ、肯テ倍畔スルコトナカレト、上杉憲顯ヲ以テ執事トス、頼之ノ管領タルモ、亦基氏ノ吹擧ニ出ツ、是ヲ以テ當時、京師關東并ニ寧綏ナリ、足利氏ノ業全キコトヲ得シハ、率ネ基氏ノ力ニ因レリ、而シテ後世東西抗亂ノ兆モ、亦此ニ胚胎セリ、

義滿執政ノ時ニ至リ、世ニ將軍ヲ呼ヒテ、公方ト稱ス、後鎌倉亦之ニ擬シ、自ヲ稱シテ公方ト云ヒ、執事ヲ號シテ管領ト呼フ、東西兩將軍アルカ如シ、氏滿ノ弟滿直、與羽ヲ管ス、又千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、那須、宇都宮ニ屋形號ヲ與ヘテ、關東八館ト稱ス、又執事上杉憲顯ノ後、世々鎌倉ノ山内ニ居リ、憲顯ノ子憲榮ノ裔、扇谷ニ住シテ、兩上杉ト稱シ、更ニ

至ル、應仁ニ至リ、遂ニ京師ノ大戰爭起リ、天下亂レテ麻ノ如シ、是ニ於テ將軍管領ノ職アリト雖モ、之ヲ理ムルコト能ハス、徒ニ虛器ヲ擁シ、世譽ケテ戰國トナレリ、

群雄割據ノ時代 室町幕府(足利氏)ノ政略ハ、大

約鎌倉幕府(北條氏)ノ制ヲ因襲セリト雖モ、當初將士ニ昭ハシテ、南朝ヲ省ミサラシメント欲シ、土地ヲ分チテ之ヲ領セシメ、王土ヲ私シテ、己カ有ト爲シ、猥ニ庄園ヲ收メテ、功臣ニ授與ス、故ヲ以テ國司ノ職名アリ、實權ナキカ如ク、守護ヲシテ世襲タラシメタリ、是ニ於テ諸國ノ守護、武力ヲ以テ諸州ヲ併セ、隨ヒテ取レハ、隨ヒテ守護ヲ兼ヌ、就中山名ノ如キハ、其ノ所領、山陰、山陽、南海ニ跨リ、一時十州ヲ有シテ、日本六分一殿ノ稱アリ、時ノ人相謂ツテ曰ク、其ノ家ヲ大ニセント欲セハ、叛スルニ如カスト、是ヲ以テ足利氏十五代ノ中、義滿ノ他ハ能ク之ヲ制スル者ナク、

日本誌 史紀 政治及法律 政治

管領ト呼フ、此ノ時ニ方リテ、關東ノ兵力京師ヨリモ強シ、而シテ天子ノ廢立、公卿ノ易置ニ至リテハ、京師之ヲ專ニセリ、

義滿薨シテ後、京師鎌倉ノ間、圓滑ナラス、屢難ヲ搆フ、蓋シ持氏ノ潛伏ナルカタメナリ、執事上杉憲實、之ヲ諫ムレトモ悛メス、將軍義教、遂ニ持氏ヲ殺ス、是ヲ永享ノ亂ト云フ、其ノ後義政執政ノ時ニ至リ、持氏ノ子成氏ヲ以テ、鎌倉管領トス、成氏兩執事ト兵ヲ搆フ、義政命シテ、成氏ヲ討タシム、成氏古河ニ走ル、將士多ク之ニ附ス、長祿元年、義政、澁川義鏡ヲ以テ、關東探題ト爲シ、上杉房顯ヲ以テ、管領トシ、以テ成氏ヲ伐タシム、既ニシテ義政、義鏡等ノ請フ所ニ從ヒ、弟政知ヲ遣シテ、關東公方トス、政知伊豆ノ堀越ニ居リ、然レトモ關東ノ將士、之ニ服セス、多ク成氏ニ歸ス、關東遂ニ大亂ニ屬シ、京師ノ政令亦行ハレス、三管領、四職等ノ勢力、強大ニシテ或ハ將軍ヲ弑スルニ

始終亂ヲ以テ訖ル、蓋シ義滿以來ノ將軍、其ノ器ニ耐ヘス、宰臣其ノ人ヲ得サリシヲ以テナラシ、

室町幕府ノ政權衰フルニ及ヒ、管領細川ノ臣、三好、松永等京畿ノ政事ヲ擅ニシ、四方ノ群雄、各一方ニ割據ス、故ニ政治ノ大勢一定セス、各自武斷政治ヲ爲セリ、

織田及ヒ豊臣氏ノ治 織田信長、尾張ヨリ崛起

シテ、諸道ヲ略シ、天下統一ノ功ヲ計ル、時ニ朝廷大ニ衰頽シテ、宮殿雨ヲ漏ラス、信長深ク之ヲ憂ヒテ、大内ヲ修メ、所司代ヲ置テ、以テ京師ヲ治メシメ、常ニ四方平定ヲ以テ志ト爲シ、行政偏私ナク、尊王愛民ノ赤心アリテ、虛飾ヲ喜ハス、顯達ヲ干ムルコトナク、賞罰明ニシテ、直諫ヲ好ム、然レトモ部下ノタメニ弑ニ遇ヒ、竟ニ其志ヲ果シ得サリキ、豊臣秀吉、躍キテ天下ヲ定ム、徳川氏ニ至リテ、全ク昌平ノ政ヲ施スコトヲ得シハ、實ニ管織田氏ノ餘烈ナリト謂フヘ

當時戰國ニ際シテ、各自カ行フ所ノ庶政ヲ察スルニ、率ネ臨時不定ニシテ、其ノ置ク所ノ吏ヲシテ、之ヲ掌ラシム、蓋シ平常ハ干戈ニ從事シテ、兵政ノ外ニ緊要ナルモノアラサレハナリ、豐臣氏ニ至リ、織田氏ノ遺政ヲ承ケ、上ハ天子ヲ奉シテ、下ハ萬姓ヲ御シ、自ラ關白ノ職ニ在リト雖モ、其ノ實、大政ヲ專決シ、諸國ヲ家臣ニ分與シ、奏請シテ官號位階ヲ與フ、故テ以テ大坂ニ鎮スルモ、僅ニ錢穀ノ吏アルニ過キス、司法出納ノ事ニ至ルマテ、悉ク武ヲ以テ之ヲ兼ヌ、是ヲ五奉行ト云フ、晚年五大老ヲ置キ、小事ハ奉行之ヲ決シ、大事ハ大老之ヲ斷ス、之ヲ十人衆ト云フ、其ノ後慶長三年、中老ヲ置ク、即チ大老ト、奉行トノ中間ニ居テ事ヲ調停ス、其ノ他訟獄、錢穀、社寺等ノ司アリテ、天下ノ大政ヲ執ル、其ノ簡略ナルコト、以テ見ルヘキナリ、

職制 足利氏、幕府ヲ京師ニ定メ、義詮ノ弟基氏ヲ鎌倉ニ居ラシメテ、關東ヲ管領セシム、應永五年、更ニ職制ヲ頒定シテ、管領ヲ置ク、斯波、細川、畠山ノ三氏、交リ之ニ任シテ、幕府ノ政ヲ總理ス、即チ執權ナリ、是ヲ三管領ト云フ、山名、一色、赤松、佐々木ノ四氏送ニ侍所別當トナル、之ヲ四職ト云フ、若シ別當國ニ就キテ幕府ニ在ラサレハ、家臣ヲ以テ所司代ト爲シ、代リテ事ヲ執ラシム、又兩吉良、今川、澁川ノ四氏、更、武者所頭トナリ、伊勢氏、奏者ヲ掌リ、武田、小笠原ノ二氏ハ禮法射御ノ事ヲ掌ル、之ヲ七頭ト稱ス、其ノ他探題ヲ鎮西、中國ニ置キテ、關東管領ト共ニ、天下ヲ制シ、大名ヲ諸國ニ配シテ、守護ト爲ス、

第二 租税法

鎌倉、幕府執政ノ代、支那錢即チ唐、宋、金、遼等ノ錢ヲ以テ、租稅徵收ノ率トス、足利氏、亦明ノ永樂錢ヲ以テ田圃ヲ算ス、蓋シ往昔額額ヲ以テ算セルモノト

同シカラス、義滿、管領細川頼之ノ議ヲ用キテ、諸國ノ凋弊ヲ拯ント欲シ、令シテ四公六民ノ制ト爲ス、義政ニ至リ、義滿ノ金匱ニ擬シテ、銀閣ヲ營ミ、驕奢漸ク甚シク、四時ノ遊宴、盤樂會ヲ行ハサルハナク、從テ其ノ入ル所、出ツル所ヲ償ハス、財貨足ラスシテ、元費費ルヘカラス、即チ下民ノ金ヲ借りテ、之ヲ償フ其ノ後徳政ト名ツケテ、大名、小名ニ課シテ出金セシメ號シテ大儀ト云ヒ、又士民ヲシテ負債ヲ辨セサシム、是ニ於テ富豪頗覆シ、貧民志ヲ得テ、鹵掠抄奪ヲ事トシテ、所在大ニ擾ル、應仁文明ノ亂後ニ至リ、漸ク商賈ニ課シ、農夫ヲ役スルニ至ル、故ニ耕耨時ヲ失ヒ田疇荒蕪ニ歸スルモノ多シ、

僻陋無寇ノ國ニアラサルヨリハ、能ク其ノ未耨ヲ盡シ能ク其ノ稅率ヲ課スルコト能ハス、是ヲ以テ武田信玄、長曾我部元親ノ如キハ、隣國ノ羈絆ヲ受ケスシテ、心ヲ農政ニ盡ス、就中信玄ノ行フ所ハ、稅歛最モ薄シ、其ノ民之ニ服ス、豐臣氏天下ヲ定ムルニ及ヒテ、大ニ諸國ノ地ヲ檢シ、五六ノ法ヲ立テ、三百歩ヲ一段ト爲シ、貫高ヲ改メテ、石高トシ、新量ヲ制シテ、糶米三分ノ二ノ租ヲ徵ス、詳ニ左表ニ示ス、

文祿田租表

水田	種米	租米
地目 曲尺	京	升
一步 方六尺三寸	五 合	三合三勺餘
上 一段 三百步	一石五斗	一 石
一町 三千步	十五石	十 石
二步 方六尺三寸	四合二勺餘	二合八勺餘
	四百二十五	

田中	一段 三百步	一石三斗	八斗六升六
	一町 三千步	十三石	合六斗六升六
田下	一步 方六尺三寸	三合六勺餘	二合四勺餘
	一段 三百步	一石一斗	七斗三升三
	一町 三千步	十一石	合三斗三升三
			七石三斗三
			升三合餘

第三 法律

足利尊氏ノ法令ヲ立ツルヤ、多ク鎌倉幕府ノ舊ニ依リ、且ツ僧玄慧等ニ命シテ、建武式目ヲ編成シ、以テ其ノ足ラサルヲ補ハシム、之ヲ足利氏ノ法典ト爲ス、爾來評定檢斷ノ署ヲ、京師鎌倉ニ置キテ、訟獄ヲ斷ス、然トモ兵革熄ム時ナク、上下干戈ノ間ニ生じシ、群雄四方ニ跋扈シテ、各自ノ法ヲ行フ、故テ以テ刑政一ニ定マルコトナク、式目ハ徒ラニ具文ニ屬シテ、之ヲ適用セルハ、僅ニ京師、鎌倉ノ直轄地ニ過キサリキ、

第三章 武備

足利尊氏、叛逆ノ當時ハ、尙ホ騎戰ニシテ、軍法更ニ

シ、兵ヲ徵ス、其ノ法、父子兄弟ヲ論セス、五畿内ヲ半役、中國四國ヲ四人役、大坂以東、尾張以西ヲ六人役、北國ヲ六人半役ト定メ、征行ノ遠近ニ從ヒテ以テ、兵數ノ差ヲ立テタリ、

第四章 宗教

天授六年(康暦二年)南禪寺ノ妙葩ヲ以テ、天下ノ増録司ニ補シ、國師號ヲ賜フ、嘗テ榮西、建仁寺ヲ創セシヨリ、東福寺以下、相踵キテ創立ス、是ヲ京師ノ五山トス(天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺)鎌倉亦建長寺以下ノ五寺ヲ以テ五山トス(建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺)義滿尋テ十大寺ヲ置ク、關東亦之ニ倣フ、總稱シテ五山十刹ト云フ、皆禪法ノ巨刹タリ、蓋シ佛法ノ行ハレテヨリ以來、八百餘年、其ノ尊僧、崇佛覺ニ習俗トナル、元中元年(至徳元年)京師及ヒ鎌倉ノ五山十刹ノ列ヲ定メ、南禪寺ヲ以テ、五山ノ上ニ置ク、

規律ナク、約不敵戰ヲ主トシテ、未ダ節制ノ法アラス、特リ楠正成ノ兵ヲ用キルニ於テ、稱スヘキモノアリ、尊氏諸國ノ守護ニ命シ、毎年ノ邑入、五十分一ヲ課シテ、軍費ニ充ツ、斯波義將執事トナリ、父高經之ヲ輔ケテ、事ヲ決スルニ及ヒ、更ニ増シテ二十分一トセリ、是ノ制ヤ、往時頼朝カ、諸國ニ賦シテ、段別ニ五升ヲ收メシニ似タリ、應仁ノ大亂以來、天下麻ノ如ク、亂レテ戰國トナル、天文中ニ至リ、北條氏綱東國ニ雄長タリ、四民風靡シ、西國ノ賈人モ亦來リテ、小田原ニ集マル、其ノ賈人鐵砲ヲ齎チ來ル、東國ニ於テ鐵砲ヲ用キルコト、當時ニ始ル、織田信長、尾張ニ崛起シ、長鎗輕兵ノ隊ヲ前列ニ立テ、騎士ノ驅突ヲ遮リ、利チ戰場ニ退クス、爾來騎戰ノ功衰ヘテ、約不步闘トナル、武田、上杉ノ二氏最モ兵法ニ長シ、其ノ制甚タ見ルヘキモノアリ、此ニ於テ節制ノ法、漸ク開ケ、敵戰ノ法、漸ク廢ル、天正中、豐臣秀吉、北條氏政ヲ討タント欲

明應八年、本願寺蓮如寂ス、蓮如ハ親鸞上人ヨリ、七世存如ノ子ナリ、博學多識ニシテ、眞宗中興ス、後柏原天皇、大永元年、本願寺光兼、勅ヲ奉シテ黃金一萬兩ヲ獻シ、天皇即位ノ費ニ供ス、依テ寺ヲ門跡ニ准ス、天正七年淨土宗ノ僧、靈譽、貞安、ト日蓮宗ノ僧不傳等ト宗義ヲ安土ニ討論ス、不傳等辭屈ス、信長命シテ不傳ヲ斬ラシム、是ヲ安土ノ宗論ト云フ、天正九年、信長耶蘇宗ノ僧ニ、安土城下ノ地ヲ賜ヒテ、テ舍ヲ建テシム、耶蘇宗ノ本邦ニ入ルヤ、天文十一年ニアリ、初メ鎮西ニ起リテ、山陰、山陽ニ及ヒ、遂ニ畿内ニ傳播シ、永祿十一年ヲ以テ、京師ニ一寺ヲ創ム號シテ南蠻寺ト云フ、是ニ至リテ信長、其ノ僧徒ヲ安土ニ居ラシム、天正十七年、秀吉南蠻寺ヲ破却シ、其ノ僧徒ヲシテ本國ニ歸ラシム、

織田、豐臣ノ二氏ハ、僧ノ兵ヲ用キルヲ惡ミ、斬テ以テ

武威ヲ天下ニ視ス、巨利爲メニ兵裝ニ罹ル、佛法ノ衰微、此ニ至テ極ル、

第五章 外交

文中二年(應安六年)六月、明僧、仲猷、無逸、京師ニ來リテ曰ク、明主ニタヒ使ヲ貴國ニ遣ス、皆鎮西ニ阻ラレテ通スルコト能ハスト、時ニ菊池武政、懷長親王ヲ奉シテ、鎮西ニアリ、親王使僧ヲ鎮西ニ留メシテ以テ、京師ニ達セサリシナリ、元中九年(明德三年)冬朝鮮ノ使者來リテ、隣交ヲ修メシコトヲ請フ、之ヲ許ス、南北朝以來、兵革ヲ以テ四方叛亂シ、海島ノ小民、或ハ明邊ヲ侵掠ス、明主書ヲ贈テ、海寇ヲ禁シ、商賈ヲ通センコトヲ請フ、應永四年八月、使ヲ明ニ遣ス、八年義滿、明主朱棣ニ書、及ヒ黄金器物ヲ贈ル、九年二月、明主、僧道彝、一如チシテ報スルニ、錦綺及ヒ大統曆ヲ以テス、其ノ書ニ曰ク、日本國王、源道義ト、義滿大ニ悦ヒ、其ノ封冊ヲ受ケ、二僧ヲ北山ニ邀フ、

是ヨリ使聘ノ往來ニ、王ト稱シ、僧ヲ以テ交通ノ使ト爲ス、十五年五月、義滿薨ス、明主計ヲ聞キ、謚シテ恭獻王ト云フ、二十六年六月、高麗船艦千三百餘ヲ以テ、對馬ニ寇ス、筑紫ノ兵、之ト戦ヒテ克タス、澁川義俊撃チテ大ニ賊兵ヲ敗ル、賊艦没シテ溺スル者算ナシ、是ノ歲、明使復タ來ル、義持、僧西堂ヲシテ諭サシメテ曰ク、先君(義滿)猥ニ外國ト音問ヲ接ス、我カ國、古ヨリ未ダ曾テ臣チ外國ニ稱セス、先君先制ニ違ヒ、神人和セス、故チ以テ先君終ニ臨ミ誓ヒテ、外國ノ通問ヲ絶チ、子孫ヲシテ遺命ヲ固守セシム、去歲告クルニ、此ノ意ヲ以テス、前諭未タ達セスヤト、遂ニ絶シテ通セス、永享六年六月、明使來リテ、銅錢三十萬錢ヲ義教ニ贈ル、嘉吉三年十一月、宗貞盛、朝鮮ト私ニ交易ヲ約シ、船五十艘ヲ遣ル、朝鮮、歲ニ米豆二百石ヲ給ス、是ヨリ每歲、交易絶エス、文明十五年四月、義政書ヲ明ニ贈リテ、日本國王臣義政ト云フ、天

第六章 民業及ヒ美術

第一 民業

文十二年八月、歐羅巴、葡萄牙ノ商船、大隅種子島ノ西浦ニ漂着ス、諭シテ赤尾木津ニ造リテ、互市セシム時ニ葡萄牙人、烏銃ヲ我ニ傳フ、足利氏明ト交好ヲ修メシ時、朝鮮其ノ間ニ兩屬シ、常ニ我ニ朝貢ス、足利氏衰ヘ、西南ノ海盜、數明境ヲ侵シ、ヨリ、明、朝鮮、我カ邦ト皆絶ツ、而レトモ海賈ノ互市絶エス、宗氏世々吏ヲ釜山浦ニ置ケリ、天文中、大友氏世亂ニ乘シ、海外諸國ト私ニ互市ヲ通ス、因テ天主教我カ邦ニ入ル、

元龜元年、肥前長崎ノ領主、大村理專、外邦商賈ノ請ヲ許シ、長崎ノ地ヲ以テ、貿易場ト爲ス、長崎ノ貿易場此ニ始ル、

天正四年、蠻人豊後ニ至リ、大煩二門ヲ、大友義鎮ニ獻ス、義鎮大ニ悦ヒ、國崩ト名ク、十五年、秀吉、鍋島直茂ヲシテ、外國ノ互市ヲ監セシム、慶長五年、和蘭ノ商船來リテ、始テ互市ヲ通ス、

高 室町幕府ノ當時(應永以來)内地ノ商業ハ、和泉、堺ノ市、甚タ盛ニシテ、豪商此ニ集マリ、或ハ外邦ト貿易ス、其ノ他ハ甚タ振ハス、然レハ内商ハ、只其ノ需用ニ從ヒテ、物貨ヲ交換スルノミ、故チ以テ、一般商業ヲ店屋業ト云ヒ、其ノ物貨ヲ店屋物ト稱セリ、外邦ノ貿易ハ、稍盛大ニシテ、宋ノ末年、及ヒ明ノ初年ノ賈人、多ク沿岸ノ通商ヲ事トセリ、蓋シ此ノ時、南北朝ノ兵革絶エス、南北一統シテ、商人漸ク業ニ樂ム、應仁ノ亂起リテ、幕府ノ政令、天下ニ行ハレス、商業ハ道梗シテ運送ニ苦ミ、農事ハ地ニ墜チテ、田圃荒蕪ニ屬ス、是ニ於テ群雄各一方ニ割據シテ、私ヲ營ミ、勢アル者ハ、各自一都會ヲ構成セリ、サレハ外商等、亦其ノ領内ニ來船シテ、互市ヲ通ス、天文中、大内氏、專ラ支那通商ノ事ヲ掌ル、故ニ明商ト約シテ、

貿易ス、故ヲ以テ山口(周防)ノ繁盛、京師ニ倍ス、爾
 來朝鮮、及ヒ歐洲ノ西班牙、葡萄牙、和蘭、英吉利等
 ノ賈人相踵キテ、九州ニ來商ス、長崎ノ領主、大村理
 專(忠純ノ鯉)外人ノ請ヲ容レテ、之ヲ開埠ス、是ニ至
 リテ博多ノ繁盛(當時博多ハ兵亂ノ爲メニ衰頹セリ)此
 ノ地ニ移リ、四方ノ商賈、亦來リ住ミテ、專ヲ通商ナ事
 トセリ、其ノ後天正中、明商三崎(相摸)ニ來船シ、尋
 テ又小田原(相摸)ニ來ル、當時北條氏政、關東ニ跋扈
 シテ、勢望管領ヲ凌キ、小田原ノ市井、甚ダ殷賑ナリ、
 氏政、明ノ通商ヲ許ス、是ニ於テ天下ノ賈人、一ハ戰
 國ノ亂ヲ避ケ、一ハ生業ノ基礎ヲ固メント欲シテ、來
 リ住スル者益々加ハル、是ニ於テ東國小田原獨リ日ニ殷
 實ナリ、

工 當時建築ノ奢靡ニ傾キシハ、義滿花ノ御所、及ヒ
 北山ニ金閣ヲ營作セシヨリ、彌蔓セリ、而シテ其ノ方
 法ニ、京間、田舎間ノ稱アリ、京間ハ六尺五寸ヲ以テ

等、周文ニ師事ス、眞能(能阿彌也)後ニ足利義政ニ仕
 フ、東福寺ノ殿主、明兆亦當時ニ聞ユ、如拙、周文等
 ニ從ヒテ起ル者ヲ、雪舟ト云フ、雪舟、曾テ明ニ入リ
 宋格ヲ學ヒテ、自ラ一機軸ヲ出セリ、減筆ノ法、是ヨ
 リ盛ナリ、洞雪、揚門等其ノ門ニ輩出シ、洞雪ノ門ニ
 雪村ヲ出ス、原等顔、初メ狩野松榮ニ學ヒ、後揚門ニ
 從フ、元龜中ニ雄靡ス、當時專ラ如拙、周文、雪舟、
 明兆等ヲ屈指ス、而レトモ託靡、榮賀、亦自ラ一家ヲ爲
 シテ、右體ヲ一變シ、參フルニ支那畫ノ法ヲ以テス、
 明應中、土佐光信、古今ヲ折衷シテ、大ニ世ニ用キラ
 ル、爾來子孫、箕裘ヲ繼キテ、連綿タリ、當時畫工ノ
 泰斗タル、土佐氏ニ次キテ、起レル者ハ、狩野氏ナリ、
 其ノ祖ヲ正信ト云フ、伊豆人ナリ、畫ヲ能クス、初メ
 正信、僧周文ニ學ヒ、又小栗宗丹ニ從フ、後室町幕府ノ
 畫長タリ、四子アリ、長ヲ元信ト云フ、古法眼是ナリ、號
 テ永仙ト云フ、永祿二年ニ歿ス、探幽ハ其ノ裔ナリ、

一間ト爲シ、田舎間ハ六尺ヲ以テ一間トナセリ、京師ノ
 風俗ハ、事物皆寬ナルヲ賞セシカハ、建築法モ、亦寬
 ナルヲ喜ヒシナリ、

足利氏、執政ノ季世ニ至リ、攻戰日ニ甚シキヲ以テ、
 土木建築ノ工藝、大ニ進歩シ、城堡船舶ノ堅牢ニシテ、
 且ツ大ナルコト、前古比ナシ、就中築城ノ如キハ、一
 種新規ノ工作アリテ、天主閣ノ法起ル、
 刀劔ハ、三原(備後)正家アリ、千子(伊勢)村正アリ、
 法城寺(但馬)國光等アリ、

機械ノ巧ハ、和泉ノ堺、隆盛ナリ、當時明、及ヒ歐洲
 ノ織物舶來シテ、織工ノ業一變ス既ニシテ京師西陣ノ
 織業起リ、綾羅錦綺ヲ出シ、堺ヨリハ多ク金襴等ノ金
 絲屬ヲ出ス、

第二 美術

繪畫 應永中、如拙北宗畫ノ嚆矢ヲ爲シ、其ノ門ニ
 周文ヲ出シテ、之ヲ成就セリ、小栗宗丹、及ヒ能阿彌

文祿中、木村山樂、狩野永徳ニ師事シ、依リテ其ノ姓
 ナ胃シ、當時ニ行ハル、其ノ門ニ猩々翁ヲ出ス、海北
 友松モ、亦永徳ノ門ニ出テ、後自ラ一派ヲ爲ス、

書法 延元ノ際、伏見帝、第六皇子、青蓮院、十七世
 尊圓法親王、最モ能書ナリ、是ヲ御家流ノ祖ト云フ、古
 筆家、其ノ筆法ヲ尊圓流ト稱ス、其ノ流種々ニ分派シ
 テ、後伏見帝ノ皇子、尊道法親王ノ傳フル所ヲ、尊道流
 ト云ヒ、二條持基ノ男、青蓮院、尊應准后ノ傳フル所ヲ、
 尊應流ト云ヒ、正親町院ノ御猶子、尊純法親王ノ傳フ
 ル所ヲ尊純流ト云ヒ、概シテ之ヲ青蓮院ノ流派トス、後
 圓融天皇最モ書法ニ精シ、之ヲ勅筆流ト云フ、後小松、
 稱光、後土御門ノ三天皇並ニ其流ヲ學ヒ、後柏原天皇之
 ナ承ケテ、又一流ヲ創ス、後奈良正親町二天皇ハ其ノ派
 ニ出ツ、之ヲ後柏原院流ト云フ、又和歌所ノ法印、堯孝、
 永享中ニ名アリ、之ヲ堯孝流ト云フ、文明中、甘露寺親
 長、書ニ巧ナリ、又飛鳥井雅親ノ傳フル所ヲ、飛鳥井流

ト稱シ、其ノ庶流、二樂軒、雅康二樂流ヲ創ス、足利義

尙、大内義隆、武田光元、其門ナリ、近衛尙通、亦此ノ流

ヨリ出テ、尙通流ヲ起ス、後信尹(號三藐院)ニ至リ

テ、近衛流、或ハ三藐院流ト云フ、

永正中、世尊寺、行季世ニ行ハレ、文龜中、中御門宣

胤、入木道ノ派ヲ以テ顯ハル、

文龜中、連歌師、宗祇ノ宗祇流、牡丹花宵柏ノ塚流、

天文中、山崎宗鑑ノ傳フル所ノ宗鑑流アリ、而シテ塚

流ハ、飛鳥井ノ派ニ出ツ、是レ皆連歌者流ノ摹倣スル

所ナリ、

陶器 足利氏、執政以來、茶事大ニ行ハレ、茶器隨

ヒテ、風韻雅致ノ製造アリ、建武年間、尾張ノ瀬戸ニ、

名器ヲ出ス、稱シテ破風窯ト云フ、傳テ云フ、後柏原

天皇ノ御宇伊勢ノ人、祥瑞五頁大輔、明ノ憲法ヲ學ヒ

テ歸朝シ、之ヲ唐津(肥前)ニ弘ム、是レ本邦ニ於テ磁

器ノ始ナリト、其 後京師ノ樂燒、尾張ノ常滑燒、備

前ノ備前燒、赤窯、京燒等相尋テ起ル、

漆器 建德(應安)中堺(和泉)ノ工人、春慶、新機軸

ノ意匠ヲ創ス、所謂春慶塗是ナリ、又京師ニ堆朱塗起

ル、支那ノ法ヲ傳フルナリ、足利氏ノ季世ニ至テ、京

師鳥丸ノ蒔繪、甚タ盛ナリ是ヲ鳥丸蒔繪ト云フ、

音樂 第五期ノ季ヨリ、田樂盛ナリシカ、北條氏

執政ノ季ニ至リテ、極マル、第六期ノ比ヨリ、猿樂起

リテ、田樂ト並ヒ行ハレ、本期ニ及ヒテ、猿樂ハ武樂

トナル、當時觀世、金剛、今春、寶生ノ四座アリテ、

各拮据相競ヘリ、

室町幕府執政ノ季ニ至リ、淨瑠璃始テ起ル、後竟ニ樂

曲ヲ一轉シテ、今ノ義太夫ヲ發源ス、傳ヘテ云フ、淨

瑠璃ハ、信長ノ侍婢、小野通女カ創設ニ係レリト云フ、

然ラハ其ノ以前ニ起レリ、之ヲ談スルニ、琵琶ヲ用キ

ル、樂曲ヲ一轉シテヨリ、三味線ヲ用キルコト、ナレ

リ、

第七章 風俗

衣服 長祿以來、連年兵革ノ餘ヲ承ケ、加フルニ諸

國凶荒シ、人民ノ困窮甚シ、然レトモ將士驕奢ニシテ、

衣服制ナク、商人ト雖モ、往々綾羅ヲ被ル、天下ノ華

麗極レリ、

當時中等女子ノ帶ハ、猶ホ古ノ如ク狹シ、又上衣ノ袖

ヲ脱キ垂レテ、腰ニ纏フ、是ヲ腰卷ト云フ、中等以下

ニ至リテハ、別ニ制限ナシ、

慶長三年、征韓ノ師還ルニ及ヒテ、木綿ノ種子ヲ齎テ

シ傳ヘテ、人民稍其ノ利ヲ覺ユ、既ニシテ天下ニ遍

クシテ、木綿ノ衣ヲ用キル者多キニ至ル、

飲食 當時歲首ニ、管領以下ノ權臣、將軍ヲ請シテ、

榎飯ヲ献ス、下隨テ之ニ倣ヒ、各其ノ長者ヲ饗ス、

菓子ハ七種ヲ尙フ、朝ハ必ス茶ヲ喫シ、饅頭ヲ添フ、

但シ是レ足利氏、庖厨ノ制ニシテ、世間一般ノ例ニア

ラサルナリ、

四百三十三

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

ト稱スル、草履ヲ用キタリ、髮ハ前代ニ異ナラス、

遊宴 應永十五年三月、後小松天皇、義滿ノ請ヲ聽

テ、

義政大ニ慚懼シテ、遽ニ土木ヲ止ム、

形容 烏帽子ハ、平常之ヲ用キ、沓ハ式日ノ外、之

ヲ用キス、平時ハ金剛ト稱スル草履、又木履、又足中

シ、北山ノ金閣ニ幸シ、留ルコト十日、舞樂、猿樂ノ
歌ヲ盡シ、詩、歌、管絃、聯歌ノ興アリ、義政退職ノ
後、數、茶宴ヲ開キテ、群下ニ頒與ス、故ニ茶人、同
朋、常ニ側ニ侍ス、數寄盛ニ行ハレテ、終ニ天下ニ周
シ、

天正十五年、秀吉北野ノ松原ニ於テ、茶ノ湯ノ會ヲ行
ヒ、都鄙ノ數寄者ヲ召ス、是ヲ北野ノ大茶湯ト云フ、
十六年、後陽成天皇、秀吉ノ聚樂第ニ幸ス、秀吉、文
武百官ヲ率キテ扈從シ、伶人、五常樂、太平樂等ヲ奏
ス、其ノ例足利氏ノ舊ニ準ス、文祿三年二月、秀吉、
大和ニ遊ヒテ、吉野ノ花ヲ觀ル、諸大名悉ク從フ、皆
歌ヲ詠シテ、歡ヲ極ム、三月又醍醐ニ遊ヒテ、花ヲ觀
ル、夫人姬妾皆從フ、預メ大名ニ命シテ、大坂ヨリ醍
醐ニ至ルノ間、道路ヲ警衛セシム、觀遊ノ盛ナル、右
ヨリ未タアラサルナリ、

流行

義滿、執政以來、聯歌大ニ行ハル、其ノ他頗
ルコト、甚シト云フヘシ、其ノ一二ヲ擧テ云ハ、國
司領家ハ、復權力ヲ失テ、守護地頭ノ威福ヲ張ルコト、
昔日ニ超過セリ、殊ニ足利氏ニ從テ、京師ニ在ル所ノ
武士ハ、驕奢度ナク、各衆ヲ結ヒテ、茗宴ヲ設ケ、交
相響應シテ、以テ歡ヲ極ム、其ノ所作ヲ云ハ、支那
ノ風ニ擬シテ、主客皆曲詠ニ倚リテ、先ツ茗宴アリ、
茗宴畢レハ、酒食ヲ供ス、飲食モ亦支那ニ倣フ、食畢
ルニ及テ、主人珍品奇物ヲ、客ノ前ニ積ム、之ヲ懸物
ト云フ、其ノ積ム所ノ物ハ、或ハ衣服、或ハ沈水香、
或ハ麝香、或ハ沙金、或ハ甲冑、或ハ刀劍、積テ堆テ
成ス、其ノ費幾千萬ナルヲ知ラス、而シテ客各コレヲ
携ヘテ還ルヲ欲セス、傍觀スル所ノ田樂、猿樂、及傾
城、白拍子等ニコレヲ與ヘ、徒手ニシテ還ルヲ榮ト爲
ス、或ハ茗宴畢テ、博奕ヲ爲スコトアリ、一夕ノ勝敗
五六千貫ニ至ル、勝ヲ得ル者ハ、皆傍觀スル所ノ者ニ
與ヘテ、以テ榮ト爲ス、又綾羅錦繡ヲ衣トシ、銀裝刀

ニ流行スル者ハ、猿樂ニシテ、至ル所皆之ヲ催サ、ル
ナシ、

天文ノ頃、象戲大ニ行ハレ、天皇侍臣ト、對局スルコ
ト數、ナリ是ヨリ又世ノ流行トナル、
當時武人等、馬揃ヲ爲スコト行ハル、武事ヲ調フルナ
リ、之ニ召サル、將士ハ、盛ニ騎馬ヲ裝ヒ、之ヲ天子
ノ御覽ニ供ヘ、或ハ民ノ縱覽ヲ許ス、小歌ト名ツクル
モノ、亦當時ノ流行トナレリ、小歌ハ、四句、五句、七
句等ノ作法ニシテ、克ク世情、人情ヲ穿通セリ、信長
ノ平素、好テ口號スル所ノモノハ、乃チ左ノ哥ナリ、
死ナウハ一定、シノビクサニハ、何チシヨゾ、一定
語ヲコソヨノ、
堺浦ノ人、陸達ハ、本ト日蓮宗ノ僧ナリシガ、還俗シ
テ自ラ小歌ヲ作りテ唱フ、其ノ曲、優艶ニシテ、其ノ
音、清朗ナリ、時人稱シテ、陸達節ト云フ、
一般ノ風俗 建武ノ亂アリテヨリ、風俗ノ凋弊セ

ナ帶シテ、風姿ノ特ニ奇異ナルヲ好ム、是ヲ婆娑羅ト
云フ、京師ノ市街ハ盛ニ浴室ノ設アリテ、其ノ浴室ニ
美女アリ、媚テ客ヲ待ツ、是ヲ湯屋風呂ト云フ、士民、
各婆娑羅ヲ盡シ、往テコレニ遊フ、尊氏法ヲ出シテ、
婆娑羅ヲ禁シ、且ツ群飲、佚游、博奕等ヲ戒メシカト
人能クコレヲ守ラス、遂ニ習テ俗トナリ、縉紳ニ至ル
マテ、此ノ風儀ニ倣ヒ、故ヲニ帽ヲ傾ケ、言語ハ東國
ノ訛言ヲ用キルニ至リシカハ、義滿之ヲ患ヒテ、進退
應對等ノ諸禮ヲ制シテ、以テコレヲ習ハシメタリ、是
ニ於テ士民ノ風儀、漸ク温恭ヲ尙ヘリ、今川、伊勢、小
笠原ノ三氏、諸禮ヲ撰フニ與レリ、三氏ノ功モ亦鮮少
ナラサルナリ、義政、衣冠ヲ慕ヒ、武事ヲ疎ミ、猿樂
ヲ賞シ、茗宴ヲ設ケ、質素ヲ守テス、驕奢度ニ過キ、
殊ニ茶器ヲ弄スルニ至テハ、好テ海外ノ奇品ヲ求メ、
其ノ貴價ヲ厭ハス、是ニ於テ將士驕傲ニ走り、居服制
ナク、競テ豪華ヲ勉メ、商賈ト雖トモ、亦往々綾羅ヲ

衣トシ、紅紫ヲ被リ、器財家什ハ、蒔繪ヲ施シ、家屋
 建築ハ、良材ヲ擇ヒ、園池ニハ奇石ヲ求メサレハ足レ
 リトセス、華靡ノ風、是ニ至テ極レリ、應仁ノ亂アリ
 テ後ハ、公武共ニ衰弊シテ、奢靡ノ風戒メスシテ熄ミ、
 一變シテ悉ク粗暴ニ趨レリ、享祿、天文ノ比、公卿牛
 車ヲ用キズ、蓋シ之レ盛衰ニ伴フ自然ノ勢ナリ、
 守護ノ懦弱ナル者ハ、其ノ臣僕之ヲ滅シ、己コレニ代
 テ新守護ト稱シ、將卒ハ朝ニ仕ヘテ、夕ニ背ク、當時
 ノ諺ニ曰ク、士ハ和多利茂乃ト、以テ常ノ言トシ、敢
 テ耻チス、農民ハ兵革ニ狎レ、武士ノ亂暴ヲ拒カント
 シテ、黨ヲ結ヒテ隊ヲ爲ス者アリシニ、遂ニ所在風ヲ
 ナシ、以テ守護、地頭ノ命ニ應セス、其ノ朋黨ヲナス
 者ヲ號シテ、土民一揆ト云ヒ、敗軍ノ將士ヲ要撃シテ、
 其ノ武器、馬具等ヲ奪フルカ故ニ、軍敗ル、トキハ、
 將士反テ土民一揆ヲ懼ル、ニ至レリ、
 武士ハ、常ニ素褌ヲ用キスシテ、多ク肩衣半袴ヲ用キ

ル、後世ニ所謂ル上下ハ、即チ是ナリ、大刀ハ佩ハス
 シテ、腰間ニ挿ム者アリ、當時ノ武士、事務ノ繁劇ナル
 ニヨリ、衣服ノ輕便ヲ尙ヒ、終ニ此ノ風ヲナセルナリ、
 又少年ノ男女ハ好テ、半身、異色異文ノ衣服ヲ着ス、是
 ナ加太美賀波理ト云フ、是足利氏季世ノ風俗ナリ、
 織田氏ノ時ニ至リ、風俗益々粗野ニ趨リ無禮ニ涉ルコ
 ト多シ、彼諸國大名ノ使者、來テ信長ニ謁スルニ、其
 ノ式、足利ノ舊典ニ循ヘハ、織田氏ノ家士大ニ之ヲ愚
 弄セリ、而シテ信長モ、亦其ノ無禮ヲ咎メズ、
 信長、將士ニ命シテ、額上ノ髮ヲ剃ラシム、時ニ織田
 氏ノ兵、強盛ナリシカハ、諸國ノ武士モ、亦之ニ倣ヒ、
 其ノ風、延テ遂ニ庶民ニ及ヘリ、

第七編 第九期

第一章 本史

第一 徳川氏參河ニ起ル

家康姓ハ源氏、新田義貞ト同祖ニシテ義家ヨリ出ツ其
 ノ裔、有親、故アリテ二子ヲ輩ヘ參河ニ至ル、長子親
 氏、酒井氏ヲ冒シ、次子泰親、松平氏ヲ冒ス、而シテ
 家康ハ有親七世ノ孫ナリ、父ヲ廣忠ト云フ、廣忠常ニ
 援テ今川義元ニ乞フ、義元質子ヲ徵ス、乃チ家康ヲ以
 テ之ニ應ス、時ニ年六歳、戸田憲光(家康繼母ノ父ナ
 リ)陰ニ款ヲ織田氏ニ通シ、告ケテ家康ヲ奪ヒテ尾張
 ニ至ラシム、

天文十八年、廣忠卒ス、義元急ニ將士ヲ遣シテ岡崎ヲ
 守ラシメ、安祥ヲ攻ム、安祥時ニ織田氏ノ奪フ所トナ
 ル、是ノ時ニ當リ織田信秀已ニ死シ、子信長嗣キ、駿
 河、參河ノ兵ト會戰ス、織田信廣圍マレテ危シ、依テ
 家康ト交換シ兵ヲ收ム、家康復タ駿河ニ質タリ、義元
 兵ヲ遣シテ參河ノ諸城ヲ守ラシメ、其ノ租賦ヲ輸サシ
 メ、其ノ兵ヲ驅リテ已チ營ム、殆ト屬國ノ如シ、
 二十年五月五日年甫十歳、出テ、安倍河原ニ遊ヒ、

日本誌 史紀 徳川氏參河ニ起ル

兒童ノ石戰ヲ觀ル、一群ハ百許人、一群ハ百三十八
 ナリ、觀者爭ヒテ衆ニ就ク、家康僕ノ背ニ在リ、命シ
 テ寡ニ就カシム、僕恠ミテ故ヲ問フ、曰ク衆者ハ勢ヲ
 恃ミ、寡者ハ自ラ奮フ、勝利恐ラクハ寡者ニアラント、
 果シテ其ノ言ノ如シ、

永祿三年義元桶狹間ニ敗死ス、家康遂ニ岡崎ニ還リ、連
 年信長ト戰フ、而シテ屈セス、後遂ニ之ト和ス、
 四年七月家康牛窪ヲ攻ム、本多忠勝從ヒテ功アリ、忠
 勝小字平八郎ト稱ス、時ニ年十四ナリ、
 六年十月佐崎、鉞崎、野寺ノ僧徒亂ヲ爲ス、家康之ヲ
 撃チテ苦戰ス、明年三月ニ至リ事僅ニ平ク、
 八年春參河ヲ定ム、是ヨリ先家康、今川氏ト絶チ、武
 田信玄ト好ヲ修メテ共ニ今川氏眞ヲ攻メ、大井川ノ東
 西ヲ分領センコトヲ約ス、氏眞遠江ニ走ル、
 十一年冬奏請シテ徳川氏ニ復シ、松平ヲ族ト爲ス、
 元龜元年正月遠江ノ引間ニ徙ル、名ヲ濱松ト改ム、威

望大ニ震フ、稱シテ海道第一ト爲ス、十二年五月復タ
甲斐下隙アリ、

六月信長ヲ援ケテ、淺井長政、朝倉義景ト近江ノ姉川
ニ戰ヒ、大ニ之ヲ破ル、信長感賞シ、目シテ武門ノ棟
梁ト爲ス、時ニ信長已ニ近畿十餘國ヲ平ク、家康ハ強
敵ト堺ヲ接スルヲ以テ、僅ニ參河、遠江ヲ定ム、
二年十二月信玄來リテ三形原ニ陣ス、家康之ト戰フ、
信玄奇兵ヲ縱チテ横撃シ、家康ノ軍遂ニ亂ル、是ニ於
テ信玄全軍ヲ誅シテ徐ニ進ム、山岳爲ニ震動ス、家康
切齒シテ死ヲ決ス、夏目正吉諫メテ馬首ヲ南セシメ代
リテ死ス、家康逃レテ濱松城ニ入り、故ヲニ四門ヲ開
キ燎ヲ簀シテ耐睡ス、敵近キテ城ニ逼ル、門ノ開キタ
ルヲ見テ伏アランコトヲ恐レ、敢テ入ラス、遂ニ軍ヲ
退ク、

天正三年五月武田勝頼、大舉シテ長篠ヲ攻ム、家康援
ヲ信長ニ乞フ、未タ出テス、城將與平信昌等堅守ス、

風ヲ望ミテ降歸ス、信忠已ニ信濃ノ諸城ヲ降シ、甲斐ニ
進入ス、勝頼天目山ニ退ク、信忠ノ兵逼リテ之ヲ殺ス、
信長、勝頼ノ首ヲ見テ罵ル、家康乃チ禮シテ曰ク、公
ハ五州ノ主ヲ以テ此ニ至ル、豈ニ天ニアラスヤト、甲
斐信濃ノ士民之ヲ聞キテ潛ニ心ヲ歸ス、五月安土ニ往
キ京師ヲ經テ堺浦ニ至ル、六月將ニ京師ニ入りテ信長
ト會セントス、飯盛山ニ至リ信長ノ變ヲ聞キ、一行大
ニ驚ク、家康、光秀ヲ討タント欲スレトモ、兵寡キヲ
以テ間道ヨリ參河ニ還リ、兵ヲ徵シ進ミテ熱田ニ至ル、
秀吉已ニ光秀ヲ誅スト聞キ、即チ師ヲ返ス、時ニ四方
擾亂シテ、甲斐、信濃空虛トナル、上杉、北條各兵ヲ出
シテ之ヲ爭フ、家康之ヲ招來ス、十月家康、甲斐、信
濃ヲ取ルト雖トモ、務テ武田氏ノ舊制ニ依リ變更セス、
唯、其ノ厚歎苛刑ヲ除キ、且ツ一寺ヲ建テ勝頼ノ幽魂ヲ
吊フ、

十二年秀吉、京畿ヲ治メ十餘國ヲ略有シテ、威權特リ

日本誌 史紀 徳川氏參河ニ起ル

敵其ノ饒道ヲ絶ツ、鳥居勝尙強ノ士ナリ、往キテ急
ヲ家康ニ報シ、將ニ歸ラントセシニ、途ニシテ敵ノ邏
兵ニ執ヘラル、勝頼曰ク汝往キテ、城兵ニ語レ、信長、
家康來ル克ハス、宜シク速ニ出テ降ルヘシ、我厚ク汝
ヲ賞セン、勝尙曰ク諾ス、乃チ甲士十餘人露刃シテ之
ヲ擁シ城下ニ至ル、勝尙城ヲ仰キ大ニ呼ヒテ曰ク、諸
君努力セヨ、大兵來援フコト三日ヲ出テスト、遂ニ礮
殺セラル、既ニシテ家康、信長皆來ル、信長ノ軍甲斐
軍ノ犯スヘカラサルヲ見テ色ヲ失フ、酒井忠次謀ヲ獻
ス、信長之ヲ容レ、兵ヲ敵背ニ巡ラシテ之ヲ襲フ、家
康等直ニ進ミテ交戰ス、山岳爲メニ震動ス、甲斐ノ軍
遂ニ破レ勝頼僅ニ脱ル、卯ヨリ午ニ至リ、凡ソ五十八
合、斬首一萬餘級、武田氏ノ宿將精兵零ホ、此ノ時ニ
礮ク、家康及ヒ羽柴秀吉、追撃セント欲ス信長聽カ
ス、

十年二月信長家康ト議シ、大舉シテ甲斐ヲ攻ム、沼道

熾ナリ、織田信雄之ト隙アリ、池田信輝其ノ二婿、森
長可、堀秀政ト美濃ニアリ、信雄、秀吉並ニ之ヲ招ク、
遂ニ秀吉ニ從フ、信雄密ニテ援ヲ家康ニ乞フ、家康信
長ノ舊ヲ思ヒ、信雄ヲ援ケ小牧山ニ軍シ、又間使ヲ發
シテ南海ノ諸豪ヲ招キ、並ヒ起チテ大坂ヲ圍ラシム、
秀吉之ヲ患フ、池田信輝等參河ノ虛ヲ擣カント欲シ潛
ニ發ス、家康豫メ之ヲ聞キ、旗ヲ卷キ馬嘯ヲ裏ミテ之
ニ尾シ、馳セテ長湫ニ至リ、信輝等ヲ撃ツ、信輝等秀
吉ノ戒ヲ守ラス、遂ニ大敗シテ之ニ死ス、秀吉敗ヲ聞
キテ大ニ怒リ馳セテ長湫ニ至ル、偃尸野ヲ蔽ヒテ隻騎
ヲ見ス、家康已ニ退キテ小幡城ニ入ル、秀吉歎シテ曰
ク家康ハ華實ヲ具スル者ト謂フヘシト、明且小幡ヲ攻
メントス、家康既ニ小牧ニ歸ル、秀吉再歎ンテ曰ク、
家康ハ何ソ夫レ速ナルト、乃チ樂田ニ還リテ對陣シ、
戌ヲ置キテ返ル、此ノ役ヨリ四方ノ豪傑歎チ徳川氏ニ
通スル者多ク、南海ノ兵益々奮ヒ、期ヲ刻シテ秀吉ヲ夾

擊セント欲ス、十一月秀吉和ヲ信雄ト講シテ大坂ニ歸ル、家康亦岡崎ニ還ル、既ニシテ秀吉和ヲ家康ト講ス、信雄亦之ヲ介ス、
 十四年家康、秀吉ノ命ニ從ヒテ大坂ニ至ル、秀吉之ヲ待ツコト厚シ、
 十八年三月秀吉、北條氏政、氏直ヲ討ツ、氏政等亡フ、家康乃チ關東八州、凡ソ二百五十萬石ヲ領ス、秀吉其ノ故地五國(駿遠參甲信)ヲ以テ、己カ親臣信將ニ與フ、關東八州ト稱スルモ、其ノ實六州ニシテ、安房ニ里見アリ、下野ニ宇都宮アリ、其ノ他結城以下ノ豪族、方隅ニ在リ、八月家康江戸城ニ遷ル、
 文祿元年秀吉、朝鮮ヲ征スルヤ、石田三成諸將ヲ誑誣ス、諸將之ヲ睚眦ス、家康常ニ其ノ冤人ヲ營救シ、將士ノ心ヲ收ム、
 四年正月、秀吉己ニ薨ス、家康伏見城ニアリ、秀吉ニ代リテ權ニ天下ノ事ヲ決ス、三成、増田長盛ト謀リテ

家康、利家ヲ離間シ、己其ノ虛ニ乘シテ天下ノ權柄ヲ乘ラント欲ス、果サズ、其ノ後關原ノ亂アリ、時ニ慶長五年ナリ、家康撥亂ノ後、四方ヲ經略ス、十二月ニ至リ禍亂略ニ定マリ、關八州ヲ根本ノ地ト爲シ、江戸城ニ鎮シ、越前、尾張、近江、伊勢ニ宗族舊親ヲ封ス、其ノ餘ノ外様大名ハ、上百萬石ヨリ下一萬石ニ至ル、又攝、河、泉七十萬石ヲ大坂ニ隸ク、
 八年二月、詔シテ征夷大將軍ニ任シ、右大臣ニ進ミ、淳和、咲學兩院ノ別當ヲ兼テ、源氏ノ長者ニ補シ、隨身兵仗ヲ賜フ、足利氏以來征夷大將軍再ヒ茲ニ始マル、
 七月家康孫女ヲ以テ、内大臣秀頼ニ妻ス、秀頼時ニ年十一ナリ、
 家康西國諸大名ノ邸ヲ江戸ニ設ケ、尋テ孳ヲ置ク、十四年諸大名ノ妻子盡ク江戸ニ至ル、其ノ會同スル所ノ大名ハ、留ルコト期年ニシテ國ニ就カシメ、以テ永制

ト爲ス、

十五年、春、名護屋ニ築キ、役ヲ前田利長以下十七大名ニ課ス、諸大名困弊シテ、不平ヲ聲テス者アリ、家康曰ク土木ヲ厭フ者ハ、宜シク速ニ國ニ就キ、高壘深溝以テ我カ旃ヲ俟ツヘシト、諸大名大ニ懼ル、
 元和元年家康遂ニ秀頼ヲ亡シ、大阪城ヲ以テ松平忠明ニ給フ、期年ニシテ殷實故ノ如シ、
 二年正月家康疾アリ、二月天使就キテ太政大臣ニ拜ス、四月十七日薨ス、年七十五、後朝廷東照宮ノ號ヲ賜フ、家康人トナリ、沈毅ニシテ大略アリ、文武ニ通シ、其ノ言行多ク後世ノ訓トナル、人ヲ愛スルヤ偏スルコトナク、事ヲ處スルヤ甚タ重固ナリ、平素自ラ儉約ヲ執リ、人ヲシテ質素ヲ守ラシム、且ツ稼穡ノ事ヲ重シ、之ヲ獎勵ス、又常ニ直言ヲ好ム、曾テ濱松ニアリシトキ、或ル人疏ヲ上ル、家康每條之ヲ稱ス、本多正信傍ニ侍シテ謂ヒテ曰ク、彼ノ言フ所一モ取ルヘキナシト、

日本誌 史紀 朝廷ノ式微

家康曰ク、吾其ノ志ヲ取ルナリ、且ツ探ルヘキ無キモノヲ獎メテ、探ルヘキモノニ至ル、敢テ虛獎ニアラサルナリト、
 (家康、幼時、尾張ニ質タリシトキ、黑鴉(巧ニ百鳥ノ聲ヲナス)ヲ獻スル者アリ、之ヲ卻ケテ曰ク、吾小慧ヲ取ラス小巧ノ者ハ大智ナシ、多藝ノ者ハ逸技ナシ、此ノ鳥他聲ヲ發スレトモ、自聲ヲ發スルコト能ハス、是レ賞スルニ足ラサルナリト、英雄ノ心緒眞ニ觀ルヘシ)

第二 朝廷ノ式微

徳川氏、大政ヲ執ルニ及ヒテ、皇室ヲ尊奉シ、而シテ公武ノ制度ヲ分チ、關白藤原昭實ト議シテ、禁裡式目十七章ヲ編シ、至尊、親王、皇族、公卿、門跡等ノ制規ヲ定メ、見任三公、諸王ノ上ニ班シ、廷臣ノ繼嗣ハ異姓ヲ取ラシメス、又詩歌、管絃、古實、禮節等ヲ勸メ、京師ニハ所司代ヲ補シテ、釐下ノ庶政ヲ掌ラシメ、

兼テ皇家ノ細大ニ干渉シ、以テ王室ノ耳目ト爲シ、都下ノ胥吏ヲ以テ、皇居仙洞ノ所職ヲ司ラシメ、旗下ノ士ヲ交替シテ、宮城ヲ護衛シ、非常ヲ警戒セシム、其ノ後法親王ヲ請ヒテ、東叡山及ヒ日光ノ座主ト爲シ、一朝變故アラハ、之ヲ奉シテ變ヲ制セントセリ、
 德川氏ノ朝廷ニ奉スルコト、既ニ斯ノ如シ、故ヲ以テ朝政咸ク幕府ニ移リ、朝廷ハ徒ラニ有名無實ノ官爵ヲ叙スルノミ、
 傳ヘテ云フ、禁裏御料、足利氏ノ時ハ三千石、豐臣氏ノ時ハ七千石ナリト、而シテ家康執政ノ時ニ至リ、一萬石ヲ獻ス、其ノ後秀忠ノ女(東福門院)入内ノ時、化粧料トシテ一萬石ヲ獻シ、元和九年ニ至リテ、家光更ニ一萬石ヲ獻シ、合セテ三萬石ナリ、然レトモ門院崩セラレテ後ハ、二萬石ニ復セシナルヘシ、其ノ後寶永二年ニ一萬石ヲ増ス、是ヨリ御料地三萬石ト定リ、其ノ他金銀若干兩ヲ補足ス、

ノ德川氏ノ領地、及ヒ武家ノ領分知行ヲ獻ス、其ノ高二十餘萬石ナリト云フ、

第三 德川光國ノ勤學

德川光國ハ家康ノ孫ニシテ、權中納言賴房ノ男ナリ、幼ニシテ岐嶷不群、威アリテ猛カラス、聰明博學ニシテ宏才人ニ過ク、曾テ史記伯夷傳ヲ讀ミ、大ニ感發スル所アリ、舊史ノ缺ケタルヲ補ヒ、大義名分ノ紊亂ヲ糾サントシテ、徧ク天下ノ逸書ヲ索メ、全國ノ名士ヲ聘シテ、史ヲ修スルノ志アリ、
 寛文十年、林春勝、本朝通鑑ヲ撰ヒテ幕府ニ獻ス、家綱大ニ悦ブ、幕僚盛ニ春勝ノ該博ヲ嘆賞ス、光國之ヲ聞シ、本邦ヲ以テ吳、太伯ノ後ト爲スヲ見テ、大ニ驚キテ老中ニ謂テ曰ク、是無稽ノ說ニテ固ヨリ信スルニ足ラス、本邦固ヨリ正史アリ、安ソ正史ヲ舍テ取ラスシテ、其ノ無稽ノ說ニ從ヒテ、天孫ノ胃ヲ瀆スルコトナセンヤト、老中其ノ確論ニ服ス、

日本誌 史紀 德川光國ノ勤學 米肥渡來

仙洞御料ハ、モトハ三千石ナリシテ、寛永十一年ニ七千石ヲ加増シテ、一萬石トセラレシ事アリ、然トモ後ニハ七千石ノ時モアリ、享保二十年ヨリ院御料一萬石、新院御料七千石ト定メラレタリ、其ノ他金銀若干兩ヲ補足ス、
 女院、東宮、中宮、女御等其ノ時ニ應シ、別々ニ御料、並ニ補足若干アリ、御料地ハ、關東ヨリ代官ヲ置キ、其ノ他ノ事務ハ、禁裏附、仙洞附等ノ職、及ヒ其ノ屬員ヲ置キ、京師ハ町奉行之ヲ治メ、所司代之ヲ總括ス、是等ノ費途ハ御料ノ外ナリ、
 皇族、攝家以下、公家衆ノ祿、女官ノ俸祿モ此ノ外ニアリ、是等ヲ合算スレハ、高凡ソ十萬石ニ及フヘシ、御大禮並ニ御造營ノ如キ、臨時ノ用度ハ一切別途ニ屬スルナリ、家茂ノ時ニ至リ、文久三年ヨリ四斗俵十五萬俵ヲ獻シ、其ノ翌年ヨリ同十五萬俵ヲ増獻シ、合セテ三十萬俵トナル、慶應三年ヨリ之ヲ止メ、山城全國

(延寶四年、光國、儒臣ヲシテ蓄髮セシメ、以テ士籍ニ編ス、始足利氏、執政時代、武士文事ニ密ナラス、翰墨ヲ僧徒ニ托ス、爾來儒者等蓄髮シテ緇ヲ被ルヲ例トシ、林氏モ亦累世僧官ヲ稱ス、是ニ至リテ儒士蓄髮ス、
 元祿三年、光國退キテ水戸ノ西山ニ居リ、自ラ西山隱士ト號ス、勤王愛國ノ志、愈篤シ、西山ニ老シテヨリ分ヲ殊ニセス、躬ヲ稼穡シテ民苦ヲ嘗メ、稅歛ヲ薄クシテ窮乏ヲ恤ム、賢明ノ名、天下ニ著シ、曾テ楠正成ノ墓ヲ攝津ノ湊川ニ立テ、自ラ其ノ碑ニ銘ス、是ヨリ天下益々楠氏ヲ重ンス、
 (水戸ノ山家ニ父ヲ殺ス者アリ、吏捕ヘテ之ヲ鞠治ス、頑愚ニシテ服セス、自ラ、謂ラク吾、吾カ父ヲ殺ス何ノ罪カアラント、吏斷スルコト能ハス、光國之ヲ聞キ、暫ク其ノ罪ヲ宥メテ學ニ從事セシメ、專ラ道德ヲ教フ、三年ニ及ヒテ罪人始テ警悔シ、自ラ

光國會テ江戸小石川邸ニ彰考館ヲ起シテ、天下ノ學士ヲ招キ、以テ歷朝ノ實錄ヲ編成ス、編次精確ナリ、特ニ列傳ニ於テ賊臣ヲ筆誅シ、義傳ニ於テ烈子ヲ褒揚シ、十志ヲ附シテ、氏、族、尙武等ノ制度ヲ示シ、大ニ國體ノ尊嚴ナル所以ヲ叙述セリ、名ケテ日本史ト云フ、後朝廷名ヲ大日本史ト賜フ、爾來天下ノ志士ハ、公然文ニ著ハシ、或ハ口ニ唱ヘ、漸ク國體名分ヲ論スルニ至リ、社會ノ人心、向フ所ヲ一ニシテ、朝廷ノ陵替ヲ慨フルアリ、幕府ノ僭逆ヲ患フルアリテ、竟ニ維新ノ大原素ヲ發生セリ、光國薨シテヨリ以來、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤及ヒ兩毛ノ志士、高山正之、蒲生秀實等頻々輩出シテ、大ニ國體名分ノ說ヲ唱ヘ、カテ尊王ノ先導ヲ爲ス、又仙臺ノ人、林友直、海防論ヲ主張シテ、四方ニ周遊ス、世稱シテ四大人ト云フ、

ヲ請フ、北米合衆國ノ如キハ、其ノ獨立以來、最モ航海ノ運動ヲ爲シ、殖産興業ヲ以テ建國シ、我カ近海ニ鯨獵シテ、數ハ海厄ニ罹ルト雖モ水炭ノ補助ヲ受クル地ナシ、是レ北米ノ我ニ和親ヲ請フコトノ切ナル所以ナリ、是ヲ以テ弘化三年閏五月、米人(北米)ひすてれ兵艦二隻ヲ帥キテ浦賀ニ來リ、書シテ互市ヲ請フ、幕府拒ミテ之ヲ去ラシム、是ニ於テ合衆國ハ大ニ議スル所アリ、意ヘラケ假ヒ幕府力テ我ヲ拒ムモ、我亦力テ之ヲ請フヘシ、日本尙ホ應セサラハ寧ロ兵威ヲ示シテ之ヲ決スヘシト、依テ此ノ舉アリ)奉行戸田氏榮、其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、隣交通商ヲ乞フノミ、但シ貴國ノ重官ニ見エテ國命ヲ達セント、氏榮書ヲ飛ハシテ江戸ニ報ス、幕府大ニ驚キテ先ツ海防ヲ戒メ、直ニ幕議ニ附ス、徳川齊昭(水戸)曰ク、戰ヲ主トシテ和セハ和ヲ保ツヘシ、和ヲ以テ主トセハ事成ルヘカラスト、皆曰ク權リニ彼ノ書ヲ受ケテ答期ヲ

第四 米艦渡來

嘉永六年六月、北亞米利加合衆國ノ使節、ベるりー軍艦四隻ヲ率キテ、相摸ノ浦賀ニ來ル、(是ヨリ先(享祿、天文以來)外人往々四陸ニ來ル、其ノ最モ先キニ來レムヲ南蠻(當時西班牙、葡萄牙等ノ商船、安南、暹羅、呂宋、等ニ貿易シ、又我カ西偏ニ來ル故ヲ以テ、總稱シテ南蠻ト云フ)ト稱ス、尋テ來ルモノハ和蘭、英吉利等ナリ、爾來佛蘭西、露西亞ノ諸國之ニ亞ク、蓋シ、皆東洋貿易ニ意ヲ用キタルヲ以テナリ、而シテ其ノ間斷一ナラス、或ハ我ニ近クシテ却テ後ナルアリ、或ハ我ニ遠クシテ却テ先ニスルアリ、是レ、唯其ノ本國ノ動靜ニ由レルノミ、佛國ノ如キハ海船ノ發明アリシ以來、頻ニ遠略ヲ事トシテ、亦我カ西州ニ泊セリ、當時日本ハ鎖國ヲ以テ國是トセシカ故ニ威ク之ヲ拒絕シタリ、然レトモ彼本國ニ事アレハ來航セス、其ノ事ナギ時ハ來航シテ、互市ヲ許サント

遷延シ、武備ヲ修メテ而シテ後戰フヘシト、議乃チ決ス、是ニ於テ假館ヲ久里濱ニ建テベるりーヲ引キ、氏榮及ヒ井戸學弘等ヲシテ其ノ國書ヲ受ケシム、國書ノ畧ニ云ク、我カ國大洋ヲ隔テ、貴國ト相對ス、貴國能ク海港ヲ開キテ互市ヲ通セハ、其ノ國益モ亦少小ニアラス、若シ疑アラハ試行數年ニシテ止マン、我カ船艦ノ支那ニ航スルモノ、及ヒ鯨ヲ獵スル者、颯風ニ遭ヒ或ハ水炭ヲ缺クコトアラハ、請フ給恤接濟シ、以テ善隣ノ誼ヲ盡サンコト云々、幕府答ヘテ曰ク、事體極テ大ニシテ輒答スルコト能ハス、宜シク明年ヲ以テ報ヲ長崎ニ取ルヘシト、米艦乃チ去ル、七月大名及ヒ麾下幕府ニ召シ、米書ヲ譯シテ(漢譯和譯)之ヲ示シ、各自意見ヲ陳セシム、是ニ於テ各、和ト戰トノ利害ヲ論シ、建議錯出シテ一ナラス、獨リ儒士古賀増、議ヲ上リテ曰ク、宜シク彼ノ來ルヲ待タス、使テ我ヨリ發シテ之ニ答ヘ、巨艦ヲ製シテ互市ヲ通シ、以テ我カ内情

ヲ知ラシメス、大ニ國威ヲ張ルヘシ、是レ當今ノ急務ナ
 リト、勘定奉行、川路聖謨、亦和議ヲ主張ス、是ヨリ
 先、渡邊登、高野瑞泉、小關學齋等各書ヲ著ハシテ、
 攘夷ノ非計ヲ論シ竟ニ罪セラレ、杉田鶴齋(醫師)亦會
 テ野斐獨語ヲ著ハシテ、開國ノ利ヲ辨ス、是ニ於テ和
 戰ノ說並ヒ起リ、黨論交發ス、幕府令シテ曰ク、衆論
 異同アリト雖、之ヲ要スルニ和戰ノ二議ニ出テス、願
 フニ海防未タ備ハラス、輕々シク兵端ヲ啓クヘカラス
 彼レ明年來リ促サハ、姑息ニ之ヲ弛ヘテ、當ニ後圖ヲ
 計ルヘキノミト、此ノ際舊國ノ水師提督、ふーちやち
 ん亦長崎ニ來リテ、三事ヲ要シテ曰ク、隣交ヲ修メ、
 樺太ノ疆界ヲ正シ、薪水食糧ヲ買フコトヲ許セト、幕
 府答ヘテ曰ク、樺太ノ事ハ、一朝一夕ニシテ能ク決ス
 ル所ニアラス、且ツ夫レ貿易通信ニ至リテハ、我方國
 固ヨリ禁アリ、若シ肯テ之ヲ議スルモ、諸大名ニ諮詢
 シテ可否ヲ決シ、朝廷ニ奏シテ天裁ヲ仰クヲ要ス、蓋

シ三五年ヲ費スヘシ、議決ノ日、我ヨリ之ヲ報セント、
 ふーちやちん乃チ去ル、
 (天文中、外邦人ノ來航セシヨリ、民間ニ於テハ、漸
 ク歐羅巴ノ事情ヲ知ルモノアリ、爾來蘭學、長崎ノ
 醫師社會ニ行ハル、實永中新井白石、采覽異言ヲ著シ
 テ、五大洲アルコトヲ知ラシメ、青木昆陽、蕃書ヲ研
 究スルニ及ヒ洋書(はいぶるヲ除ク)始テ幕府ノ採用
 スル所トナル、故ニ洋學者、社會ニ於テハ、夙ニ海
 外ノ形勢ヲ察シテ、占然鎖國ヲ墨守スルコト能ハサ
 ルチ主張シ、之ニ反セルモノハ單ニ鎖國ヲ唱ヘテ、
 攘夷ヲ是トシテ意ヘラク、今日文弱ニシテ允武ノ士
 氣衰ヘタリト雖、皇室ヲ尊ンテ向フ所チ一ニシ、團
 結一致、以テ外夷ニ當ラハ、豈ニ恐ル、ニ足ランヤ
 ト、其ノ他俗間、見解亦二分シテ和議開戰ヲ唱フ、
 物情騷然タリ)

第五 内外條約及ヒ朝野ノ異見

安政元年正月北米合衆國ノ使節、ペるりー兵艦七艘ヲ
 率キテ、復タ浦賀ニ來ル、幕府之ヲ武藏ノ横濱ニ延キ
 林煒、井戸學弘、伊澤政義等ヲ遣ハシテ、ペるりート應
 接セシム、三月遂ニ條約十二款ヲ議決シ、明年九月ヲ
 以テ施行センコトヲ約シ、尋テ附加條約ヲ定ム、ペる
 りー乃チ還リ去ル、徳川齊昭甚タ憚ハス、會、川路聖謨
 等長崎ヨリ歸リテ曰ク、臣等力テ露國ノ使者ヲ却ク、今
 特リ米國ニ許セハ、露國ニ反スルナ如何セント、幕府遂
 ニ其ノ請フ所ヲ許ス、十一月朝議攘夷ヲ主トス、因テ
 幕府ニ令シテ曰ク、國家ノ急務ハ海防ニアリ、宜シク
 嚴ニ邊備ヲ修ムヘシト、幕府太政官ノ官符ヲ以テ、天
 下ニ頒布ス、徳川氏執政以來、官符ヲ以テ海内ニ令ス
 ルコト是ヲ以テ始ト爲ス、

三年七月米國總領事、はるりす下田ニ來リテ將軍ニ謁
 シ、以テ國書ヲ呈センコトヲ乞フ、諸吏之ヲ拒ム、老
 中堀田正睦、將ニ使臣ヲ引キ理ニ由リテ論辨セントス、

日本誌 史紀 内外條約及朝野ノ異見

時ニ外邦相踵キテ來航スルノ警聞アリ、四月正月、蘭
 使忠告シテ、曰ク貴國ノ外邦人ニ對スルヤ、遷延依違
 シ、止ムヲ得サルニ至リテ之ヲ許ス、其ノ威ヲ損フコト
 蓋シ渺カラス、竊ニ貴國ノタメニ取ラサル所ナリト、米
 使はるりす亦曰ク、英佛貴國ニ逼ランコトヲ謀ル、貴國
 ノ危殆旦夕ニ迫レリ、我貴國ノタメニ百方匡濟ノ策ヲ
 盡スト雖、貴國尙ホ遠巡セバ、大勢一變シテ、十數港
 ヲ開クニアラサレハ已マサラント、七月家定、將ニはる
 りすヲ見ントス、齊昭書ヲ以テ止ムレトモ聞カス、十
 月竟ニ謁見ヲ許ス、時ニ朝旨攘夷ヲ主トセルカ故ニ、在
 野ノ士民爭ヒテ通商ノ害ヲ論シ、謂ヘラク幕府外夷ノ
 脅嚇ニ畏ル、ナリ、一戰以テ蠻船ヲ攘フニアラサレハ、
 皇威將ニ泯ヒント、衆口雷同シテ物情騷然タリ、
 四年六月、老中阿部正弘病ンテ卒ス、
 五年六月、老中堀田正睦、入朝シテ米使ノ頼末ヲ奏シ
 且ツ曰ク、方今形勢一變シ、本邦獨リ舊法ヲ固執セン

ト欲スルモ、風潮既ニ玆ニ至ル、強テ之ヲ拒マント欲セハ、其ノ害フ所、測ルヘカラス幕議、大ニ外交ヲ開キテ特角ノ勢ヲ張り、進取ノ法ヲ執リテ、將ニ皇權ヲ耀カサントスト、朝旨之ヲ許サス、蓋シ是ヨリ先、幕府事ヲ奏スルニ文書ヲ以テシテ、一价ノ使ヲ奉セス、日者、入朝命ヲ請フニ至ル、且ツ私ニ開港條約ヲ許シ、其ノ爲ス所、咸ク僭斷ニ出ツ、故チ以テ朝廷之ヲ許サス、加フルニ當時幕府ノ一部ハ、頗ル外國ノ形勢ヲ察シ、早晚鎖スヘカヲサレコトヲ知レリ雖、朝野ノ思想之ニ反シテ、未タ外國ノ何物タルヲ知ラス、一意驕暴ノ變賊ナリト信シ、一腰ノ日本刀、以テ之ヲ兩斷スルニ足レリト爲ス、是ノ故ニ正陸奔走甚タカムト雖モ、其功ヲ奏セス、

第六 幕府ト親藩トノ關係

安政四年七月、徳川家定、孝明天皇ニ奏シテ、米使はるゝすヲ見ノコトヲ請フ、是ヨリ先徳川齊昭曾テ幕府ノ

レ萬國公法ノ許サ、ル所ナリ、幕府其ノ權ヲ有セサレハ、應ニ皇帝ニ謁シテ決ヲ取ルヘシト(米使未タ朝廷アルヲ知ラサシナリ)老中等具ニ内情ヲ示シテ期ヲ改ムルニ七月ヲ以テス、徳川慶勝、徳川齊昭等極テ其ノ非ヲ論ス、筒井政憲、議ヲ幕府ニ獻シテ曰ク、兵端一カヒ開クルニ至ラハ、千古無缺ノ帝國ヲシテ外人ノ凌辱ヲ受ケシム、而シテ朝廷及ヒ大名等之ヲ意ト爲サス、是レ世態ヲ審カニセサルカ故ナリ、若シ内外ノ情實ヲ以テ朝野ニ示サハ、天皇豈ニ願ミ玉ハサランヤ、外様大名或ハ朝命ヲ藉リテ幕府ニ凌駕セントシ、或ハ以テ宮闕ヲ護ラント請ヒ、或ハ以テ幕府ノ公役ヲ免避セントス、嘆スヘキナリト、幕府ノ執掌是ニ由リテ重大ナリ六月米露ノ兵艦下田ニ來ルハ、はるゝす云ハク、英、佛將ニ來薄セントスト、且ツ曰ク、今ニ於テハ既ニ及ハス下雖、速ニ我ニ同盟セハ、吾能ク其ノ間ニ居テ、之ヲ調停シ、以テ虞ナキヲ保タント、直弼以爲ヘシク、

日本誌 史紀 幕府ト親藩トノ關係

外國ヲ待スル處置、意ニ滿タサルカ故ニ、辭シテ政事ニ關カラス、是ニ至リテ其ノ子慶篤ト共ニ家定ヲ諫ム、家定聽カス、十一月家定、遂ニはるゝすヲ見ル、既ニシテはるゝす互市ヲ十港ニ開カンコトヲ請フ、幕府因テ使者ヲ京師ニ遣ハシテ之ヲ奏セシム、五年正月、天皇勅シテ曰ク、米使ノ請フ所ハ實ニ我カ國安危ノ係ル所ナルニ、將軍之ヲ許サハ、何チ以テカ國家ヲ保タントスル、宜シク三家及ヒ諸大名ト議シテ、更ニ之ヲ奏スヘシト、四月家定、井伊直弼ヲ以テ大老ト爲ス、時ニ老中ノ權、行ハレス以テ紛議ヲ戢ムルニ足ラス、蓋シ三家、親藩、政事ニ干涉スルヲ制スルコト能ハサルナリ、是ニ於テ直弼ヲ以テ大老ニ補ス、初メ幕府米使ニ約スルニ三月五日ヲ以テ、兩國政府ノ印信交附ノ期ト爲ス、期ニ至リテはるゝす之ヲ促カス、老中等答フルニ未タ勅許ヲ得サルヲ以テス、はるゝす色ヲ作シテ其ノ食言ヲ責メテ曰ク、堂々タル政府大事ヲ議定シテ輒チ中止ス、是

各國來薄シテ危キコト且タニ在リ、今朝旨ニ從ヒテ衆議ヲ俟タハ、必ス機ヲ愆ラント、曾テ幕府ニ議定セル所ノ貿易章程ヲ出ス、一字ヲ改ムルニ違アラス、號シテ假條約ト云フ、更ニ神奈川、長崎、箱館ノ三港ヲ開クコトヲ約ス、(即日諸大名ニ布告シ、又奏狀シテ曰ク、禍集眉ニ逼リ、順序經奏ニ違アラス、但シ海防ニ至リテハ益、完實ヲ盡サント)故チ以テ彼我ノ權衡、甚タ當ヲ失ス、但シ特設ノ一項アリ、曰ク條款ノ更革ヲ要スルコトアテハ、十四年ノ後、彼此再議シテ之ヲ改ムヘシト、(當時未タ外情ニ明ナラス、竟ニ關稅ヲ減ズルコトニ回ニ及フ、其ノ不公平、亦想フヘシ、故ニ明治五年、即チ十四閏年ノ後ニ至リ、改正ノ舉アリ、而レトモ遂ニ全ク對等ノ權ヲ有スルコト、能ハサルハ皆玆ニ因レリ)尋テ外國奉行ヲ設ケ、和蘭ノ舊約ヲ修正シ露英ト權リニ互市ヲ約シテ稅則ヲ定メ、更ニ佛ト條約ヲ締結シ、竟ニ五國ノ條約ヲ刊シテ之ヲ頒ツ、

是ニ於テ三家其ノ非ヲ極言ス、諸國勤王ノ士、大ニ憤
リ攘夷ノ説、盛ニ起ル、

七月家定病篤シ、直弼急ニ德川齊順(紀伊)ノ子、慶福
ヲ迎ヘテ世子ト爲ス、家茂ト改名ス、年甫十二、是
ヨリ先キ齊昭(水戸)慶喜(尾張)慶永(越前)ニ謀リテ曰
ク、方今國家多難ナリ、長ニシテ賢ナル者ニアラサレ
ハ不可ナリト、仍テ其ノ子慶喜ヲ立テント欲ス、是ニ
於テ三家、入りテ疾ヲ問ヒ、且ツ繼嗣ヲ議セントス、
直弼曰ク、將軍病中ニアリテ人ヲ見ルコトヲ欲セス、
且ツ嗣君ハ近親ヲ以テスルノ例ナリト、齊昭抗論シテ
聽カス、老中間部詮勝、變アラシコトヲ慮リ、直弼ヲ
呼ヒテ曰ク、將軍掃部頭ヲ召スト、之ヲ扶ケテ入ル、
齊昭等快々トシテ去ル、其ノ後幕府、齊昭ヲ其ノ邸ニ
幽シ、慶喜、慶永ヲ致仕セシム、此ノ月征夷大將軍家
定薨ス、十二月家茂職ヲ襲ク、是ヨリ先直弼齊昭ノ臣
鶴飼吉右衛門、安島帶刀等カ關白鷹司政通ノ大夫、及

老中安藤信正ヲ諫ム、初ノ直弼害ニ遭ヒテ、人心爲ニ
大ニ動キ、中外新故ノ如何ヲ望ム、信正因襲シテ革メ
ス、專恣較々甚シ、是ニ至リテ利源會議ニ方リ切諫ス、
信正怒リテ之ヲ罵ル、利源還テ書ヲ遺シテ自ヲ割腹
ス、

文久元年正月、水戸亡命ノ士、常陸ノ長岡ニ據リ、楳
ヲ四方ニ傳ヘテ、勤王攘夷ノ士ヲ募ル、是ニ於テ同志
ノ徒、争ヒ趨ク者、二千餘人、豪富ヲ劫割シテ金穀ヲ
儲蓄ス、幕府徳川慶篤ニ命シテ之ヲ征討セシム、五月
水戸浪士有賀半彌等十餘人、夜高輪ノ東禪寺ヲ襲ヒテ
英人二人ヲ傷ク、英ノ公使怒リテ佛國ト合シ、將ニ兵
ヲ以テ江戸ニ逼ラントス、信正罪ヲ謝シ、事壓ニ釋ク、
二年正月浪士、三島三郎等六人、信正ヲ坂下門ニ要撃
シ、輿ヲ刺シテ之ヲ傷ク、從士善ク拒闘シ、六人皆之
ニ死ス、各々一書ヲ懷ニシ、表ニ斬奸趣意書ト記ス、
信正ノ虐政ヲ誦レルナリ、二月老中安藤信正職ヲ免セ

日本誌 史紀 幕府ト薩長土ノ關係

ヒ官女村岡等ニ遷リテ、朝廷ノ密旨(攘夷)ヲ得タルヲ
誅シテ其ノ事跡ヲ知り、奏シテ關白以下ノ職ヲ辭セシ
メ、又村岡等六十餘人ヲ捕フ、
六年幕府命シテ齊昭ヲ水戸城ニ禁錮シ、慶篤、慶喜ヲ幽
シ、安島帶刀ニ死ヲ賜ヒ、鶴飼吉右衛門等ヲ斬ル、其
ノ他悉ク流竄ニ處ス、
萬延元年三月三日、水戸ノ士、佐野光明等十七人、直
弼ヲ江戸櫻田ニ要殺ス、既ニシテ光明等八人分レテ老
中脇坂安宅、及ヒ細川慶前ノ邸ニ自首シ、直弼ノ罪ヲ
數ヘテ曰ク、大老直弼、幼主ヲ挾ミテ威福ヲ恣ニシ、
苞苴私請至ラサル所ナク、親藩ヲ擯ケテ幕府ノ羽翼ヲ
殺キ、關白名卿ヲ厄シ、擅ニ條約ヲ結ヒテ勅旨ヲ輕蔑
ス、臣等天ニ代リテ、此ノ五罪ヲ誅罰ス、然レトモ私
ニ劔戟ヲ動カシ、國法ヲ犯セルコト其ノ罪免ルヘカラ
ス、謹ミテ處分ヲ俟ツト、後皆刑セラル、
七月徳川齊昭薨ス、十一月外國奉行、堀利源自殺シテ

ラル、

第七 幕府ト薩長土ノ關係

毛利慶親、曾テ中外ノ大勢ヲ觀察シ、開國ノ却テ國是
ナルコトヲ發明シ、頓ニ志ヲ翻シテ尊王開國ノ議ヲ上
ラント欲ス、老臣益田親胤等夙ニ感發スル所アリテ爾
ヘラク、方今ノ急務ハ方向ヲ定ムルニ在リ、而シテ朝
廷鎖港ヲ主トシ、幕府開港ヲ利ト爲ス、退キテ社會ノ
風潮ヲ候ヘハ、鎖國攘夷ノ説、殆ト國家ノ輿論ヲ代表
セルモノ、如シ、然レトモ鎖國ノ時勢ニ適セサルヤ明
ナリト、慶親、之ヲ然リトシテ、旨ヲ其ノ臣永井時庸
ニ授ケ、入京シテ中納言三條實美ニ就キ奉奏セシム、
天意亦頗ル動ク、慶親尋テ幕府ニ建議ス、老中久世廣
周等太ニ喜ヒテ時庸ニ囑シ、公武ヲ調停シテ圓滑ナラ
シム、時庸極論諱憚ニ觸レ、且ツ長人(當時毛利氏ノ
臣)長人ト云フ)ト雖、亦幕府ノ説客ナランコトヲ疑
フ、依テ斥ケラル、

文久二年五月、毛利慶親京師ニ入ル、

(文久二年、久光姫路ヲ過ク、平野國臣等二百餘人遮リテ説キテ曰ク、近者幕府朝廷ヲ凌蔑シ、外夷ニ結納ス、臣等憤激シテ忍ブコト克ハス、依テ其ノ罪ヲ問ヒ、且ツ正義者ノ囚ヲ解キ、縉紳ノ冤ヲ雪カント欲ス然レトモ烏合ノ徒、統一スル克ハス、莫ハクハ公ニ依リテ事ヲ就サント、久光依違シテ之ヲ京師ニ擧フ、浪士大阪ニアルモノ、久光ノ處置稽緩ナルヲ怒リテ來リ逼ル、久光之ヲ退ク)

六月勅使東下シテ家茂ノ入朝ヲ促シ、國事ヲ議セシメント欲ス、七月山内豐信入京ス、詔シテ久光、慶親ト同シク釐下ヲ鎮撫セシム、時人大名ノ威望ヲ語レハ、必ス先ツ薩長土ヲ稱ス、八月幕府勅ヲ奉シテ一橋慶喜ヲ後見ト爲シ、慶永ヲ以テ政事總裁ト爲シ、松平容保(會津城主)ヲ京師守護ト爲シ、牧野忠恭ヲ所司代ト爲シ、又井伊直弼、安藤信正ノ罪ヲ追罰シ、戊午以來ノ

クシテ苟モ其ノ意ニ稱ハサレハ、目シテ國賊ト爲シ、隨テ之ヲ斬滅シ、其ノ四肢骨節ヲ寸斷シテ將軍公卿ノ邸内ニ投シ、又關白其ノ他ノ當路ニ逼リテ、攘夷ノ期ヲ促ス、同月天皇加茂ノ社ニ幸シ、關白將軍以下ヲ率キテ、攘夷ノ期ヲ定メント欲ス、而シテ未ダ定マラス、浪士等松平慶永ニ迫ル、慶永頗ル鎖國ノ議ヲ難シ、時事ノ竟ニ爲スカラヘサルコトヲ料リテ、病ト稱シテ職ヲ辭シ國ニ就ク、

四月天皇、石清水神社ニ幸シ、將ニ節刀ヲ家茂ニ賜ハントス、家茂病ト稱シテ從ハス、乃チ慶喜ヲ召ス、慶喜モ亦病ヲ稱ス、浪士等之ヲ聞キ、大ニ憤リ誓リテ曰ク、懦夫大事ヲ托スルニ足ラスト、上書シテ親征ヲ仰キ、自ラ之カ先鋒タラント請フ、

(當時朝廷ハ幕令ト矛盾ス、朝廷詔シテ曰ク、外船若シ來ラハ、乃チ之ヲ撃テト、幕府令シテ曰ク、濫ニ戰ヲ挑ミテ兵端ヲ開クコトナカレト、其ノ相反スル

日本誌 史紀 幕府ト薩長土ノ關係

國事犯ヲ赦シ、諸大名ノ妻孥ヲシテ國ニ就カシム、毛利慶親、既ニ時勢ヲ悟レリト雖、憤慨愛憤ノ士、天下ニ充滿シ、且ツ藩中ニ分シ、朝旨亦渝ハラス、是ニ於テ更ニ意ヲ決シテ、奏シテ攘夷ノ期ヲ促ス、十一月勅使三條實美、東下シ宸旨ヲ宣ヘテ速ニ其ノ期ヲ決セシム、且ツ諸大名ヨリ壯士ヲ貢シテ親兵タラシム、幕府ニ於テハ曩ニ勅ヲ奉シテ諸政ヲ革メ、事匯ニ端緒ニ就ク、而シテ更ニ此ノ勅アリ、甚ダ緩急ニ惑ヘリ、

十二月慶喜ヲシテ先ツ入朝セシム、浪士其ノ館ニ迫リテ攘夷ヲ促ス、慶喜將軍ノ入朝ヲ待チテ事ヲ處セントスルヲ以テス、浪士扼腕シテ退ク、三年二月、浪士等持院ニ入り、足利三將軍ノ像ノ首ヲ斬リテ、之ヲ三條磔ニ梟シ、其ノ罪惡ヲ聲ラシテ幕府ヲ諷ス、容保捕ヘテ獄ニ下シ、將ニ刑セントス、毛利定廣、請ヒテ之ヲ宥ム、之ニ因リテ處士心ヲ毛利氏ニ屬ス、三月將軍家茂、勅ヲ奉シテ入朝ス、時ニ浪士等暴烈、最モ甚シ

コト斯ノ如シ、而シテ外藩(外藩大名ヲ云フ)多クハ朝旨ヲ奉シ、内藩(譜代大名ヲ云フ)率子幕令ニ從ヘリ)

是ニ至リテ慶喜上書シテ曰ク、臣圖ルニ未ダ攘夷ノ勝策ヲ見ス、而シテ吏却テ臣ヲ以テ禍心アリト爲ス、臣才識庸暗ニシテ重任ニ堪ヘスト、乃チ職ヲ辭ス、朝廷允サス、既ニシテ家茂等詔ヲ奉シ、十月ヲ以テ攘夷ノ期ト爲ス、

島津久光、入朝シテ朝彥親王(華頂宮、即チ舊尊融法親王)ニ見エテ曰ク、攘夷ノ事ハ重大ナリ、方今浪士擅ニ朝官ヲ凌キテ物議ニ逼ル、是輩寧ロ逮捕シテ法憲ヲ正スニ若カス、今日ノ計ハ、諸藩ヲシテ國ニ就カシメ、廷臣ノ浪士ニ左袒スル者ヲ禁スルニ在リ、宜シク幕府ヲシテ之ヲ推彈セシムヘシト、

是ヨリ先、勅使東下ス、島津久光、兵ヲ率キテ之ヲ護ル、歸路武藏ノ生麥村ヲ過ク、英人馬ヲ馳セテ久光ノ

前驅ヲ衝ク從士之ヲ斬ル、仍テ英艦下田ニ來リ返リテ、幕府及ヒ鹿兒島ニ其ノ價ヲ求ム、幕府遂ニ洋銀四十五萬元ヲ出ス、

六月長藩、米艦ヲ田浦ニ擊ツ、幕府之ヲ責ム、答ヘテ曰ク、朝廷幕府已ニ攘夷ヲ命ス、我先鞭ヲ着クルナリ、功アリト云フモ罪ナシト、朝廷後ニ復タ價金ヲ出ス、

七月英人、鹿兒島ニ抵リ、彼ノ生麥ノ兇行者ヲ得、且ツ價金ヲ出サシコトヲ促カス、答ヘテ曰ク、我カ國ノ法、大名ノ凶簿ヲ犯ス者アレハ之ヲ誅ス、卿等已ニ我國ニ居リ、何ソ我カ制ニ遵ハサルヲ得ンヤト、英人聽カス、港口ニ亂入シテ船ヲ奪フ、薩摩ノ士、怒リテ之ヲ擊チ、六艦ヲ毀チ、二將ヲ燬ス、英人鎗ヲ拔クニ追アラスシテ遁ル、然ルニ彼カ再舉ヲ圖ルニ及ヒテ幕府ニ請ヒ、英ノ求價數ノ如クナラシメ、以テ成テ行フ、而シテ英人鎗ヲ乞フ、亦之ヲ與フ、凡ソ歐洲ノ法、鎗

ヲ奪ヘバ以テ大捷ト爲シ、四隣ニ告ク、敵亦價金ヲ出シテ之ヲ贖フナ例トス、惜哉我邦未ダ之ヲ知ラス、英人ノ乞フニ任シテ、贖ヲ徵セスシテ之ヲ返與ス、英人ノ僥倖ナリ

松平慶倫、藤堂高潔等上疏シテ、薩(島津氏ヲ云フ)長(毛利氏ヲ云フ)ヲ召シ、勤王攘夷ヲ議ラント乞フ、近衛忠熙、亦鷹司輔熙ニ説テ、薩長土(山内氏ヲ云フ)ヲ召喚センコトヲ勸ム、朝廷特ニ幕府ニ令シ、英佛等ノ使ト閉港ノ事ヲ議セシム、

(九月浪士藤本眞金等、中山忠光ヲ將トシテ、其ノ徒千餘人ヲ聚メ、天忠組ト號シ、大和ノ五條ノ吏、鈴木源内ヲ襲ヒテ之ヲ殺シ、金穀ヲ奪ヒテ櫻井寺ニ據リ、在京ノ浪士ニ告ケテ親征ヲ促サシム、已ニシテ朝旨遂ニ變セルヲ聞キ、失望シテ天川ニ據ル、幕府諸藩ヲシテ征討セシム、利アラズ、彦根ノ援兵ヲ得テ遂ニ之ヲ破ル、眞金等戰死シ、忠光遁走ス)

第八 長州ノ役

(元治元年五月、藤田信、兵ヲ起シテ筑波山ニ據ル、初メ徳川齊昭、藤田彪等ヲ擢キテ國政ヲ改革ス、結城實壽之ヲ嫉ミ、齊昭ノ幕府ニ叛スルヲ報告ス、幕府乃チ齊昭及ヒ彪等ヲ幽ス、實壽復タ國政ヲ執ル、是ニ於テ藩論ニ派トナリ、結城ノ黨ヲ奸曲ト云ヒ、藤田ノ黨ヲ正義ト云ヒ、相凌轢ス、已ニシテ齊昭薨ス、奸黨市川三左衛門、朝奈比彌太郎等勢ヲ恃ミテ驕傲ナリ、彪ノ子、信憤リテ兵ヲ起ス、幕府松平頼徳ヲシテ之ヲ鎮メシム、齊昭ノ臣、武田正生之ニ從フ、奸黨拒ミテ城ニ入レス、遂ニ與ニ格鬪ス、正生等敗レテ、那珂郡ニ走ル、三左衛門等正生ノ妻孥ヲ執ヘ、又頼徳ヲ誘殺ス、信等議シテ正生ヲ救ヒ奸黨ヲ擊タントス、其ノ黨ノ浪士、相謀リテ曰ク、我カ輩ノ事ヲ舉グルハ勤王、攘夷ニアリ、何ソ私闘ニ關ランヤト皆散去ス、信遂ニ發兵三百ヲ以テ正生ノ軍ニ投ス、幕府、若年寄、田沼意尊ニ命シテ之ヲ討タシム、

正生防拒ス、已ニシテ糧盡キ越前ニ走リ、金澤ノ兵ニ遇ヒテ之ニ降ル、幕府命シテ正生信等ヲ刑ニ行フ、
文久三年八月、天皇、外夷親征ノ詔ヲ下ス、朝廷ノ此ノ命アルヤ、毛利慶親ノ奏請ズル所ト爲ス、初メ浪士ノ首領、平野國臣等、關白藤原輔熙ニ就キテ親征ヲ請ヒ、長人モ亦之ヲ主張ス、因テ毛利氏ヲ召シ六軍親征ノ議、既ニ決ス、諸藩ノ中、或ハ其ノ不可ヲ論スル者アリ、時ニ流言アリ、慶親、天子ヲ挾ミテ四方ニ號令セント欲スト、是ヲ以テ朝廷、俄ニ詔ヲ停メ、毛利氏京師守衛ヲ罷メ、薩藩等ヲシテ之ニ代ラシメ、又松平容保等ニ命シテ、九門ヲ閉テ出入ヲ禁セシム、毛利元純等之ヲ訴フ許サス、時ニ長人、薩人ト相容レス、長人、以爲ヘラケ薩摩等ノ諸藩、我ヲ構陷セルナリ、宜シク退キテ後圖ヲ爲スヘシト、遂ニ中納言三條實美以下七卿

ナ擁シテ本國ニ奔ル、天皇震怒シテ七卿ノ官爵ヲ褫
ヒ長人ノ入京ヲ禁ス、

元治元年六月慶親、累疏シテ冤ヲ訴ヘ、其ノ臣福原元
佃、國司朝相、益田親施等ヲ遣シ、上書シ召シテ親問セ
ラレシコトヲ請ハシム、元佃等因テ兵ヲ率キテ伏見山
崎、嵯峨ニ屯シ、三營、犄角ヲ爲ス、眞木保臣、久坂
通武兵ヲ率キテ國ヲ脱シ、來リテ親施ニ合ス、慶喜元
佃ヲ諭ス依違シテ聽カス、是ニ於テ會津、薩摩、高知、
久留米等ノ諸藩、議ヲ獻シテ曰ク、長藩ノ爲ス所、名
ヲ哀訴ニ託シテ兵ヲ備フ、不臣焉ヨリ甚シキハナシ、
乞フ之ヲ討タント、長藩ノ三臣等モ、亦松平容保等ノ
罪ヲ聲ラシテ之ヲ討タント請フ、勢最モ急ナリ、慶喜
容保等大ニ悲ル所アリ、是ニ於テ征長ノ議決ス、長人
ノ三營ニ在ル者、之ヲ聞キ以爲ヘラク、朝思ノ薄キハ
容保等ノ讒構ニ依レリ、如カス我ヨリ先シテ彼ヲ誅セ
ンニハト、乃チ三道ヨリ進ミテ京師ヲ犯ス、勢甚タ猛

ナリ、大垣、會津、桑名、薩摩、福井、彦根ノ藩兵拒
戰シテ之ヲ破ル、眞木保臣、久坂通武等戰死シ、其ノ
他西ニ走ル、

(十月平野國臣、南八郎等澤宜嘉ヲ擁シ、但馬ノ生野
ヲ取テ之ニ據リ、容保ヲ罪狀シ、公卿ノ冤ヲ伸フル
ヲ名トス、幕府姫路藩ニ命シテ之ヲ討タシム、國臣
等奮戰シテ死シ、宜嘉逃レテ往ク所ヲ知ラス)、
天皇詔シテ毛利慶親、定廣父子ノ官爵ヲ褫ヒ、家茂ニ
命シテ萩ヲ征セシム、幕府乃チ徳川慶勝(尾張)ヲ征
長總督ト爲ス、家茂毛利氏ニ與フル所ノ松平姓及ヒ偏
諱ヲ褫フ、十一月慶勝軍ヲ進メテ廣島ニ至ル、初メ毛利
氏攘夷ノ舉ヲ謀リシ時、(文久三年)西洋ニ倣ヒテ兵制
ヲ改メ、家臣ノ子弟ヲ以テ行伍ニ充ツ、號シテ先鋒隊
ト云フ、高杉晋作論シテ、門地ノ弊ヲ矯メ、士庶貴賤
ヲ分タス、強壯ニシテ用キルヘキ者ヲ舉ク、其ノ兵強
悍、號シテ奇兵隊ト云フ、晋作之カ長トナル、賞罰ヲ

明ニシテ號令嚴肅ナリ、故ニ雄壯ノ徒ト雖、皆其ノ恩
威ニ服シテ規制ヲ守リ、各用ヲ爲サンコトヲ樂フ、是
ニ於テ晋作等ハ開戰ヲ主張シ、他ハ皆恭順ヲ事トス、
故ニ晋作等ヲ目シテ激黨ト稱シ、他ヲ目シテ俗黨ト云
フ、猶ホ水戸ノ正邪ニ黨ノ如シ、時ニ毛利元純、吉川
經幹、慶親父子ヲ諫メ萩城ニ退カシメ、福原元佃、益田
親施、國司朝相主謀十三人ヲ斬リ、首ヲ函シテ轅門ニ
降ル、慶勝因テ追討ヲ止メ、四事ヲ徵シテ曰ク、山口
城ヲ毀チ五卿ヲ放出シ、(七卿ノ中、錦小路賴徳病死、
澤宜嘉所在ヲ知ラス)慶親父子來リテ罪ヲ謝シ、將士
ヲ鎮メテ激論セシムルコトナカレト、乃チ五卿ヲ薩
摩、筑前、肥前、肥後及ヒ久留米ノ五藩ニ分置シ、具
狀シテ朝廷、幕府ニ奏報シ、十二月軍ヲ大阪ニ凱旋
ス、

慶應元年正月高杉晋作等兵ヲ舉ク、初メ長藩ノ中、俗
黨ノ者意ヘラク輕躁ノ輩、國ヲ註ルト、乃チ益田親施

等ヲ始メ、當時事ヲ執レル者ヲ捕ヘテ獄ニ下シ、慶親
父子ヲ寺院ニ幽シ、遂ニ首謀ノ獄ニ在ル者ヲ刑ス、晋
作等之ニ服セス、以テ國ヲ賣ル者ト爲ス、俗黨大ニ志
リテ將ニ捕ヘントス、晋作遁レテ筑前ニ走ル、尋テ赤
馬關ニ還リ、檄ヲ傳ヘテ曰ク、主公王ニ勸ム俗黨之ヲ
誤リ大義ヲ失セリ、臣等之ヲ誅シテ主公ノ大節ヲ天下
ニ表セント、願ニ俗黨ヲ排ケ、其ノ弊政ヲ矯メントス、
奇兵ノ徒、倉然トシテ集ル者、凡ソ五百人、兵勢大ニ
振フ、是ニ至テ晋作乃チ山田市之丞、山縣狂介等ト謀
リ、赤間關ノ藩廳ヲ襲ヒテ軍資ヲ奪ヒ、將ニ萩城ニ退
ラントス、俗黨之ヲ擊ツ、晋作等邀ヘテ大ニ戰フ、俗
黨連戰利アラス、退テ萩城ヲ守ル、晋作等之ニ逼ル、
城將ニ陷ラントス、入アリ和ヲ謀ル、時ニ幕府武田正
生等ヲ加賀ニ誅ス、是ニ於テ俗黨、以爲ヘラク我カ君
臣、既ニ罪ヲ謝スルモ亦遂ニ斯ノ如キニ至ラント、乃
チ晋作等ト和シ、俗黨ノ首謀數人ヲ殺シ、一藩ノ方向

開戦ニ決ス、晋作等藩主ヲ山口ニ奉ス、

(時ニ薩長怨ヲ釋ク、初メ薩藩召サレテ京師ニ至ル、其ノ船田浦ニ泊ス、長藩誤リテ外艦ト爲シ之ヲ砲撃ス、其ノ丸火砲庫ニ及ヒ、流船焚ケテ溺死スル者三十餘人、薩藩怒リテ之ヲ責ム、幕府解諭シテ止ム、後京師ノ變ニ及ヒ、薩藩力ヲ極メテ長兵ヲ撃ツ、斬獲多シ、是ニ至リテ議シテ曰ク、方今ノ要務ハ一致シテ國ヲ護ルニアリ、徒ニ内亂ヲ構ヘ、區々ノ鏖鏑ヲ角スヘカラス、乃チ長人ノ俘ヲ釋シテ之ヲ禮還ス、尋テ西郷吉之助密使ヲ發シテ好ヲ通ス、是ヨリ交際日ニ親密ナリ、朝廷幕府未タ之ヲ知ラス、慶應元年四月、幕府毛利慶親父子ノ罪ヲ公布シ、勅ヲ奉シテ之レヲ討ント欲ス、松平容保將軍ノ自ヲ將キシトコトヲ勸ム、慶勝等出師ノ名ナキヲ以テ、之ヲ苦諫スレトモ聞カズ、徳川茂承(紀伊)ヲシテ前軍ニ將タラシム、九月家茂大坂城ニ在リ、征長ノ諸藩、亦無名ノ

四百五十八

師ヲ評シテ奮撃ノ意ナシ、慶親事情ヲ具シテ曰ク、服罪ノ後、謹ミテ天裁ヲ待ツノミ、激徒一旦國ヲ擾セリト雖モ、既ニ鎮定セリト、二年正月、公卿諸藩入朝シテ、長藩ノ罪ヲ議シ、慶親ノ嫡孫、興丸ヲシテ家ヲ嗣カシメ、慶親父子ノ終身ヲ禁錮シ、領内十萬石ヲ削ルト、是ニ於テ長藩幕府ノ命ヲ憤リ、上下益々志ヲ戰鬪ニ決ス、此ノ時ニ當リ、兵庫開港ノ期迫ル、英、佛、米、蘭ノ公使之ヲ促シ、且ツ曩ニ長藩ガ英ノ商舶ヲ撃チシヲ以テ、十三萬元ヲ償ハシテ請求ス、薩藩以下幕府ノ私ニ開港ヲ約セルヲ責メテ、主任者ヲ罪センコトヲ請フ、朝廷乃チ老中阿部正者等ヲ斥ケシム、幕府ノ臣議シテ曰ク、老中ノ進退既ニ朝旨ヲ仰グ、近日幕政ノ行ハレサルハ、大藩ノ幕府ノ命ヲ用キサルニ因レリ、方今内患外憂一時ニ蟬集シ、前途甚タ危シ、將軍アリト雖モ木偶ニ異ナラス、速ニ辭職スルニ若クハナシト家

茂之ヲ然リトシテ竟ニ職ヲ慶喜ニ讓ラント請ヒ、併セテ外交ノ信ヲ失フヘカラスコトヲ論ス、幕府ノ多端想ヲヘシ、

慶喜等入朝シテ、從前開ク所ノ三港ヲ勅允アラシコトヲ請ヒテ云ク、三港勅許アラハカテ兵庫ノ開港ヲ拒マント、朝議已ムヲ得スシテ之ヲ可ス、

六月東軍大舉シテ、長防ノ四境ニ進ミ、茂承、廣島ニ在リテ諸軍ヲ總督ス、長將、井上聞多、大村益次郎等石見ノ濱田ヲ侵シテ、東軍ノ後ヲ絶ツ、石見盡ク長兵ノ有トナル、十九日、長兵二道ヨリ大野ヲ襲フ、東軍三兵隊及ヒ紀伊大垣ノ兵、力拒奮戦シテ遂ニ之ヲ走ラズ、長兵死傷前後比ナシ、然レトモ爾來、東軍毎ニ敗劔シテ皆廣島ニ退ク、幕府ニ於テハ慶勝、慶永等切ニ征長ノ不可ヲ議シ、薩藩亦爲ニ之ヲ調停セント請フ、

(初メ東軍ノ軍裝ヲ爲スヤ、皆甲冑戰袍ヲ着ケ槍ヲ用キル、時ニ暑夏ニ方リ病ヲ發スル者多シ、長兵短控

日本誌 史紀 大政奉還

輕衣ヒシテ專ラ銃ヲ用キタリ、蓋シ文久三年ノ役ヨリ兵制ナ一變セシナリ、故ニ進退操縱意ノ如シ)八月征夷大將軍、家茂、大坂城ニ薨ス、慶喜固ヨリ征長ノ勅命ヲ甘シセス、十二月天皇詔シテ中納言慶喜ヲシテ職ヲ襲カシム、是ノ月天皇崩ス、皇太子立ツ今上是ナリ、慶喜、勝義邦ヲ遣シ教旨ヲ以テ長藩ヲ諭シ、兵ヲ解カシム、長將、廣澤兵介、井上聞多之ヲ傳フ、兵士恚リテ命ヲ奉セス、二將朝旨ヲ重シ、使者ノ禮アルニ感シ、衆ヲ慰諭シテ兵ヲ收ム、征長ノ師ノ起リシヨリ國用ヲ費スコト巨萬ニ至ル、然シテ遂ニ勝ヲ取ルコト能ハス、是ヨリ大藩ハ復タ幕府ノ節度ヲ受ケス、政權竟ニ地ニ墜チタリ、

第九 大政奉還

慶應三年ニ至リ、天下ノ形勢漸ク變シテ、諸藩各意見ナ一ニス、高知藩主山内豐信、曾テ大政ノ二途ニ出ツル弊害ヲ憂ヘ、幕府ニ建議シテ曰ク、方今ノ要ハ、

四百五十九

幕府ヲ廢シテ政體ヲ一變シ、誠忠ヲ以テ朝廷ヲ奉シ、信義ヲ以テ萬國ニ交ハルニ在リト、旨ヲ其臣寺村左膳、後藤象二郎等ニ授ケ、意見書及ヒ官制建築等ヲ附テシテ幕府ニ説カシム、薩摩以下ノ外藩、多ク賛成ス、然レトモ内藩及ヒ旗下ノ將士ハ頗ル之ヲ非トス、是ヨリ先一橋慶喜入りテ將軍タリ、是ニ至リテ政權ヲ奉還セント欲ス、幕府ノ吏之ヲ拒ム、薩摩ノ士、小松帶刀、土佐ノ士、後藤象二郎等之ヲ怨ス、

十月慶喜疏奏シテ曰ク、往昔綱紀紐ヲ紊リテ、相門權ヲ專ニシ、延テ保元、平治ニ至リ、政權武門ニ下移シ、鎌倉、室町ノ幕府ヲ經、織田、豐臣ノ二氏執政ノ時ヲ過キテ、臣カ祖、家康ニ至リ、征夷大將軍ニ任セラレ、子孫交、閭職ヲ辱クス、臣ニ及ヒテ政刑當ヲ失シ、内訌日ニ急ナリ、皆是レ臣カ非徳ノ致ス所ナリ、方今事類ニ煩ヲ加フ、是レ國家ノ大事ニシテ、臣カ一家ノ任ニアラス、伏シテ請フ自今内外ノ庶政、一ニ聖斷ヲ仰

キ、上下一心ニ帝國ヲ保護セハ、庶幾ハクハ海外萬國ト對立スルヲ得ン、臣カ一世ノ盡忠唯、此一事アルノミト、幕吏拒ミテ之中沮セシメント欲ス、薩土等ノ諸藩、關白ニ條齊敬ニ説キテ竟ニ上奏セシム、天皇之ヲ許ス、徳川家康、征夷大將軍ニ拜セシヨリ、是ニ至リテ二百六十五年、大政全ク皇室ニ復セリ、

第二章 政治及ヒ法律 第一 藩屏政畧

應仁ノ後、戰國割據ノ世トナリシヨリ、各自風土ノ宜シキニ適應シテ政ヲ爲スト雖、總テ簡單ニシテ又各國異同アリ、其ノ奉行登用ノ如キモ更ニ紀律ナク、吏其ノ人ヲ得レハ國治リ、否ラサレハ弊政救フヘカラサルニ至ル、
徳川氏關ヶ原、撥亂偃武ノ後功ヲ論シテ賞ヲ行ヒ、其ノ子義直、賴宣、賴房ヲ尾張、紀伊、水戸ノ三樞要ノ地ニ封シテ親藩ト爲シ、(世ニ之ヲ三家ト云フ) 井伊

直政、本多忠勝等ノ家臣ヲ所在ニ配置シテ内藩ト爲シ、前田利長、加藤清正以下ヲ本領ニ安ンシテ外藩ト爲シ、内藩ヲ其ノ咽喉ニ置キテ之ヲ掣肘シ、内外交錯シテ相理メシム、凡ソ二百餘大名ナリ、後沿革アリテ二百七十一藩トナル、

慶長八年二月、家康征夷大將軍ニ拜シ、右大臣ニ陞リ、淳和、奨學兩院ノ別當ヲ兼ネ源氏ノ長者タリ、天使詔ヲ奉シ、伏見ニ就キテ之ヲ拜ス、勅使其ノ第二就キテ拜任スルコト茲ニ權興ス、十年四月、家康職ヲ辭シ秀忠襲ク、子孫繼嗣シテ一ニ先例ニ從フ、(是ヨリ先、秀忠江戸ヲ發シ、東國ノ諸藩ヲ率キテ入朝ス、鹵簿路ニ連ナルコト、十有七日ニ及フト云フ、)

徳川氏ノ政略ハ、極テ巧妙ナルモノナリ、而シテ其ノ最モ慎重ニシテ遠謀アルハ、朝廷ニ對スル政略、即チ外戚ノ權ニ乘セサルノ政略是ナリ、秀忠其ノ女、和子ヲ納レテ中宮ト爲シ、(東福門院) 外戚ノ親ニ連ル、而

シテ皇家ヲ仰グコト恰モ別天地ノ如シ、古ヨリ外戚ノ威ニ乘シテ朝政ヲ私スル者渺カラス、皆三公攝關ヲ以テ之ヲ握ルト雖、獨リ兵馬ノ權ニ至リテハ措キテ省ミス、故ニ其ノ衰フルニ及ヒテハ殆ト髦毛ノ如シ、賴朝以來政兵上ノ實權ヲ收メテ顯爵ヲ干メス、徳川氏モ亦此ノ政略ヲ執リテ既ニ外戚トナリ、且ツ政兵ノ實權ヲ有スルモ、敢テ朝官ニ列セス(太政大臣等ハ、只有名ノミ) 是レ實ニ徳川氏ヲシテ、久シク其ノ勢力ヲ保持スルヲ得セシメタル要因ナリトス、

次ニ諸藩ニ對スル政略ノ如キモ、其ノ用意甚タ周到綿密ナルモノナリ、例ヘハ島津氏ノ如キ、雄豪大族ニハ松平氏ヲ冒サシメ、與フルニ偏諱ヲ以テスルハ、是レ恩威ヲ結ヒテ偃蹇ヲ制スルナリ、(慶長十一年、家康松平氏ヲ島津忠恒ニ與ヘ、名ヲ家久トス、是ヨリシテ多ク稱號ヲ諸大名ニ與フ) 又諸藩ノ邸第及ヒ妻子ヲ江戸ニ置カシメ、諸藩ヲシテ隔年ニ參覲交替セシムルカ如

キハ、是レ實ニ諸藩ノ領ヲ陛下ニ留置シテ、事ヲ謀ル
 ナ防止スルノ策ナリ、(此ノ制ハ慶長九年、藤堂高虎ノ
 職ヲ採用シテ成レルモノナリ、而シテ寛永十一年ニ至
 リ、諸大名ノ交替ヲ四月ト定メ、譜代大名ノ交期ヲ六
 月トシテ、各一年ノ參觀ヲ命シ、關東即チ箱根以東ハ
 半年トス、慶安三年諸藩ノ交替ヲ更メテ、八月トス、
 後王政一新ニ及ヒ、各其ノ國ニ就カシム)
 又元和元年、新式十三條ヲ制シテ諸藩ヲ戒メ、群飲、
 逸遊、結黨、私婚等ヲ禁スルカ如キ、是レ亦陽ニ政刑
 ナ敗ムルモノナリト雖、陰ニハ諸藩ノ微瑾ヲ窺ヒ、苟
 モ小隙アレハ倏チ乘シテ其ノ地ヲ創リ、其ノ力ヲ殺ク
 ノ具ト爲ス、其ノ他諸藩ニ合シテ城壘ノ増築ヲ禁シ、
 又慶長元和ノ頃ヨリ三年ニ一回、巡察使ヲ發シテ諸國
 ノ狀勢ヲ檢校セシムルカ如キ、又邊要咽喉ノ地、外藩
 ト接スルモノニハ、豫メ密令ヲ下シテ虞ニ備フル
 カ如キ德川氏經國ノ術策至レリト謂フヘシ、

(德川氏ノ制、將士ノ子ナキ者ハ、同姓(同姓ニ子ナケ
 レハ、他姓ヨリ取ル)十七歳以上ノ男子ヲ養子トス、
 然レトモ豫メ之ヲ平時ニ定メシム、若シ病篤キニ臨
 ミ、或ハ死後ニ定ムレハ其ノ家系ヲ斷絶ス)
 斯ノ如ク種々ノ手段ヲ施シテ、諸藩ノ動作ヲ抑制スル
 ノミナラス、德川氏ハ更ニ文事ト宗教トヲ進メテ、人心
 ナシテ忠孝ヲ重セシメ、惡意ヲ未萌ニ消滅セシメタリ、
 家光外様大名ヲ營中ニ召シテ曰ク、我カ祖考卿等カ祖
 考ノ力ヲ以テ天下ヲ定ム、而レトモ曾テ肩ヲ比ヘ等ヲ
 同クセシカ爲ニ、肯テ譜代ト同視セス、予ニ於テハ權
 祿ノ中、既ニ四海ヲ統フ、自ラ父祖ニ異ナリ、今ヨリ
 卿等ヲ待ツコト應ニ譜代ニ比スヘシ、若シ不平アラハ
 各ノ國ニ就キテ熟考シ、以テ去就ヲ決セヨト、諸侯敢テ
 忤フ者ナシ、是ニ於テ幕府ノ權勢愈々固シ、此ノ時賢臣
 前後輩出シテ幕政ヲ執ル、故チ以テ德川氏將來ノ計畫
 盡ク定マル、爾來吉宗ノ外基タ政略ニ富メル將軍アラ

ス、且ツ島原ノ亂、由井正雪ノ變等二三ノ小變細故ア
 リト雖、未ダ曾テ大名ノ叛キテ幕府ヲ謀ル者アラズ、
 以テ十五代ニ傳フルコトヲ得タリ、

(七代將軍家繼、薨シテ嗣ナシ、家康ノ子頼宣ノ孫、
 吉宗紀伊ヨリ入リテ、宗家ノ職ヲ紹キ、征夷大將軍
 トナリ、大ニ曾祖ノ政ヲ修メ、勵精以テ治ヲ謀リ、
 釐革スル所多シ、世ニ稱シテ德川中興ノ主ト爲ス)
 中葉以降、王政陵替シテ戶籍ノ法、亦行ハレス、浮宕
 流零ノ民、天下ニ滿チテ戶口定マラス、良民從テ其ノ
 堵ニ安スルコト能ハス、闔世遂ニ戰國トナレリ、德川
 氏ニ至リ大ニ經國ノ制度ヲ理メ、戶籍ノ法、亦漸ク定
 マル、蓋シ當時藩屏ノ制ナルカ故ニ、諸藩ハ各其ノ適
 宜トスル所ヲ行フ、而シテ皆宗教戶籍法ナリ、故ニ之
 ナ宗門人別ト云フ、

第二幕府ノ職官

德川氏江戸ニ移リテヨリ、諸制度ハ專ラ足利氏ノ舊法

日本誌 史紀 幕府ノ職官

ニ依リテ其ノ煩ヲ除キ、江戸奉行ヲ置ク、而シテ其ノ
 大阪ヲ減スヤ、之ヲ松平忠明ニ與ヘ、尋テ忠明ヲ郡山
 ニ徙シ、大阪城ヲ以テ鎮府ト爲シ、城代定番ヲ置キテ
 畿内以西ノ諸國ヲ控制セシメ、伏見城ヲ廢シテ奉行ヲ
 置ク、是ヨリ先老中及ヒ奏者ヲ設ク、寛永九年始テ大
 目付ヲ置キ、監察ヲ司ラシメ、十一年大番隊ヲ定メテ
 十二部ト爲シ、十二年始テ若年寄ヲ置キ、麾下ノ士ヲ
 管シ、又後房ノ内政、出納、庖厨ノ事ヲ掌ラシメ、寺
 社奉行ヲ置キテ社寺、僧祝、巫覡ヲ管セシメ、國郡奉
 行ヲ置キテ、幕府領スル所ノ國郡ノ民政ヲ司ラシメ、
 老中ナシテ毎月輪番ヲ定メ、幕府ノ庶政ヲ統攝セシム
 之ヲ月番ト稱ス、十五年始テ大老ヲ置キ、以テ老中ノ
 上座トス、其他勘定奉行、町奉行等アリ、之ニ寺社奉
 行ヲ併セテ三奉行ト稱ス、又京師ニ所司代ヲ設ケテ、
 皇城及ヒ社寺等ノ事ヲ掌ラシム、京師、大阪及ヒ駿府
 ニ城代定番等ヲ置キ、西海ニ探題ヲ置キテ各方面ヲ鎮

支配

幕府職制

其ノ一

側衆	高家衆	留守居
大番頭	大目付	町奉行
勘定奉行	關東郡代	勘定吟味役
作事奉行	普請奉行	小普請支配
旗奉行	鎗奉行	留守居番
交代寄合衆	表高家衆	美濃郡代
遠國役人		
若年寄		
書院番頭	小性番頭	小普請奉行
新番頭	小性衆	中與奉行
小納戸	鐵砲百人頭	持弓頭
持筒頭	定火消役	先手弓頭

セシノ江戸、京師、伏見、大坂、堺浦、奈良、長崎、松前、山田、日光、佐渡、下田(正徳六年浦賀ニ移ス)大津及ヒ草津ニ奉行ヲ置キテ、市人ノ訴訟ヲ裁判シ、并ニ船賦公務ヲ司ラシム、其ノ他代官陣屋ノ類、全國ニ滿チテ、地方ヲ抑制ス、今諸書ニ參考シテ、慶長以來職制ノ重要ナルモノヲ表示スヘシ、

留守居
大目付
町奉行
勘定奉行
作事奉行
鎗奉行
大老
若年寄
目付衆
鷹師頭
鳥見組頭
船手頭
西丸裏門番頭
腰物奉行
醫者衆
祐筆組頭
膳奉行
細工頭
吹上奉行
同朋頭
盜賊火方改
進物番
幸若音曲
寺社奉行

先手鐵砲頭	目付衆	使番	紅葉山附衆	紅葉山火之番	紅葉山樂人衆
出火見廻役	鷹師頭	鳥見組頭	天文方	神道方	歌學方
小十人頭	徒頭	船手頭	連歌師	碁將碁所	
鐵砲方	西丸留守居	西丸裏門番頭	留守居		
二丸留守居	納戸頭	腰物奉行	廣敷番之頭	廣敷番用達	廣敷番進物
寄三千石以上	儒者衆	醫者衆	與火之番	切手番之頭	取次番之頭
女中方用人	書物奉行	祐筆組頭	富士見番之頭	寶藏番之頭	天守番之頭
馬方	大筒役	膳奉行	軍筒奉行	弓矢鎗奉行	玉藥奉行
賄方頭	臺所頭	細工頭	幕奉行	二丸火番	具足奉行
材木石奉行	濱御殿奉行	吹上奉行	其ノ二		明屋敷番伊賀組頭
藥園預	庭者支配	同朋頭	大目付		
數寄屋頭	中川番	盜賊火方改	關所物奉行		
道奉行	屋敷改	進物番	町奉行		
御召船役	繪師	幸若音曲	石出帶刀	町年寄	
能役者			勘定組頭	勘定衆	切米手形改

日本誌 史紀 幕府ノ職官

藏奉行 金奉行 油漆奉行
 林奉行 川船極印改 評定所
 評定所留守居 總代官 金銀朱座
 作事奉行
 大工頭 作事吟味役 作事下奉行
 疊奉行 庭作 植木奉行
 鑄物師 翠簾屋
 鑓奉行
 八王寺千人頭
 心頭 目付衆
 徒目付 小人目付 徒 押
 表火之番 貝役 太鼓役
 黒鞆頭 掃除頭 提灯奉行
 中間頭 小人頭 駕籠頭
 傳奏屋敷番 櫻田用屋敷 和田倉用屋敷

京都所司代 京都町奉行 禁裏附
 京都代官 二條在番 二條門番
 二條御殿番 藏奉行 鐵砲奉行
 淀川過所船配 伏見奉行 大坂城代
 大坂定番 大坂在番 大坂加番
 大坂町奉行 大坂目付 大坂船手
 大坂破損奉行 大坂鐵砲奉行 大坂弓奉行
 大坂具足奉行 大坂金奉行 大坂藏奉行
 甲府勤番 長崎奉行 長崎目付
 奈良町奉行 駿河城代 駿河加番
 駿河在番 駿河定番 駿河町奉行
 駿河目代 駿河武具奉行 久野宮番
 久野宮目代 山田町奉行 堺奉行
 浦賀奉行 佐渡奉行 日光奉行
 日光目代 八王子千人頭 日光奉行
 美濃郡代 諸國代官衆 諸國關所番

第三 租税法

徳川氏ノ租税法ハ、豊臣氏ノ租税法ヨリハ、緩ニシテ
 五公、五民ヲ率トスト雖、或ハ時ニ從ヒ、或ハ處ニ應
 シテ、改剛増減アリ、其ノ悉シキ事ハ地方凡例録、地
 方大概集、地方大成等ノ書ニ見エタリ、而シテ幕府直管
 ノ地ニ於テハ、租税法稍一定スト雖、諸藩領地ノ賦法
 ニ至リテハ、大小輕重區々ニシテ所定ナク、從テ一見
 之ヲ括説スルコト極テ難シトス、今徳川氏ノ租法ノ一
 斑ヲ知ラシムルタメ、左ニ貞享年中ニ制定セル所ヲ示
 ス、(尙ホ詳細ナル沿革ヲ講究セント欲セハ、曩ニ大藏
 省ニ於テ編成セル、大日本租稅史ヲ見ヨ)

貞享田租表

品目	曲尺	京	租	米
田々上	一步 方六尺一分	五合三勺餘	二合六勺餘	
一段	三百步	一石六斗八	斗	
一町	三千步	十六石八	石	

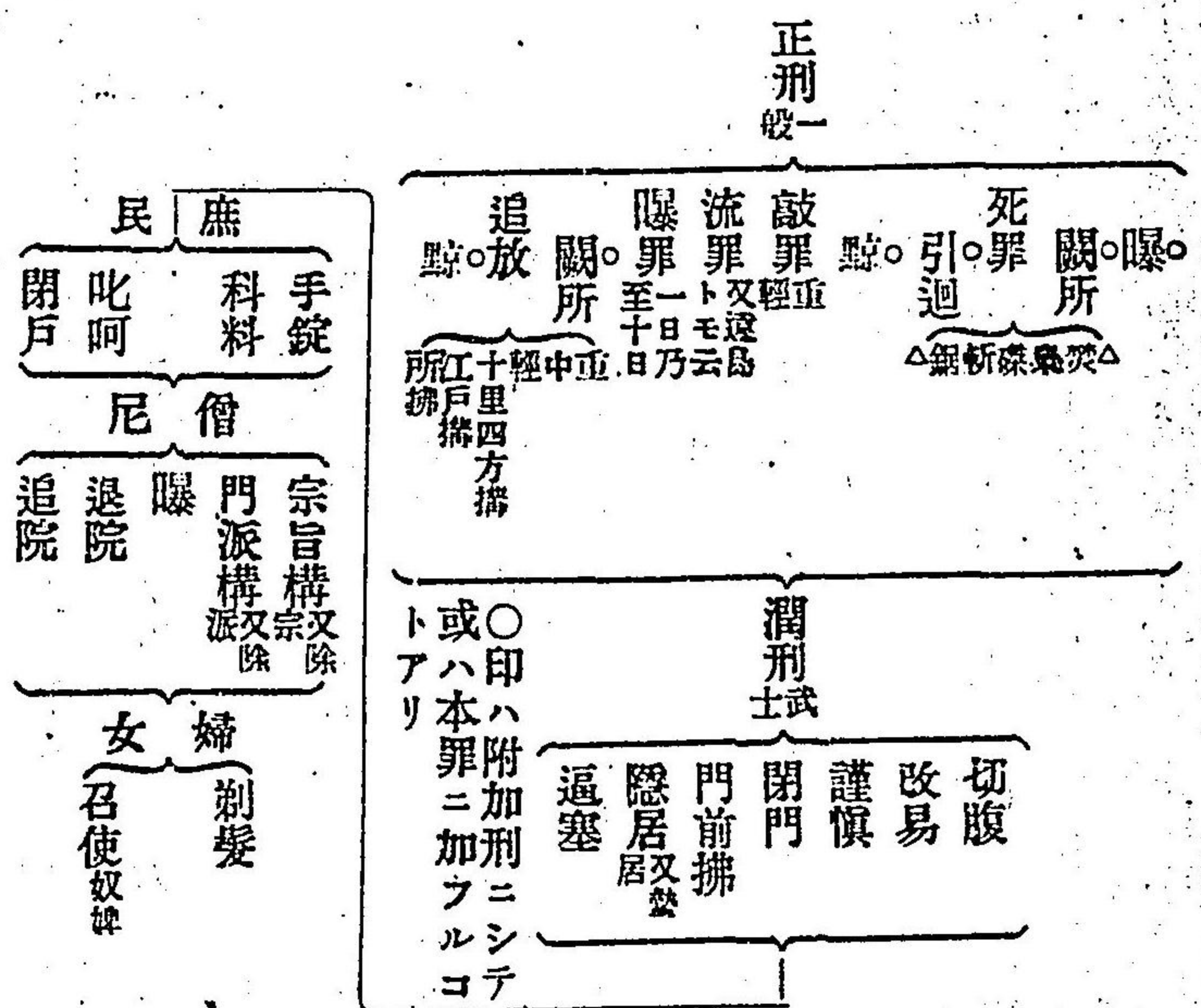
日本誌 史紀 租税法 法律

第四 法律

元和元年、大坂ノ戰ヲ訖ハリテ後、家康林信勝等ニ命
 シ、貞永、建武等ノ式目ヲ參酌シテ、新式目ヲ制セシ
 ム、蓋シ諸侯ニ對スル令則ノミ、後評定所ヲ置キ大老、

田上	田中	田下	田々下
一步 方六尺一分	一步 方六尺一分	一步 方六尺一分	一步 方六尺一分
一段 三百步	一段 三百步	一段 三百步	一段 三百步
一町 三千步	一町 三千步	一町 三千步	一町 三千步
五合	四合三勺餘	三合六勺餘	三合
二合五勺	二合一勺餘	一合八勺餘	一合五勺
七斗五升	六斗五升	五斗五升	四斗五升
七石五斗	六石五斗	五石五斗	四石五斗

老中、若年寄、大目付等ヲ以テ、率ネ諸藩ニ係レル裁判ヲ決セシム、其ノ他四民ノ訟獄ハ、町奉行之ヲ掌リ、社寺ノ訴訟ハ寺社奉行之ヲ掌リ、農工商等ノ徵稅處分ハ、勘定奉行之ヲ掌リ、京都ニハ所司代、町奉行アリテ之ヲ擔當シ、大阪ニハ城代及ヒ町奉行アリテ之ヲ審決シ、堺、長崎等ノ奉行、亦之ニ準ス、若シ重罪ノ疑獄、讞罪アレハ江戸ニ檻致ス、其ノ勘定、寺社及ヒ町奉行ヲ三奉行ト稱シテ、最モ世ノ重ンスル所ナリ、而シテ幕府直轄ノ外、諸藩ニ至リテハ各自其ノ法ヲ異ニス、又願訟、添書ノ制アリ、然レトモ諸藩ニ於テ、或ハ之ヲ聽サ、ル時ハ、宛民將軍ニ越訴スル者アリ、幕府執ヘテ之ヲ刑ス、會板倉重宗、大岡忠相ノ如キ事實裁判ニ長セル者アリ、然トモ常ニ斯ノ如キ人ヲ得ルコト難シ、今徳川百箇條及ヒ科條類典等ノ諸書ヲ參考シテ、幕府ノ刑名ヲ表スルコト左ノ如シ、



第三章 文學

應仁以來戰國ノ世トナリ、文學湮滅シ、士民專ラ武ヲ修メテ干戈ノ間ニ生息シ、閨中ノ子女ト雖モ、尙武ノ風儀アリ、故ニ筆ヲ執リ書ヲ閱スル者ハ、唯僧徒ノミ、去レハ菅原、大江ノ二氏モ、竟ニ衰ヘテ五山ノ僧侶ノミ文事ニ與リ、外國ノ通信ニ至ルマテ、皆之ニ委ネタリ、爾ルニ徳川氏、武ヲ以テ事ヲ創シ、文ヲ以テ成ヲ守ラント欲シ、意ヲ學術ニ留メ、慶長偃武ノ後、文學ノ士ヲ招キ縉素ヲ論セス、之ヲ禮重ス、是ヲ以テ海内駁々トシテ文教興レリ、

初メ家康、藤原肅(惺齋)ヲ聘シテ、古今ノ成敗、政治ノ得失ヲ問フ、其ノ門ニ林信勝、(道春號羅山)松永尺五、那波道圓等アリ、古來ノ學風ヲ一變シテ、專ラ朱氏學ヲ唱フ、天下靡然トシテ風ニ嚮フ、羅山最モ博洽ニシテ、家康ノ顧問トナリ、朝鮮使ニ接ス、幕府執政上ノ文書、是ヨリ林家ノ世職ニ歸シ、程朱ノ儒宗トナリ、文學一時ニ振起セリ、

日本誌 史紀 文學 漢學

寛永年間、中江藤樹アリ、王陽明ノ全書ヲ得、初テ其ノ說ヲ近江ニ唱ヘ、學風又一派ヲ爲ス、

正保年間、山崎闇齋アリ儒ヲ業トス、初メ小倉三省、野中兼山ニ從ヒテ程朱ヲ學ヒ、後自ラ看破スル所アリ、一派ノ學風ヲ起ス、又神道ニ及フ、所謂山崎學是ナリ、闇齋儒ヲ尙フト雖、之ニ感溺セス、門人充滿シテ大ニ隆盛ヲ極ム、

寛文年間、伊藤仁齋アリ、京師堀川ニ居リ、曾テ性理ノ學ヲ信シ、論孟古義、中庸發揮等ヲ草定シテ、專ラ漢魏ノ傳注ヲ主張シ、大ニ程朱ノ說ヲ排斥シ、學風爲ニ亦分岐セリ、世人之ヲ堀川學、又古學ト云フ、當時古學、朱子學ノ稱アリ、

元祿年間、林鳳岡、特命ニ依リテ髮ヲ蓄フ、即日從五位下大學頭ニ任ス、其ノ餘、儒官皆髡ヲ止ム、

五年二月始テ釋奠ヲ孔子ノ廟ニ行ヒ、又生徒ノ食ヲ備フ、是ニ於テ諸藝彬々トシテ學ニ就ク、

四百六十九

正徳年間新井白石、室鳩巢アリ、木下順庵ノ門ヨリ出ツ、般ニ實學ヲ起シ、政治、經濟ヲ究ム、順庵初メ松永尺五ニ學フ、元和元年辟サレテ幕府ノ儒官トナル、故ヲ以テ幕府ノ臣、多ク之ニ師事シ、大ニ當時ニ推重セラル、時ニ梁田崧巖、貝原篤信、(益軒)山鹿素行等、亦東西相踵キテ起ル、

享保年間、萩生徂徠、古文辭學ヲ江戸ニ唱フ、其ノ名尤モ高シ、徂徠豪邁ニシテ、博聞強記、才識比ナク、一世ヲ睥睨ス、初メ徂徠、増上寺ノ邊ニ僑居シ、專ラ復古ノ學ヲカメ、禮、樂、刑、政ヲ講ス、尤モ經濟ニ長セリ、後李王ノ說ヲ信シテ、修辭說ヲ唱フ、其ノ派大ニ盛ナリ、時ニ木下ノ諸門及ヒ五井持軒、中井鷺菴等、東西並起リテ各々之ト抗ス、

享保九年、吉宗、山田正朝ヲ召シ經ヲ講セシム、文義明晰ナリ、之ヲ嘆賞シテ俸二百石ヲ賜フ、正朝賤ヲ上リテ之ヲ謝ス、其ノ文老練人呼ヒテ神童トナス、時ニ

年十三ナリ、

天明中、後藤芝山、柴野栗山等、師弟相共ニ性理ノ學弊ヲ矯正ス明和、安永ノ頃ニ至リ井上金峨、自ラ一家ノ說ヲ爲シ、折衷學ト稱シテ修辭ノ學ヲ排斥ス、江戸ノ文學之カタメニ方向ヲ變ス、門人井上南臺、龜田鵬齋、山本北山、原狂齋等、古注疏ヲ奉シテ始テ考證說ヲ唱ヘ、徂徠及ヒ其ノ門太宰春臺、服部南郭ノ李王ノ修辭說ヲ駁ス、是ニ於テ江戸ノ文教、復タ一變セリ、

山本北山、天明以來盛ニシテ修辭家竟ニ抗スルコト克ハス、時ニ北山及ヒ龜田鵬齋、市河鶴鳴、豊島豊州、塚田大峰ヲ目シテ五鬼ト稱ス、又北山ノ門人蒲生君平、太田錦城等一世ニ鳴ル、君平、典章制度ノ廢セルヲ興シ、錦城常ニ折衷學ヲ修メ、寛政以降大ニ名ヲ顯ハス、

享保以降凡ソ四十年間、林氏ノ程朱ヲ辨駁スル者、接踵シテ起ル、是ニ於テ禁學ノ令アリ、爾來世人、又大

ニ宋學ヲ崇フ、之ニ依リテ江戸ノ學風一定セリ、

寛政四年九月、徳川家齊、科目ヲ湯島昌平校ニ設ケテ、麾下ノ士ヲ試ミ、及第者ニ衣服金錢ヲ賜フ、

十年ノ頃、皆川淇園、巖垣龍溪、村瀨栲亭、佐野山陰ノ輩、其ノ名京師ニ震フ、之ヲ古學ノ四大家ト云フ、文學ノ振起是ノ時ヲ以テ極盛ト爲ス、

第二 皇國學

漢學即チ支那ノ儒學專ラ行ハレテ、世ニ久シク用キラレシヨリ、皇朝典故ノ學ヲ、皇國學又和學ト稱ス、蓋シ此ノ稱ハ近古ニ起リシモノニテ、古ハ紀傳博士ノ兼掌タリ、

(孝徳天皇大化二年、改新ノ制アリシヨリ以來、詔勅官符以下ノ公文ハ、皆漸ク漢文ヲ以テ之ヲ爲シ、大學(京師學校)國學(諸國學校)ヨリ出テ、試業ヲ要ム、秀才進士等ノ學生ハ、特ニ對策文ノ巧妙ヲ競フ、總テ任官ヲ欲スル者ハ、盡ク支那ノ故事ヲ稱揚

セシ故、本朝ノ歴史及制度ハ、自ラ講究スル者少ク、浮華競ヒ起リテ遺テ舊老ヲ嗤フニ至レリ、爾來王政衰ヘテ、官吏其ノ職ヲ世襲セシヨリ、政事、法律、經濟、辭章、和歌、有職、故實、歴史、家譜學等各々分立ス、總テ之ヲ國學家ト名ツク、往昔紀傳道ノ家ナリシ所ノ菅原、大江氏及ヒ藤原氏、南北兩家等ニシテ、政事上ニ關レル學問ハ、外記史ノ家タル清原、中原、小槻氏等ノ諸家、又法律、歴史ノ學業ハ、紀傳明經、明法、文章等ノ家タル菅原、大江、清原、中原氏ノ家業トナリシカハ、顯官ト雖、皆其ノ家ニ就キテ學ヘリ、故ニ源賴朝ノ政所ヲ建ツルヤ、大江、三善ノ二氏ヲ舉ケテ、機務ニ與カラシメタリ、

鎌倉以來、幕府執政ノ時ニ至リ、故事ニ明ナル者ハ、幕府政範ノ顧問トナリシテ以テ、其ノ家ナラサル人ト雖、志アル者ハ漢學ニ從事セリ、而シテ天下攻伐

ナ事トスル世ニ及ヒテ和漢ノ學事、地ニ墜チ唯、五山ノ僧侶ヲシテ事ニ從ハシメ、外國通信書ノ如キモ、皆其ノ起草ニ係ル、是レ蓋シ僧侶ノ外ニ學事ニ從ヘル者アラサレハナリ、

徳川氏、撥亂偃武ノ後、林道春ヲ聘シテ文事ヲ掌ラシムルニ至リ、其ノ學科中、始テ和學科ノ目アリ、熊澤番山、室鳩巢、太宰春臺、新井君美相踵キテ輩出ス、而シテ君美等漢學ニ從事シ、漸次ニ經濟ニ志シ、兼テ和學ヲ考攷スルニ至レリ、其ノ他各、專門ノ一科ヲ以テ稱セラル、者アリ、安積澹泊、栗山潜峰ノ徒、史學家ヲ以テ自ラ任シ、伴信友、小山田與清、黒川春村等ハ、考證家ト稱セラル、壺井義知、多田義俊、山田以文ノ如キハ、有職家ト稱セラレ、僧契沖、加茂眞淵等ハ、萬葉家ト稱セラレ、荷田在滿、村田春海等ハ、律令家ト稱セラレタリ、

是ヨリ先、元祿中、荷田東滿、最モ卓見アリ、近世國

學、數派ニ分レ、又神代ノ事ヲ談スル者ノ中、佛說ヲ混シタル兩部神道ノ徒ハ勿論、白川、吉田二家ノ惟一ト稱スルモ、山崎闇齋、出口延佳等ノ漢意ヲ交ヘタルモ、皆其ノ本旨ニアラス、又國史、律令衰没シテ歌學ハ伎藝トナリ、秘傳口訣等ノ家説起リテ、國語ノ粹ヲ失ヘルコトナ概ヘテ、其復古ヲ企テ、専ラ斯ノ學ヲ京師ニ唱フ、國學ノ隆起セシハ實ニ東滿ノ力ニ依ルナリ、其ノ姪、在滿、門人、加茂眞淵等亦其ノ業ヲ繼グ、眞淵ノ門ニ本居宣長出ツ、其ノ門ニ平田篤胤アリ、並ニ大ニ學事ヲ振起ス、

第二 洋學

寛永十八年、蘭人始テ本國ノ醫師ヲ携ヘ來ル、西玄甫、譯官ヲ以テ蘭書ヲ學ヒ、其ノ外科術ヲ受ク、之ヲ蘭學ノ始ト爲ス、吉雄幸右衛門、檜林豊重等相踵キテ起ル、寛永五年、西川如見、長崎ノ譯官タリ、華夷通商考ヲ作ル、當時譯官ノ外、未タ其ノ語ヲ解シ、其ノ文ニ通

江戶ニ置ク、爾來西洋諸國ノ學、幕府ニ用キラル、而レトモ朝廷未タ之ヲ用キス、五年幕府、戶塚靜海、伊藤玄朴ヲ擢テ、内班醫師ニ、伊藤貫齋、竹内玄同ヲ擧ケテ與詰醫師トス、並ニ皆西洋醫師ナリ、幕府是ニ於テ醫師ヲ擧グルニ前令ニ依ラス、

文久元年、蘭醫ぼーといんヲ精得館ノ教員トス、是ヨリ先幕府松本良順ヲ長崎ニ遣ハシ、蘭ノ海軍々醫ぼんペヲ聘シテ、其ノ地ニ病院ヲ設ケ、大ニ生徒ヲ集ム、後其ノ中ヨリ伊東玄伯、林研海ヲ迪テ、蘭ニ留學セシム、是西洋教師ヲ聘シ、及ヒ留學生ヲ發遣セシ嚆矢ナリ、文久三年、番書調所ヲ改メテ開成所ト稱ス、爾來西洋ノ學術漸ク隆盛ナリ、

第四章 外交

スル者アラス、新井白石始テ西洋紀聞、采覽異言等ヲ著スニ及ヒ、世人始テ西洋ノ事情ヲ知ル、享保年間、吉宗、青木文藏ニ命シテ蘭學ヲ講習セシム、爾來前野真澤(蘭化)桂川甫周ノ徒、頻ニ輩出シテ醫術ヲ講シ、益、蘭學ヲ究ム、安永三年ニ至リテ、解體新書ノ譯成ル、是レ蘭書翻譯ノ起原ナリ、

享保五年、幕府洋書舶來ノ禁ヲ解ク、是ヨリ先、元和年間、西洋醫學我ニ行ハル、ニ伴ヒテ、耶蘇ノ教書傳來スルヲ以テ、凡テ洋書ノ舶來ヲ禁セリ、是ニ至リテ更ニ其ノ禁ヲ解ケト雖、尙ホ教書ハ禁シテ許サス、

天明三年、大槻玄澤、蘭學階梯ヲ著シ、文化十二年、大槻玄幹、蘭學凡西音發微等ヲ著ス、和蘭文法茲ニ始マル、文政九年、青地林宗、氣海觀瀾ヲ譯述シテ理學ノ源ヲ起シ、天保十年、宇田川榕菴、舍密開宗ヲ譯シテ、化學ヲ開說シ、弘化四年、藤井三郎、英文範ヲ著ハス、之ヲ英文法ノ發起トス、安政三年、番書調所ヲ

文龜ノ頃、西洋諸國ノ商賈等、暹羅、安南、呂宋等ニ交易シ、轉シテ我カ西邊ニ來ル、故ニ時人其ノ葡萄牙、西班牙等ヲ總稱シテ、南蠻ト云フ、

天文中、大友氏、海外諸國ト互市ニ爲ス、十二年八月、葡萄牙ノ商船、復タ大隅種子島ニ泊ス、互市ヲ開カンカタメナリ、元龜元年、葡萄牙船、長崎ニ來船ス、天正四年、南蠻船大砲(石火矢ト云フ)ヲ齎シ來リテ肥後ニ泊ス、此ノ年堺浦ヲ以テ外船入津ノ所トス、八年夏、英船肥前平戸ニ來着シ、島主松浦氏之ト交易ヲ約ス、文祿元年秀吉始テ長崎奉行及ヒ代官ヲ置ク、長崎ノ地ハ大村理專ノ所領ニシテ深江浦ト呼ヘリ、慶長元年、蘭船土佐ニ漂着シ、翌年平戸ニ來リ、互市ヲ約シテ去ル、後平戸ヲ互市ノ地ト爲ス、五年英人、蘭人、堺浦ニ入港ス、家康之ヲ江戸ニ回船セシメ、乃チ通商ヲ聽シ、蘭人ヤんようヲ英人あんじん并ニ江戸ニ在留セシム、是ノ歲航行スヘキ船額ヲ定ム、之ヲ朱印船ト稱ス、十一年夏、羅馬船始テ長崎ニ來ル、十三年ヤんようヲ還ル十四年十二月、葡萄牙、和蘭貢獻シテ通商ヲ請フ、十八年長崎港ヲ貿易場ト定ム、是ノ歲、英船陸奥ニ漂

到ス、伊達政宗幕府ニ請ヒテ、支倉常長ヲシテ波斯ニ至ラシム、家康あんじん及ヒあてろ等ヲ仙臺ニ至ラシメ、與ニ發スル者、都テ百八十人ナリ、元和元年、常長、波斯王ニ謁シ、又羅馬ニ至リテ法王ニ見ユ、尋テ其ノ國ノ議政官トナリシカ、幾モナク復タ波斯ニ還ル、二年秀忠、下田奉行ヲ置キ、海船ノ出入ヲ監セシム、六年常長呂宋ヨリ歸ル、寛永十三年家光朱印船ヲ停メ外航ヲ禁ス、十六年嚴ニ海外ノ來航ヲ禁ス、是レ去年島原ノ亂アリシヲ以テノ故ナリ、但シ蘭人彼ノ役ニ與リテ功アリシヲ以テ、特ニ蘭及ヒ支那ノ通商ヲ可シ、且ツ外邦ノ事情ヲ報セシム、十八年長崎ヲ大浦頭ト爲ス、貞享二年、榎林豐重ヲ以テ蘭國ノ大通詞ニ任ス、十一月幕府、支那、和蘭ノ商額ヲ定ム、寛政二年蘭ノ商人幕府ニ貢獻ス、此ノ年ヨリ五年毎ニ一貢ノ例ト爲ス、五年魯西亞始テ通信ヲ乞フ聽カス、爾來屢ニ我カ北邊ニ寇ス、

天保十一年土佐ノ漁人、萬次郎等漂ヒテ無人島ニ至ル、亞墨利加船ニ救ハレ、彼ノ國ニ如ク、弘化元年蘭人長崎ニ至リ密告シテ曰ク、貴國西洋各國ト盟約ヲ結ビ、交易ヲ許サ、レハ、諸國必ス兵艦ヲ率テ境邊ニ寇セント、二年亞米利加船、阿波、陸奥ノ漂流ヲ送リテ浦賀ニ來ル、三年佛蘭西始テ長崎ニ來ル、嘉永五年、蘭復タ上書シテ曰ク、米人明春來ラント欲ス、幕府若シ貿易ヲ許サ、ラハ、兵艦是ヨリ發セント、是ノ歲萬次郎米國ヨリ還リ、世界通覽、萬國輿地圖及ヒ米書數十卷ヲ獻ス、六年果シテ米使ベリリ浦賀ニ來ル、九月露使長崎ニ至リ、修好交易ヲ乞フ許サス、安政元年三月、幕府米國ト權ニ和親ヲ結フ、三年米使はるり來ル、尋テ魯人ふーちやもんモ亦來ル、四年蘭使上書シテ曰ク、米、露、英ノ他ニ獨、佛亦應ニ踵テ至ルヘシ、此ノ諸國皆歐洲ノ強盛國ナリ、貴國之ト交ルコト實ニ嘉スヘシ、然レトモ貴國ノ風タル尊嚴自

持、海外ヲ與メ事アルモ速ニ裁決スルコト能ハス、已ムヲ得スシテ後ニ許スハ、或チ損シ侮チ招カント支那ト異ラス、貴國以テ之ニ鑒ミ、信ヲ失フコト勿レト、五年六月、米、蘭、英、佛、魯ノ五國ニ神奈川、長崎、箱館ノ三港ヲ開クノ條約ヲ爲ス、萬延元年、幕府外國奉行、親見豐前守等ヲ米國ニ遣ス、五月葡萄牙ト通商ヲ約シ條令ヲ定ム、文久三年十一月外國奉行、池田筑後守、河津伊豆守等ヲシテ英、佛等ノ諸國ニ如キ、閉港ヲ議セシム、朝廷鎖港ノ命アルカ故ナリ、元治元年池田筑後守等佛ヨリ還ル、(初メ筑後守等、先ツ佛ノ巴黎ニ至リ閉港ヲ説ク、佛人聽カス、筑後守時ニ歐洲諸國盟約ヲ結ヒテ、緩急相救フ狀ヲ見ル、是ニ於テ外邦交際ノ道、廢スヘカラサルヲコトヲ悟リ、遂ニ他國ニ至ラスシテ歸ル、幕府命ヲ辱ムルコトヲ責メテ、官ヲ奪ヒ祿ヲ削ル)

慶應元年九月、英、米、蘭、佛ノ使、横濱ヨリ兵庫ニ至ル、兵庫開港ノ期ニ過キタルコトヲ詰リ、且ツ宸裁ヲ仰カントスルナリ、家茂奏シテ之ヲ請フ、孝明天皇詔シテ横濱、函館、長崎ノ三港ヲ許シ、兵庫ハ京師ノ近海ナルヲ以テ仍ホ聽サス、

(初メ幕府私ニ條約ヲ結ヒシヨリ、時論紛々トシテ内亂止マス、幕府制スルコト能ハス、天下ノ變、皆是ヨリ起ランコトヲ恐ル、是ニ至テ遂ニ三港ヲ開クノ勅許ヲ得タリ、)

第五章 武備

元和元年大阪ノ陣畢リテ後、家康命ヲ諸國ニ傳ヘ、一萬石ノ大名ハ、二百人ノ兵ヲ率キルヲ從軍ノ制トス、蓋シ德川氏ノ制ハ、概ネ織田、豊臣兩氏ノ遺制ニ依リ、六十餘州ヲ割キ、以テ群雄子弟ニ與ヘ、上ハ百萬石ヨリ下一萬石ニ至ルマテ、總テ之ヲ藩ト稱ス、所謂藩屏ノ謂ナリ、幕府ノ麾下ノ士、十五歳以上六十歳以下ハ、

皆兵務ニ編入セリ、二年五百石以上一萬石以下ノ兵賦ヲ定ム、寛永十年又改メテ、千石ヨリ十萬石以下ノ兵役ヲ定ム、

嘉永二年、江川太郎左衛門、意見三事ヲ建言シテ、西洋ノ兵制ニ准シ、且ツ砲臺ヲ築キ軍艦ヲ造ランコトヲ請フ、幕府之ニ從フ、

安政中、高島四郎太夫、其ノ門人等ト舟ニ乘シテ發砲ノ技ヲ試ム、其ノ後麾下ノ兵士、皆西洋ノ兵制ニ倣ヒ、古來刀槍、歩戰ノ隊伍ヲ廢シテ、專ラ砲陣銃隊ヲ練習ス、是ヨリ舊制條革マリ、兵制遂ニ一新セリ、

第六章 宗教

第一 佛教

織田、豊臣ノ二氏ヲ經テ、名山巨刹モ兵燹ニ罹リ、宗教爲メニ衰ヘタリ、殊ニ延曆寺ノ衰微セルコト甚シ、家康大權ヲ握ルニ及ヒ、三千石ノ地ヲ賜ヒテ、王城鎮護ノ祈禱ヲ復セシム、僧天海ハ才識聰敏、衆ニ超エタ

リシカハ、家康厚ク崇信シ、天台ノ座主トナス、是ニ於テ天台宗復タ盛ナリ、天海寂スルニ及ヒテ、朝廷慈眼大師ノ號ヲ賜フ、世以テ榮ト爲ス、其ノ他諸寺ニ舊守護、舊地頭ノ寄附セル地ノ證迹アル者ハ、改メテ之ヲ附與シ、又特ニ地ヲ寄スルモアリ、故ニ一旦荒廢ニ屬セルモ、亦爲ニ再ヒ興レリ、

寛永中肥前肥後ノ民、亂ヲ作ス、此ノ亂ヲ作セシ者ハ、皆耶蘇宗ノ信徒ナリ、家光因テ嚴ニ耶蘇宗ヲ禁シテ、他宗ニ歸セシメ、若シ命ヲ奉セサル者ハ、之ヲ刑ニ處ス、諸宗ノ信徒モ亦各々カメテ己カ宗門ニ入ラシム、終ニ天下ニ耶蘇宗ヲ信スル者ナキニ至リテ、諸宗ノ信徒ハ、海内ニ耶蘇宗ヲ信スル徒ノナキヲ保證スルモノ、如シ、

家綱、足利氏ノ故事ニ准シ、禪刹ヲ建立セント欲シ、道徳優長ノ僧ヲ明ニ求ム、僧隱元、因テ本邦ニ來リ、寺ヲ山城ノ宇治ニ創ム、黃蘗山萬福寺ト云フ、以テ禪

ノ一派ヲ爲ス、之ヲ臨濟正宗ト云フ、世人之ヲ黃蘗宗ト云フ、

綱吉、貞享三年ヲ以テ關東ニ於テ、德川氏ニ緣故アル淨土宗ノ佛寺十八(増上寺、光明寺、傳通院、大光院、常福寺、弘經寺、幡隨院、大善寺、大巖寺、勝願寺、大念寺、靈巖寺、蓮馨寺、淨國寺、靈山寺、弘經寺、東漸寺、善導寺)ヲ定メテ檀林ト爲ス、初メ家康淨土宗ノ巨刹十八(寺ノ名不詳)ヲ撰ミ檀林ト稱ス、此ノ年綱吉之ヲ改定セリ、

第二 耶蘇教

耶蘇教ハ當時天主教ト云フ、耶蘇舊教ノ稱ナリ、天正十年、肥前ノ大付純伊、有馬豊氏等、書信方物ヲ私ニ羅馬十三世法王ニ贈ル、文祿中、外征多事ナルヲ以テ耶蘇ノ禁弛フ、天下定マリテ外交互市大ニ啓ケ、慶長十一年、占城暹羅ノ船、長崎ニ來ル、蘭人ヤンようヲ窺ニ耶蘇ノ宗國タルコトヲ告ク、仍テ之ヲ却ケ、耶

蘇教ヲ嚴禁シ、蠻人ヲ海外ニ逐ヒ、宗徒ヲ諭シ、やん
ようすナ江戶ノ郭内ニ寓キテ厚ク之ヲ待ス、元和五年、
耶穌信徒五十七人ヲ六條磔ニ殺シ、其ノ他、口ニ信セ
スト稱スル徒ニハ、耶穌ノ祖像ヲ蹂躪セシメテ教法ノ
斥クヘキヲ示ス、其ノ後又鎮西ノ人ヲシテ、毎歲耶穌
ノ像ヲ踏マシメ、以テ宗教ヲ絶ツ、是ヲ踏繪ト云フ、

寛永十四年八月、益田時貞兵ヲ肥前ノ天草ニ起ス、初
メ小西行長ノ遺臣等、耶穌教ヲ唱ヘテ人民ヲ煽動ス、
島原ヲ製ヒテ之ニ據ルニ及ヒテ、衆時貞ヲ推シテ謀主
ト爲シ、益郡邑ヲ侵奪ス、其ノ宗徒ノ男女殆ト三萬八
千餘人ナリ、幕府西海ノ諸藩ニ命シテ之ヲ討タシム、
板倉重昌監軍タリ、賊堅守シテ屈セス、諸藩多ク爲ニ
士卒ヲ亡フ、幕府松平信綱、戸田一西等ヲシテ更ラニ
往カシム、十五年正月、重昌、信綱等ノ未ダ至ラサル
間ニ之ヲ破ラント欲シ、士卒ニ先ンシテ進ミ、丸ニ中
リテ斃ル、二月細川忠利、鍋島勝茂等奮登シテ城門ヲ

破リテ入ル、諸將之ニ踵ク、賊拒クコト能ハス、城遂
ニ陷ル、斬首三萬七千餘級ナリ、爾來耶穌教ノ禁益
嚴ニシテ、固ク海外ノ來航ヲ絶チ、或ハ外人ヲ逐ヒ、
或ハ宗徒ヲ磔殺スルニ至レリ、

第七章 民業及ヒ美術

第一 民業

農 徳川家康以來、幕府特ニ農事ヲ獎勵シテ、多ク
池塘ヲ修メ、兼テ馬牛ノ畜産ヲ勸メシカハ、農牧ノ業
頓ニ隆盛ヲ致セリ、而シテ蠶桑ノ業ニ至リテハ、特ニ
之ヲ獎勵セサリシニ、安政五年ニ至リ、幕府外邦ノ買
易ヲ許セシヨリ、蠶絲及ヒ茶ヲ外邦ニ輸出ス、是ヨリ
後諸國競ヒテ養蠶製茶ノ業ヲ起セリ、
工 徳川氏執政以來、天下昌平ニ屬セシカハ、諸工
業並ニ皆進歩セリ、其ノ建築、神社ニ於テハ日光ノ東
照宮ノ如キ、佛寺ニ於テハ江戶ノ寛永寺、増上寺ノ如
キ、以テ其ノ模範トスヘキナリ、

當時、船舶、橋梁ノ工業モ亦進歩シタリ、特ニ大ナル
アリ、長キアリ、所謂安宅丸(徳川氏ノ船ノ名)ノ錦
帶橋、矢矧橋、永代橋ノ如キ是ナリ、
織物ノ織工ハ、幕府節儉ノ令ヲ出シテ、衣服ノ料ニ供
スルノ制、甚タ嚴ナリシモ昌平ノ久シキ、竟ニ弛ヒテ
私ニ需用スル者多シ、故チ以テ諸國ノ産出最モ多シ、
就中京師西陣ノ織物、錦、綾及ヒ琥珀織、和泉ノ羽
重、甲斐ノ甲斐絹、上野桐生ノ男女帶地、縮緬、紗、
綾ノ類、下野ノ眞岡木綿布、足利ノ縮木綿布、豊前ノ
小倉織、筑前ノ博多織、武藏ノ秩父絹、五日市織、信
濃ノ上田絹、美濃ノ岐阜縮緬、越後ノ上布、薩摩ノ飛
白上布、下總ノ結城紬、伊豆ノ八丈紬、陸奥ノ精好平、
近江ノ長濱縮緬、丹後ノ縮緬等ヲ以テ、最モ著名ナル
モノトス、

商 前期ノ季、豊臣氏天下ヲ制スルニ及ヒテ、治ヲ
大坂ニ置キシヨリ、其ノ地全國中ノ都會トナリテ、商

日本誌 史紀 民業及ヒ美術 民業

業ノ中心ナリシヲ、徳川氏幕府ヲ江戶ニ開キテヨリ、
京師、大坂及ヒ近江、伊勢等ノ豪賈、店ヲ玆ニ移スモ
ノ多シ、爾來天下ノ大都會トナリテ、明暦中ニ至リテ
ハ、八百八町ト云フ、商業最モ繁榮ニ趣ケリ、
豊臣氏ノ時(天正中)諸商業、免役鑑札ヲ買人ニ與フ
徳川氏ノ初、其ノ制ヲ承ケタリシカ、元祿中ニ至リ間
屋仲間十組ヲ設ケテ、商業回船ノ範圍ヲ定ム、既ニシ
テ、十三組トナリ、文化中ニ至リ更ニ増加シテ六十八
組トナル、然レトモ尙ホ舊稱ヲ襲ヒテ、組間屋十仲間
ト呼ヘリ、天保十二年、老中水野忠邦、庶政ヲ改革ス
ルニ際シ、曾テ問屋等ノ不正ノ積弊アルヲ譴メ、咸ク
之ヲ廢シ、自由買賣ヲ許セシカ幾モナクシテ、忠邦職
罷ミ、阿部正弘之ニ代ル、正弘之ヲ舊制ニ復セリ、
外國貿易ハ前期ニ異ナラス、豊臣氏ノ時ばたに(馬
來半島中ノ一部)ノ主、書ヲ豊臣氏ニ致シテ通商ヲ乞
フ、慶長年中徳川氏之ニ答翰ヲ贈リ、以テ其ノ請ヲ容

ル、五年英蘭ノ商賈來リテ互市ヲ請フ、家康亦之ヲ許ス、時ニ船破レテ歸ルコトハ能ス、依テ英人あんじん蘭人やんようす等江戸ニ留任ス、現今八代洲町(やんようす居留ノ近傍)ノ地名、東京市中ニ存セリ、其ノ後安南、柬埔寨、明、朝鮮等ノ使來リ、尋テ交通互市ノ國トナル、蓋シ朝鮮ハ徳川氏ニ至テ和議成ル、故ニ此ニ至ル、

慶長十四年、丁銀ヲ以テ貿易用ノ通貨ト爲ス、十六年長崎ヲ以テ外邦互市ノ地ト定ム、十八年英國ト通商條例ヲ定ム、寛永二年沿海貿易ヲ明國ニ特許ス、七年英人商利ナキヲ以テ通商ヲ辭ス、十二年明商ニ令シテ長崎ヲ限リ交易セシメ、十三年外邦人ノ長崎ニ僑居スルヲ禁シ、更ニ出島ヲ築キテ移ス、蓋シ耶穌教ニ關係アルヲ以テナリ、延寶元年英商來リテ再ヒ通商ヲ請フ許サス、貞享二年長崎ノ市法賣買ヲ罷メテ、入札賣買ト爲ス、是ヨリ先明亡ヒテ清起ル、依テ清、蘭及ヒ朝鮮

ノ市互銀額、並ニ往反船船ノ數ヲ定ム、安政中ニ至リ、米、蘭、英、佛、魯ノ五國ト條約ヲ交談シテ、神奈川(後横濱)港等ヲ開ク、

本期商界ノ通貨ハ、豐臣氏執政ノ時、鑄錢ハ永樂錢一ニ對スル四ノ率ヲ以テ通用セシメシカト、尙ホ擇錢ノ弊アリシニ、徳川氏執政ノ時ニ至リ、竟ニ永樂錢ヲ廢シ、寛永十二年ヲ以テ始テ錢ヲ鑄ル、文ニ寛永通貨ト云フ、又大小判金ヲ發行ス、(是ヨリ大判小判及ビ丁銀行ハル)是ヨリ商界ノ通貨復タ一變セリ、爾來一步ニ朱ノ金銀貨、小玉銀及ヒ青銅錢、鐵錢ヲ鑄造ス、(金銀一兩ハ、金銀四步、金銀一步ハ、金銀四朱)元祿以降諸藩漸ク困弊シテ國用足ラズ、依テ各自楮幣ヲ造ル、之ヲ藩札ト云フ、上十匁ヨリ下二分ニ至ル、是ヨリ金、銀、銅、鐵、貨幣、紙幣並ヒ行ハル、貨制紊亂シテ以テ明治ノ革新ニ至レリ、

第二 美術

繪畫 徳川氏執政以來、畫工ニハ狩野守信アリ、探幽齋ト號ス、守信祖先元信以來ノ畫風ヲ一變シテ、大ニ世ニ用キラル、狩野氏ノ畫是ニ於テ又更ニ盛ニシテ、其ノ畫ニアラサレバ人之ヲ賞セサルニ至レリ、大和繪ニ土佐光吉アリ、光吉ノ子光則、廣通(如慶)ト云フ、業ヲ繼キテ名アリ、光則ノ子光起、廣通ノ子廣澄(其慶)亦家聲ヲ墜サス、支那ノ人、伊予九ハ享保十一年ヲ以テ長崎ニ來リ、以來往來スルコト二十餘年ナリ、伊九、南宗畫ヲ能クス、池野露樵(大雅堂ト號ス)畫法ヲ伊九ニ學ヒ、頗ル精妙ニ至ル、後世霞樵ヲ以テ、本邦南宗畫ノ祖ト爲ス、南宗畫興ルニ及ヒテ、北宗畫及ヒ狩野氏畫漸ク衰フ、文化、文政ノ間ニ至リテ谷文晁アリ、名聲一時ニ振フ、文晁ノ畫ハ南北ニ宗ヲ合ス、後世文晁ヲ以テ南北合宗ノ祖ト爲ス、圓山應舉ハ石田友汀ニ學ヒテ寫生ヲ旨トシ、後自ラ一家ヲナス、渡邊華山ハ谷氏ヨリ出テ寫意

ヲ旨トシ、更ニ一家ヲ成ス、圓山氏、渡邊氏ノ畫世ニ行ハル、ニ及ヒテ、谷氏ノ畫風漸ク衰フ、油繪ヲ能ク作ル者ニハ、山田右衛門佐アリ、右衛門佐ハ元耶穌教ノ信徒ニシテ、寛永中肥前ノ原ノ城ニ入りテ幕府ニ抗セシカト、城陷リ後故アリテ罪ヲ宥メラレシ者ナリ、明曆三年、江戸大災アリテ後屢、火ヲ失ス、時ニ老中松平信綱以爲ヘラク、此ノ災ヤ多ク烟草ヲ嗜ム者ノ火ヲ失スルニ出ツルナラント、因テ右衛門佐ヲ召シテ、烟草ヲ好ム者ノ、窶ニ火ヲ蓄藏シテ以テ之ヲ弄シ、誤テ床席ヲ燒ク狀、及ヒ其ノ者ノ刑セラル、狀ヲ圖セシメ、以テ之ヲ衆ニ示シ、將來ヲ懲シタリ、近世作ル所ノ油繪ハ、司馬江漢ヲ以テ始トス、江漢初メ狩野氏ニ學ヒ、後洋畫ニ入ル、又銅板ノ技ヲ創傳ス、刻スル所、天球全圖、地球全圖及ヒ東都八景等アリ、

慶長年間、岩佐又兵衛勝重アリ、巧ニ當世ノ風俗ヲ摸

ス、天和貞享ノ頃、菱川師宣アリ、好ミテ風俗畫ヲ摸寫シテ、終ニ一家ヲ爲ス、元祿中英一蝶、古山師重、鳥居清信アリ、正徳、享保ノ頃ニ至リ、西川祐信、宮川長春、奥村正信、羽川珍重アリ、並ニ皆善ク士女ヲ描ク、寶曆中鈴木春信アリ、明和中勝川春章、北尾重政アリ、文化中歌川豊國、葛飾北齋、歸齋北馬、喜多川歌麿アリ、天保中歌川國芳アリ、並ニ風俗畫ニ秀ツ時人浮世繪師ト云フ、

書法 書家ニ北村三立アリ、雪山ト號ス、細井知慎ハ廣澤ト號ス、書法ヲ雪山ニ學ヒテ、遂ニ一家ヲ成セリ、本邦ニ於テ書家ト稱スル者ハ、北村細井ノ二氏ヨリ始マル、細井氏ノ門人ニ松下鳥石、關思恭、三井親和、平林淳信アリ、此ノ後市河米庵、卷菱湖出ツ米庵ハ殊ニ書法ニ精シ、

陶器 徳川氏執政以來、磁器窯治ノ技、進歩シ瀬戸燒、特ニ盛ナリ、世人陶器ヲ稱シテ瀬戸物ト云フ、其彫刻ニ至リテハ、漸次ニ衰頽セリ、

音樂 徳川氏執政ノ時、猿樂ノ行ハル、コト前期ノ如シ、但シ此ノ樂ハ武家専ラ之ヲ賞美シ、民間ニハ狂言芝居ヲ喜ヘリ、芝居ニ二種アリテ、一チ歌舞伎芝居ト云ヒ、一チ操芝居ト云フ、其ノ歌舞伎芝居ハ、演劇ニ絃歌ヲ和シ、後ニハ淨瑠璃ヲ和ス、操芝居ハ淨瑠璃ニ從ヒテ、木偶ヲ舞ハス等ノ異アルノミ、爾來單ニ淨瑠璃ノミヲ詠ヒ、俳優或ハ人形ヲ用キシテ、曲節シテ之ヲ三絃ニ和ス、是ヲ義太夫節ト云フ、爾來一變シテ一中節トナリ、又加藤節トナリ流レテ常盤津節トナリ其派分レテ豊後節トナル、其ノ後新内節ハ豊後節ヨリ出テ、富本節ハ常盤津節ヨリ出テ、清元節ハ富本節ヨリ出ツ、並ニ流行ノ俗曲ナリ、

第八章 風俗

衣服 元和寛永ノ際ハ武士ト雖、平常肩衣上下ヲ着スル者ハ、甚々稀ニシテ其ノ婦女子ニ至リテハ、歩行

日本誌 史紀 風俗

ノ他清水、粟田(京師)有田、唐津(肥前)、九谷(加賀)、志賀(對馬)、志戸呂(遠江)、等ノ陶器、相尋テ世ニ顯ハル、

漆器 慶長以來、蒔繪、螺鈿等ノ漆工術、亦大ニ擴張シテ、其匠名技頗ル多シ、就中幕府ノ器具ヲ製ル者ハ、皆御塗師、御蒔繪師等ノ稱アリ、

當時ノ蒔繪ヲ稱シテ、常憲院(綱吉)時代蒔繪ト云ヒテ、以テ大ニ之ヲ賞ス、當時漆器ヲ出ス地甚々多シ、下野ノ日光、岩代ノ會津、陸奥ノ南部、津輕、若狹ノ小濱、讃岐ノ象谷、紀伊ノ黒江、京師ノ根來、等アリテ、各々今ニ賞セラル、

彫刻 寛永中、左甚五郎アリ、山城ノ伏見ノ人ナリ、彫工ノ妙手ニシテ、自ラ發明スル所多シ、其ノ子宗心、宗心ノ子勝政並ニ名聲アリ、金、玉、木、石等ノ彫刻、圖書ノ刊刻等ハ、歲月ニ精微ヲ盡ス、然レトモ佛像ノ

スルニ麻布衣ヲ戴キテ、以テ其ノ面ヲ覆フ、風俗最モ質素ナリ、サレハ民間ニ於テハ、男女並ニ木綿布、麻布ヲ衣トシ、里正(庄屋トモ名主トモ、イブ)ト雖、尙ホ此ノ如シ、寛永十一年家光衣服ノ制ヲ出シテ徒士、若黨、弓、鐵砲ノ者ハ、絹袖ヨリ以上ノ品ヲ着スルコトヲ禁シ、農工商ハ悉ク布、木綿布ヲ用キシメ、其ノ婦女子ノ如キハ、布類ヨリ袖ニ至リテ是ヲ許シタリ、明暦三年江戸大災アリテ、後風俗一變シ、人々奢侈ニ趨リ、旗下ノ士及ヒ大名ノ家士モ、常ニ肩衣ヲ着シ、其ノ婦女子ハ面ヲ覆フニ麻布ヲ以テセスシテ、皆絹帛ヲ用キ、帶ハ博大ナルヲ好ミ、七絲、緞子等ノ類、皆兩截シテ其ノ一ヲ用キル、庶人モ亦漸ク之ニ倣フ、爾來衣ノ袖ハ滋々博大ニ、衣ノ丈ハ彌々長ク婦女子ノ帶ハ七絲、緞子ノ類、遂ニ兩截セスシテ全幅ヲ用キルニ至リ、(後世所謂萬留於比ナリ)楠、梓ハ瑋瑁ヲ用キテ材ト爲ス

モノアリ、天保年間ニ至リ家慶令シテ曰ク、近世衣服華美ヲ盡ス、斯ノ如クニシテ禁セスハ、遂ニ其ノ極ナキニ至ラン、婦女子ノ衣ハ、其ノ表ノ料細チセル者ハ價銀三百匁、華章ヲ染出セル者ハ價銀百五十匁ヲ以テ限ト爲シ、瑠瑠ヲ以テ櫛笄ヲ作り、天窓絨ヲ以テ木屐ノ緒ト爲スカカキハ、嚴ニ之ヲ禁スト、而レトモ遂ニ熄マス、當時用キル所ノ羽織ハ、道服(僧徒ノ着ル道服トハ異ニシテ所謂ル道中着用ノ意ナリ)ノ異制ナリ、初メ道服ハ乘馬ノ時、塵又ハ濕氣ヲ防カンカタメニ用キタリ、寛永ノ頃ニ至リテ、人羽織ヲ用キル、後一般ノ用トナルノミナラス、遂ニ禮服ノ如クナレリ、其ノ長短定リナシ、其ノ短キチ蝙蝠羽織ト云ヒ、長キチ曳摺羽織ト云フ、

元和、寛永ノ頃ハ、革足袋ヲ用ヒタリ、木綿足袋ハ細川忠興ノ母ノ創意ナリ、忠興ハ老シテ名ヲ宗立ト改メ、號ヲ三齋ト云ヘリ、宗立茶ノ湯ヲ好ム、其ノ母、

宗立ノ其ノ席ニ在リテ足ノ冷エシコトヲ憂フ、而シテ當時用キル所ノ革足袋ハ、其ノ席ニ適セス、因テ更ニ意匠ヲ用キテ木綿布ヲ以テ、足袋ヲ作りテ宗立ニ與フ、時ノ人ノ之ヲ數寄屋足袋ト云フ、其ノ後人皆木綿足袋ヲ用キル、木綿足袋ハ作ルニ易クシテ、洗滌ニ便ナルカ故ナリ、革足袋遂ニ大ニ廢レタリ、

飲食 慶長十年、南蠻人始テ烟草ノ種子ヲ傳フ、(烟草ノ我カ邦ニ入りシハ、天正ノ初年ニアリ)幕府烟草ハ人ニ害アリトシテ、令シテ喫烟スルコトヲ禁ス、然トモ年序ヲ經テ弛フ、寛文七年ニ至リ烟草ヲ良田ニ種ウルコトヲ禁ス、蓋シ農業ヲ妨クレハナリ、後世竟ニ制スル克ハス、全國ニ及ヒ男女トモ、之ヲ喫ハサルモノ尠キニ至レリ、

寛永ノ季、琉球始テ西瓜ヲ貢セシヨリ、諸國之ヲ植エテ、夏時ニ炎暑ヲ凌クタメノ一菓トナル、

同シ頃、諸國邑里ニ於テ酒ヲ賣ルコト起リシカハ、家

光令ヲ出シテ之ヲ禁シタリ、又庶民ハ常食ニ大小麥粟、及ヒ其ノ他雜穀ヲ用キシメテ、米ヲ喰ハセラシム、元祿九年綱吉天下ニ令シテ曰ク、酒ニ酔フ者多ク過失アリ、多飲ヲ爲スコトナカレ、若シ之ヲ飲ムコト度ニ過キ禮ヲ失ヒテ、後之ヲ酒ニ託ストモ其ノ罪ヲ宥メスト、又曰ク沽酒戸ハ漸々減スルヲ要ス、天下此ノ意ヲ體スヘシト、

砂糖ハ古來外邦ノ輸入ヲ仰キシニ、吉宗令シテ甘蔗ヲ植シメテ、始テ砂糖ヲ製セシム、青木文藏命ヲ奉シテ之ニ從事シ、大ニ功アリ、世ニ甘蔗先生ト稱ス、其ノ後寛政二年ニ至リテ、駿河ノ人始テ白砂糖ヲ製ス、爾來乾菓子蒸菓子ヲ製スルニ、砂糖ヲ用キルモノ多シ、牛肉ヲ食物ニ充テサラシメシハ、徳川ノ制ナリシカ、安政六年港ヲ横濱ニ開キテヨリ以來、人之ヲ以テ上味トス、其ノ他外邦ノ飲食ヲ賞スルコト起レリ、

住居 家康ハ邸宅ノ壯麗ナルヲ好マサレハ、幕府ヲ

江戸ニ開クニ至リテ、其ノ城營ヲ修理スルニ裝飾ヲ加フルコトナシ、諸大名ハ之ニ反シ、尙ホ豊臣氏ノ舊ニ倣ヒテ華麗ヲ極メシカハ、幕府ト大名ノ第宅、精粗甚タ異ナリキ、大名ノ第宅ノ壯麗ナル、其ノ一二ヲ云ハ、加藤忠廣ノ第宅ハ玄關及ヒ書院ハ、貼金ノ繪ノ間ニテ、其ノ門ハ間口十間ノ矢倉門ニ、扉ヲ五頭彫リ金箔ヲ貼シタリ、葺ク所ノ瓦ハ玄關書院ヨリ長屋ニ至ルマテ、桔梗ノ紋ニ金ヲ貼セリ、其ノ他五萬石以上ノ大名ノ玄關及ヒ書院ハ、貼金ノ繪ノ間ニアラサルハナシ、以テ其ノ一斑ヲ見ルヘシ、又三家ニテハ御成門ト稱シ、唐破風作りニシ、物象ヲ彫リ金ヲ貼シテ善美ヲ盡セリ、而トモ旗下ノ士ニ至リテハ甚タ粗ナリ、殊ニ二千石以下ノ家屋ハ、大率草舎ニシテ竹葺ヲ周垣トセシニ、明曆大災ノ後ハ、諸大名ノ邸宅ハ甚タ往時ニ及ハサルニ旗下ノ士ノ家屋ハ、之ニ反シテ佳麗ヲ加ヘタリ、農家ノ景況ハ大率疊席ナシ、床ヲ設ケ疊席ヲ敷ケルハ、唯

村長ト富豪ノ民トノミ、又初メ武士ニシテ後平民ニ位スル者ニハ、幕府之ニ長屋門ヲ造ルコトヲ許ス、是ヲ世ニ浪人百姓ト云フ、後平民モ亦漸ク之ニ擬シ、其ノ富有ノ者ハ之ヲ造ルニ至レリ、

家光天下ニ令シテ曰ク、新ニ佛寺ヲ建ツヘカラス、民庶ハ各分ニ應セサル家屋ヲ作ルヘカラス、但シ市人ノ家宅ハ定制ナシ、其ノ地頭代官ノ令スル所ニ從フヘシト、家綱佛寺建築ノ法ヲ制シテ曰ク、遊行ハ京間三間ヲ限ル、但シ桁行ニ至リテハ制限ヲ立テス、若シ巴ムコトヲ得サル事故アラハ、狀ヲ寺社奉行ニ告ケテ、以テ其ノ許可ヲ受ケ、而シテ後建築スヘシト、吉宗令シテ江戸ハ邸第市肆ノ幕府ニ近キ者ハ、皆草舎ヲ更ヘテ瓦屋ト爲サシメ、陛下ノ士ニハ金ヲ貸シテ以テ改造セシム、以來金ヲ貸スコト四タヒニシテ、江戸市中ノ草舎ハ遂ニ絶エタリ、

形容 征夷大將軍タルモノ、前髪ヲ剃リシハ家光

大ニ歩ヲ進メタリ、

徳川幕府ハ家例ヲ遵守シテ、歳首ノ式ニ連歌アリ、故ニ連歌世ニ行ハレテ、和歌漸クニ廢ル、元祿中松尾桃青アリ、芭蕉ト號ス、芭蕉連歌ヲ一變シテ、俳諧ノ連歌ヲ起ス、世ニ之ヲ俳諧ト云フ、遂ニ海内ニ行ハレテ連歌爲メニ衰フ、

元祿中、荷田春滿僧契沖アリ和歌ノ廢レタルヲ起ス、享保中、賀茂貞淵、出テ古風ヲ唱フ、爾來和歌世ニ行ハル、天保年間香川景樹出ツ、其ノ詠スル所風韻新ナリ、時人之ヲ賞ス、

天明年間ニ至リテ、狂歌大ニ行ハル、四方赤良(蜀山人ト號ス)特ニ名聲アリ、天保年間ニ至リテ漸ク廢ル、流行 寶永二年、諸國ノ民競テ伊勢ノ神宮ニ詣ツ、往還絡繹トシテ晝夜絶エス、之ヲ御蔭參ト云フ、此ノ後明和八年ニ至リテ、亦此ノ如シ天保元年ニ至リテ、亦此ノ如シ、

ヲ以テ始トス、子家綱冠スルニ及ヒテ亦前髪ヲ剃ル、

是ヨリ後、士庶人ニ至ルマテ男子ハ前髪ヲ剃リテ、以テ元服ヲ表シ、女子ハ眉ヲ剃リ鐵漿ヲ以テ齒ヲ黒クスルノ外ニ、更ニ髪ヲ結フニ島田曲ヲ改メテ、狀ヲ橢圓ニ爲ス是ヲ丸曲ト云ヒテ、以テ元服ヲ表ス、耳搔簪アルハ、紀宗直ノ創意ナリ、宗直ハ中御門天皇ニ仕ヘテ、御厨子所預タリ、一和工人ヲ召シテ命シテ耳搔アル簪ヲ作ラシメ、以テ女装ニ供セシニ、此ノ簪ヤ數十年ヲ經テ、徧ク海内ニ弘マレリ、遊宴 武士ノ宴ヲ資クルニハ、多ク謠曲ヲ以テシ、和スルニ笛、鼓、太鼓ヲ用キ、民庶ノ宴ニハ時ニ行ハル、所ノ、淨瑠璃以下ノ俗曲ヲ用キ、或ハ舞子(小女舞妓)ヲ呼ヒテ舞ハシメ、以テ興ヲ資ク、(音樂ノ部ヲ合看スヘシ)後之ヲ藝者ト云フ、

詩歌 詩ハ徳川氏執政ノ季世、文化年間ニ至リテ山本北山、大窪天民、賴春水、龜田鵬齋、賴襄等出テ、

延寶ノ比ニハ、江戸ノ市中ニ躍舞行ハレ、舉テ華美ヲ盡シ、大ニ財ヲ糜スルヲ以テ、幕府之ヲ禁ス、元文ノ頃、風俗漸ク舉グルコト大ニ行ハレ、士民爭ヒテ巨大ノ製ヲ爲ス、

一般ノ風俗 慶長元和ノ際ハ、庶人ノ擅ニ刀ヲ帶ヒシカハ、秀忠令シテ之ヲ禁シ、且ツ粗暴無禮ヲ戒ム、是ニ於テ民庶ノ風俗漸ク淳朴ニ歸ス、然レトモ年序ヲ經ルニ從ヒテ弛ヒシカハ、家綱又之ヲ禁セリ、安政年間ニ至リテ、家定海外ノ諸國ト通スルニ及ヒ、攘夷ノ說起リテ喧シ、時ニ庶人ハ刀ヲ帶ヒテ武士ニ混スルアリ、武士ハ刀ヲ脱シテ庶人ニ交ルアリ、其ノ體一ナラス、

慶長元和ノ當時、武士ノ髭ヲ剃ルアリ、是ヨリ先東國ノ人、髭ノ少キ者ヲ目シテ怯弱ノ者トス、是ニ至リテ好テ之ヲ剃ルニ至リシモ、亦風俗ノ變セルナリ、慶長元和已來、庶人ノ婦女女子ノ結髮ニ、吹上、兵庫、

島田、角髻、勝山、丸髻、髮搔搔等ノ稱アリテ、時ニ隨テ其ノ様モ亦變遷アリ、公武ノ婦女子ハ、尙ホ舊風ヲ存シテ昔ニ垂ル、之ヲ下ケ髮ト云ヘリ、商家ノ婦女ハ、都鄙並ニ島田髮搔ノ二様ヲ用キル、蓋シ其ノ島田、兵庫ハ皆宿驛ノ遊妓等ノ風ニ倣フモノナリ、又勝山曲ハ江戸吉原ノ遊娼、勝山カ好ミノ鬘ヨリ出シモノナリ、

元和寛永ノ比、上巳ノ日(三月三日)女兒アル家ニハ、雛人形ヲ飾リテ弄ヒ、端午ノ日(五月五日)男兒アル家ニハ、必ス章幟ヲ門前ニ樹テ、之ヲ祝フコト、一般ノ風俗トナレリ、又端午ノ日勇壯ナル戯ヲ爲スコトアリ、

元和ヨリ寛文ニ至リテ、殉死ノ風大ニ行ハル、家綱其ノ非道ヲ論シテ之ヲ嚴禁セリ、但シ殉死ハ武家ノ間ニ止マリテ、四民一般ノ風俗ニアラス、

天和ノ頃、頭巾流行シ、女子ノ歩行スルニ絹ノ頭巾ヲ

以テ面ヲ覆ヒ、又綿ヲ以テ包ム、男子ハ編笠又ハ深帽子ヲ被リテ面ヲ覆ヘリ、寛保三年江戸ノ市中盜賊多カリシカハ、總テ男子ノ覆面ヲ禁ス、是ヨリ後覆面ノ風俗止ミタリ、

夏日婦女子ノ歩行スルニ涼傘ヲ用キル、之ヲ日傘ト云フ、日傘ハ寶曆年間ヨリ起レリ、是ヨリ先男子共ニ、襟笠及ヒ菅笠ヲ戴キシニ、此ニ至リテ女子ハ專ラ日傘ヲ用キル其ノ後男子モ亦之ヲ用キルニ至ル、

松平越中守定信ハ、家齊ヲ輔ケテ職、老中ニ居リ、定信、致仕シテ後家齊漸ク政務ニ怠リ、專ラ奢侈ヲ務メシカハ、天下ノ人亦奢侈ニ趨レリ、家慶令シテ嚴ニ奢侈ヲ禁ス、之ヲ御趣意ト云フ、時人陽ニ遵奉スト雖トモ、陰ニ令ノ嚴ナルヲ謗ル、

第八編 第十期

第一章 本史

第一 皇政維新

慶應三年十月幕府政權ヲ奉還ス、十一月天皇尾張、越前二藩ニ勅シテ時事ヲ建白セシム、十二月公卿、諸藩及ヒ徵士等ヲ召シテ、政體ヲ會議セシム、紛議大ニ起リテ決セス、時ニ三條實美以下五人ノ官爵ヲ復シ、舊官ヲ廢シテ、權ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置キ、有栖川煇仁親王ヲ總裁ト爲シ、三條實美、岩倉具視、中山忠能、正親町實愛等ヲ議定ト爲シ、西郷吉之助、後藤象二郎、大久保利通等ヲ參與ト爲シ、以テ政治ヲ施サシム、且ツ天下ニ詔シテ曰ク、自今巨細ノ政、朝廷ヨリ出ツ、四方其レ之ヲ體セヨト、

シテ退ク、其ノ器ニ適スレハ又四年ヲ延ス、又諸藩ヲ大中ノ三等ニ分チ、大藩ニ三人、中藩ニ二人、小藩ニ一人撰出スルヲ貢士ト云ヒ、以テ議事官ト爲ス、任限ヲ定メス、才能アル者ハ徵士ニ舉グ

三月十四日、天皇天神地祇ヲ祭リ、百官ト五事ヲ誓ヒ給フ、尋テ諸道ノ舊榜ヲ撤シ、更ニ新令五條ヲ掲グ、一ニ曰ク五倫ノ道ヲ正ス、二ニ曰ク周ク饑饉、孤獨、癡疾ヲ恤ム、三ニ曰ク人ヲ殺シ家屋ヲ燒キ財ヲ盜ム者ハ、殺戮シテ赦スナシ、四ニ曰ク結黨強訴スルコトナカレ、相率キテ田里ヲ去ルコトナカレ、五ニ曰ク耶蘇教ハ、舊ニ仍リテ禁止スト、

第二 鳥羽伏見ノ戰

明治元年、更ニ三職八局ヲ定ム、總裁局、神祇事務局、內國事務局、外國事務局、軍防事務局、會計事務局、刑法律事務局、制度事務局是ナリ、既ニシテ又徵士貢士ヲ定ム、諸藩士及ヒ朝野ヨリ撰擢シテ薦舉スルヲ徵士ト云ヒ、參與ニ任シ、又各局ノ判事ニ任ス、在職四年ニ

德川氏曩ニ毛利氏ヲ撃ツ、既ニシテ事成ク、然トモ尙ホ嫌隙アリ、會津、桑名藩等毛利氏ト並ヒ立ツコトヲ欲セス、慶應三年十月、慶喜政權ヲ王室ニ奉還スルニ及ヒテ、朝廷毛利氏ノ官爵ヲ復シ新政ヲ議ス、慶喜其ノ

議ニ與ラサルヲ怒ミテ、謂ヘラク是レ諸藩士ノ朝命ヲ
擅ニセルナラント、遂ニ松平容保(會津)松平定敬(桑
名)以下ヲ京師ニ條城ニ會シ、議シテ上書ス、曰ク嚮
ニ臣ニ勅シテ、諸藩ノ入親ヲ待チ事ヲ議セシムト、而
シテ臣九日ノ大議ニ與カルコトヲ得サルハ何ゾヤ、請
フ嚮ニ依リテ事ヲ執ラント、是ニ於テ天下大ニ慶喜ヲ
疑フ、薩、長、土、藝以下宮闕ヲ護ル、徳川氏ノ將士
亦二條城ニ據リ、屹然トシテ相對ス、人心恟々タリ、十
二月十二日夜、慶喜臣下ノ暴動ヲ鎮スト稱シ、書ヲ留
メテ俄ニ大坂ニ下ル、官軍ノ隊將伊地知正治、山田市
之丞(顯義)等大ニ之ヲ憂ヒ、相議シテ曰ク、今東軍ノ
退ク其ノ意測ルヘカラス、彼大坂ニ據リ關東ノ兵ヲ徵
シテ、海陸夾撃セハ殆ト危シ、豫メ兵ヲ丹波地方ニ置
キテ、緩急ニ備フルニ如カスト、議噸ヲ決シ、東軍ノ
舉止ヲ窺フ、是ヨリ先浪士數百、江戸ノ薩摩邸ニ潛ミ
テ隊ヲ結ヒ、夜富商ヲ掠奪ス、江戸市中巡邏、酒井忠

篤(庄内)之ヲ逮捕ス、浪士怒リテ庄内ノ屯營ヲ擊ツ、慶
喜以爲ヘラク鹿兒島藩、朝廷ト幕府トヲ離間シ亡命ヲ
嗾スト、遂ニ追捕ノ命ヲ江戸ニ下シ、其ノ邸ヲ圍ミテ
之ヲ燔カシム、是ヨリ徳川氏、島津氏相敵視ス、慶喜
薩摩ノ罪暴ヲ奏シテ、之ヲ黜ケント請フ、朝廷省ミス
、時ニ參與等相議シテ曰ク、王室新ニ政ヲ執リ經費足
ラス、依テ之ヲ徳川氏及ヒ諸藩ニ課スヘシト、詔シテ
慶喜ヲ諭シ、議定ニ列セシメントシ、慶勝(尾張)慶永
(越前)ヲシテ之ヲ召サシム、二人大坂ニ至リ具ニ朝旨
ヲ宣ヘ、且ツ小隊輕裝ニシテ入朝シ、異志ナキコトヲ
表セシム、
明治元年正月、勅使復命シテ慶喜天旨ヲ奉スルコトヲ
奏ス、既ニシテ會津、桑名藩等内議シテ之ニ從ヒ入朝
セント欲ス、事京師ニ聞ユ、二日薩、長ノ兵ヲ以テ伏
見、鳥羽兩道ノ關ヲ塞カシム、伊地知正治、山田市之
丞等請ヒテ曰ク、大坂ノ動止常ナラス、大軍必ス關ヲ

排カシ、願ハクハ隨機專決ヲ許サレシコトヲ、朝廷
乃チ令シテ曰ク、慶喜大兵ヲ以テ入朝スルコトヲ許サ
ス、會津、桑名藩以下固ヨリ入京ヲ禁ス、如シ命ヲ用
キスハ便宜事ニ從フヘシト、官軍關ヲ守ル者、凡ソ六
千五百、東軍號シテ三萬ト稱ス、三日東軍ノ使者、瀧川
具知來リテ二關ヲ過キント請フ許サス、具知曰ク寡君
朝命ヲ蒙リテ入朝セント欲ス、公等之ヲ拒マハ、當ニ
兵力ヲ以テ過クヘシト、禮セスシテ去ル、尋テ大兵進
撃ス、官軍憤ヲ發シテ拒キ、遂ニ之ヲ走ラズ、此ノ夜
東軍下鳥羽ニ餐ス、官軍急ニ襲ヒテ大ニ之ヲ破ル、已
ニシテ遊軍馳セテ之ヲ援フ、官軍殆ト支フヘカラス、
然レトモ奮戰シテ遂ニ復タ之ヲ敗ル、四日東軍大舉シ
テ兩道ニ逼ル、官軍ノ將士多ク之ニ死スト雖モ、屈セ
スシテ相抗ス、時ニ總督仁和寺宮、嘉彰親王錦旗ヲ樹テ
進ム、官軍大ニ振ヒ、勢ニ乘シテ之ヲ破ル、東軍退キ
テ淀城ニ入ル、五日官軍淀ヲ攻メテ之ヲ拔ク、東軍又

退キテ橋本ニ保ツ、初メ津藩(藤堂)ノ兵東軍ノ爲ニ山
崎ノ關ヲ守ル、官軍順逆ヲ説キテ之ヲ降ス、東軍未ダ
知ラサルナリ、六日橋本ニ逼ル、兩軍戰方ニ酣ナルニ
及ヒ、津藩ノ兵、山崎ヨリ進テ東軍ヲ橫撃シ、榴彈ヲ
牙營ニ放ツ、是ニ於テ東軍大敗シ死傷算ナシ、竟ニ大
坂ニ走ル、時ニ慶喜以下狼狽シ、回陽經ニ乘シテ江戸
ニ走ル、朝廷二條城ヲ以テ政府ト爲ス、此ノ役薩、長
ノ二藩寡ヲ以テ大兵ニ當リ、將士死スル者最モ多シ、
而レトモ速ニ軍功ヲ奏ス、故ニ兩藩ノ勇武益々天下ニ
顯ハル、九日總督大坂ニ至リテ之ヲ定ム、當時諸藩或
ハ勤王ヲ議シ、佐幕ヲ論シ、一時藩論沸騰ス、是ニ至
リテ順ニ歸スルモノ多シ、已ニシテ容保國ニ就キ、定
敬等東北ニ潛匿シ、向背一ナラス、十二日慶喜以下ノ
官爵ヲ削リ、有栖川宮熾仁親王ヲ征東總督ト爲シ、大
ニ東征ノ師ヲ起ス、二月二十八日親征ノ詔ヲ發シ、三
月大坂ニ幸シ、水陸ノ兵ヲ分チテ將ニ江戸ヲ攻メント

ス、絶伊ノ士、江戸ニ在ル者、近藤勇等佐幕ヲ首唱ス、
徳川氏ノ將士江戸城ニ會シテ攻守ヲ議ス、慶喜時ニ非
ナ悔イ、恭順シテ衆議ヲ斥ケ、密旨ヲ勝安房、大久保一
翁等ニ授ケテ將士ヲ諭サシメ、遂ニ上野寛永寺（東京
忍岡）ニ屏居ス、將士釋ハス、往々籍ヲ脱シテ隊ヲ編
ム、彰義、誠忠、純義、草風、衝鋒、回天、七聯、傳
習、遊習、遊撃、進撃等ノ名アリ、或ハ常陸下野ニ走
リ、或ハ甲斐越後ニ奔ル、六日山道ノ官軍信濃ヲ畧シ、
進ミテ甲斐ヲ徇フ、熾仁親王駿河ニ至リ、東海東山ノ
軍ニ令シテ江戸ヲ伐タシム、時ニ慶喜寛永寺ニ在リ、謹
愼罪ヲ俟ツ、輪王寺宮公現法親王問ミテ爲ニ哀ヲ乞フ、
和宮及ヒ天璋院等、各女使ヲ海道ニ馳セ、往來相望ム、
已ニシテ海道ノ官軍品川ニ次ス、勝安房、大久保一翁
等、參謀西郷吉之助ニ見エテ、具ニ慶喜恭順ノ狀ヲ陳
ヘ、征師ヲ弭メノコトヲ乞フ、吉之助之ヲ總督ニ請フ、
總督之ヲ聽ス、是ニ於テ攻撃ヲ輟ム、四月勅使江戸城

四百九十二
ニ入ル、詔シテ江戸城及ヒ軍艦砲ヲ收メ、逆ヲ助ク
ル者ヲ斷シ、慶喜ヲ水戸ニ屏居セシム、

第三 陸奥出羽ノ役

舊幕府ノ士ノ中、慶喜ノ水戸ニ退クヲ聞キテ、意ニ不
平ヲ懷ク者アリ、江戸亡命ノ徒ト佐幕ノ徒ト、相率キ
テ二總下野ノ間ニ走リ、大鳥圭介、古屋作左衛門、秋
月登助、土方歳三等ヲ推シテ將ト爲シ、横行シテ大名
及豪富ヲ脅説シ、軍須ヲ募ル、時ニ官軍宇都宮ニアリ、
大鳥圭介等之ニ向フ、近藤勇、伏見ノ戰ニ殿シテ官軍
ヲ拒キ、驍名大ニ著ハル、敗ル、ニ及ヒテ江戸ニ歸リ、
將士大煽動シテ甲斐ニ赴キ、官軍ト勝沼ニ戰ヒ、竟ニ
敗レテ江戸ニ走ル、此ノ時勇、板橋ニアリ宇都宮ノ援
軍、香川敬三等江戸ヲ發スルニ遇ヒテ捕ヘラル、四月
十七日圭介、結城ヲ發シテ小山ニ戰ヒ、兵ヲ散布シテ
官軍ヲ狙撃シ、之ニ勝ツ、官軍抗スルコト克ハス、遂
ニ宇都宮ニ退ク、此ノ役ヤ彦根ノ兵、死傷最モ多シト

云フ、十九日賊將、秋月登助、土方歳三等純義、回天、
傳習ノ三隊ヲ以テ、味爽宇都宮ヲ攻ム、官軍之ヲ城外
ニ拒ク、登助歳三挺進シテ益々奮フ、官軍退キテ城ニ入
ル、時ニ圭介、鹿沼ヨリ出テ横撃シ、會津藩士亦三王
嶺ヲ下リテ之ニ薄ル、砲聲天地ニ震フ、官軍支フルコ
ト克ハス、遂ニ城ヲ棄テ、走ル、宇都宮全ク賊有トナ
ル、二十三日官軍大舉シテ宇都宮ヲ環攻ス、時ニ會津
ノ士、刀ヲ揮ヒテ挺進シ、縱橫刺撃ス、官軍爲ニ躊ル
、者多シ、參謀島取藩ノ部將、河田佐久馬奮志シテ衆
ヲ勵マシ、殊死シテ其ノ一角ヲ拔キ、賊ヲ殲スコト算
ナシ會士佐ノ兵亦進撃ス、賊軍潰散シテ日光山ニ走
リ、官軍遂ニ宇都宮ヲ復ス、圭介等殘兵ヲ率キテ會津
ニ投ス、

テ奥羽ニ在リ、東北ノ諸藩ヲ指揮ス、諸藩危疑シテ號
令行ハレス、秋田、津輕藩等順ニ歸シ、庄内藩ハ備強
ニシテ服セス、秋田藩士ト戰ヒテ屢之ヲ破リ、遂ニ舊
幕府ノ脱士、及仙臺ノ脱兵ト秋田ニ薄ル、時ニ九條道
孝、伊達慶邦、上杉齊憲ヲシテ檄ヲ傳ヘシメテ、奥羽
ノ諸藩ヲ召ス、南部、二本松、三春等ノ十藩之ニ會シ、
會津藩モ亦來會ス、時ニ松平容保、慶邦、齊憲ニ由リ
テ首謀ヲ誅シテ信ヲ表シ、以テ罪ヲ謝セント請フ、諸
藩爲ニ連署シテ之ヲ督將ニ請フ、督將之ヲ許サントス、
參謀世良修藏、大山格之助其ノ實ナキヲ責メテ之ヲ卻
ケ、兵ヲ促シテ會津ヲ討タントス、仙臺、米澤等ノ諸
藩、怒リテ修藏ヲ斬リ、南部以下ノ諸藩ヲ煽動ス、是
ニ於テ、奥羽十七藩、連衡シテ會津ヲ援ク、遠近騷然
タリ、是ニ於テ道孝以下仙臺ヲ去リテ秋田ニ投シ急ヲ
奏ス、朝廷大ニ驚キ慶邦以下ノ官爵ヲ削リ、益々追討ノ
兵ヲ奥羽ニ進ム、

五月官軍兵ヲ分チテ、三道ヨリ白河城ヲ攻メテ之ヲ陷ル、蓋シ白河城ハ奥羽ノ要衝ニシテ、途八方ニ通シ攻守ニ便ナリ、故ニ兩軍最モ之ヲ争ヘリ、時ニ水戸ノ奸黨、市川三左衛門、朝比奈彌太郎等、越後口ノ賊軍ニ投ス、山道ノ官軍、小千谷ヲ襲ヒテ之ヲ破リ、進テ長岡ヲ攻ム、賊大舉シテ之ヲ圍ミ援路ヲ絶ツ、官軍孤立シテ甚タ危シ、參謀黒田了介(清隆)山縣狂介(有朋)精兵ヲ以テ腹背ヲ衝ク、隊將三好軍太郎等、曉霧ニ乘シテ、兵ヲ潜メ、枚ヲ衝ミテ筑摩川ヲ濟リ、直ニ賊壘ヲ搦ク、諸軍之ニ踵キ、鼓噪シテ進ム、賊大ニ敗レテ椽尾ニ走ルアリ、會津ニ投スルアリ、官軍竟ニ長岡ヲ取ル、

六月官軍白河ニ在リ、將ニ會津ヲ攻メントス、棚倉城未タ降ラス、二十四日官軍進ミテ棚倉ヲ拔ク、賊走リテ平城ニ萃ル、七月十二日官軍ニ平城ニ薄ル、砲聲天地ヲ動シ、山嶽爲ニ崩ル、賊軍奮戦シテ之ヲ拒キテ勝タ

ス、竟ニ退キテ牙城ニ入ル、官軍亦疲レテ進マズ、此ノ夜賊城ヲ燔キテ脱走ス、是ニ於テ官軍平城ヲ取ル、此ノ城最モ險ニシテ守リ易ク攻メ難シ、故ニ昨日ノ戰、官軍ノ死傷多シ、二十一日官軍二本松ヲ陷ル、時ニ越後ノ官軍、長岡ニ在リテ會津ニ向ハントス、賊將河合繼介偵知シテ死士五百ヲ率キ、潛ニ發シテ官軍ノ間ヲ過キ、直ニ長岡ニ薄リ、火ヲ縱ツ、官軍色ヲ失フ、會津、米澤ノ兵亦其背ヲ撃ツ、官軍大ニ敗レテ死傷算ナシ、賊遂ニ長岡ヲ復ス、參謀山縣狂介曰ク、我今一步ノ進退ニ由リ形勝ノ得失アリ、豈ニ一挫折ヲ以テ軍機ヲ失フヘカランヤ、渠勝ニ狙レテ稍懈ル、一舉シテ取ルヘシト、二十九日謀シテ賊ノ假臥ヲ窺ヒ、直ニ進ミテ之ヲ之ヲ討ツ、賊兵潰亂シ守ヲ棄テ、走ル、官軍復タ長岡ヲ取ル、

輪王寺宮公現法親王時ニ仙臺ニアリ、奥羽同盟ノ諸藩益勢ヲ得、南部庄内ノ兵、日ニ秋田ヲ襲メ城下ニ逼ル、

秋田孤立シテ陷沒、且夕ニ在リ、已ニシテ官軍漸次ニ加ハリ、南部、庄内ノ兵ヲ討チテ侵地ヲ復シ、勢大ニ振フ、九條道孝以下敵地ニ在リテ艱苦セシ者、是ニ至リテ再生ノ思ヲ爲ス、時ニ中村、三春以下順ニ歸シ仙臺、南部、庄内等尙ホ屹然トシテ之ニ抗ス、八月米澤ノ兵歸順セント欲シ、守ヲ徹シテ國ニ就ク、是ヨリ先、官軍三春城ヲ攻メテ之ヲ降シ、進ミテ二本松ニ入ル、參謀伊地知正治、板垣退介等白河ニ在リ、議シテ曰ク會津ハ根蒂ナリ、仙臺、米澤ハ枝葉ナリ、宜シク先ツ根ヲ絶ツニ如カスト、乃チ仙臺ヲ伐ツト聲言シ、急ニ會津ニ向フ、初メ會津藩、兵隊ヲ編制シテ四ト爲シ、朱雀、青龍、玄武及ヒ白虎ノ四神ニ配ス、朱雀最モ強ナリ、白虎先ツ敗レ、官軍若松城ニ迫ル、入江總介等奮戦シ官軍爲メニ辟易ス、已ニシテ總介等多ク官兵ヲ殪シテ戦死シ、其ノ他老少、士女皆盡ク戦歿ス、二十四日松平定敬、大島圭介、土方歳三等米澤

ニ走ル、二十五日城兵官軍ヲ搦チ之ヲ破ル、時ニ尾、紀二藩以下ノ兵、城下ニ來リ會ス、官軍大ニ振フ、賊屢ニ乘シテ之ヲ襲フ、官軍頗ル苦ム、城將佐川官兵衛、精兵ヲ以テ決戦ス、官軍力拒シテ之ヲ卻ク、城中時ニ鐘ヲ撞クゴト日夜止マズ、彈丸雨ノ如ク注キ、鐘聲之ニ和ス、又紙爲ヲ城上ニ放チテ餘暇ヲ示ス、九月板垣退助説キテ上杉齊憲ヲ降ス、會津國境ノ戍兵皆敗レテ城ニ入ル、大島圭介等仙臺ニ走リ、榎本釜次郎(武揚)ノ軍ニ投ス、朝廷詔シテ秋田藩ヲ賞ス、蓋シ賊中ニ孤立シテ王ニ勤メ、大義ヲ唱ヘ近隣ヲ諭スヲ以テナリ、時ニ越後ノ官軍若松ニ入ル、十五日伊地知正治、山縣狂介、板垣退介等若松城ヲ圍ム、曠日變ヲ生センコトヲ恐レ、一舉シテ勝ヲ制セント欲シ、晝夜夾撃ス、城兵壁ニ要リテ死闘シ寢食ヲ得ス、疲弊シテ支フル克ハス、援糧並ニ竭キテ勢是ニ至テ屈ス、米澤藩使ヲ城中ニ遣シテ降ヲ説カシム、容

保日ク、吾薩長ノ私怨ヲ惡ミテ死守スルノミ、今已ニ
天兵ナルヲ知ル、豈ニ抗スヘケンヤト、二十二日容保
降旗ヲ城門ニ樹テ歸順ス、二十三日官軍城ニ入ル、容
保等妙國寺ニ入り、將士ハ出テ猪苗代ニ退ク、是ニ於
テ若松城陷ル、舊幕府ノ亡命ノ者、及ヒ桑名、松山、
唐津等ノ兵仙臺ニ走ル、二十八日仙臺、南部、庄内以
下相踵キテ降り、奥羽始テ平ク、

十月二日市川三左衛門、朝比奈彌太郎等水戸ニ入ル、
正黨ノ將士、奮戦シテ利アラス、詔シテ之ヲ討タシム、
二人下總ニ走ル、水戸ノ人捕ヘテ之ヲ斬ル、

第四 上野ノ戰

明治元年閏四月、朝廷德川慶喜ニ詔シテ、上野ノ兵ヲ
解散セシム、彰義隊肯セス、初メ勝安房、城池兵仗ヲ
官軍ニ納ル、ニ及ヒテ、舊幕府ノ臣、怒リテ之ヲ刺サ
ント欲シ、緒ヲ脱シテ黨ヲ結ヒ、上野寛永寺ニ據リ、自
ラ彰義隊ト稱シ、輪王寺宮公現法親王ヲ擁シテ兵ヲ擧

ノ役ヤ近傍ノ市街兵變ニ罹ル、是ヨリ後錦裂ノ威江戸
ニ震テ、

第五 函館ノ亂

明治元年十月、榎本釜次郎、松平太郎、大島圭介、荒
井郁之助、土方歳三等兵二千五百ヲ率キ、七艦ヲ以テ
東名濱ヲ發シ、遂ニ函館ニ至リ、進ミテ五稜廓ヲ拔キ、
函館ヲ取り、永井玄蕃ヲ推シテ、函館奉行トス、十一
月、榎本釜次郎等五稜廓ニアリ、大島圭介函館ニアリ、
松前ノ兵、之ヲ襲ハント欲ス、土方歳三等兵ヲ率キテ
松前ニ向ヒ、福島灣ニ入ル、松前ノ兵砲撃シテ之ヲ卻
ク、已ニシテ榎本釜次郎等亦灣ニ入りテ之ヲ戰フ、大
島圭介等陸ヨリ進ミ、以テ腹背松前ニ薄ル、時ニ松前
徳廣、江刺ニアリ、五日賊福島城ニ逼ル、城池尤モ險
ナリト雖、城兵孱弱ニシテ支フルコト克ハス、賊軍竟
ニ之ニ入ル、徳廣城陷イルト聞テ熊石ニ走ル、
十一日賊江刺ヲ取ラント欲シ、海陸並ヒ進ム、徳廣津

ケント欲ス、會津、庄内等ノ諸藩、亦遙ニ聲援ヲ爲ス、
是ニ於テ諸藩脱徒ノ戰ヒ破レテ潛伏セル者モ、亦相傳
ヘテ之ニ投ズ、鳥合ノ徒、固ヨリ規律ナキヲ以テ、遊歩
ノ際、長劔ヲ帶ヒ高履ヲ穿テ、踞傲無賴ニシテ、頗ル
威柄ヲ張ル、時ニ官軍皆衣ニ鎗符ヲ着ケテ標章トス、
人竊ニ之ヲ嘲リ、呼ヒテ鎗裂ト云フ、彰義隊ノ徒、途
ニ之ト遇ヘハ、或ハ罵詈訾シ、或ハ殺害ス、官軍憤懣止
マス、奏シテ之ヲ誅セント請フ、

五月二日、詔シテ彰義隊ヲ追討セシム、參謀大村益次
郎諸軍ヲ督ス、賊聞キテ脱ル、者少カラス、十五日官
軍上野ニ逼ル、賊兵銳ヲ悉シテ衝突ス、官軍退キテ廣
小路ニ陣ス、適風雨烈シキニ乘シ、大煩ヲ發ス、賊退
テ黒門ヲ保ツ、賊ノ別隊山王山ニアリ、俯シテ銃ヲ發
ス、彈丸雨ノ如ク下リ、礮聲ノ兵殪ル、者算ナシ、而
レトモ益進撃シテ、竟ニ之ヲ走ラス、賊退キテ山内ノ伽
藍ニ據ル、官軍火ヲ縱チテ之ヲ燒ク、斬獲甚ク、此

輕ニ走ル、十二日賊松前、五稜廓ノ兩路ヨリ進ム、其
ノ將、松岡四郎稻倉石ニ至ル、官軍險ニ據リ防戦シテ
之ヲ破ル、徳廣亦津輕ニ投ス、十四日榎本釜次郎等、
水軍ニ將トシテ、松前ヨリ江刺ニ至リテ之ヲ奪ヒ、陸
軍ノ至ルヲ俟ツ、十五日、日暮風浪大ニ起ル、賊色ヲ
失フ、榎本釜次郎等遂ニ上陸ス、十餘日ノ間、開陽艦
洋中ニ漂ヒテ竟ニ破碎ス、賊特ヲ失フ、二十二日賊熊
石ヲ取ル、是ニ於テ北地盡ク賊有トナル、榎本釜次郎
總裁トナリ、松平太郎副トナリ、荒井郁之助海軍大將
トナリ、五稜廓ヲ本營トシ、奉行ヲ函館、松前、江刺
ニ置ク、二十四日朝廷、徳川家達ノ幼冲ナルヲ以テ、
徳川昭武(水戸)ヲシテ代リテ賊艦ヲ追討セシム、慶喜
亦自ラ征討ヲ乞フ許サス、十二月賊已ニ松前全地ヲ奪
シ、五色ノ旗章ヲ船ニ樹テ、片々風ニ翻リ、市街ハ夜
ハ火燈ヲ掲ケテ、照映白日ノ如シ、榎本釜次郎等、函
館在留ノ各國領事及ヒ英、佛船將ニ托シテ書ヲ朝廷ニ

上リテ曰ク、徳川ノ家臣三千萬人ニ下ラス、而シテ今七十萬石ノ地ヲ給フ、悉ク給スルニ足ラス、由リテ草莽ヲ開拓シテ、天恩萬分ノ一ニ報セント欲シ、曩ニ舊主家達歎訴スレトモ允サレス、臣等上書シテ品川ヲ發シ此ノ地ニ來リ風雪ヲ冒シテ之ヲ開拓シ、且ツ北門ノ鎖鑰ヲラント欲ス、然ルニ府知事清水谷公考、臣等ヲ以テ賊ト爲シ、松前藩亦安ニ兵ヲ加フ、臣等止ムヲ得スシテ之ヲ破レリ、方今臣等農商業ニ安シ、既ニ山野ヲ開ク、請フ此ノ地ヲ家達ニ賜ヒ、北門ノ護衛ト爲サシメタマヘト、朝廷卻ケテ採用セス、

二年正月賊相議シテ曰ク、我カ輩上ハ天朝ノタメニ荒蕪ヲ開キ下ハ主家ノタメニ之ヲ圖ル朝廷卻ケテ賊ト爲シ、將ニ征討セントス何ソ手ヲ束子テ待ツヘケンヤト、大ニ奮激シテ防禦ノ備ヲ爲ス、

三月十日、土方堅吉、赤塚源六、中牟田倉之助等甲鐵以下八艦ヲ率キ、薩、長ノ諸軍ト函館ノ賊ヲ討ツ、二十

五日八艦南部ノ宮古港ニ入ル、賊謀シテ之ヲ知り、荒井郁之助、土方歳三等函館ヲ發ス、洋中颯ニ遇ヒテ散逸シ、一艦宮古港ニ達ス、適官艦碇泊スルヲ見、急ニ旗ヲ掲ケ、北亞米利加ノ五字ヲ表シ、徐ニ甲艦ニ近キ、忽チ日章ノ旗ヲ掲ケ、大砲ヲ連發ス、甲鐵ノ船身ハ鐵板ヲ以テ製ス、故ニ彈丸飛ヒテ海ニ入り貫クコトヲ得ス、而シテ官軍狼狽シ戰フコト克ハス、賊刀槍ヲ揮ヒ躍リテ艦ニ登ル、賊將甲賀源吾大煩ヲ以テ、遂ニ甲鐵艦ノ甲板ヲ貫キ、蒸氣罐ニ中テ數十人ヲ斃ス、砲聲雷ノ如ク、海水爲ニ震踊ス、官軍大ニ怒リ、亂發シテ源吾ヲ狙撃ス、賊兵大ニ沮ム、提督荒井郁之助急ニ令シテ港ヲ去ル、官軍之ヲ追ヒテ及ハス、此ノ役ヤ官軍ノ死傷賊ニ倍ス、

四月官軍進ミテ江刺ヲ取ル、賊兵之ヲ復セント欲シ、大ニ戰フ、時ニ仙臺ノ脱士、四百餘人來リテ賊ニ投ス、賊勢益々振フ、官軍大舉シテ海陸並ヒ進ミ、松前ヲ攻

メテ大ニ敗衄ス、時ニ山路ノ官軍、奮闘シテ賊兵ヲ破ル、甲鐵艦以下ノ水軍、既ニ松前ニ逼ル、城市村落飛丸雨ノ如シ、賊兵彈藥竭キテ拒クコト克ハス、遂ニ福島ニ走ル、松前官軍ノ有トナル、

十九日官軍兵ヲ潛メテ木古内ヲ侵シ、遂ニ之ヲ取り、尋テ矢不來ヲ攻ム、大鳥圭介等之ヲ防ク、而シテ本道ノ戰方ニ酣ナリ、賊地雷火ヲ發ス、官兵爲ニ死傷多シ、然トモ水軍岸ニ近キテ、賊ノ中營ヲ撃ツ、賊遂ニ敗レテ五稜廓ニ走ル、五月官艦函館ニ至ル、忽チ一艦アリ、徐ニ來ル甲鐵、長陽二艦遂ヘ撃ツ應セスシテ益々進ミ、甲鐵ヲ突ク官軍宮古港ノ變ニ懲リテ之ヲ避ク、其ノ艦遂ニ二艦ノ間ニ至ル、官軍且ツ懼ミ且ツ懼ル、少頃クシテ之ヲ視レハ昨夜機關ノ破レシ千代田艦ナリ、賊笑ヒテ曰ク人無キ漂船填軍ノ甲鐵艦ヲ却クト、以テ死セル孔明生ケル仲達ヲ走ラスニ比ス、八日榎本釜次郎、大鳥圭介等大舉シテ出ツ、官軍謀知シ兵ヲ

伏セテ之ヲ撃ツ、賊狼狽シテ走ル、十一日官軍大舉シ函館ニ逼リ、腹背夾撃ス、賊軍大ニ敗ル、賊將松岡盤吉善ク戰フ、其ノ發スル所ノ佛狼機ノ榴彈、官艦朝陽ノ砲庫ニ中リ、響數十里ニ徹シ、遂ニ破裂シテ沈没ス、千人ノ水兵死セサル者僅ニ二十餘人ノミ、官軍モ亦砲ヲ發シテ賊艦ヲ亂射ス、回天艦甚々窘蹙シ、荒井郁之助等僅ニ身ヲ以テ脱レ、五稜廓ニ走ル、蟠龍艦亦殆ト碎カル、是ニ於テ賊兵悉ク船艦ヲ失ヒ、辨天臺ニ入ル、官軍奮ヒテ之ニ薄ル、土方歳三以下多ク戰死シ、賊勢大ニ屈ス、

五稜廓ノ賊、再ヒ函館ヲ襲ハント欲シ、松平太郎ヲ以テ將ト爲シ、一本木ニ進ム、官軍堅守屈セス、時ニ官軍ノ勢日ニ振ヒ、賊兵ハ唯、僅ニ五稜廓及ヒ辨天臺、千代岡ヲ保ツノミ、十二日官軍五稜廓ニ逼ル、郭壘砲擊ノタメニ震裂ス、時ニ函館病院ノ患者、書ヲ醫師ニ托シテ官軍ノ厚待、且ツ寛仁ナルヲ告ケ、和議ヲ榎本釜

次郎等ニ圖ル、五稜原、辨天臺ノ兵亦交、之ヲ説ク聽カス、十三日軍艦復タ諭スニ恭順降服ヲ以テス、十四日辨天臺糧食已ニ竭クルヲ以テ降服ノ議ニ決ス、五稜原ハ路隔絶セルカ故ニ、賊未タ之ヲ知ラス、官軍別ニ入テシテ之ヲ諭サシム、賊却テ使者ヲ凌辱ス、官軍大ニ怒リテ之ヲ攻ム、時ニ賊兵辨天臺ノ降ヲ聞キテ亡命スル者多シ、榎本釜次郎、松平太郎等衆ヲ諭シテ曰ク、吾等主家ノタメニ諸君ト戮力シ今日ニ至ル、方今兵士大ニ疲ル、而シテ天下ノ大敵ニ抗スルハ、徒ニ無罪ノ士ヲ殺スノミ、故ニ我先ツ衆ニ代ラント、將ニ自殺セントス、左右之ヲ止メ降伏ノ議ニ決ス、十八日榎本釜次郎、松平太郎、荒井都之助、大島圭介等出テ、軍門ニ降ル、是ニ於テ北海道始テ平ク、

第六 開國外交ノ事定マル

近時攘夷鎖國論ハ、垂ント天下ノ輿論ナリシカ、社會ノ開進ニ從ヒテ、昔日輿論ノタメニ挫カレシ、開國外

交論者ハ、漸ク反動無比ノ勢力ヲ有スルニ至リ、遂ニ攘夷鎖國論者ハ、一隅ニ屈シテ竟ニ消滅セントスル狀勢ヲ呈セリ、而シテ開國論者中最モ熱心ナル者ヲ見レハ、誰カ知ラン是レ曠日鎖國ヲ主張セシ者ニシテ、彼ノ初ヨリ開國論ヲ以テ斥ケラレシ者ハ、却テ僅ニ其ノ主義ヲ持續シテ、新ニ鎖國論者ヨリ變化シタル者ノ圖下ニ隨伴シテ、甚タ冷淡ナル者ノ如シ、蓋シ最初ヨリ開國主義ノ論者ハ、頗ル躊躇スル所アリシニ、之ニ反シテ攘夷論者ハ一意熱心ニ、之ヲ決行セント欲シ、中頃其ノ非ヲ悟リ、開國ノ國是ナルコトヲ感スルニ至リテハ、亦熱心ニ斷行ノ一線ニ走ルヲ以テ、其ノ進行ノ速力甚タ強ク、恰モ迅雷ノ如キ勢ヲ爲セリ、明治元年、是ヨリ先識見ヲ懷ケル者ハ、漸ク開國ノ時勢ニ適スルコトヲ覺リテ、頓ニ鎖國ノ舊套ヲ脱シ、社會ノ風潮漸ク一方ニ傾向ケリ、是ニ至リテ、土佐、越前、薩摩、長門、安藝、肥後ノ六藩、建言シテ天下ヲ

更始シ、萬國ト駢立シテ、耻チサランコトヲ奏上ス、二月勅シテ、英、佛、蘭ノ三公使ヲ延見ス、英公使、途上刺客ノ要スル所トナリテ、朝スルコトヲ得ス、蓋シ攘夷ノ説、久シク天下ノ談柄トナリ、大政革新ニ及ヒテ、衆意ヘラク朝廷先ツ外交ヲ絶ツヘシト、而シテ其ノ外事ノ處置、玆ニ至レルヲ見テ、往々喜ハス、公使延見ノ儀アルニ及ヒテ、此ノ變アリ、然トモ朝廷省ミス、遂ニ開國外交ノ事一定ス、

第七 臺灣ノ役

明治七年、四月十五日、大ニ臺灣征討ノ師ヲ起ス、陸軍中將西郷從道ヲ、生番事務都督ト爲シ、少將谷干城。陸軍ヲ總ヘ、海軍少將、赤松則良、海軍ヲ總フ、兵凡三千人、俱ニ品川海ヲ發ス、

臺灣ハ支那ノ東南ニ在ル島嶼ニシテ、海ヲ隔ツルコト、四十餘里、西部ハ支那ニ屬シ、東部ハ土人ニ屬シテ、部落ヲ爲ス、風俗卑陋、射獵ヲ以テ業トス、外人漂ヒ

抵レハ、暴橫ヲ極メ、衣服ヲ剝奪シ、甚シキハ之ヲ殺戮ス、實ニ野蠻蠻賊ノ巢窟ナリ、去年ノ冬、琉球人民、騷ニ遇ヒテ、此ニ漂着ス、土人嘯集シテ、五十四人ヲ殺ス、琉球王、憤リテ具ニ奏上ス、天皇震怒シテ、遂ニ征番ノ命ヲ下シ、問罪ノ師ヲ出ス、

我カ軍、權ニ蕃地事務局ヲ長崎ニ置キ、日々軍事ヲ議ス、二十七日、支那廈門副領事、福島九成、先ツ發シテ廈門ニ赴キ、事ヲ支那政府ニ告ケ、直ニ臺灣ニ至ル、五月、水陸二軍長崎ヲ發シテ、社寮ニ着シ、陣營ヲ布キテ、攻撃ノ策ヲ爲ス、

社寮ノ地、平遠ニシテ、土人漢語ニ通シ、頗ル文學ヲ識ル、其ノ社寮ノ地方ヲ、熟蕃ト云ヒ、其ノ酋長ヲ爾亞ト云フ、又山中ニ住スル者、十八社アリ、皆野蠻ニシテ、生番ト云フ、毎社各、酋長アリ、牡丹人種ハ、慄慄暴行ニシテ、人倫ノ道ヲ知ラス、常ニ戰鬥ヲ喜ヒ、或ハ人ヲ殺シテ之ヲ食フ、

社寮酋長、先ツ降ル、官軍之ヲ先導トシテ、熟蕃ヲ嚮服セシム、生蕃ハ頑固猖獗ナリ、銃ヲ以テ我カ軍ヲ狙撃ス、我カ軍直ニ其ノ巢窟ヲ搗カント欲シテ、軍ヲ分チテ、賊ノ通路ヲ絶チ、其ノ背後ニ繞リ出テ、山上ヨリ俯シテ之ヲ射ル、土蕃狼狽シテ大ニ敗ル、我カ軍竟ニ牡丹酋長ヲ殺ス、

是ノ月、都督西郷從道臺灣ニ達ス、支那ノ士官、來リテ征蕃ノ事由ヲ詰ル、從道答フルニ、漂民遭害ノ事ヲ以テス、乃チ龜山ヲ以テ、牙營ト爲シ、號シテ都督府ト云フ、時ニ土蕃大ニ敗レ、畏縮、落膽シテ軍門ニ降附スル者、陸續相踵ク、都督恩威ヲ以テ綏撫ス、是ニ於テ土蕃悅服ス、六月、官軍兵ヲ分チテ、三道并ヒ進ム、會ニ霖潦シテ河水溢激ス、近衛ノ兵士、奮進流ヲ亂リテ、火ヲ縱チテ之ヲ焚ク、諸軍牡丹社ニ會シ、戍兵ヲ所在ニ置キテ、牙營ニ還リ、以テ久頓ノ計ヲ爲ス、二十一日、清艦港ニ入ル、我カ軍議シテ彼ノ動止

ス、天皇大ニ之ヲ慰勞ス、

第八 鹿兒嶋ノ亂

明治十年一月十九日、詔シテ鹿兒嶋ノ賊ヲ討タシム、初メ大阪鎮臺ノ士官、櫻島ニ赴キ、彈藥製造所ノ硝藥ヲ載セ、將ニ發セントス、時ニ私學校ノ暴徒、之ヲ劫奪ス、士官等依テ具狀以聞ス、暴徒益々猖獗ニシテ、官吏ヲ毆辱シ、尋テ亂ヲ作サント欲ス、只其ノ名ナキヲ病フ、會ニ警視官、中原尙雄等、其ノ國ニ歸省ス、乃チ誣ヒテ内務卿大久保利通等、西郷隆盛以下ヲ圖ルノ刺客ト爲シ、尙雄等二十一人ヲ捕ヘテ、之ヲ拷掠ス、尙雄等屈セス、縣令大山綱良、專使ヲ發シテ、出兵ヲ沿道ノ府縣、及ヒ鎮臺ニ報ス、書辭倨慢ナリ、時ニ陸軍少將、谷干城熊本鎮臺ニ在リ、其ノ書ヲ卻ケテ曰ク、賊奴敢テ無名ノ師ヲ起シ、闕下ニ強逼セント欲ス、吾無似ト雖モ、已ニ司令長官ヲ辱クス、一人ノ兵ト雖モ、吾カ臺下ヲ過グルヲ許サスト、使者惶レテ去ル、

日本誌 史紀 鹿兒嶋ノ亂

ナ視フ、是ヨリ先キ、副島種臣ヲ支那ニ遣シ、臺灣ノ罪ヲ問ハント欲スルコトヲ告ク、答ヘテ曰ク、臺灣ハ清國ノ所屬ナリ、討伐ノ權、我ニアリト、八月、參議大久保利通ヲ、辨理大臣トシ、清國ニ至ラシム、利通、總理衙門ニ至リ彼ノ諸大臣ニ接シ、遂ニ約書ニ欽印シ互ニ之ヲ交換ス、初メ利通彼ノ諸大臣ト、議論紛々決セス、日本安ニ問罪ノ師ヲ發セシコトヲ責ム、利通抗辯反覆、數日ニ亘ル、然トモ議和セス、十月、利通意ヲ開戦ニ決スルニ至テ、彼和平ヲ議シ、遂ニ三事ヲ約ス、一ニ曰ク、日本征臺ノ軍費ハ、清國一切之ヲ償ハン、二ニ曰ク、清國政府、法度ヲ嚴ニシテ、土蕃ヲ制シ、日本人ヲシテ後害ナカラシムコトヲ保ス、三ニ曰ク、日本ノ兵退キテ、隻兵ヲ留メスト、是ニ於テ議定マリ、事初メテ平ク、其ノ償金ハ、五十萬兩ナリ、十一月、辨理公使、參議大久保利通歸朝シ、十二月、生蕃事務都督、陸軍中將西郷從道歸朝シテ、並ニ復命

朝廷、有栖川熾仁親王ヲ大總督トシ、陸軍少將野津鎮雄、三好重臣ヲ參謀トシ、軍艦十餘隻ヲ以テ進發ス、詔シテ西郷隆盛、桐野利秋、篠原國幹等ノ官爵ヲ褫フ、初メ隆盛力ヲ王事ニ盡シ、功勞最大ナルヲ以テ、朝遇優渥ナリ、官陸軍大將ニ至リ、參議ヲ兼テ、位正三位ヲ辱クス、利秋、國幹、亦少將正五位タリ、共ニ人臣ノ榮譽ヲ荷フ、隆盛曾テ征韓論ノ容ヲレサルヲ憤リ、利秋等ト辭シテ國ニ還リ、田野ニ屏居スルコト四年、私學校ヲ立テ、人心ヲ收メ、終ニ事ヲ謀リ、兇徒一萬五千人ヲ率キテ、鹿兒嶋ヲ發シ、牙營ヲ川尻ニ設ケ、榜ヲ軍門ニ建テ、新政大總督、東征大元帥ト署シ、全軍ニ令シ、進ミテ城ヲ圍マシム、鎮兵防戦、甚タ力ム、小倉ノ官軍、高瀬ニ戰ヒテ、大ニ賊軍ヲ破リ、驍將村田新八ヲ傷ク、三月四日官軍進ミテ山鹿口ニ激戦ス、此ノ日國幹斃レ、賊兵大ニ沮ム、官軍追ヒテ木葉ニ至ル、拂曉ヨリ午後四時ニ及ヒ、勝敗未タ決セス、

彈丸雨ノ如ク注キ、聲山壁ニ震フ、賊兵力戰シ、官軍ノ將、爲ニ多ク斃ル、拔刀隊(警視隊中擊劔ヲ善クスル者ヲ擇フ)賊ノ砲壘ヲ衝キテ進ム、臺兵亦之ニ繼グ賊壘ヲ棄テ、走ル、近衛兵ト拔刀隊ト馳名、太夕顯ハル、尋テ大ニ田原坂ニ戰フ、賊兵短兵接戰シ、屢官軍ヲ破ル、

是ヨリ先キ(三月八日)勅使、柳原前光、鹿兒島ニ至ル、參議黒田清隆、大警視川路利貞、軍艦七隻ヲ以テ之ニ從フ、是ニ於テ清隆等賊ノ砲臺ヲ壞チ、糧援ノ路ヲ絶ツ、柳原前光、中原尙雄等、二十一人ノ幽囚ヲ解キ、縣令大山綱良ヲ拉テ、京師ニ歸リ、神戸ニ至リテ、綱良ヲ東京ニ送ル、岩村通俊代リテ縣令タリ、三月十一日、天皇大阪ニ行幸シ、鎮臺病院ニ臨御シ、親ヲ瘡傷ヲ慰問ス、患者聲ニ在リ、惶恭措ク所ヲ知ラス、將ニ起チテ拜セントス、天皇之ヲ制止ス、感泣セサルハナシ、是ノ日、皇太后、皇后亦綿撤絲、葡萄酒等ヲ賜フ、蓋

シ此ノ綿撤絲ハ、二宮及ヒ女官ト親ヲ紡績スル所ナリ、

四月六日、賊將別府晋介、八代ニ逼ル、官軍利アラス、是ノ時ニ方リ、賊兵大舉シテ、熊本城ヲ圍ム、干城、兵ヲ戒メ、固ク守リテ出戰ヲ禁ス、七日山鹿ノ官軍、宇土ニ至ル、賊前後敵ヲ受ケ、カチ攻城ニ專ニスルコト克ハス、時ニ城中糧乏シク、足ヲ翹テ、援軍ノ至ルヲ望ム、田原植木ノ賊、倔強ニシテ、官軍拔クコト克ハス、相持シテ未タ城下ニ達セス、城中益々困ム、上下一致シテ、戰備ヲ爲ス、然レトモ、糧食日ニ缺乏シテ餘ル所、僅ニ二十三日ヲ支フルノミ、將士議シテ出戰ヲ計ル、既ニシテ砲聲宇土ノ方位ニ在ルヲ聞キ、背後ノ官軍、漸ク近ツクヲ知リ、遂ニ其ノ議ヲ止ム、八日再ヒ突出ノ議ニ決シ、黎明與保鞏一大隊ヲ率キ、圍ヲ潰シテ出テ、轉戦シテ賊ヲ破リ、遂ニ宇土ニ達ス、時ニ黒田清隆等、勞ヒテ狀ヲ問フ、答フルニ現狀ヲ以テ

ス、清隆等乃チ進撃ヲ繼ス、

四月十四日、官軍連戰、賊ヲ破リ、遂ニ長驅シテ、熊本城下ニ至ル、賊兵大ニ敗レ、圍ヲ解キテ去ル、城中歡呼ノ聲、地ヲ動カス、初メ桐野利秋等、城ヲ圍ミテ下ス、克ハス、是ニ至リテ、三面官軍ノ進撃ヲ受ケ、支フヘカラサルコトヲ度リ、虛勢ヲ張リテ、四面攻撃ノ狀ヲ爲シ、銃砲ヲ連發シ、徐ニ軍ヲ收ム、城兵以テ攻撃ト爲シ、守備ヲ嚴ニス、須臾ニシテ砲聲漸ク衰フ、已ニシテ賊全ク退ク、壘跡一物ヲ遺サス、器械、輜重、皆之ヲ携フ、人其ノ退軍ノ巧妙ナルヲ賞ス、十五日、勅使城ニ入り、天旨ヲ宣シテ、大ニ將士ヲ褒勞シ、物ヲ賜フコト差アリ、十七日、總督本營ヲ城中ニ移ス、熊本ノ圍、既ニ解ケ、官軍盡ク連絡ヲ通シ、益々進撃ヲ計ル賊軍退キテ、本山ニ軍ス、

二十六日、賊軍連ニ利アラス、遂ニ日向ニ走ル、官軍長驅、鼓行シテ進ム、賊又退キテ人吉ニ據ル、此ノ地

日本誌 史紀 鹿兒島ノ亂

群山阻絶シテ、人跡罕ナリ、蓋シ西肥ノ究郷ナリ、賊糧仗ヲ恃ミテ、持久ノ計ヲ爲ス、

六月一日、官軍進ミテ人吉ヲ陷ル、賊狼狽シテ逃レ、軍門ニ降ル者相接ス、餘賊薩摩ニ入りテ、要害ヲ扼守シ、四出掠奪シテ、勢威屈セス、官軍攻撃甚々苦ム、八月十四日、官軍、延岡城ニ逼リテ之ヲ陷ル、賊遂ニ逃遁ス、明日諸道ノ官軍齊シク發シテ堂坂ニ戰ヒ、互ニ勝敗アリ、是ノ日隆盛以下親ヲ軍ニ臨ミテ決戦ス、士氣大ニ奮ヒ、進退馳驅意ノ如シ、官軍死傷尠カラス、十六日官軍長井ニ進ム、是ニ於テ賊勢大ニ盛リ、僅ニ方二里以内ヲ保ツノミ、降ル者日々多シ、十八日、隆盛以下圍ヲ潰シテ突出ス、勢風雨ノ如ク、官軍支フルコト克ハス、初メ隆盛事ノ成ラサルヲ知リテ、將士及ヒ私學校黨ノ兵ヲ長井村ニ會シテ曰ク、區々タル薩隅ノ士ヲ以テ、天下ノ大兵ニ抗スルコト、茲ニ半歳、吾カ事畢レリト、將ニ自刃セントス、別府晋介之ヲ止メ

テ決戦ヲ勸ム、利秋等以下亦之ヲ賛成ス、

九月三日、官軍水陸並ニ進ミテ、磯山ヲ拔キ、多智催馬樂ノ二山ヲ奪フ、賊軍大ニ敗レ、退キテ私學校ニ入り益、窮蹙ス、其ノ有ツ所ハ、城山近傍半里ニ過キス、五日諸道ノ官軍、鹿兒島ニ萃ル、是ニ至リテ、城山ノ圍全ク合ス、是ノ時ニ當リ、賊本營ヲ岩崎ニ移シ、守兵ヲ城山ニ置キ日夜相攻撃ス、見兵四百ニ盈タス、二十一日、賊ノ使者、官軍ノ營ニ來ル、參軍河村純義等接見シテ、意趣ヲ問フ、答ヘテ曰ク、我カ輩ノ事ヲ舉クルハ、義舉ニ出ツルコトヲ明ニセント欲トスルノミ、參軍等責問數次ニ及フ、二人悔悟、匍匐シテ罪ヲ謝ス、是ニ於テ一人ヲ留メ、一人ヲ遣歸ス、參軍山縣有朋等、書ヲ付シテ隆盛ニ報ス、隆盛書ヲ見テ、愁然歎息ス、

二十四日、官軍四面齊シク進ミ、賊ノ巢窟ヲ勦ス、隆盛、利秋、以下皆岩崎谷ニ戰没シ、西南ノ亂始テ平定ス、

初メ參軍賊ノ報ヲ待ツ至ラス、遂ニ諸軍ヲ部署シ、全軍夜半ヲ以テ、城山ニ進ム、此ノ地、懸崖千仞屏風ヲ列スルカ如シ、官軍山後ニ在ル者、蘿葛ヲ攀チテ登リ、竟ニ其ノ頂ニ達シ、林叢ニ潜伏シテ期ヲ俟ツ、賊險ヲ特ミテ備ヘス、酣睡聞然タリ、少焉シテ砲聲山下ニ起ル伏兵賊シテ之ニ應シ、叢銃ヲ亂發シ、俯シテ賊營ヲ射ル、賊事ノ不意ニ起ルニ驚キ、頗ル狼狽シ、村田新八、蹶起シ兵ヲ督シテ健闘ス、官軍益々薄リ、火ヲ縱チテ、賊營ヲ火ク、焰煙天ニ漲ル、天全ク明ク、賊岩崎谷ノ壘ニ集ル、飛丸隆盛ノ腰ヲ洞ク、晋介其ノ首ヲ斬リテ、左手ニ之ヲ提ケ、右手ニ刀ヲ揮ヒ、大喝シテ曰ク、先生死シ、大事皆去ル、先生ニ殉セント欲スル者ハ皆此ニ集レト、即チ首ヲ溝中ニ埋メテ自殺ス、利秋及ヒ村田新八、池上四郎等以下奮戰シテ盡ク死ス、餘衆或ハ降り、或ハ縛セラル、

三十日、大山綱良ヲ長崎ニ斬ル、初メ綱良陰ニ隆盛等

ヲ佐ケテ、中原尙雄等ヲ縛シ、口供ヲ羅織シ、官金ヲ掠奪ス、是ニ至リ長崎臨時裁判所ニ送致シテ之ヲ刑ス、

大總督熾仁親王、諸軍ヲ率キテ鹿兒島ヲ發シ、十月十日、東京ニ凱旋ス、十一月賊黨千九百四十餘人ノ刑辟ヲ定メテ、斬或ハ懲役ニ處ス、是ニ至リ鎮西ノ事全ク了レリ、

第九 立憲政體ノ成立

我カ邦、政體ノ變遷一ニシテ足ラス、其ノ間更ニ幾多ノ小變動、小沿革アリト雖モ、大政ノ本體ニ至リテハ、儼然タル君主獨裁ナリ、而シテ時遷リ勢變スルニ及ヒテ、政體モ亦自ラ之ニ隨伴セサルヲ得ス、是ニ於テ遂ニ立憲政體ト成ルニ至レリ、

明治八年四月、天皇詔シテ曰ク、朕今誓文ノ意ヲ擴張シ、地方官ヲ召シテ、國益ヲ圖リ、漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ起シ、汝衆庶ト其ノ慶ニ賴ラント欲ス、汝衆庶

能ク朕カ旨ヲ體シテ、之ヲ賛襄シ、舊慣ニ拘泥スルコト勿レ、又輕躁ニシテ、速成ヲ冀フコト勿レト、是レ即チ本邦立憲政體ノ淵源ナリ、九年九月、勅ヲ元老院ニ下シテ曰ク、宜シク我カ建國ノ體ニ基キ、海外各國ノ法ヲ斟酌シ、以テ國憲ヲ創スヘシト、

十四年十月、更ニ詔シテ曰ク、朕祖宗ノ鴻緒ヲ嗣キ、中古解紐ノ紀綱ヲ振起シテ、夙ニ立憲政體ヲ制シ、以テ子孫繼嗣ノ大業ヲ創センコトヲ期セリ、今將ニ來ル明治二十三年ヲ以テ、議員ヲ徵シ、國會ヲ開キテ、朕カ初志ヲ成サントスト是レ實ニ帝國議會ヲ開設スル所以ノ根源ナリ、

十八年十二月、太政大臣、三條實美奏シテ曰ク、今日ノ事、前途尙ホ遠シ、立憲ノ基ヲ建テ、中興ノ業ヲ完クセント欲セハ、敢テ前轍ヲ因襲スヘキニアラス、維新ノ初、陛下幼沖、臣叨ニ寵爵ヲ蒙リ、虔テ太政ヲ董攝ス、實ニ止ムヲ得サルニ出ツ、明治二年、職員令

ヲ定ムルニ當リテ、仍ホ大寶ノ古制ニ基キ、太政官ヲ以テ、諸省ノ冠首ト爲ス、凡ソ文書ノ上奏、皆太政官ヲ經由ス、是レ獨リ親政統一ノ體ヲ得サルノミナラス、徒ニ曠濫ノ弊ヲ生ス、方今陛下聖德日ニ高クシテ太政官ヲ綜攬シタマフ、官制宜シク更張スヘシ、依テ太政官ヲ廢シ、内閣ヲ以テ、宰臣奏政ノ所ト爲シ、一日萬機ノ政專ヲ簡捷ヲ主トシ、宰臣出テ、ハ所任ニ就キ、入りテハ大政ニ參シ、以テ陛下ノ手足トナラン、而シテ其中、一人ヲ撰ミテ、中外ニ當ラシメ、旨ヲ承ケテ奉宣シ以テ各部ヲ統制セシメン、是レ即チ祖宗簡實ノ政ニシテ親裁ノ體ナリ、立憲ノ義モ、亦此ニ外ナラサラン、陛下願ハクハ臣カ堪フル所ニアラサルヲ察シ、併セテ臣カ職ヲ解キタマハントナト、天皇之ヲ嘉納シタマフ、是ニ至リテ詔ヲ下シテ曰ク、經國ノ要ハ、官制機關、其ノ宜シキヲ得ルニ在リ、内閣ハ萬機ヲ親裁ス、今其ノ組織ヲ改メ、諸大臣ヲシテ各、其ノ重任ニ當

ラシメ、統フルニ總理大臣ヲ以テス、夫中興ノ政ハ、華ヲ去リテ實ヲ務メ、綱舉カリ目張リ、以テ永遠ニ繼續スヘカヲシム、卿等其レ之ヲ體セヨト、乃チ三大臣(太政大臣左右大臣)參議、各省卿ノ職制ヲ廢シテ、更ニ内閣、及ヒ官内、内務、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信ノ十省ヲ置キ、内閣總理大臣、及ヒ十省大臣ヲ任シ、以テ内閣ヲ組織シ、内大臣一人、顧問官數人ヲ官中ニ置ク、但シ官内大臣ノミハ、閣外ニ在リテ、帝室ニ屬ス、(逓信省ハ此ノ際ノ創設ニシテ、工部省ヲ廢シ、之ヲ置キ驛遞、電信、管船、燈臺等ノ事務ヲ掌ラシム、内閣ハ文書恩給ノ二局ヲ廢シテ、記録、會計、官報ノ三局ヲ設ク、又統計院ヲ改メ局ト爲シ、參事院、制度取調局ヲ廢シ、法制局ヲ置キ御料局内匠寮ヲ宮内省ニ設ク、)蓋シ是我カ政府、歐州制度ニ倣ヒテ政體ノ面目ヲ一新スルモノニシテ、維新以降、官制ノ改革一ナラスト雖モ、是ニ於テ畧ホ一定

シテ、立憲政體ヲ得ルニ至レリ、二十一年、更ニ樞密院ヲ設ケテ、顧問官ヲ置キ、以テ天皇最親ノ高等顧問ト爲ス、

第十 憲法ノ制定、國會ノ開設

前節中ニ示セル、數次ノ詔勅ニモ、見エタル如ク、維新政治ノ目的ハ、廣ク衆庶ノ公議ヲ採リ、普ク國民ノ輿論ヲ用キルニ在リ、而シテ社會漸ク進歩スルニ從ヒ、人民モ亦國會ヲ開キテ立憲代議政治ヲ熱望スルニ至レリ、故ニ豫メ憲法ヲ制定シテ、皇室ノ安泰、國會ノ權限、政府ノ職掌、人民ノ權義等ヲ定メサルヘカラス、仍テ明治二十二年、二月十一日、皇祖神武天皇、即位ノ紀元節ヲ以テ、帝國憲法(總テ七章七十六條)ヲ發布セラレタリ、是實ニ國家ノ關鍵、宗室ノ大法ナリ、尋テ皇室典範(總テ十二章六十二條)議院法(八章九十九條)衆議院議員選舉法(十四章百一十一條)會計法(十一章三十三條)貴族院令(十三條)大赦令(五條)等ヲ發布ス、

日本誌 史紀 憲法ノ制定、國會ノ開設

即チ帝國議會ハ、貴族院及ヒ衆議院ノ兩院ヲ以テ組織シ、政府提出ノ法律案ヲ議定シ、又自ラ議案ヲ提出議定シ、歳出入ヲ議シ、天皇ニ上奏ス、而シテ其ノ開會ハ、毎年三箇月間トシ、時ニ必要アレハ、勅命ヲ以テ之ヲ延長ス、

衆議院議員ハ全國ノ代議士三百人(任期ハ四年)ニシテ、撰舉人ハ男子ノ年齢二十五歳ニ達シ、撰舉人名簿調製ノ日ヨリ、前滿一年以上本籍ヲ其ノ府縣内ニ定メテ之ニ住居シ、仍ホ繼續シ、且ツ其ノ間、直接、間接、ノ國稅(地租又ハ所得稅)十五圓以上ヲ納メ(所得稅ハ三年以上納メタル者)仍ホ持續シテ之ヲ納ムル者ナリ、又之ト同資格アリテ、三十年以上ノ男子ハ、被撰舉權ヲ有スル者トス、官内、裁判、警察、會計、檢査、收稅ノ諸官吏、及ヒ神官僧侶并ニ各府縣郡吏ハ其ノ管轄區域内ニ於テ、又撰舉ノ管理ニ係レル、市町村吏員ハ、其ノ撰舉區ニ於テ、又瘋癲、白

痴、身代限ノ處分ヲ受ケテ未タ負債ノ義務ヲ訖ラサ
ル者、公權ヲ剝奪セラレ、或ハ停止中ノ者、禁錮ニ
處セラレ、若クハ、一年以上ノ懲役、又ハ國事犯禁獄
ノ刑ニ處セラレ、若クハ賭博犯ニ由テ處刑ヲ受ケ、
各滿期、或ハ赦免ノ後三年ヲ經サル者、撰舉ニ關ス
ル犯罪ヲ以テ撰舉被撰舉權ノ停止中ナル者等ハ并ニ
撰舉被撰舉人タルコトヲ得ス

貴族院議員ハ、成年以上ノ皇族(列席)滿二十五年以
上ノ公侯爵ヲ有スル者(議員)伯子男爵ヲ有スル者
各、其ノ同爵者ノ撰ニ當リタル時ハ、七年ノ任期ヲ以
テ議員ト爲ス、(各總數ノ五分一)又國家ニ勲勞アリ、
又ハ學識アリテ滿三十歲以上ノ男子ニシテ、勅任セ
ラレタル者ハ、終身議員タルヘシ、其ノ他各府縣ニ於
テ、滿三十歲以上ノ男子ニシテ、土地又ハ工商業ニ
付キ、多額ノ直接國稅ヲ納ムル者、十五人中ヨリ、
一人ヲ互撰シテ、勅任セラレタル者ハ、七年ノ任期

ナ以テ議員タルヘシ、(禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、又
ハ身代限ヲ受ケタル者ハ之ヲ除ク)、

斯ノ如クニシテ、諸制度定位シテ、終ニ明治二十三年
ヲ以テ、帝國議會ヲ開キ、始テ立憲代議政體ノ組織、
具備スルニ至レリ、

二十三年十一月詔シテ帝國議會ヲ東京ニ召集ス、車駕
親シク臨マセ給ヒテ開院式ヲ行ハセラル、貴族院ハ皇
族華族勅撰議員各府縣ノ多額納稅者ヨリ成リ、衆議院
ハ各府縣選出ノ議員ヨリ成ル、コレヲ第一回ノ帝國議
會トナス、

第十一 二十七八年ノ戰役

朝鮮ハ、曩ニ我國カ啓誘シテ、列國ノ伍伴ニ就カシメ
タル獨立國ナリ、而ルニ清國ハ、猶朝鮮ヲ以テ屬國ト
稱シ、京城駐劄公使袁世凱、韓廷ノ大臣閔泳駿等ト結ヒ
テ、其内政ニ干渉シ、國政益々亂ル、廿七年四月朝鮮ノ
亂民自ラ東學黨ト稱シ、國政改革ヲ名トシテ兵ヲ擧ケ、

諸道ヲ陷レ、將ニ京城ニ迫ラントス、官軍防クコト能
ハス、清國乃チ屬國ノ難ヲ拯フト稱シ、葉志超ヲシテ
兵ヲ率キテ、朝鮮ニ入ラシム、六月我カ政府、急ニ公
使大島圭介ヲシテ、八重山艦ノ海兵ヲ率キテ、京城ニ
入ラシメ、次テ陸軍少將大島義昌ヲシテ、混成一旅團
ヲ率キテ、京城ニ入り、以テ仁川京城間ヲ扼シテ變ニ
備ヘシメ、更ニ清國ニ牒シ、東洋全局ノ平和ヲ維持セ
ン爲ニ、協同シテ朝鮮ヲ助ケンコトヲ以テス、清國拒
ミテ容レズ、朝鮮ハ我カ勦ヲ喜ヒテ繁政ヲ改革セント
セシニ、清國ハ始終、陰ニ之ヲ妨碍シ、遂ニ兵力ヲ以
テ其欲望ヲ達セントス、

此ノ時ニ當リテ、我カ國論皆清國ノ無狀ヲ憤ル、廷議
亦竟ニ清韓ノ處分ヲ定メ、樺山資紀ヲ海軍軍令部長ニ
補シ、艦隊ヲ編成シテ事ニ備ヘシム、七月清國頗ニ兵ヲ
朝鮮ニ送り、廿五日清ノ軍艦操江、運送船高陸ヲ護衛
シテ牙山ニ抵ル、濟遠、廣乙ノ二艦出テ、之ヲ迎フ、我

カ軍艦吉野、浪速、秋津洲コレト豐島沖ニ逢ヒ、奮戰
シテ、濟遠ヲ走ラシ、廣乙ハ暗礁ニ觸レテ破壊シ、操
江ハ降り、高陸ハ墜沈セラレ、清兵千三百人皆溺死ス、
時ニ清兵數千、成歡、牙山ノ間ニ在リ、是日韓王書ヲ
大島公使ニ贈リテ、國內ノ清兵ヲ逐ハンコトヲ請フ、
因テ大島少將兵ヲ率キテ牙山ニ向ヒ、廿九日左右ヨリ
擊チテ、成歡ノ敵壘ヲ拔ク、牙山ノ兵戰ハスシテ潰ユ、
葉志超等兵仗ヲ棄テ、走ル、我軍大砲糧食ヲ收メテ京
城ニ凱旋ス、朝鮮王使ヲ發シテ効勞ス、此報ノ本邦ニ
傳ハルヤ、人心大ニ奮フ、

八月一日天皇宣戰ノ詔ヲ下シ賜フ、清帝モ亦開戰ヲ宣
言ス、兩國ノ公使互ニ館ヲ撤シテ還リ、列國多クハ局
外中立ヲ布告ス、是ニ於テ國民皆踴躍シテ戰ニ赴カン
ト請フ、天皇優詔シテ許シ給ハス、國民ヨリ金品ヲ獻
シテ、軍資ヲ助クルモノ多シ、九月大本營ヲ廣島ニ進
メ、天皇親シク軍事ヲ督シ給フ、

是ヨリ先ニ、清兵ハ平壤ニ據リテ、江山ノ險ヲ扼シ、葉志超、衛汝貴、馬玉崑、左寶貴等將タリ、牙山ノ敗兵モ亦來リ會シ、兵凡一萬五千人、五萬ト稱ス、乃チ廣島、名古屋ノ二師團ヲ合シテ第一軍トナシ、陸軍大將山縣有朋、其司令官トナル、未發セス、先ツ陸軍中將野津道貫ヲシテ之ヲ率キテ、平壤ニ向ハシム、少將大島義昌ハ前面ヨリシ、少將立見尙文ハ朔寧ヨリシ、大佐佐藤正ハ元山ヨリ背後ニ出テ、野津中將ハ自ラ大同江ノ下流ヲ渡リテ、側面ニ向フ、九月十五日、四面相會シテ平壤ニ逼ル、敵兵支フルコト能ハス、白旗ヲ立テ、降ヲ乞ヒ、即夜大雷雨ニ乘シテ遁ル、我軍走路ヲ扼シ、擊チテ之ヲ殲ス、伏屍路ニ滿ツ、コレヨリ朝鮮ノ域内ニ清兵ヲ見ス、

海軍ハ本隊及ヒ遊撃隊ニ分チ、海軍中將伊東祐亨司令長官トナリ、平壤ノ攻撃ニハ大同江ヲ扼シテ聲援ヲナシ、十七日ニ至リ、清ノ北洋水師督丁汝昌、定遠、鎮

遠、來遠、經遠、靖遠、致遠、揚威、超勇、平遠、廣丙、廣甲、濟遠ノ十二艦、水雷艇六隻ヲ率キ、陸兵ヲ載セテ平壤ノ難ニ赴カントス、我艦隊シテ之ヲ知り、海洋島附近ニ挾撃ス、我艦隊ハ旗艦松島ヲ始メトシ、第一遊撃艦隊、吉野、高千穂、秋津洲、浪速ノ四艦ト本艦隊、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑、赤城、ノ七艦ト、假軍艦ナル西京丸トヲ以テ、聯合艦隊ヲ組織ス、我艦隊ハ海洋島ヲ右ニシテ進ミ、敵艦ハ左ニシテ進ム、我ハ益進テ敵ノ左舷ニ出テントセシニ、敵我カ右舷ニ迫リテ接戦ス、赤城、比叡ハ速力ノ遅キヲ以テ列外トナリ、赤城艦長少佐坂本八郎太戰死ス、第一遊撃隊來リ援ヒ、本隊ト挾ミテ敵ノ艦隊ヲ猛撃ス、敵艦ノ陣形逐ニ亂ル、我艦隊益々奮戦シ、致遠、經遠、超勇揚威、廣甲ノ五艦ヲ擊沈シ、平遠、來遠、廣丙ノ諸艦ヲ火ク獨リ定遠、鎮遠ノ二艦ハ、戰鬪甲鐵艦ナルヲ以テ、能ク戰ヒシモ遂ニ支フルコト能ハス、日暮ニ及ヒテ皆敗

走ス、我艦隊ニハ海軍司令部長樺山資紀、西京丸ニ乗リシカ、敵艦之ヲ圍ミテ水雷ヲ放ツコト二度、皆中ラス、松島、比叡ハ一時放火シタレトモ救フコトヲ得テ一艦ヲモ失ハサリキ、此戰ニ我軍ハ水雷艇ヲ率キサルヲ以テ、太迫ラス、天明ヲ待チテ海洋島ニ至レハ、敵艦既ニ逃レテ隻影ヲ留メス、コレヨリ朝鮮海、黃海ノ權全ク我ニ歸セリ、

十月帝國議會ヲ廣島ニ召集シ、臨時軍事費一億五千萬圓ノ公債ヲ募集スルノ案ヲ提出ス、二十日議會ハ滿場一致ヲ以テ之ヲ可決シ、明日皇上聖德ノ頌ヲ上ル、比年議會ハ、官民ノ識相合ハサルヲ多カリシニ、此ニ至リ、上下一致シテ大業ヲ贊襄ス、亦以テ國民敵愾心ノ旺ナルヲ見ルヘシ、時ニ井上馨特命全權公使トナリ朝鮮ニ入り、國王ニ勸メテ、弊政ヲ改革セシム、韓廷傾動ス、尋テ王子義和宮ヲシテ、來朝報聘セシム、此月山縣司令官、第一軍ヲ率キテ平壤ニ入ル、義州ノ

日本誌 史紀 二十七八年ノ戰役

敵兵逃レテ九連城ニ據ル、廿四日佐藤大佐ノ一隊、鴨綠江ヲ渡リ對岸ノ敵ヲ撃ツ、即夜工兵ヲシテ潛ニ鴨綠江ニ架橋セシム、時ニ沍寒、兵士水中ニ凍死スル者アリシカト、全隊屈セス、天明ニ至リテ成ル、中將桂太郎第三師團ヲ率キ、橋ヲ渡リテ虎山ニ向フ、第五旅團長少將大迫尙敏モ亦敵ノ右翼ヲ襲フ、敵支フルコト能ハス、九連城ニ走ル、立見少將背後ヨリ大ニ追撃ス、廿六日諸軍九連城ニ迫レハ、既ニ一兵ヲ留メス、因テ之ヲ占領シ、廿九日大東溝ヲ占領シ、卅一日立見少將進テ鳳凰城ニ入ル、敵兵既ニ城ヲ燒キテ遁ル、向フ所敵ナシ、山縣司令官、因テ民政廳ヲ安東縣ニ設ケテ、其地ヲ治メシム、清民悅服シテ皆我カ用ヲナサンコトヲ樂メリ、

此時陸軍ハ、金州半島ヲ占領セントシ、陸軍大將大山巖其ノ司令官ニ補シ、第二軍ヲ率キテ艦隊ニ掩護セラレ、是月廿四日盛京省花園河口ニ上陸ス、旅順口ヲ距

ルコト二十餘里ナリ、尋テ大連灣ヲモ占領ス、十一月三日第一師團長中將山地元治ハ、本隊ヲ率キ本營ヲ發シテ金州ニ向フ、少將乃木希典ハ、一旅團ヲ率キテ之カ前衛トナリ、六日敵城ヲ肉薄シ、山地中將ハ復州道路ヲ迂回シテ、側面ヲ攻撃シ、綿火藥ヲ以テ城門ヲ碎キ城遂ニ陥ル、七日大連灣ノ諸砲臺ヲ攻メテ之ヲ占領ス、金州城内ニ占領地行政廳ヲ置キテ、土民ヲ安撫ス、

旅順口ハ金州半島ノ要港ナリ、城壘ノ堅固、守備ノ完全、東洋第一ノ稱アリ、廿一日總攻撃、拂曉先ツ椅子山砲臺ニ迫ル、此砲臺ハ旅順背面防禦ノ首力ニシテ、彼我ノ力爭スル所ナルヲ以テ砲擊尤劇シ、我ノ一隊遂ニ城壘ヲ超エテ突貫シ、之ヲ陥ル、旅順沖ノ我艦隊ハ海上ヨリ敵ノ退路ヲ砲擊ス、尋テ連リニ松樹山、二龍山、鷄冠山ノ諸砲臺ヲ攻撃シ、共ニ之ヲ陥ル、時ニ正午ナリ、是ニ於テ陸方面ノ砲臺ハ全ク陥落ス、午後ハ

更ニ海岸砲臺ノ攻撃ニ着手シ、先ツ黄金山砲臺ヲ占領ス、此砲臺ハ諸砲臺ト應援シ、瞰望自在、此地屈指ノ要害ナリ、我兵進テ旅順ノ市街ニ入り、敵兵ヲ斬ルモノ無數、此夜諸砲臺ノ敵兵皆潰散シテ、旅順廿餘ノ砲臺ハ、一日ニシテ全ク我カ有トナリ、捕獲品甚タ多シ、海軍モ廿三日灣内ニ入ル、此報大本營ニ達セシカハ、天皇優詔シテコレヲ賞シ給ヘリ、是ヨリ先キ廿一日、敵ノ敗將宋慶、我カ金州城ヲ留守セル兵ノ寡キニ乘シ大舉シテ復州ヨリ來襲ス、兵苦戰シテ之ヲ擊退ス、此夜旅順ノ敗兵モ、亦海ヨリ來リテ我營ヲ襲フ、我艦隊即チ陸戰隊ヲ出シテ要撃セシメ、敵五百餘人ヲ殺ス、死屍海ヲ掩フ、旅順口ハ是ヨリ海軍ノ根據地トナリ、司令部ヲ置ケリ、

第一軍ハ、連リニ大孤山、岫巖ヲ占領シ、十二月海城ニ向フ、時ニ河水凍結シテ我兵頗ル苦シム、十二日柞木城ヲ零シ、十三日海城ヲ占領ス、海城ハ奉天府ニ通

スル、滿州第一ノ要衝タリ、但深ク敵境ニ入りテ、孤立ノ勢アリ、此時敵將依阿克唐ハ鳳凰城ヲ襲ハントシテ成ラス、宋慶ハ蓋平ヨリ海城ヲ復センコトヲ謀リ、一萬ノ兵ヲ以テ缸瓦寨ニ據リ我軍ヲ控ス、我軍風雪ノ中ニ劇戰シテ、遂ニ之ヲ敗ル、後又海城ヲ襲フコト數回、遂ニ復スルコト能ハス、

先ニ山縣司令長官安東縣ニ於テ病ニ罹ル、天皇勅使ヲ遣ハシテ之ヲ召還シ、依テ野津中將ヲ大將ニ進メテ後任トナス、海城ノ孤立スルヤ、第二軍ハ蓋平ヲ占領シテ、海城ニ通シ、第一軍ト連絡ヲ通セントシ、旅團長乃木希典ヲシテ其ノ任ニ當ラシム、廿八年一月十日遂ニ蓋平城ヲ占領シ、兩軍ノ連絡始メテ通ス、

第二軍ハ已ニ旅順口ヲ陥レシカハ、更ニ威海衛ヲ陥レテ、直隸灣ノ兩關門ヲ奪ハント欲シ、第一師團ヲ留メテ、金州半島ノ守備トシ、大山司令官自ラ第六師團ノ兵ヲ率キ、一月十九日大連灣ヲ發シ、汽船數十艘、舢

艦相衝ミテ、山東角ニ向フ、我艦隊ハ敵艦ノ威海衛ニ集合セルヲ以テ、コレヲ偵察シ、且ツコノ運送船ヲ護衛セリ、

一月廿四日、參謀總長陸軍大將熾仁親王(有栖川宮)病ミテ薨シ給フ、天皇宸悼、朝ヲ廢スルコト三日、國葬ノ禮ヲ以テ葬ル、

山東角ニ向ヒシ軍隊ハ、榮城灣ニ上陸シ、直ニ威海衛ヲ指シツ、三十日東北海岸砲臺ヲ占領シテ、我海軍トノ連絡ヲ通セントシ、先ツ摩天嶺ノ砲臺ニ迫ル、摩天嶺ハ連山中ノ最高ナルモノ、陸地防禦ノ要衝タリ、我兵山砲ヲ以テ對應シ、三面ヨリ合圍シテ占領ス、砲兵直ニ摩天嶺ニ入り、敵砲ヲ以テ敵壘ノ未タ拔カサルモノヲ砲擊ス、灣内ナル鎮遠、定遠ノ敵艦モ、亦陸地ニ近ツキテ、我兵ヲ射撃ス、我兵奮戰漸ク各砲臺ヲ拔キシニ、日島ノ隱顯砲臺ヨリ我占領ノ砲臺ヲ攻撃スルコト甚シク、敵ノ水兵モ上陸シテ、諸砲臺ヲ恢復セン

トセシニ、我兵狙撃シテ之ヲ塵殺セシカハ、伏屍海岸ニ堆シ、我海軍ノ陸戰隊モ上陸シ、百尺崖ノ砲臺ヲ利用シテ發砲ス、敵艦頗ル此砲臺ニ注目シテ、逐ニ之ヲ擊碎シタリ、此日ノ戰ニ少將大寺安純、流彈ニ中リテ死ス、第二師團ニ於ケル少將山口素臣ハ、右翼ヨリ少將貞愛親王ハ左翼ヨリ、佐久間中將ハ豫備隊ヲ率キテ、他方面ヨリ威海衛街道ニ進撃シテ、二月二日威海衛ヲ占領ス、

劉公島、日島及ヒ敵艦隊ハ依然トシテ頑強ニ、我艦隊及ヒ水雷艇ノ圍入ヲ禦カンカ爲ニ、港口各所ニ防材ヲ布キ、搜索電燈ヲ點シテ警戒甚嚴ナリ、司令官伊東祐亨、一夕將校ヲ會シテ、北洋水師職減ノ策ヲ議ス、水雷艇長等、死ヲ以テ港内ニ入ランコトヲ請フ、中將壯ナリトシテコレヲ許ス、是ニ於テ第二第三水雷艇隊ハ、暗ニ乘シテ、密ニ東口ノ防材ヲ破壊スルコト連夜、竟ニ定遠、來遠、威遠等ヲ撃チテコレヲ沈ム、七日本隊

平遠、濟遠、廣丙及ソノ砲艦ヲ收メタリ、我軍ノ威海衛ヲ攻メシヨリ、凡十二日ニシテ、北洋水師全ク滅ビテ、直隸灣内ノ海上權亦我手ニ歸セリ、

此時ニ當リテ、陸軍ハ兵ヲ分チテ、牛莊城ヲ合撃シ、又進ミテ、營口ヲ占領シ、田庄臺ヲ平ケ、遼河以南ハ皆我カ有ニ歸セリ、此ニ於テ大舉シテ北京ニ向ハントス、時方ニ三月、漸ク春和ノ候ニ及フヲ以テ、兵氣益壯ナリ、

三月六日陸軍大佐比志島義輝ヲ混成枝隊長トシ、宇品港ヨリ發シ、廿三日臺灣海峡ノ澎湖島ヲ襲ハシム、我艦隊先ツソノ陸上砲臺ヲ砲撃シ、混成枝隊ハ裏正角ニ上陸シテ、砲臺ヲ奪取ス、翌日進軍シテ馬公城ヲ收ム、敵艦ハスシテ降ル、此ニ於テ澎湖島ヲ全ク占領ス、此地炎熱酷シク、惡疾猖獗ヲ極メ、病死スルモノ尠カラズ、十九日詔シテ征清大總督府ヲ金州ニ置キ、陸軍大將彰仁親王(小松宮)ヲ大總督ニ任シ、陸軍中將川上操

日本誌 史紀 二十七八年ノ戰役

及ヒ遊擊隊ハ、劉公島及日島砲臺ヲ砲撃ス、時ニ敵ノ水雷艇十三隻西口ヨリ逃レ出テントス、我第一遊擊艦隊之ヲ追窮シテ、大抵破壊シ、若クハ捕獲シタリ、此日陸軍モ應援セシカ、ソノ彈丸日島砲臺ニ命中シテ、ソノ火藥ヲ爆發セシメ、又靖遠ヲ撃チテコレヲ沈ム、此時ニ當リテ、敵ノ保ツ所ハ劉公島ノミ、艦隊ハ皆精銳ヲ失ヒ、僅ニ鎮遠、濟遠、平遠、廣丙ノ四艦ト、砲艦數隻ヲ餘スニ過キス、而シテ外ニハ援兵ナク、内ニハ日々兵士ヲ損傷スルヲ以テ、提督丁汝昌ハ意ヲ決シテ降ヲ納レ、以テ其將士ヲ救ハントシ、十二日一小砲艦ニ白旗ヲ樹テ、東口ヨリ出テ、松島艦ニ就キ降書ヲ伊東中將ニ呈ス、即チ劉公島ノ砲臺、兵器、彈藥及ヒ港内ノ軍艦ヲ我ニ渡スヘケレハ、内外ノ官員、兵勇、人民等ヲ助ケンコトヲ請フトノ意ナリ、依テ之ヲ許シ、且ツ酒ヲ贈リテ之ヲ慰ム、此夜汝昌自殺ス、十七日我艦隊灣内ニ入り、其器仗ヲ檢シ、兵勇ヲ解放シ、鎮遠、

六ヲ參謀トス、四月十三日親王宇品ヲ發シテ旅順ニ至ル、

我軍ノ旅順ヲ攻撃セシ時ニ當リ、清國ハ獨人ドットリル々李鴻章ノ書翰ヲ以テ、神戸ニ來リ、密ニ和ヲ我ニ請フ、我政府ソノ正使タル資格ナキヲ以テ之ヲ拒絕ス、

二月又張蔭桓ヲ請和使トシ、邵友廉ヲ副使トシ、我國ニ來ラシム、米國前國務卿ホをトすテソノ顧問タリ、乃チ内閣總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光ヲ全權辦理大臣トシ、廣島ニ於テ會見ス、然ルニソノ携フル所ノ委任狀ニ缺クル所アルヲ以テ、又コレヲ却ク、三月十九日清國ハ、更ニ總理衙門北洋大臣兼直隸總督李鴻章、及ヒ李經芳ヲ全權大臣トナシ、馬關ニ來リテ我全權大臣ト商議セシメ、先ツ休戰ヲ要求ス、依テ我全權大臣ハ休戰條件ヲ示シテ曰ク、天津太沽山海關ノ兵ヲ撤シ、其砲臺、營舍、兵器、彈藥等ヲ、悉皆我軍ニ引渡スヘシ、天津ヨリ山海關ニ至ル鐵道ハ、我ノ管理ニ

屬スヘシ、出征軍全般ニ屬スル、休戦中ノ諸費ヲ支償スヘキ由ヲ以テス、李鴻章ソノ條件ニ遵行スルヲ能ハサレハ、今ハ休戦ノ請求ヲ撤回シ、更ニ本談判ヲ開カント約ス、タマ／＼兇人アリ李鴻章ヲ途ニ要襲シテ之ヲ傷ク、朝野大ニ驚ク、天皇ハ特ニ勅使ヲ遣シテ、慰問太渥シ、三月卅日我ヨリ無條件ニ奉天直隸山東ノ地方二十日間ノ休戦ヲ許ス、既ニシテ李大臣ノ創愾ユ、即チ議シテ、清國ハ朝鮮ノ獨立國タルヲ確認スヘキ事、奉天省南部ノ地及ヒ臺灣澎湖全島ヲ、日本國ニ割與スル事、軍費賠償金トシテ、庫平銀二億兩ヲ支拂フ事、日本人ノ爲ニ更ニ清國ノ四港ヲ開ク事等ヲ定メ、十七日双方ノ全權大臣各調印シテ、媾和條約ヲ締結ス（コレヲ世ニ馬關條約トイフ）天皇嘉納シ給ヒ、平和恢復ノ大詔ヲ發シ給フ、五月ニ至リ、芝罘ニ於テ條約ノ批准交換ヲ了ヘタリ、時ニ大本營ヲ京都ニ移サレ、車駕又此ニ臨ミ給フ、

是時ニ當リテ、露獨佛ノ三國ハ、日本カ遼東半島ヲ永久ニ所領スルハ、東洋ノ平和ニ不利ナリトナシテ、我ニ從順スル所アリ、政府遂ニコレヲ容レ、惠ヲ隣邦ニ垂レ誼ヲ友邦ニ厚クス、五月十三日京都行宮ニ於テ、始メテ馬關條約ヲ發表シ、併セテ遼東半島還附ノ詔勅ヲモ下シ給ヘリ、十一月ニ至リ、北京駐在ノ公使林董ニ命シ、李鴻章ト談判セシメテ、清國政府ニ遼東還附ノ代償トシテ金三千萬兩ヲ出サシメタリキ、カクテ威海衛守備隊ノ外ハ、班師ノ令ヲ下シ、大總督彰仁親王、第一軍司令官野津大將、第二軍司令官大山大將、聯合艦隊司令官伊東中將以下凱旋ス、第四師團ハ留リテ遼東半島ヲ下附スル迄ハ守備セシメタリ、五月三十日ニハ、天皇東京ニ凱旋シ給フ、廣島ニ臨マセ給ヒシヨリ二百五十餘日、供御ヲ損シ、飲膳ヲ減シ、宵衣旰食、親シク軍機ヲ統ヘ給ヒシニ、此日還幸シタマヘルヲ以テ、上下歡呼シテ以テ皇威ノ隆ナルヲ奉頌

セリ、カクテ文武百官ニ功ヲ論シ賞ヲ行ヒ、始メテ金
鵞勳章ヲ頒賜セラル、

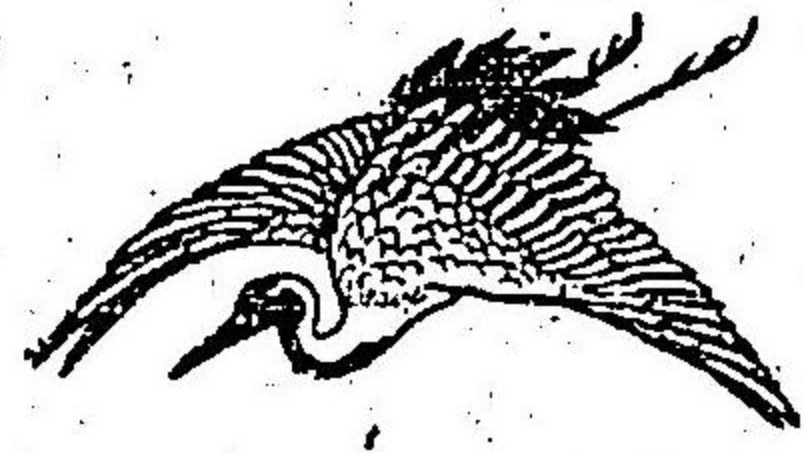
第十二 臺灣ノ新版圖

臺灣ハ、既ニ我版圖ニ入リシヲ以テ、五月海軍中將樺
山資紀ヲ大將ニ陞セ、臺灣總督トナシ、辨理公使水野
遵ト共ニ臺灣ニ赴カシメ、六月清國ノ委員李經芳ト會
シテ、授受ノ式ヲ行フ、時ニ臺灣巡撫劉永福臺南府ニ
アリ、清廷ノ命ヲ奉セス、所在ノ清民之ニ應シテ、此
ニ抗ス、永福ハモト黒旗兵ノ頭領、勇武ヲ以テ知ラレ
シモノナリ、大本營令ヲ金州半島滞在ノ近衛師團ニ下
シテ臺灣ニ向ハシム、師團長能久親王(北白川宮)コレ
ヲ率キテ三貂角ニ上陸シ、基隆ヲ攻ム、獅沫嶺ノ砲臺
防戦最モカメシカト遂ニ占領セリ、海軍モ基隆沖ニテ
砲臺ヲ攻撃シタリ、五日樺山總督、總督府ヲ基隆ニ置
ク、六日我兵臺北ニ進ム、土民皆歡ヒテ王師ヲ迎フ、
尋テ澎湖島ニ屯在セル混成枝隊ヲシテ、基隆ノ守備隊

トナシ、淡水新竹ヲ占領ス、七月安平鎮ヲ拔ク、後敵
兵新竹ヲ逆襲スルコト數次、我兵撃チテコレヲ退ク、
八月ニ至リテ臺灣北部ノ鎮定全ク了ル、

是ヨリ先キ、中將高島綱之助、臺灣副總督トナリ、第
二師團ヲ率キテ臺北ニ着シ、南進ノ途ニ上ル、艦隊ハ
陸ト相應シテ、打狗砲臺ヲ牽制セントス、十月永福書
ヲ英國領事ニ托シテ和ヲ乞フ、辭極メテ不遜ナルヲ以
テ許サス、我軍益々臺南ニ迫ル、十九日永福竊ニ英船ニ
托シテ、厦門ニ走ル、我軍臺南ニ入り、別ニ一隊ヲ恒
春ニ送りテ附近ヲ鎮壓セシム、南部モ亦平定ス、タマ
ク能久親王病ニ罹リ、廿四日カメテ臺南ニ入ラセラ
レシニ終ニ薨セラル、上下悼惜ス、朝廷國葬ノ禮ヲ以
テ葬ル、十一月野津大將ヲ近衛師團長ニ補シ、カクテ
第二師團ヲ留メテ守備トナシ、近衛師團ハ凱旋セリ、
本島ハ道路險惡ニテ風氣人ヲ毒シ、其土匪ハ往々抵抗
シ、逐ヘハ山ニ入り、去レハ復來リ襲フ、此ヲ以テ軍

隊ノ行進頗ル困シム、廿九年四月又大坂師團ニ命シテ
出征シ、臺東地方ヲ鎮定セシム、四月始メテ大本營ヲ
解キ、尋テ又新ニ拓殖務省ヲ設置シ、高島副總督之カ
大臣トナリ、臺灣及北海道ノ事ヲ管掌ス、コレヨリ凡
百ノ施設漸ク整ヒ、南部ノ頑民モ漸ク皇化ニ霑フニ至
ラントス、



明治三十年十二月二十七日印刷
明治三十年十二月三十日出版

非契約品本

編纂者
發行兼發起人

發起人

特別協贊員

特別協贊員

特別協贊員

特別同盟員

山梨縣東八代郡英村四四番戸(原籍)
神奈川縣橋本郡程ヶ谷町貳五九六番地(寄留)

峽洞 小幡 宗海

山梨縣東山梨郡春日月村三四六番戸

飯島 邦寧

山梨縣下都賀郡飯木町字港町壹八番地

藤沼 玉一 郎

山梨縣下都賀郡富山村大字下皆川五五番地

富田 要太 郎

東京府京橋區西紺屋町七番地

菊地 泰亮

山梨縣東山梨郡岡部村壹六七番地

飯田 竹一 郎

同 盟 員
全 金
全 金
全 金
全 金
全 金
印 刷 所
印 刷 人
發 行 本 部

神奈川縣鎌倉郡中和田村大字和泉

田 中 佐 之 助

熊本縣熊本府北坪井町貳三番番地

巖 野 小 四 郎

愛知縣知多郡阿久比村大字矢高壹貳五番地

舟 橋 正 之

山梨縣東山梨郡岡部村大字國府壹八番番地

久 保 田 七 郎 右 衛 門

神奈川縣足柄下郡小田原十字町四丁目五九番番地

內 田 金 藏

山梨縣東山梨郡春日居村大字下野下

金 子 末 四 郎

東京市京橋區宗十郎町十五番地

出 口 齋

東京市京橋區宗十郎町十五番地

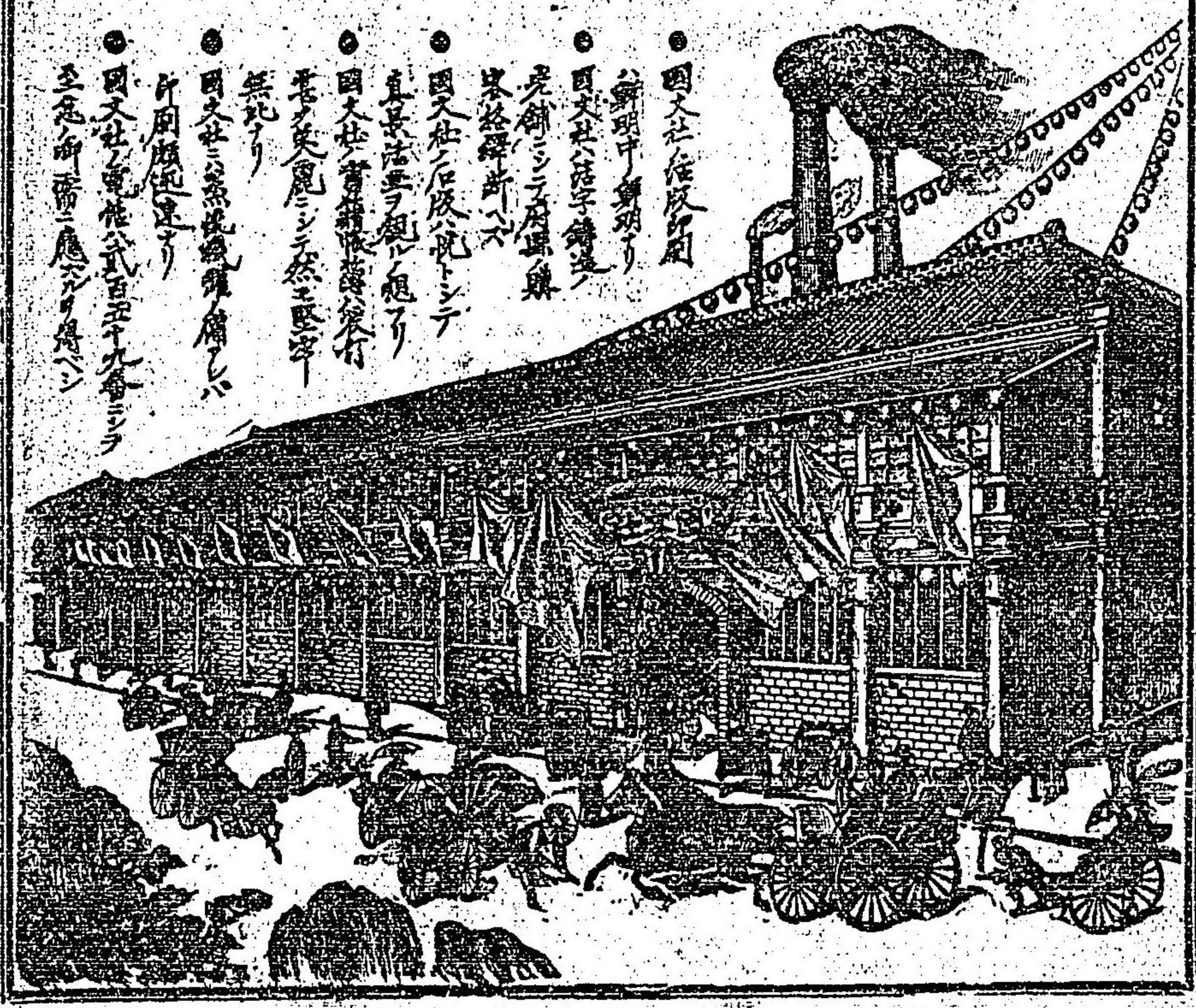
國 文 社

神奈川縣鎌倉郡磯ヶ谷町壹五九六番地

神奈川文庫事務所

國文社營業科目

和漢洋活版印刷
 石版彫刻印刷
 銅版彫刻印刷
 木版彫刻印刷
 諸帳簿裝釘
 和洋書籍裝釘
 活字鑄造販賣
 電氣版製造
 紙型鉛版製造
 トタン野輪廓類
 畫格野引類
 金銀箔凸版

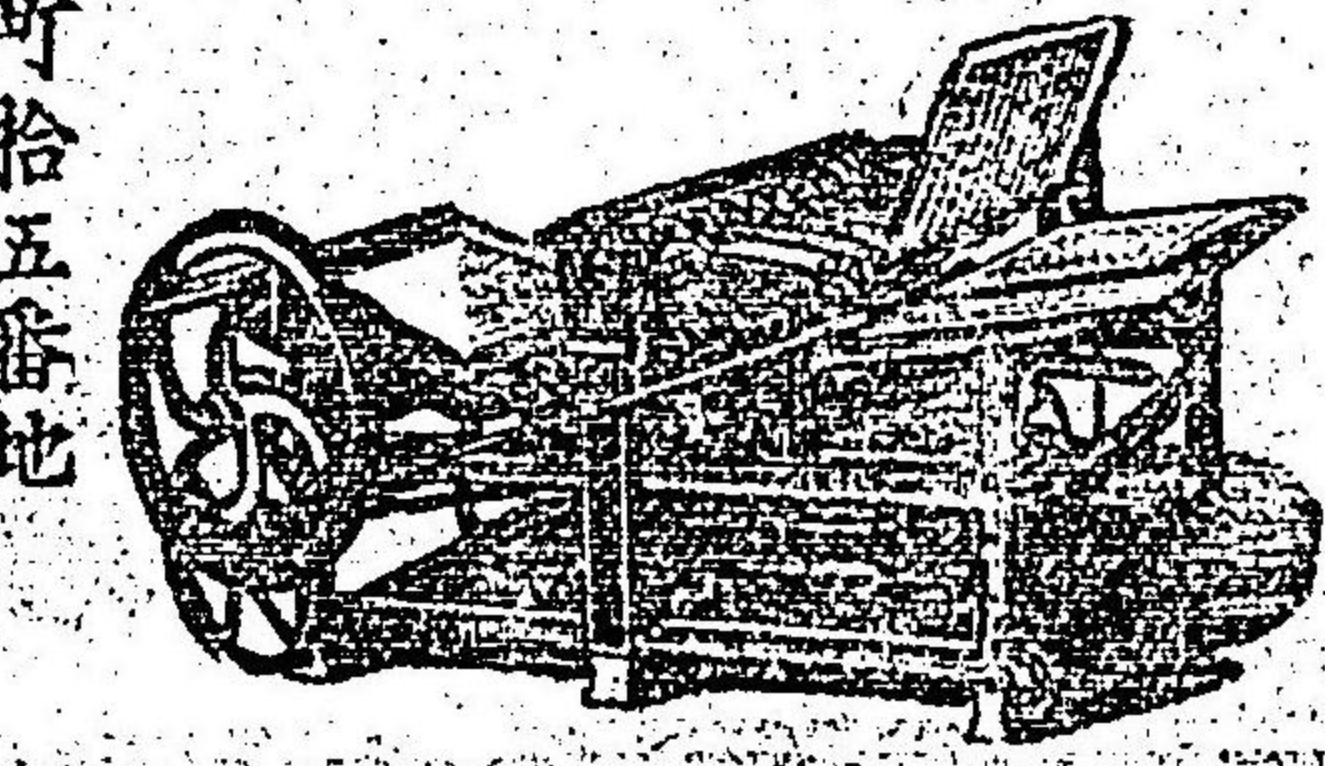


● 國文社活版印刷
 鑄造中一類あり
 ● 國文社活字鑄造
 鑄造中一類あり
 ● 國文社電氣版製造
 電氣版製造中一類あり
 ● 國文社紙型鉛版製造
 紙型鉛版製造中一類あり
 ● 國文社トタン野輪廓類
 トタン野輪廓類製造中一類あり
 ● 國文社畫格野引類
 畫格野引類製造中一類あり
 ● 國文社金銀箔凸版
 金銀箔凸版製造中一類あり

國文社廣告

弊社活字は未だ他に類なき鋼鐵彫刻の字父を以て打込字母なるか故に
 鮮麗堅緻なる事世界に冠たりと云ふも誇言にあらざるなり而して印刷
 は歐米最近發明の最上印刷器に蒸氣機關の運轉なれば如何なる大數大
 部のものにても期日通り確實に調製可仕候又活字鑄
 造販賣は多少に不拘鑄造販賣仕候尤も一時多數御注
 文は大割引仕候其他總て低廉に且迅速を旨とし御便
 利を謀り調製仕候間一層の御愛顧あらんとを希ふ

- 營業科目
- 和漢洋活版印刷
 - 石版印刷
 - 銅版印刷
 - 木版印刷
 - 諸帳簿裝釘
 - 和洋書籍裝釘
 - 活字鑄造販賣
 - 電氣版製造
 - 紙型鉛版製造
 - トタン野輪所類
 - 金銀箔押刷



官内省御用達

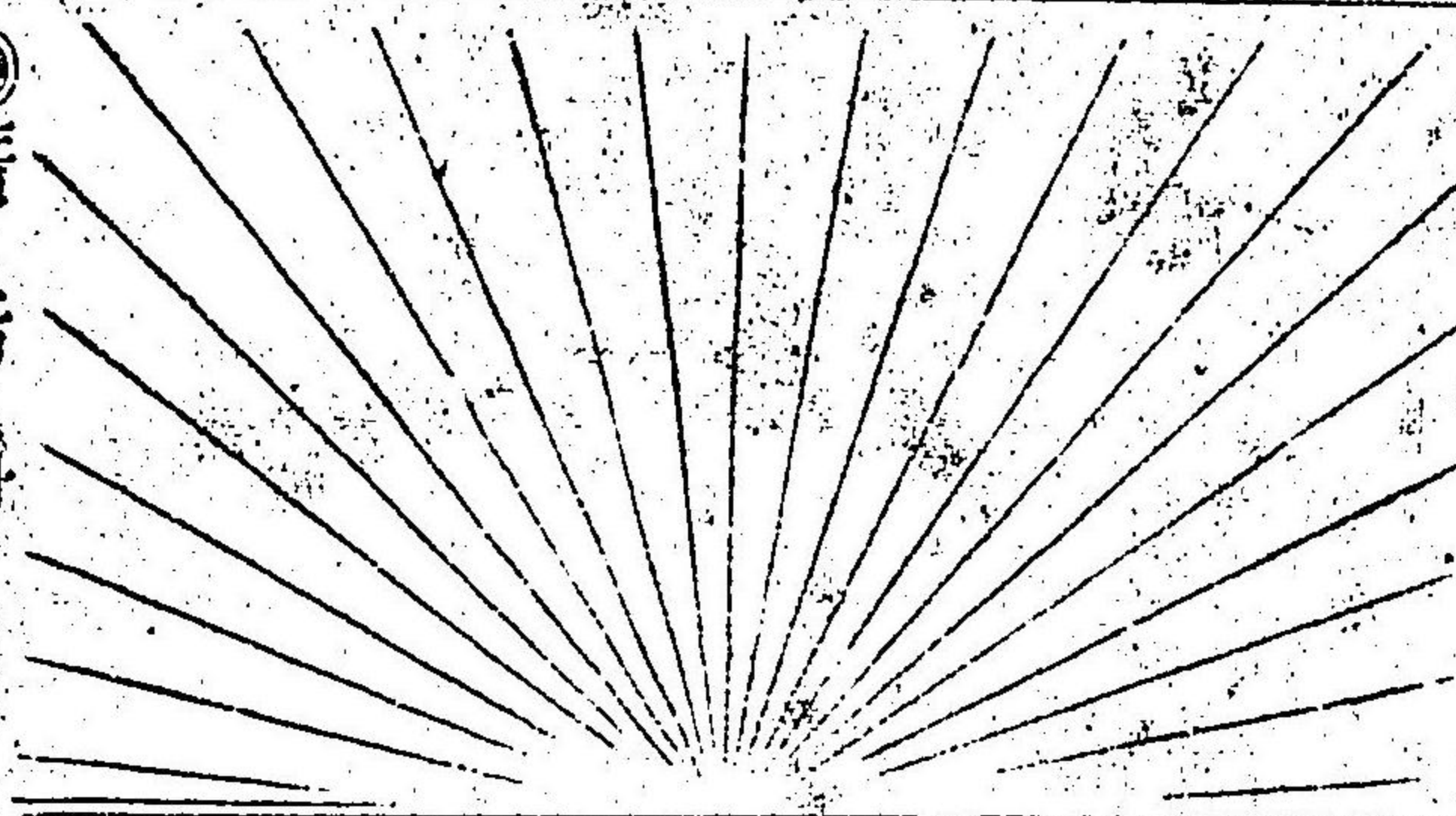
社三 天置源太郎

東京市京橋區宗十郎町拾五番地

電話本局二五九番

● 廣告料

五號活字二十二字語一行に付一回限拾八錢二回以上金七錢五回以上拾六錢



中央新聞 年中無休刊

● 本紙定價

一ヶ月三十五錢 三ヶ月一圓 六ヶ月一圓九拾錢 一ヶ年三圓六十錢

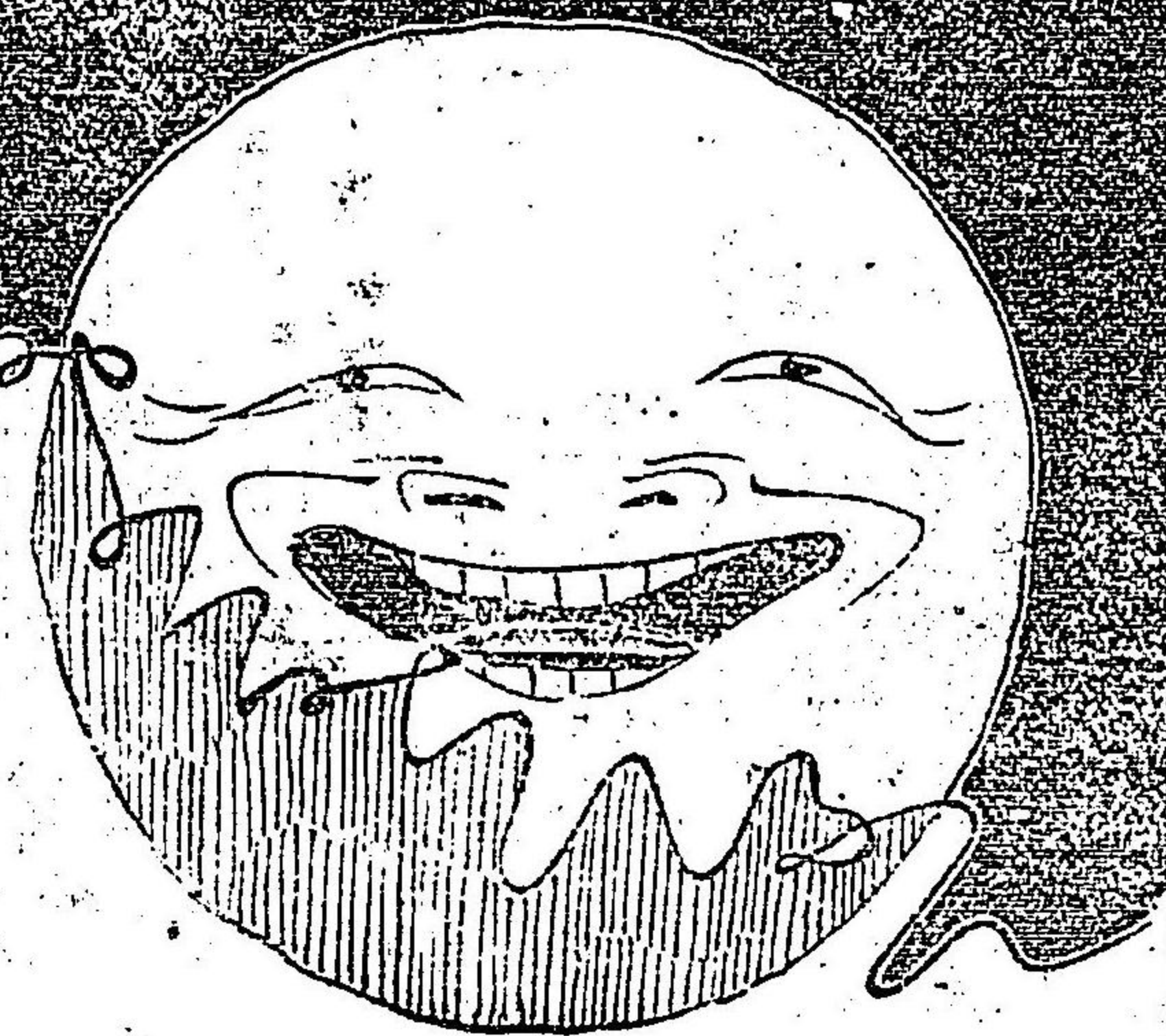
政治新聞として最も奇警痛快に實業新
聞と名しては最も聰明周旋俊速に、會
振假名新聞として最も圓滿に最も面白
く最も機敏なるものは實に中央新聞也
論より證據、上は英照皇太后の崩御を首
め、軍事公債の責任、米布合併の條約案、
郵船會社の失敗より近くは日本銀行の縮
小方針、恐慌の警戒に及ひ日本銀行の縮
小方針、先んじて至るまで、大問題大事件は中央
新聞に先んじて至るまで、大問題大事件は中央
新聞也

中央新聞は年中無休刊の大勉強新聞也、
故に日曜大祭日等に休刊する新聞に比す
れば、月少くも五日、一ヶ月に六十餘日を
餘分に發行す、故に讀者は格外の廉價を
以て、三百六十五日一日も新聞を讀まず
して、世事を離る、不便を避け得ます

地方郵送は 本社直接御注文に
限り大勉強一ヶ月
郵税八錢

東京銀座四丁目 中央新聞社
電話本局一七九

團圓珍聞



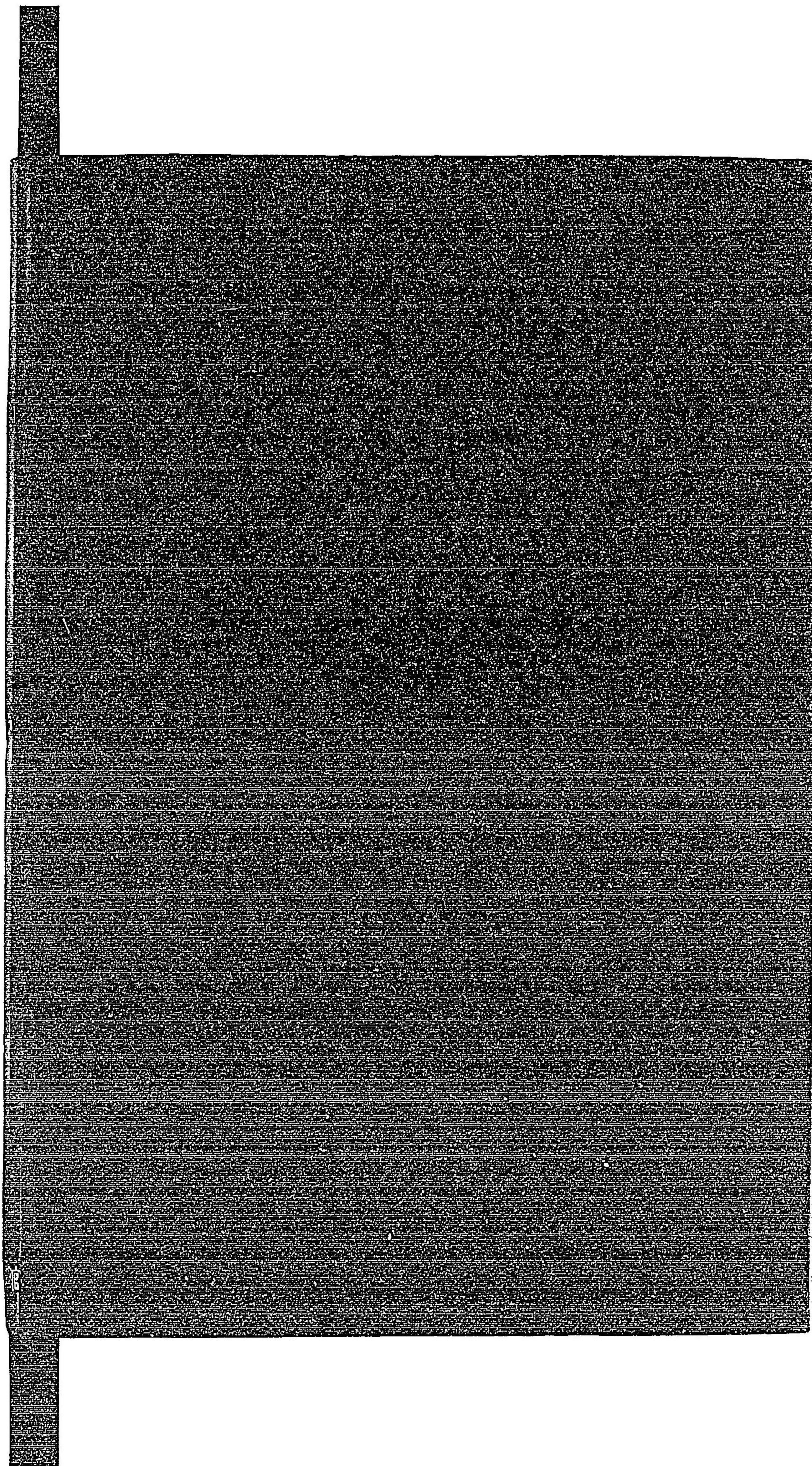
定價 二部五錢十部四十九錢二十六部(凡半年)二部四十四錢五十四部(凡一年) 廣告料(一頁)三錢(十頁)十錢(外埠)一頁一錢(十頁)十錢(外埠)一頁一錢(十頁)十錢

東京市銀座四丁目四番地

團々珍聞發行所

日本唯一の政治的滑稽雜誌にして、二
 十餘年來の歴史を有し、中外の聲價高
 き我が囀々珍聞は、去る四月大改訂以
 來、殆んど面目一新し、特得絶妙の
 ボンチ巧みに時事を諷刺して、憤
 悶、大臣より下は政黨までを慚愧
 治に、茶を沸かし、一般の讀者をして
 政論の最も進歩したるものはボンチ
 也、戒の最も痛切なるものはボンチ
 訓戒の最も巧なるものはボンチ也、最
 なくして最も面白きはボンチ也、罪
 珍聞は日本ボンチ親玉にして、此の他
 小説、考へ物、時報等皆ボンチと相待
 つて、限りなく面白し
 世の賢明なる人々よ、徒らに不景氣を
 嘆じて益々世を不景氣にせんよりは我
 が團々珍聞を讀みて大に元氣を付け、
 一家の陽氣を世の不景氣を回復し玉へ

86
40



86
40

(M)

022759-000-7

86-40

日本誌

小幡 宗海/編

M30

ADB-0555

